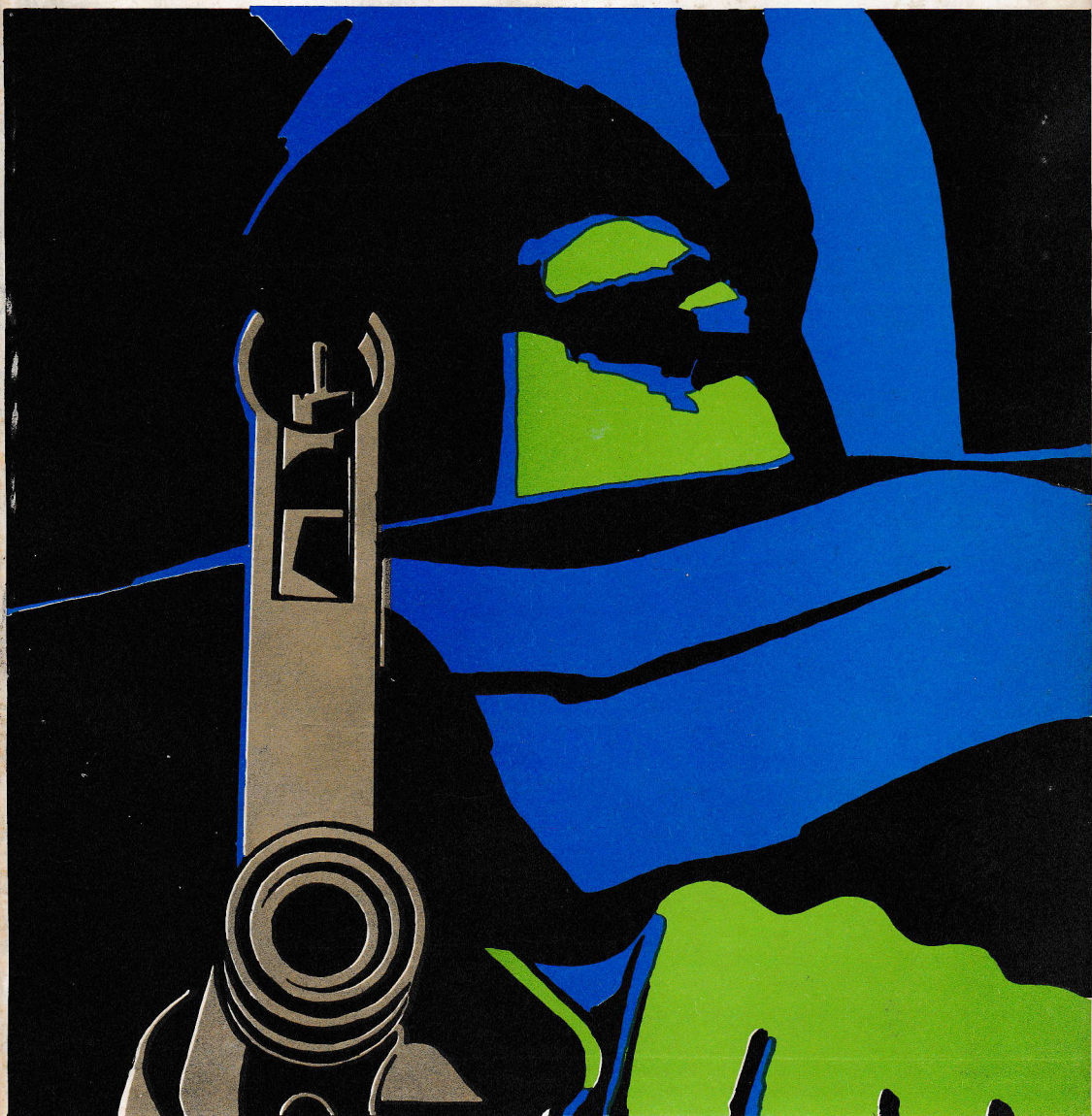


# 隊伍を整えよ！

——日本赤軍宣言——

IRF・IC+VISA共同編集



غوابر وليتارية العالمية والعنف الثوري المنظم

# 日本赤軍宣言

隊伍を整えよ／——日本赤軍宣言——

隊伍を整えよ！ 目次

プロレタリア国際主義と武装闘争の旗の下、日本赤軍と共に進撃せよ！ 世界革命戦線情報センター 9

声明（一九七五・三・一七） 日本赤軍 12

プロレタリア国際主義と組織された暴力万歳！世界革命統一戦線日本協議会を組織せよ！ 日本赤軍 15

リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命勝利国際連帯集会へのアピール PFLP国際局 19

リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命勝利国際連帯集会へのアピール PFLP・GC政治局 21

リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命勝利国際連帯集会へのアピール アラブ解放戦線中央委員会 22

リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命勝利国際連帯集会へのアピール PFLP日本人医療隊 24

I アラブ赤軍からのテーゼ

1972

赤軍派の同志諸君ならびに連合赤軍の同志諸君そして友人たちへ 重信房子 37

赤軍からの宣言 赤軍 40

アッピール アラブ赤軍 42

戦争を知らない革命家たちへのメッセージ アラブ赤軍 43

世界革命戦争宣言 アラブ赤軍 45

アラブ赤軍からのテーゼ アラブ赤軍 47

国際主義の問題について（テーゼ補） アラブ赤軍 56

8・16パレスチナ人民インドシナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会へのメッセージ PFLP 60

遠い戦場より アラブ赤軍・重信房子 61

連帯のあいさつ 日本PFLP医療委員会 62

革命二戦士追悼に向けて 奥平純三 65

ディル・ヤシン作戦勝利万歳！ VZ 58・来見弘 66

戦闘宣言 アラブ赤軍 83

1973

テルアビブ銃撃戦争一周年5・30行動へのアピール アラブ赤軍 86

テルアビブ銃撃戦争一周年5・30行動へのアピール PFLP国際局 89

テルアビブ銃撃戦争一周年5・30行動へのアピール PFLP日本人医療隊 90

7・24宣言 アラブ赤軍 92

日本の戦士に呼びかける アラブ赤軍 93

日航404便ハイジャック闘争万才！ 日本赤軍 VZ 58 98



パリ共同声明 日本赤軍・SOLO 101

闘うあなたへ、アラブよりの招請状 重信房子 105

11・2パレスチナ革命連帯集会へのアピール アラブ赤軍 109

11・2パレスチナ革命連帯集会へのアピール PFLP日本人医療隊 110

1974

赤軍宣言 アラブ赤軍 112

4・14シンガポール・クウェート作戦勝利アラブ・パレスチナ人民連帯集会へのアピール PFLP国際委員会 116

4・14シンガポール・クウェート作戦勝利アラブ・パレスチナ人民連帯集会へのアピール アラブ赤軍 117

5・30リッダ闘争二周年集会へのアピール 赤軍 118

5・30リッダ闘争二周年集会へのアピール PFLP 119

5・30リッダ闘争二周年集会へのアピール PFLP・GC 120

ハーグ仏大使館占拠闘争勝利万才！ 日本赤軍 121

声明（一九七四・九） 日本赤軍 122

## II 人民の交通情報網を組織せよ！世界革命戦線を組織せよ！

パレスチナ解放・テルアビブ銃撃戦勝利万才！ 世界革命戦線情報センター 128

テルアビブ銃撃戦闘一周年 世界革命戦線情報センター 130

7・20日航機HJ闘争貫徹勝利！ 世界革命戦線情報センター 132

シンガポール・クウェート連続武装遊撃戦争勝利！ 世界革命戦線情報センター 137

アラブ・パレスチナ革命不退転の武装闘争を！ 世界革命戦線情報センター 139

ハーグ仏大使館占拠同志奪還闘争勝利！ 世界革命戦線情報センター 143

## III 不滅の最前線陣型—アラブ・パレスチナ革命

シオニズムの展開と移民政策の帝国主義的構造 アラブ赤軍 146

パレスチナ革命の現段階 重信房子 160

不滅の最前線陣型—アラブ・パレスチナ革命 アラブ赤軍 174

あとがき 査証編集委員会

## プロレタリア国際主義と武装闘争の旗の下、日本赤軍と共に進撃せよ！

### \* 世界革命戦線情報センター

プロレタリア国際主義と武装闘争の旗を高く掲げ、一国主義と合法主義の枠を突破し更なる進撃をかちとろう！

全ての労働者人民・プロレタリアート諸君！

カンボジア人民の勝利、そして四月三〇日の南ベトナム解放民族戦線のサイゴン解放へと打ち続くインドシナ人民の革命戦争の勝利を心より祝い、全世界の労働者階級、被抑圧民族解放、被抑圧人民解放、世界プロ独樹立へ向け決意を新たに前進することを確認しようではないか！

第二次帝国主義戦争後の、アメリカ帝国主義を筆頭とするところの世界帝国主義の世界支配構造は、インドシナ革命戦争の勝利、パレスチナにおけるPFLPをはじめとするアラブ・パレスチナ人民の武装解放闘争、チョソン南半部人民の決起、西独等先進帝国主義本国内の武装遊撃戦闘等国際階級闘争の激化によって、根本的に破綻をきたしている。

帝国主義ブルジョアジーは、一步一步と墓場への道を歩んでいるのである。そして、日本帝国主義もまた世界帝国主義の一員と

して、死の淵へと追いやられているのである。

この様な中であって、帝国主義本国人民プロレタリアートの国際主義的闘争の重要性は増々高まるばかりである。

現代過渡期世界のプロレタリア革命派にとっては、プロレタリア国際主義を自らの闘いの中に、どの様に位置付けどの様に闘い抜いていくかは、まさに革命党派にとってその存在を根底から問う試金石とも言えるものである。

プロレタリア国際主義は、単なるスローガン・御題目ではなく、口先で叫ぶだけのものでもなく、まさに実践の問題として、闘争のあり方として問われているものである。現在の、帝国主義者との戦争を現実を展開している人民の階級情勢を世界革命運動の状況として把握することを通じ、それと同質の闘いを世界中に於いて、とりわけ帝国主義本国内に於いて現実化し、同一の敵・共通の敵、世界帝国主義に対する共同の闘いを組織することにおいてこそかちとらなければならないものである。

一九七二年五・三〇テルアビブ銃撃戦、日本人三戦士による闘

いこそ、それまで一國主義の枠内によってしか思考され、実践されなかったプロレタリア国際主義の内実を、PFLPとの共同軍事行動作戦の実践として貫徹することによって、真のプロレタリア国際主義の姿を復権したのである。軍事境界線としての国境を突破し、民族、国籍を越えた人民の軍隊・革命の軍隊、世界革命戦線、世界赤軍構築への目的意識性の下に、第三世界人民、被抑圧民族・人民の民族解放社会主義革命戦争の現実、武装闘争の現実を、帝国主義本国のプロレタリアートへ、最前線、戦後後方の相互連関的結合をもって環元させること、すなわち共同軍事行動によってのみ、プロレタリア国際主義は現前化せしめることを教えたのである。

テルアビブ銃撃戦以降展開されたアラブ赤軍・日本赤軍の闘いは、敵・世界帝国主義との闘いは、武装プロレタリアートの共同軍事行動による真の国際連帯・国際共産主義運動として展開しなければならぬこと、その闘争実践はあくまでも非妥協の武闘貫徹路線による世界革命戦線の構築、世界赤軍、世界党建設へ向けた単一にして永続的同時に同質の世界革命戦争による建軍・建党の総路線の実践であることを明らかにして来た。

△テルアビブ銃撃戦△においては、PFLPをはじめとするパレナ革命を闘う武装プロレタリアートの闘いとして、敵・国際シオニズム、イスラエル打倒の武闘展開にとどまらず、世界帝国主義打倒、全アラブ解放・パレスチナ革命、イスラエル粉砕、アラブ反動派打倒を目標化したものであった。

更に△七・二〇日航機H・J爆破闘争△では、アラブ反動派と

争)において共通の敵、世界シオニズム、イスラエル、アメリカ帝国主義、アラブ反動派の四つの敵を撃っているだけではなく、世界同時革命(世界革命戦争)の敵、四つの敵による世界帝国主義体制を打倒するための、歴史的、世界的規模での武装プロレタリアートの喚起、世界革命統一戦線の世界プロ独樹立へ向けた総路線であることを実証した。

また革命戦略としては、世界帝国主義体制が、最早種々の同盟環や一國主義的な「帝国主義論」の個別的、特殊的な「敵の指定」の地平では打倒しきれないこと、まさに世界帝国主義体制そのものを「敵」と指定した、「味方の指定」するところの陣型、世界革命統一戦線による持久的遊撃戦争によって撃つことが初めて可能になることを、非妥協の武闘路線の貫徹によって実証、構築、戦略技術化する過程であった。

日本赤軍によるPFLPと共闘した闘争主体の構築は、世界革命統一戦線の実体化、世界赤軍、世界党建設へ向けた着実な第一歩であったこと。更に世界革命戦争派として、不断の武闘貫徹路線を進撃している、単にアラブ領域にとどまらない世界的規模での各国革命戦線との出会いから共闘獲得は、日本赤軍、PFLPの共闘によって開始された世界革命統一戦線の陣型を、従来の一國主義的革命的論の矛盾を止揚する実践理論の構築を、今、獲得可能ならしめている。

すなわち、武装プロレタリアートの世界的規模での統一戦線構築へ向けた大潮流化が、日本赤軍、PFLPをはじめとする各国武装革命戦線との共同軍事行動によって実証されつつある今日、

日本帝国主義をはじめとする新植民地主義による世界帝国主義体制の、アラブ支配体制そのものを打倒目標として闘いを進撃させた。

△シンガポール石油基地襲撃爆破・在クウェート日本大使館制圧連続遊撃戦争△は、米帝・日帝のみならず、世界帝国主義体制の中核的結合環としての多国籍企業、ユダヤ資本を母体とするところの石油メジャー、国際シオニズムが敵となっている現実、世界帝国主義体制が持つ新植民地主義支配の構造、姿態をまざまざと浮き彫りにし、先進国革命主体と第三世界革命主体の共通の敵と指定しなければならないことを証明した。

そして△ハーグ仏大使館制圧同志奪還闘争△は、敵権力の弾圧に対しては如何に闘うべきかを、捕虜になった同志に対しては奪還することによってその名譽を回復し、なおかつ敵に打撃を与えていく革命主体のモラルを、武装闘争、革命戦争の実践を通して表現した闘争である。これは、日本赤軍が、何時、いかなる処においても世界中の抑圧された人民と共にあり、世界革命へ向けた戦線があらゆるところで着実に組織化されていることを実証したものである。革命的人民は、その革命性によっていついかなる時、処においても敵、世界帝国主義の心臓部を撃つことが出来ることを全世界のプロレタリアート人民の前に明示したのである。

これらの闘い、不断に連続する日本赤軍とPFLPをはじめとする各国武装革命派による共闘は、世界帝国主義打倒の闘いを、世界革命統一戦線の持久的な陣型で闘い抜く戦略戦術の可能性として実体化し得たし、その陣型は、パレスチナ革命(民族解放闘

世界革命統一戦線を構築した武闘貫徹路線の正しさを証明し、幻の武装プロレタリアートが実在する現実、世界革命統一戦線陣型によるプロレタリア独裁への道、世界赤軍、世界党建設の国際共産主義運動の潮流化の現実を、世界の革命的人民へ指し示し得ているのである。

日本赤軍が切り拓いた、この闘いの地平は、世界革命戦争の母体、世界赤軍への自らの飛翔を組織化する更なる進撃を世界階級情勢の要請として、自らの課題へと再指定されるべく開かれているのである。

そして今、日本赤軍は、インドシナ革命戦争と共に国際共産主義運動の最前線としてあるパレスチナ革命戦争の中で、自らを鍛え武装を勝ち取り、幾多の闘争の過程で出会った革命的同志・友人たちと世界革命戦線構築への、更なる共産主義化を獲得しているのである。のみならず、全世界の労働者階級、被抑圧民族・人民の世界革命への真の闘いを指し示し、多くの支援・連帯を得て全世界を革命戦争の戦場とするべく、更なる進撃を開始しようとしている。

今、日本赤軍は、敵・帝国主義ブルジョアジー共の国際的な反革命弾圧網の中で、熾烈な闘いを展開している。しかし、この試練の中でこそ、まさに今までの闘争実践の成果蓄積が問われているのである。日本赤軍は、いかなる弾圧にもめげず反革命策動にも挫けることなく闘い続けるであろう。

最後に勝利するのは我々なのだから！  
全ての革命的同志・友人諸君！

日本赤軍と共に進撃せよ！

世界革命戦線の創出を、世界革命戦線協議会へとまずもって組織し、世界党―世界赤軍建設の第一歩へ！  
世界帝国主義打倒！  
世界革命戦争勝利！

## 声明

### \* 日本赤軍

日本帝国主義者とその同盟者共は、パレスチナ・アラブ人民と共にパレスチナの完全解放へ向けて闘い続けている日本赤軍を破産させるために、フレイムアップとデマゴギーを使い、巧妙な策動を開始した。

三月一七日付『ディリースター』東京情報によると、『日本政府は、スエーデンに於て日本赤軍がレバノン政府機関をテロ攻撃するために準備していたという結論に達した』と伝えている。

三月五日、スエーデン政府によって日本赤軍の二人の同志は逮捕された。そして一週間後、我々の報復を恐れたスエーデン政府は、二同志を日本の官憲当局によって日本の支配下に強制送還した。官憲当局と日本帝国主義者共は一体となり、フレイムアップとデマゴギーによって事実を歪曲している。

チナ革命連帯を進める日本の革命的勢力を抑圧しようと、無益な闘いをしている彼らの第一段階である。

彼らの侵略性を隠蔽するために日本帝国主義者共は、海外に出て日本帝国主義に対峙して闘う人民の代表としての日本の革命家を非常に恐れている。

これは、日本帝国主義打倒を闘う全ての革命に対して行ういつもの策略である。

一九七〇年、朝鮮民主主義人民共和国への日本赤軍によるハイジャック闘争の場合、日本帝国主義者とアメリカ海軍は、南朝鮮の金浦空港にハイジャックした飛行機を強制着陸させた。彼らは悪質な策略を使って金浦空港をジョンヤン空港に装い、そしてM-16ライフル銃を一束の花の下にかくし、『ここはジョンヤンです。ようこそ革命的友人たちよ！』と報じ、作戦を崩壊させようと企てた。これは日本の有名な話である。それはイスラエルと西ドイツによってミュンヘンで使われた策略と全く類似している。

一九七二年、テルアビブ飛行場襲撃の際、日本帝国主義者共は、同志岡本を含む三人の勇者を「気狂いと同じである」と論じた。「普通の日本人」から区別することによって、彼らはアラブ人民からの支持と連帯を攪乱しようとした。同時に、彼らは日本に闘いの波が波及することを防ぐために彼らの全勢力をかけて陰謀をくわだてた。

一九七三年、彼らは日航機ハイジャック作戦に同じ方法を使った。彼らは、日本国内の彼らの手の内にある我々の政治犯を送り返せという我々の要求書を握りつぶし、彼らはどんな要求書も

プロレタリア国際主義万才！

日本革命戦争勝利！

パレスチナ革命戦争勝利！

インドシナ革命戦争勝利万才！

日本赤軍万才！

日本帝国主義者とその同盟者共の思惑は明白である。彼等は、パレスチナ人民とアラブ人民の友人でありパレスチナ革命の一端を担っている日本赤軍のメンバーを捕えるために、デマゴギーを使い質（たち）の悪い、そして非常に巧妙にアラブ政府に命令して、アラブ人民から日本赤軍を分離するというもくろみの段階に事を運ぼうとしている。

アラブ人民と進歩的アラブ政府が『日本赤軍を制圧せよ』との日帝からの種々の要求の全てに応じなかったため、日本帝国主義者としオニストを含む同盟者共は『日本赤軍はレバノン政府へテロ攻撃をしようとしている』という非常に悪質なフレイムアップを始めた。

これは、国際主義の実践の最重要な一環としてアラブ・パレス

受け取っていなかったというデマゴギーを言い、飛行機の乗客の怒りを鎮圧しようとした。

全般に帝国主義者共は大うそつきである。しかし、どんな陰謀も全て成功しなかったということは皮肉なことである。

彼らによって、日本の多くの革命家は偽りの証言とフレイムアップによって今だ獄中にいる。

彼らの民主主義の意向というものは、彼らの必要に応じて、全ての革命的人民に対する証言は彼らによって作られ、そして処理するためにあるのである。

そして現在、日本帝国主義者共は猿芝居を再び演じなければならなくなっている。

誰がアラブとパレスチナ人民の友人なのか？ 石油資源を奪いエコノミックアニマルとして日本商品の市場を得るために押し入って来た日本帝国主義者の手先が、アラブ人民の真の友人なのか？

抑圧されている日本人民の代表であり、アラブ・パレスチナ人民との共通の敵イスラエル、米帝、日帝に対して自らの血を流し闘い続けて痛みを共にしている日本赤軍がアラブ人民の真実の友人ではないのか？

その解答はアラブ人民自らによって選択されるであろう。我々は、その答えの中に真実の正義を見出すであろうことを信じる。

これは、世界の抑圧された人民と彼らの闘いが唯一結合によってこそ共通の利益を持てるということの明確な表現の一つである。

日本赤軍は、パレスチナ人民のパレスチナ全土の解放闘争と同

様に、日本革命に答え、闘いを拡大してゆくことを約束する。

我々は今、パレスチナ人民の抵抗運動と同志的に団結して闘っている。そしてまた、我々は具体的にレバノン政府によって抑圧されたことはかつて一度もない。よって、我々がレバノン政府攻撃を企てているということは、全く真実性を欠く、ブレイムアップに他ならない。

我々は日帝のデマゴギーによる茶番なブレイムアップに振りまわされてはならない。

我々は真の巨大な敵を見きわめなければならない。それは、日本帝国主義者、イスラエル・シオニスト、そして反革命同盟の全ての帝国主義者共である。

我々は、イスラエルの同盟者、反革命日本帝国主義者との闘いを国内で、そして国外でも強化することを固く決意している。我々は、日帝の偽りの親アラブ面をはぎとり、そして彼らの欺瞞を暴露する闘いを続けるであろう。

パレスチナ・アラブ革命と日本革命の連帯万才！

国際主義の闘いを拡大せよ！

帝国主義者に死を！

日本帝国主義者をアラブから追放せよ！

一九七五年三月一七日

## コメント

世界革命戦線情報センター

一九七五年三月初旬、スウェーデン警察は二名の日本赤軍兵士を偽造旅券所持容疑で逮捕し、三月一三日、日本へ強制送還した。

三月二〇日

# プロレタリア国際主義と組織された暴力万歳！ 世界革命統一戦線日本協議会を組織せよ！

## \* 日本赤軍

本日のリッダ空港襲撃三周年集会に結集した同志諸君、友人そして戦士諸君！

ベトナム・カンボジア革命勝利の熱い銃後に支えられながら、パレスチナ革命戦場が、不退転に前線を堅持、進撃していることを、そして我々日本赤軍も又、その前線で共に闘い続けていることをこの集会にむけた最良の連帯として表明する。

帝国主義支配は、人民の時代！人間による人間に対する搾取・被搾取関係を廢絶する闘いの中でおおい様のない正体を日々暴露されながら、敗北を重ねている。しかし同時に、敵・帝国主義者共は、自らの利益を延命させる為、ずるがしこく、たくみな再編を続けている。奴等は「平和共存」を叫ぶことによって、革命的兵士・人民、プロレタリア陣地をたぶらかし彼等の「平和共存」の枠組の中に、すべての政治潮流を押し込めようとしている。

歴史の流れが、革命と人民の正義を要求するが故に、帝国主義者共は、攻撃用核兵器を軸とする安保・NATO・OAS軍事同盟を背後に「平和」について語ることによって、帝国主義利益の延命の方法を人民におしつけようとしている。ベトナム・カンボ

帝国主義・ブルジョアジー・シオニスト・反動共は、この間の日本赤軍の一連の作戦行動そして、世界の革命勢力の連帯と団結の前にふるえ上り、その弾圧体制の強化にヤッキとなっているのである。

特に、日帝権力はICPO（国際刑事警察機構）への日帝警察官の派遣、警察庁内への国際刑事課なるものの新設等、各国帝国主義政府と連携のうえ、具体的な機構強化をもって、予防検束をも含めた、国際的な反革命弾圧体制を敷いてきているのである。

そして、日帝権力は、日本赤軍がスウェーデンのレバノン大使館を攻撃するとのデマゴギーを流したうえ、あまつさえ国内支援組織の解明なるおきまりの文句をもって、手当たり次第のガサ入れ、活動家の尾行、監視の弾圧を行って来ているのである。と同時に我々が忘れてはならないのは、権力の弾圧形態が特に連合赤軍弾圧以降、マスコミを大量動員したブレイム・アップ、反テロ・キヤンペーン、反動プロバガンダ体制の下になされていることである。これは、闘う人民の真実を隠蔽歪曲し、ファッショ的支配体制強化を目論み、情報操作によって支配政治を貫徹せんがためであることは明らかである。

しかし、敵・権力がどの様に工作しようとも闘う人民の真の姿はおのずと見えてくるものである。我々は目を凝らし、耳をそばだてその姿を見出し、それを人民から人民へと伝え、敵・権力の目に見えぬ情報・交通網を張りめぐらせ、人民のプロバガンダ体制を構築し、更にそれを地下兵站線へと強化していかなくてはならない。

のミニ・パレスチナ国家提案への道！ジュネーブ会議の提唱を行うことによって、資源収奪、搾取、商品市場として帝国主義政治の中に、経済、軍事総体を組み込もうとしている。ジュネーブ会議の話し合いの場という幻想をふりまき、右翼反動民族主義政権を、資本主義経済として「近代化」せしめ、パレスチナ全土解放の人民の要求を弾圧し、変えようのない歴史の波を反革命へと先行的に組織しようとしている。

ミニ・パレスチナ国家が、たとえ現実化することが可能なら、唯一それは、右翼民族主義、ファシズム、イスラエル・シオニスト、米帝の同盟者としてのみ、奴隷の立場の中で許されるのである。パレスチナ解放、人民の為の民主主義国家として建設しうるというのは、敵の中にくみ込まれた幻想にすぎない。

今、人民とマルクス・レーニン主義革命主体、左翼的民族主義者の組織は、この幻想を闘いの中で一步一步切り崩すことを、すなわち、敵の「平和共存路線」を突破する階級的闘いを、不退転、不屈に持続させている。

四月にひきおこされたレバノン右翼ファランジストによる、反ミニ・パレスチナ国家案グループ拒否戦線に対する挑発的な市



民バスへの攻撃による虐殺は、拒否戦線を圧殺するどころか、逆にレバノン進歩派、中間派を越えて、パレスチナ革命連帯勢力をつくり出し、右翼ファランジストに対する反撃を組織せしめ、帝国主義と結託した挑発者は、孤立を深めている。と同時に、パレスチナ革命総体が、決定的な転換点に立たされていることを我々は、はっきりと確認しなければならない。何故なら、日本・パレスチナ革命連帯の実実が、この転換をいかなる階級の立場からとらえるのかということが、日本のパレスチナ連帯・日本革命の闘いとして問われているからである。

今、PLO指導部に代表されるミニ国家案派とPFLPに代表される拒否戦線との間で、人民にむかって開かれた論争が続いている。我々は、この問題を次の様に問う。つまり、敵の延命の協力者として実現不可能なミニ国家を目的化するのは、それともただ革命を堅持するのか？

闘いの困難を敵との妥協でのり込めようとする右派グループの目論見は、ベトナム・カンボジア革命勝利の前で、日々色あせながら進歩的という粹をかなぐりすてて、彼らの同盟者をサダト、フセインにまで拡大させてでも幻想の建国に人民をひきつれていくようにしている。それでも拒否戦線派は、PFLPを軸に、帝国主義者、妥協主義者の弾圧に抗して不屈にねばり強く、しぶとく、したたかに革命堅持にむけて人民を組織している。拒否戦線が、未だ戦術に對置して戦術的に結集した統一戦線ではない現在の状況においても、全パレスチナ人民の闘いを全的に抱擁しえる対応性と方向性を可能性として持っている段階に到達している。

し、我々も又、我々の立場において遊撃戦争を闘い抜くことを約束する。東アジア反日武装戦線の同志が、一分野として担っている系統的で持続的な闘いを更に、日本階級闘争における人民と共に闘える構造へと、階級形成としてとらえかえす中で、我々は深く地下活動を通じて、建党・建軍の闘いの中で、同志たちとひとつの隊伍を担うであろう。

いまだ端緒でしかない敵への遊撃戦による破壊の現時点を、階級的な結集をめざし、国際主義の地平からとらえかえし、破壊の質を獲得の質へと、敵との対峙戦を地下に組織し合い、一分野における闘いをあらゆる分野における系統的、持続的な闘いへと組織し合い、別個に進んで別個に撃ちつつけながら、味方を保存し全方面にわたる遊撃戦を、蜂起・プロレタリアートの独裁へと階級的な、全面的な闘いへと成長せしめる為に我々も又、その一端を今、準備しつつけるであろう。

日本赤軍の持続的なゲリラ戦を誕生せしめた、テルアビブ闘争の歴史的意義の上に、非妥協な革命戦争を我々は断固堅持する。

このテルアビブ闘争の地平とは、まさに、世界階級闘争の対峙情勢を主導的に闘い抜く、世界党・世界赤軍建設にむけた主体を具現した最初の闘いであり、第二に、被抑圧階級の普遍的利益を最良の形態で、PFLPとの共同武装闘争によって最前線の任務を保証した階級的団結の深さであり、第三に革命主体形成にむけて、国際主義と革命の暴力を、シオニスト・イスラエルとの闘いの中に表現することによって、反帝反シオニズムの闘いを担う可視、不可視の主体に対するプロレタリア階級と、その闘いの結合環を

この革命堅持、全土解放にむけて開かれた闘いの中にこそ、真の人民戦争を媒介とする、人民の民主主義的な建国を唯一可能ならしめる方向が存在している。我々日本赤軍は、マルクス・レーニン主義の立場から、この現実を直視し、即自的な妥協がパレスチナ人民の正義を売りわたす結果を招くことを、すなわち、人民戦争の結果として解放区をプロレタリア被抑圧階級の独裁として闘いとることぬきに、ミニ・パレスチナ国家を目的化してはならないという立場を堅持し、我々は、拒否戦線・PFLPの政治路線を共に我々日本赤軍の立場から担うことによって断固として革命を堅持する！

そればかりか、アラブ戦場・パレスチナ戦場と、アジア戦場を一つに統一し、単一の革命戦場として人民の統一を目的意識的に追求しながら、敵の「平和共存路線」を突破しつつ、世界同時革命にむけた地下対峙戦の陣型を固めていく。

今、断固として闘う地平とは、敵の「平和路線」を我々の平和の道・人間の搾取、被搾取関係を廢絶する闘い・の唯一の目的にむけて、あらゆる場所で、あらゆる方法で革命勝利を実践し抜くことである。

同志・友人・戦士諸君！更なる団結した進撃を誓おう！

日本の中で今、東アジア反日武装戦線をはじめとする同志たちの闘いが、五月一九日の八名の戦士の逮捕にもみられる恐怖にひきつった権力の狂暴な反革命弾圧、フレイム・アップ、反動プロパガンダの嵐にさらされながらも持続的で、系統的な真の遊撃戦争の萌芽を担いつつあることを我々日本赤軍は断固として支持する。

統一戦線としてテーゼする内実としてあり、第四に、日本階級闘争の中で、不断に切望されていた世界・一国の結接点として、日本階級闘争の中から誕生した主体の組織的闘いを軸に、日本人民の革命連帯の萌芽を示し、第五に、この闘いに表現された戦士の作風・思想の共産主義的内実である。

このテルアビブ闘争によって獲得した質を堅持・発展させることこそ、我々日本赤軍の原則方針としてある。このテルアビブ闘争を戦士の作風のみ一面化、純化することによって、決意の方針化に転倒されるのではなく、発展しぬくこととは、この地平を、いかに組織の質的量的内実へと、人民との結合にむけて闘いを持続発展せしめるのかという革命戦争にむけた、我々の担うべき方向を示している。つまり、リッダ空港襲撃闘争を担う主体的な力量の困難さを越えて、具現ならしめた組織性を、武装闘争の持続発展におしとどめ固定化するのではなく、武装闘争を軸とする革命党・軍形成へと、世界的規模の戦略的統一戦線・共産主義運動の組織化として、日本国内・アジア規模の遊撃を我々は、日本の同志諸君と共に担うことを要請されている。

パレスチナ革命戦場においても又、テルアビブ闘争の地平はマ・ロット作戦、キリヤト・シエモナ作戦へと引きつがれ堅持され、拒否戦線の闘いの基盤の中に、そして、人民の革命堅持の思想の中に生きつつけている。

闘う日本の同志・友人・戦士諸君！

プロレタリア国際主義のリッダ空港襲撃・テルアビブ闘争の地平を共に我々と担いつつ進撃しよう！

唯一それは、革命政治を人民と共に貫徹すべく、世界同時革命をめざす党的主体・グループが、一つの党一つの軍形成を、世界日本革命を担う責任として問われている。今こそ、世界同時革命を開く共産主義者の党・軍の建設を、日本国内において世界革命統一戦線日本協議会へと組織し、世界の統一戦線主体と同等な闘いを担うことが要請されている。

世界の同志たちと共に、建党建軍過程にある我々日本赤軍は、世界同時革命にむけて、共に、日本の共産主義者党建設一赤軍建設の為に、まずもっての協議会形成を相互組織しあうことを呼びかける。この協議会運動を共産主義運動として、プロレタリア国際主義と組織された暴力を真に復権せしめ、日本の地において、日米帝国主義反革命に対決する全分野における遊撃戦を系統的・統一的に、協議会への地下結集を軸におし進めんことを呼びかける。党派政治が、革命政治を疎外し続けていた過去の闘いを「党派性」という組織利己主義を、革命政治における二義的な内実としてとらえるところから止揚し、革命政治を協議会運動の中で、自己批判一批判の運動としてうちたえ、共同綱領一共同実践獲得にむけて、妥協のない思想闘争を敵への打倒にむけて組織しよう！

スターリニズムによって生み出された自己批判のない批判は、分裂と敵対で革命陣地を墮落させて来たし、自己批判一自己改造のベクトルを持つ革命堅持の思想性を持って、共産主義運動として、世界革命統一戦線日本協議会を単一の革命党革命軍建設にむけて相互組織しよう！

我々は今、リッダ空港襲撃一テルアビブ闘争三周年を迎へ、テルアビブ闘争の闘いの地平が築いた世界革命統一戦線テーゼを軸に、自らを検証し、勝利の革命にむけて多くの同志たちと団結を深めている。そして、この小さく若い我々は、いくつかの実践の失敗の中で、同時に実に多くの教訓を得、学んで来ている。

今、二人の我同志が、日本帝国主義の極度の恫喝の中で孤立した状況にあることを、そして、我同志が、敵に対して完全黙否で闘い抜いていないことを我々日本赤軍は、事実として認めざるをえない。我々は、我二人の同志が、苦境の中で耐え、無念の想いかられたであろう敗北感を、まずなによりも敵への憎悪、階級的憎悪として我々の建軍過程の中に刻み込み断固として反撃を組織する。

そして我同志二名の事態を、日本赤軍全体の思想性の未だ弱さ、組織性の未だ弱さとして自己批判的にとらえ、勝利の確信に燃えた革命思想として深化すべく、不退転に自己批判内実を貫徹することを全世界・日本人民・同志共闘組織、同時にそして敵・帝国主義者共に対し宣言する。

それは唯一、我々の敵に対する非妥協な闘いの貫徹、持続をもって同志・友人・戦士たちに裁かれるべき、我々の榮譽ある革命堅持の内実としてある。我々は必ずや、二人の我同志と再会し、再結集し、再度革命戦士として赤軍兵士として迎へ、闘い抜くことを、我々の革命の作風一思想性として貫徹する。二人の我同志を加え検証し合い、思想を共有し、敵のスキヤンダラスなデマゴグではなく、我々は、革命にむけて検証作業を貫徹し抜き、そ

の時点で、日本赤軍としての立場を再度あきらかにしていくことを約束する。我同志のダメージは、日本赤軍のダメージのみならず、共闘主体、全世界の闘う人民のダメージであり、我々の思想は、断じて敵権力に屈するものであってはならない。ベトナムの、パレスチナの、三里塚青行隊の完熟の思想は、階級的闘いの深さの表現であり完結が、革命を、人民を防衛する唯一の捕虜の前提である以上、それを貫徹しえなかった責任は二人に帰するのではなく、いまだ、日本赤軍がもつ弱さであることを痛苦を持ってうけとめ、敵打倒にむけて、更に強固で大胆な隊伍に組織しながら闘い抜くことを自己批判にかえて宣言する。

三戦士によって切り拓かれたリッダ空港襲撃一テルアビブ闘争の闘いの革命的地平と、共産主義思想の勇敢無私の非妥協性を、

## リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命戦争勝利国際連帯集会へのアピール

### \*パレスチナ解放人民戦線国際局

同志・友人たち

一九七二、五・三〇日本赤軍とPFLPが連帯して遂行したリッダ空港襲撃戦三周年にあたって、我々は犠牲者となった彼らの死に対して心からの敬意を表明する。

リッダ空港襲撃戦における彼らの献身的な、しかも英雄的な参加を通して同志バーシム、サラハ、アハマッドは日本人民とパ

日本赤軍の原則基盤へと深化せしめ、必ずや勝利の革命の先頭に起って闘い抜くことを、この日本赤軍誕生の日、テルアビブ闘争三周年に誓って、我々の連帯の意の表明にかえたい。

- ・テルアビブ闘争の地平を堅持し、更なる進撃を！
- ・プロレタリア国際主義と組織された暴力万才！
- ・日本一パレスチナ一ベトナム一カンボジア革命万才！
- ・アジアアラブ戦場を単一の戦場へと組織せよ！
- ・世界一日本革命にむけて、世界革命統一戦線日本協議会を単一の建党一建軍として組織せよ！

五・三〇リッダ空港襲撃闘争三周年集会へ向けて

五月三〇日

レスチナ人民との連帯の道を開いたのであった。

同志アハマッド・岡本は、多くの我々の闘っている同志と共に、イスラエルに拘禁され続けている者として、この連帯を強調している。

彼らの犠牲的精神を決して忘れることはないであろうし、我々が我々の武装闘争を前進し、更に前進し続けることで彼らを思い

出すであろう。

そのような共同行動の成果を通して、我々はシオニスト共の主要な背景である帝国主義を屈服させるだろう。

すでにベトナム・カンボジア人民を先頭とするインドシナ人民は、少数民族にもより大きな敵を打倒出来ることを立証した。しかし、それらの勝利も帝国主義に対する人民の効果的な武器！武装闘争！の強化の結果としてあるのである。

今日、パレスチナ解放闘争は、我々の闘争とアラブ解放闘争総体を一掃するために、米帝とその協力者共の率いる帝国主義と真正面から対峙している。

帝国主義とアラブ反動派は、彼らの役割の成功の為に、いわゆるアラブ・イスラエル紛争を解決するうえで欠けているものは、パレスチナ人に彼らの「和平」協定への参加を要求することであると確信している。

この意味で、帝国主義とアラブ反動派は、パレスチナ人指導部に対して、どうしても自発的に最初の目的を断念するよう要請しないわけにはいかなかった。しかも次々と関係者となり「平和」計画の偽造が必要でもあった。その計画の主要な目的は、パレスチナ人民の武装闘争の終結と、徹底的にその総体を一掃するためである。しかもこの過程は、ジュネーブ会議を実現する時に、パレスチナ人指導部を参加させることによってはじめて首尾よく目的を達せられるのである。

PFLPは、パレスチナ人民の代表団が参加するしないにかかわらず、無条件に断乎として闘い抜き、ジュネーブ会議を拒否し、

いかなる決議も承認しないことを宣言する。

もし我々が、帝国主義的平和に基づく協定に着手するならば、我々は唯、解放闘争を失うことになるだけだ。

現在の勢力均衡は、まだまだ我々に有利なものではない。今後、我々は潜在している能力、勢力、直接に立向う効果を結集し、帝国主義的、清算主義的計画の息の根を止めなければならぬ。

この協定に参加するどのようなパレスチナ人指導部も、我々人民の闘いを裏切るだろうし、我々人民の憤怒を別の方にそらしてしまうにちがいない。

我々の指導部、我々の兵士、我が人民は最後の全面勝利まで闘い続けることを決意している。

我々は、我々の前に残されている任務の正確な理解に基づいて、真の統一戦線の構築に努力する。我々はすでに「パレスチナ人民拒否戦線」を発展させる活動をはじめている。

何故なら、それは完全に承認された勢力であり、帝国主義とイスラエル・シオニスト共を打倒する唯一の道は、パレスチナの全面解放と自由なパレスチナ人民社会の確立となるであろう長期間の人民戦争を指導することであるからである。

再度／ベトナム・カンボジア人民の勝利が証明したように、我々は武装闘争こそ解放の唯一の道であることを確信している。

同志バーシム、サラハ、アハマッドは、この時にこそ思い出されなくてはならない。

彼らは、武装闘争を確信していたばかりではなく実際に実行者であったからである。

我々の闘っている人民を代表して、我々は、日本の革命勢力の前進のために戦闘中の熱いあいさつを送る。

そして、この日から、我々はあらゆる帝国主義勢力に対抗し、我々の武装闘争が敵を完全に打倒するまで続けることを約束し、

## リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命戦争勝利国際連帯集会へのアピール

### \*パレスチナ解放人民戦線総司令部派政治局

日本人民の革命的諸組織、同志諸君！

パレスチナ解放人民戦線・総司令部派（PFLP・GC）の戦士、人民根拠地（PopularBase）中央委員会、政治局を代表して、日本のそして全世界の資本主義・帝国主義に対し、軍事闘争を展開している同志諸君に対し、固い連帯を表明し、この革命的集会に挨拶を送ります。

同志諸君！

我々は同一の敵に対峙しています。その敵とは様々な形態をとっている植民地主義、シオニズム、民族反動派そして米帝に導かれ共にある世界帝国主義であり、彼らは人民を抑圧しその富を強奪し続けているのです。

我々はその敵に対し、世界のすべての人民の自由を達成するための同一の戦線、世界的な革命戦線のそれぞれ一翼を担っているのです。

共に連帯することを再度断言する。

我々の犠牲者の思い出万才！

日本人民！パレスチナ人民連帯、国際的連帯万才！

パレスチナ革命・パレスチナ全面解放万才！

同志諸君！

我々PFLP・GCは、闘争の最良の形態である武装闘争のみが、シオニスト、植民地主義から、パレスチナを真に解放させるものであると確信しています。

我々の政治基盤は、科学的社会主義であり、人間の解放なしに地域の解放は存在しないことをはっきりとさせています。

この政治方針の具体的な闘いが、一九四八年以来の被占領地域内の我が同志によるカルサ（キリヤト・シェモーナ）、ウム・アラカレブ（クファール・シャミール）作戦でした。

そして、この作戦はリッダ闘争の三戦士によって切り拓かれたものです。

奥平、安田、岡本の三戦士によって切り拓かれた、シオニズムとその頭目米帝に対する我々と、日本の同志との共闘の実践的な闘いの地平を、我々もまた受けついでいるのです。

同志諸君！

また我々は、我々の闘争が直面している米帝によって仕組まれた中東和平策動に対し、次の理由から断固として拒否することを表明します。

① 我が勇敢なパレスチナ人民の革命を抑え、アラブにおけるイスラエルの存在を保護する目的で和平を押しつけようとしているその帝国主義こそが、パレスチナや他のアラブ地域を占領しているシオニスト国家を作りあげているのだ。

② アラブ国家における米帝の勢力は、労働者階級とアラブ民族運動の意識の発展に従って、ますます後退している。それに対し米帝は、いわゆる「和平」によって、幾つかのアラブ国家における米帝の支配力を復活させることを意図しているのである。

③ この「和平」の目的は、まやかしの国家ミニ・パレスチナに

## リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命戦争勝利国際連帯集会へのアピール

### \*アラブ解放戦線中央委員会

結集された同志・友人諸君に連帯の挨拶を送る。

バーシム・奥平、サラ・ハ・安田、アハマッド・岡本の三戦士によって闘われた、パレスチナ・アラブにおける英雄的な闘いは、帝国主義、シオニズム、国際的反動勢力の国際反革命同盟に対し闘っている全ての世界革命の戦士の統一の必然性を体現したものの

よって、パレスチナ革命の路線をそらし、パレスチナ革命とアラブ解放運動を分断することで、パレスチナ革命の原動力であるアラブ解放運動を抑えつけ、一握りのパレスチナ人を和平会議に参加させることで、パレスチナをシオニストの植民地とする企みを、アラブ人民から覆いかくすことにある。

同志諸君！

我々は、諸君の集会を信頼し希望に満ちて見守っています。すべての努力が、敵・帝国主義を、いつ、いかなる場所においても攻撃しうるところの世界的な統一戦線へと結集してゆくことを信じているからです。

自由の旗を高らかにかけよう！

日本の革命勢力万才！

解放への路を歩むパレスチナ人民万才！

である。そして更に、シオニストの占領に対する彼らの英雄的な闘いとその死は、パレスチナ革命戦争が、世界革命の最前戦として構築されているのだということを明らかにしている。

同志諸君！

日本赤軍とその三人の同志によって、パレスチナで切り拓かれ

た最も重要で真剣な地平は、パレスチナ革命とアラブ革命の統一を、その組織的形態と戦略的基盤、確定された革命理論を通して勝ちとり、パレスチナ革命と世界革命の結合を証明することによってより深化される。

すべての民族的、階級的敵に対するパレスチナ人民の闘いは、パレスチナ解放闘争とアラブ民族革命闘争の実践的連帯を構築し、他方特権階級の権力に対し闘う統一、「パレスチナ解放戦線」によってしか勝ちとれない。

ここから、アラブ人民はパレスチナ解放闘争における、そして必然的に世界革命における自らの役割を見出すのである。

同志諸君！

この様な組織形態、戦略基盤、革命理論の一致によるアラブとパレスチナの統一の構築が、現在、勝ちとられていないのは帝国主義者、シオニスト、アラブ反動派による強力な侵略とパレスチナ革命におけるアラブの降服のためである。

このことから我々は、「パレスチナ解放戦線」の構築によるパレスチナ革命とアラブ革命勢力の統一を通して、世界革命と結びつくことがパレスチナ革命を強化し、支援するものであるという事実を確信する。

パレスチナ革命の未来と、敵の国際的侵略基地の打倒は、パレスチナ解放に先立つアラブ革命に直接依っているのである。

同志諸君！

我々は、諸君の同志であり我が同志である日本赤軍のリッダ闘争の英雄的な闘いを高く評価し、そして更なる世界革命勢力の共

闘と連帯なしには、敵の経済的、イデオロギー的、社会的、軍事的基盤への直接的攻撃なしには、帝国主義、シオニズム、国際反动派への闘いはなしえないと確信する。

全世界の闘う人民を力づける、インドシナ人民の米帝打倒の革命の勝利という歴史の流れの中で、再度、我々は諸君の集会に連帯し、我々が日帝打倒の諸君の闘いと共にあり、日本プロレタリア階級の前進と共にあることを表明する。

リッダ闘争の英雄を記念する国際集会は、我々を強く勇気づける。

しかし、パレスチナ革命をジュネーブ会議へ参加させ、和平の策動にのせることによって、我々の革命を阻止しようとする民族的地域的敵の企みが、我々を攻撃している重大な局面に今、我々はある。

我々が、諸君の集会に参加できないのはこの状況のためであることを付け加えておく。

パレスチナ解放人民武装闘争万才！

日帝・世界帝国主義と闘う日本赤軍万才！

パレスチナ革命とアラブ革命の統一万才！

前進と自由の敵に対する世界人民の共闘万才！

革命に死んだ我がリッダ闘争の英雄に、永遠の栄光あれ！

世界革命のために死んだすべての英雄に永遠の栄光あれ！

帝国主義者、シオニスト、世界の反革命共よ、恥を知れ！

勝利は常に反革命勢力に対し闘う人民のものである！

# リッダ闘争三周年パレスチナ人民連帯インドシナ革命戦争勝利国際 連帯集会へのアピール

## \* PFLP 日本人医療隊

5・30三周年にあたり、集会に結集した闘う日本の労働者、人民へ！

輝かしいテルアビブの三戦士の五月、レバノンでは敵の陰險な爆弾により、一五日のデッチあげ「イスラエル建国記念日」に、ガザ地区抵抗闘争指導者アブ・フサンが、今また車ごと粉々に散った。

ちょうど、一九七二年、テルアビブの闘いの後、その報復としてPFLP情報局ガッサン・カナファーニとそのめいの車の爆破と同じように！

その手口は、パリのPFLP指導者暗殺と全く同じだ！

イスラエルは、南部国境のレバノン村人達の誘拐等、国境侵犯をいつもより強化している。音をたてて崩れていく米帝国主義者の反動の、イスラエルは、最後のあがきに、イスラエル秘密警察をフル動員、レバノン反動、暗躍する米CIAと結託し、あらゆる手段をもって立ちむかって来た。

血なまぐさい五月が、日本に強制連行されたフレイム・アップのための人質、日本赤軍兵士二人を切り刻もうとしている。

極東の反共の誓、世界帝国主義者共の最前線と中東のイスラエ

ルとは、七〇年代後半の崩壊をせまられた米帝の死守線であるが、故に、本格的な日本に於ける世界革命の闘いを開始する合図が、この血ぬられた五月に鳴りわたっている。

闘う日本の同志！

今や、敵の陣中、被占領地の闘いが毎月数十件に達し、アラブ人民とパレスチナ人民の闘う連帯が深まり、米ソの和平マヌーバが世界的に暴露され、文字通り地下豪をもって前線を強化した人民が国境の対峙戦に復帰していることを、レバノンから報告し、リッダ闘争の切り拓いた国際主義の精神を日々の糧としたPFLP日本人医療隊の、さらなる進撃をちかい、あいさつとします。

一九七五年五月三〇日

TOWARDS PROLETARIAN INTERNATIONALISM  
AND ORGANIZED REVOLUTIONARY VIOLENCE

خوالبروليتاريه العالميه والعنف الثوري المنظم

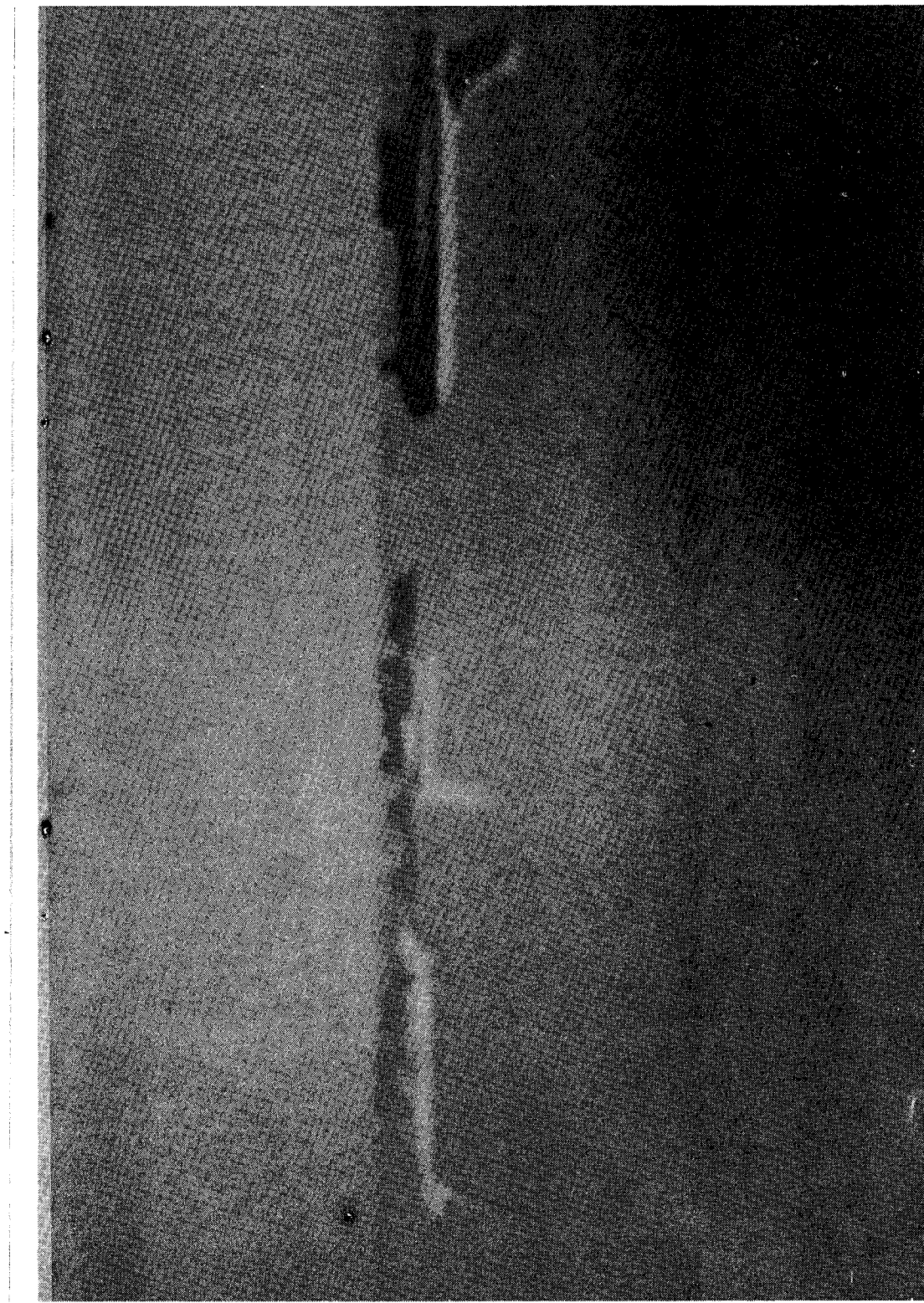
暴力を組織した国際主義とアラブ人民



الجيش الاحمر الياباني  
THE JAPANESE RED ARMY  
The Popular Front For The  
Liberation Of Palestine

3<sup>rd</sup> ANNIVERSARY OF TEL AVIV OPERATION 1972  
الذكرى الثالثه لشهداء عملية تل ابيب ١٩٧٢







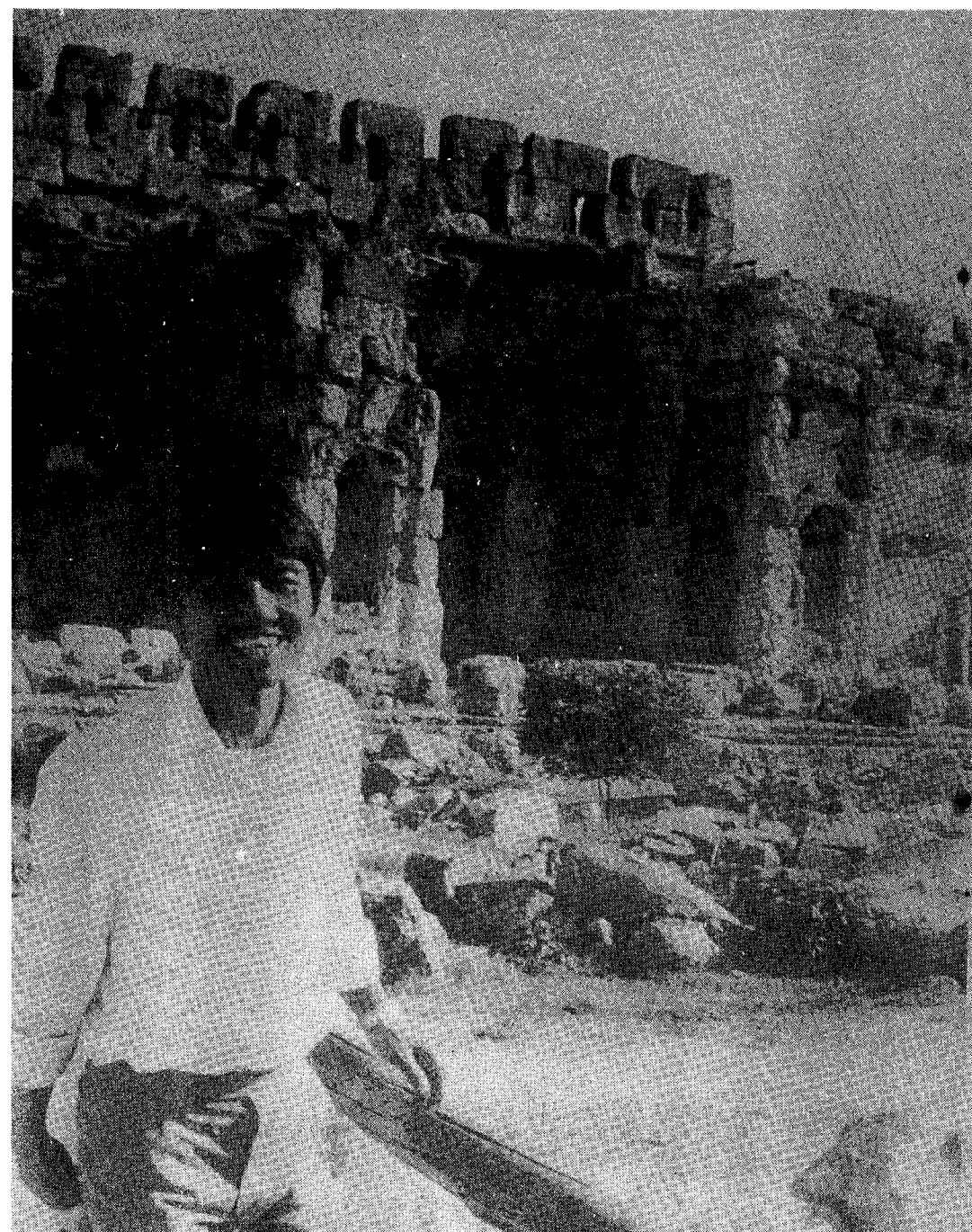
GHASSAN KANAFANI

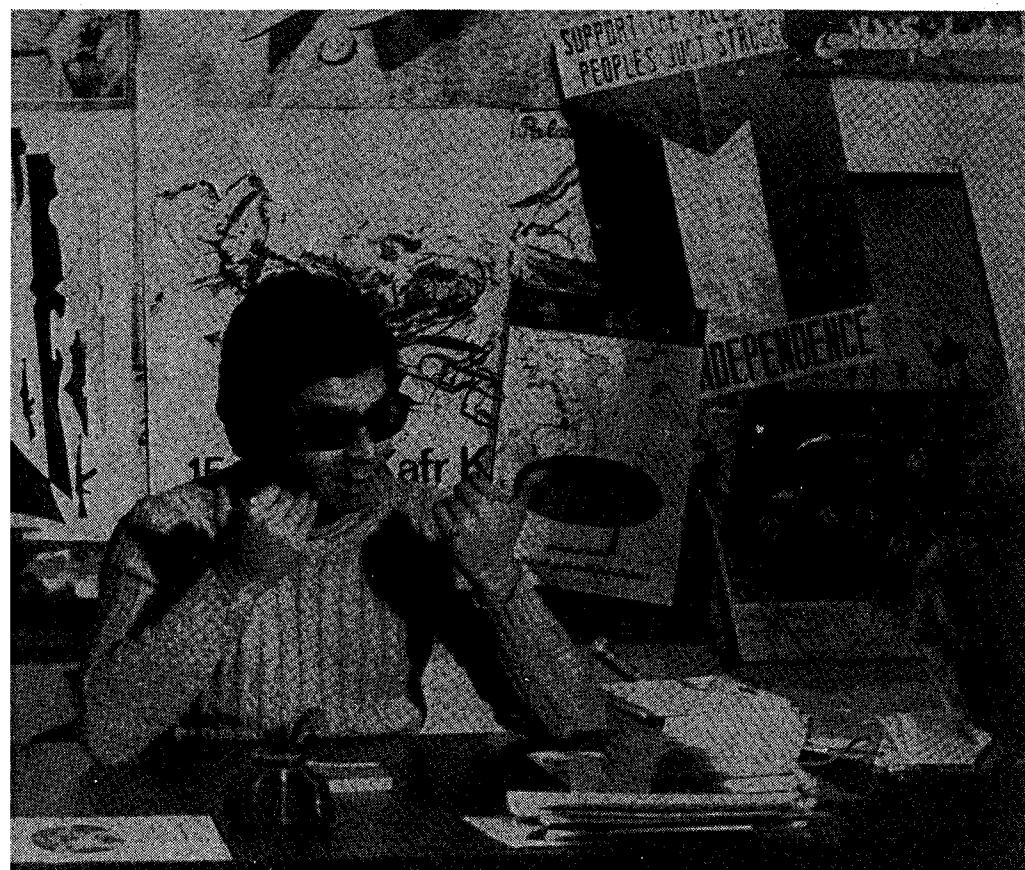


GEORGE HABASH









BASSM ABU SHARIF : CHIEF EDITR OF "AL HADAF"

いかなる地においても敵を打



OUR BELOVED COMRADES  
OF BOUNDLESS COURAGE  
AND FITTING WITH ZEAL

倒する国際主義的闘い万才！

# 1972

赤軍派の同志諸君ならびに連合赤軍の同志諸君  
そして友人たちへ

\* 重信房子

さらば連合赤軍の同志諸君！

赤軍兵士の一人として、夢と勇気を込めて、訣別を宣言する。訣別とは、真の革命戦争を準備すること。訣別とは、不退転の決意で自らを検証すること。たとえ銃撃戦の開始をもって、人民に武装の質を伝達したとしても、自らの体内に共産主義がないかぎり、それは我々がめざす革命戦争ではない。敵との直接的な緊張関係を通してでなく、味方内部を規律によって、共産主義化しうるという幻想は、悪しき独裁を助けるだけだ。我々はこんな革命はいらない。

仲間を殺した連合赤軍の同志たち、今だ、同志と呼ぼうとする私の気持が判りますか。仲間を殺す権利など、

誰も持ちあわせてはいない。あなたたちの、革命の私物化を斗う同志たちは、決して、許しはしないだろう。たとえあなた達が、数人、数十人の敵を殺したとしても、仲間を殺した罪は、償えないだろう。

殺害に責任ある同志たち、ブルジョア裁判によってではなく、人民の手によって裁かれることを望んでほしい。我々は、同志としてブルジョア裁判で、あなた達が処刑される以前に、同志として我々の手であなた達を、裁くことを義務として負うだろう。

同志諸君、今だ困難をのりこえ、この責任を同質に受けながら尚、革命戦争を継承している同志諸君、中国革命の困難な途上を覚えていますか？「『隊伍をととのえ



なさい。隊伍とは、仲間であり、仲間でない隊伍が、うまくゆくはずがないではありませんか。『我々は、隊伍をととのえた。全軍は、九一人と七二挺の銃をのこすのみとなった。多くの者が失われたが、残った者は精鋭中の精鋭であり、自覚を持ち、立場をわきまえ、どの様な困難と欠亡にも耐え得る戦士、すなわち、もはや、わが難き革命の志に結ばれた一心同体の仲間のみであった。』隊伍をととのえなさい。隊伍とは仲間であり、この言葉を叫びながら、同志達とこんなにもかくぜつしてしまっている無念に不覚にも涙が流れてならないのです。覚えていますか？議長を中大にとらわれ、関東学院に集結した時のことを。お金もなく闘う武器もなく、しかしながら、「革命の志」に結ばれた一心同体の仲間達は心には余裕があったことを。

覚えていますか？一人の同志の言葉を、「例え、赤軍派が存在しても『リンチをする組織』『仏議長を権力に売った組織』として永遠に批判されるだろう。これに対して、仏議長を奪い返す戦術も練った。だが、事実は事実であり、例え赤軍派を解散しても、『スネに傷を持っている。』過去が我々からなくなる訳ではない。

赤軍建設は、現赤軍派以外のものによってしかなり得ないのか？我々は一生「反革命」でなければならぬのか？いや、例え「スネに傷を持って」いようと、ここで赤軍派を解散してはならない。秋の蜂起は、誰がやる

あらゆる党派、あらゆる斗いの担い手が、自らのものとして再点検しない限り、大なり小なり、こうした終えんに向うにちがいないと思うのです。

党—軍の共産主義化の斗いは、味方階級の普遍的な質として敵との攻防を通して創造されるものであり、死を決意した斗いは、同志の命がどんなに尊いものであるか、現実には銃撃戦を闘いぬいているバレスチナの同志達から教えられています。

バレスチナの闘う同志達は、日本の斗いがインターナショナルといいつつも、実はナショナルな情念価値観にとらわれていることに、悲しみと驚きを表現しています。

私は、赤軍兵士の一人として、世界の質を實質的に逆流させることを断固として接続させるでしょう。

獄中の同志達、この苦斗を乗り越える主体を日本の闘う同志達と共に着実につづけることを約束します。

同志達、斗いの中で抱き合える日を確信します。

—以下、後半部分省略—

のか。我々は自己批判しよう。我々指導部は、右派でも、中間派でもない。中央委員会、その下の統制委員会で死刑を受けても良い。そのことで、はっきりと階級的に自己批判します。にもかかわらず、現在の赤軍派を解散してはならない。指導部は、トロツキーや、ボルシェヴィキの様に殺されても、それは「スネに傷」を持っていてから仕方がないが、君たちは立派に堂々と育つてよい。死んではならない。六九年秋の決定的な歴史の転換に蜂起で応えるのだ。今、芽をふいたばかりの赤軍、日本階級斗争と、世界の歴史の一切の利益を表現している赤軍の芽をここで殺したらまた歴史は数十年を全地球的地獄の世界とするだろう。第二次世界大戦以上の未曾有の破局／否／否／否／

（赤軍結成の歴史「世界革命戦争への飛翔」より）

あらゆる友人達に、自己批判を通して、わがち合う地平を確信する為に、どんなに痛苦であろうとも始めようではありませんか。

同志達、唯一このことによって殺された仲間達の無念を、情念として出発することが出来るのです。

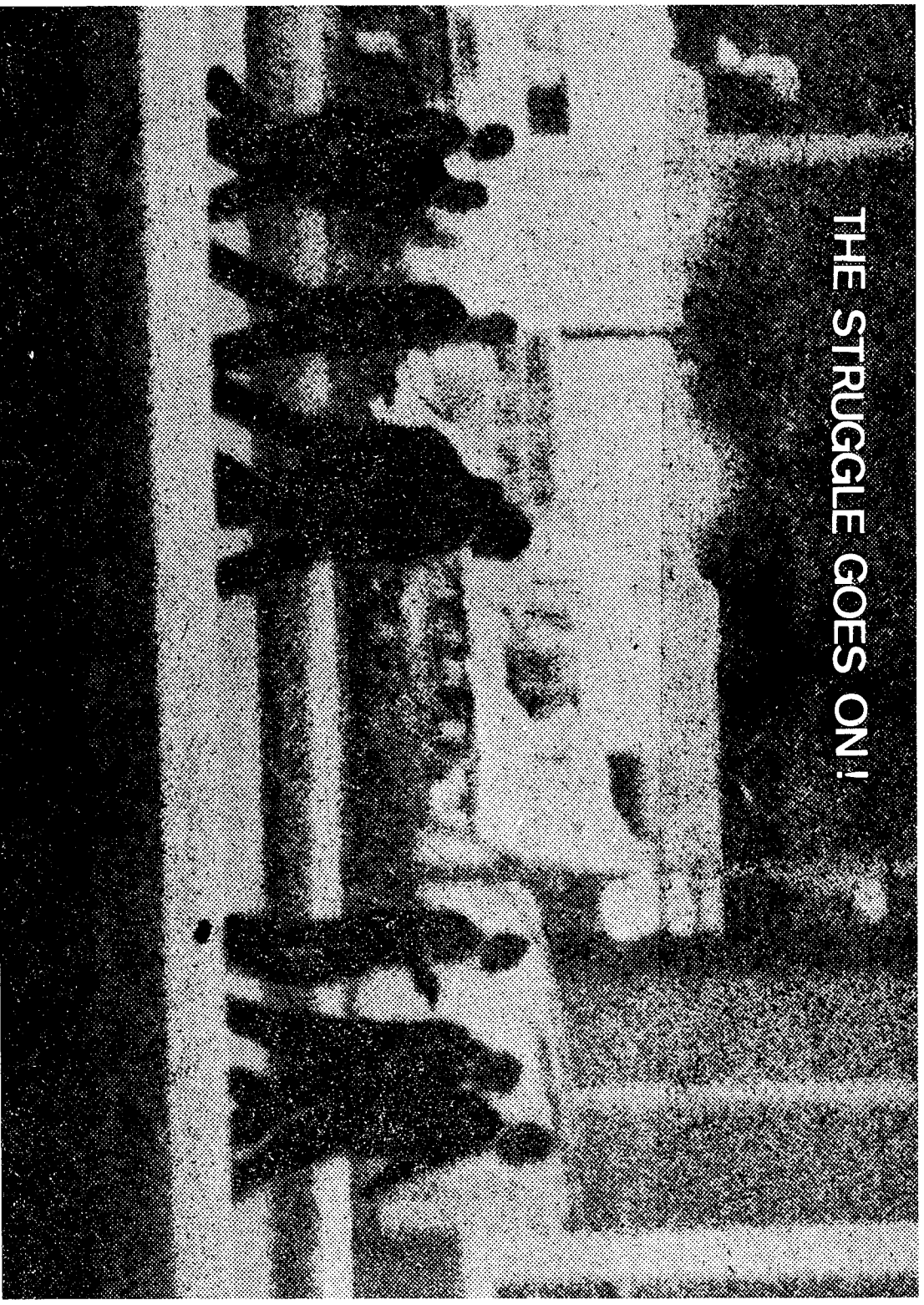
そして闘う友人達。

現在の新左翼Mの純化された形態を赤軍派が、ひきずっていたことも事実です。先行した現実を同様に、闘う友人達も自らの検証の地平として、みつめようではありませんか。

#### 編集部・註

この文章は3月14日（一九七二）付でベイルトより寄せられた重信房子氏の書簡であり、日本赤色救援会を経由し、共産同赤軍派東京委員会あてに届けられ、3月31日「3・31 H J2周年 銃撃戦万歳・故連合赤軍兵士追悼・人民集会」に於いて読み上げられたものの再録である。

THE STRUGGLE GOES ON!



I

アラブ赤軍からのテーゼ

## 赤軍からの宣言

### \* 赤軍

一、われわれ赤軍は、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）の同志とともに、共通の敵に対して成功裏に行なわれた攻撃的闘争のニュースを享受できて幸福である。われわれはこの作戦を誇りとする完全な権利を持つ。

一、敵は、全世界にいつわりの情報をまき散らし、わが革命的攻撃の衝撃をけんめいに低めようとつとめている。彼らがいかにかにヒューマニズムVの名に於いて自己を正当化しようとも、われわれは彼らが1956年10月20日、パレスチナのカフル・カシム村で何をしたか思い出すだけである。彼らがヒューマニズムVについて叫べば叫ぶほどわれわれ戦う人民は自らの長い虐げられた歴史を、ますます鮮明に思い出す。

一、虐げられた者の語ることは、銃以外になく、虐げられた者

が心に抱くヒューマニズムは、武装闘争以外にない。ベトナム、パレスチナの同志たちが、帝国主義者の世界分割によって作られた国境を突き破って日夜任務を果しているのと同じ方法でわれわれも戦い続け、闘争を強化する。

一、真の団結は、先進国ならびに第三世界の人民の共同武装闘争を通じて、また共通の敵を打倒する過程を通じてのみ達成される。一、三人のゲリラ戦士は、具体的かつ効果的な実行と、犠牲の上に立つ、われわれの革命に永遠の火をとすために、ききとして攻撃におもむいた。われわれもやる。全世界にわたる彼らと同質の闘争を拡大しよう。

一、パレスチナの虐げられた友よ、この闘争は、日本帝国主義者の黒い血にまみれた手で育った日本人民が武器を置くことなくあ

なた方に手をさしのべ、抱擁し、歩き続けていることを証明した。それをわれわれは誇りに思う。

一、われわれは宣言する。「われわれはパレスチナの友人ならびにPFLPの同志と手を取り、世界の全ての敵を打倒するまで前進する用意がある」ことを。

一、勝利の日まで、日本に進む朝鮮、中国人民に、さらに日本の中の第三世界を強制された沖縄人民と共通の敵の打倒において、われわれと共にある全世界の友よ、われわれは互いに会うことはないけれども灯をともしプロレタリア国際主義があらゆる戦線ならびに戦場を統一し、ひとつの敵をたたきつぶすことを、確信をもって告げる。世界革命までともに歩もう。

一、日本の同志よ、友よ。愛する三人の同志の闘争を前進させ、既成の国境を打ち砕き虐げられた者の心はひとつであることを胸にしつつ、より大胆に進もう。

一、三人の同志の最後の言葉は次のようであった。「われわれは絶対に失敗しない。歴史の中の無名戦士としてどこでも死ぬ用意がある。いざ友よ、家族よ、葬式をせずにお祝いをせよ」

31. may. 1972 赤軍



## アッピール

### \* アラブ赤軍

闘う日本の同志、友人たち

アラブ赤軍によって貫かれた攻撃的陣型は今、熱狂的なアラブ人民の歓喜を呼び起こしています。この歌と祝砲が聞こえますか？

民族主義政府、リビア・エジプト・シリア・イラクなどの政府までも、赤軍三戦士の勇敢な国境を越えた闘いを一日中ここ一週間支持する放送を流しています。

抑圧された人民は敵の攻撃によってめざめ、敵の抑圧によって益益強くなっていることをブルジョアアジアは気付くのが遅すぎたようです。パレスチナ革命戦争を、世界革命戦争の同時・同質的な闘いとして、プロレタリア国際主義の先兵として闘いぬいた赤軍兵士が、日本人民に次のことを伝えてほしいと言っていました。

「国境を越えた闘いは日本革命を保証し、日本革命は世界の人民戦争を押し進める。日本の友人たち、行動と犠牲の上に雄々しく燃えている革命の歴史を継承し、世界の友人と共に進め、隊伍を整えよ、敵は一つだ。我々は日本人民の誇りを持って世界赤軍としてパレスチナ人民と戦争に行く。絶対に葬列をくり出すな。ただ祭りを我々と世界革命の友人たちの為に。」

世界の革命的同志たちとの連帯とは、フェスティバルでもおしゃべりでもなく、唯一、共通の敵に向けて武装闘争を貫くことです。

我々は、第一インターナショナル、第二、第三、第四の歴史的インターナショナルを武装闘争を軸とした世界革命戦争の陣型で乗り越える用意がある。我々と共に、国際主義をかけた勇敢に突き進むPLFPの同志たち、トルコ人民解放軍の同志たち、ドイツ赤軍の同志たちは今、世界革命戦線構築に向けて、あらゆる場所で武闘争を展開している。人民戦争は我々が場所を選ばず権利を持ち、我々が時間を選ばず権利を持ち、最も有効な方法で敵権力の打倒に向けた闘いを要求している。

パレスチナ革命の状況の中で、最も有効に闘いを貫き、世界革命陣型の一步を担ったアラブ赤軍は、あらゆるデマゴギーをはねのけ、日本の同志たち友人たちが共に立ちあがることを呼びかける。

我々は日本革命——世界革命を多くのうちの一人一人として、共に思うだろう。

闘う日本の同志諸君、沖縄の抑圧された人民と共に、在日朝鮮人民・中国人民と共に、立ちあがった現職五自衛官と共に、自らの立

場を明確に武装闘争に表現して進もう。我々を含むすべての「革命家」は高慢であつたし、一人よがりであつた。打ちこわし、火つけなど人民の戦うすべてから学び、共に情念を武装しよう。我々はあらゆる困難を乗り越えて進む。我々はあらゆる場所で世界の人民戦

争の兵士となる用意がある。闘う日本の友人たち、隊伍を整えて共に進もう！

六月五日

## 戦争を知らない革命家たちへのメッセージ

### \* アラブ赤軍

すなわち必要なことは、国境とばらい運動——世界革命戦争なのです。

戦争を知らない革命家は、歌を忘れたカナリアよりも始末の悪いものです。何故なら、さえずりすぎるものですから。

武装された怨念が、ひたすらに現実を憎悪する時、生活となった闘いがふきでる時、私たちは無言で自分の闘う術を発明し、私たちは共に仲間の眼が恋人のようになりたいことをしるでしょう。未来から過去の透明なまなざしは、今、私たちが、なんてへっぴり腰でやっているか気付くでしょう。

「武装せよ。武器をそして、手から一時も離すまいと誓おう。」

爆弾を郵便受に入れることから始まったへっぴり腰は、ただただ自らの内在において武装解除していることを証明したのです。武装す

ることは、銃か爆弾かなどという趣味の問題ではないのです。人民の創意しうる武装の情念を組織化すること。敵への確実な思想的、組織的、軍事的ダメージを与える為に。一つの敵にむかって、現在なお、分断された戦場を一つの戦場すなわち、世界革命戦争場とする為に、世界の抑圧された人々が闘いつづけていることを、そしてその戦いが、いかに現実であるかを知らなければなりません。

帝国主義者の打倒の一点にこそ私たちの怨念はきだされるべきであって、仲間のつつきあいには、もう何も生まないことを判ったと確信しています。

ナチズムの原罪意識にのっかった逆転した「ヒューマニズム」の強力な波は、帝国主義者の利益を代弁し、パレスチナ人民の権利を

一切はくだつし、「イスラエル建国」の「悲願」を一九四八年に決めたのです。あの時から、帝国主義者によって人為的に創られたイスラエルと斗うパレスチナ人民は、問答無用に必然的に反帝斗争をベトナムの人民と共に担いつづけています。国をとりかえず斗いは一切の帝国主義の分割戦争を紛砕すること、すなわち、世界共產主義にむかう道のりなのです。イスラエルに無実の市民がいるか？

イスラエルに無実の市民が居るとしたら、それはパレスチナ人民の斗争と地下で共闘し、斗い続けている人々だけだ。しかしそれは市民ではなく、革命家であり人民である。

もっとも手を汚したくなかった、又は、汚れた手をたくみに隠していた筈の日本帝国主義者は、不本意ながら、ざまみろ的な結果を生んでしまったようです。

イスラエルに、夜通しかけつけたにもかかわらず、イスラエルと日帝の汚れた手を握り合ったにもかかわらず、問題は、岡っぴき大將佐藤栄作にとって、深刻となりました。

この三戦士による革命的闘いがすべての、アラブ人民に熱烈に支持されているが故に、すでに、日本商品ハイセキと、石油売買禁止の声がアラブ人民、アラビヤ語新聞、そしてアラブの民族的政府間からも湧きあがっているという現実です。

「ざまみろ、てめえだけ良い子になるうなんて根性で、イスラエル・アラブの等間距離にめだたない様に存在しようなんてえのは、中立でもなんでもない。それをただただ無能と呼び、卑怯と呼ぶ。」

私たちは、正直なもんだからもっと現実をみたいのです。現実を証明することは、もっと、こうやって岡っぴきをあわてさせ、とうとう尻尾を出して本当のことを言わせて、殴り殺すことです。

## 世界革命戦争宣言

### \*アラブ赤軍

本日の六・一五集会に結集された斗う日本の同志たち、友人たち、在日朝鮮人民に、世界の人民戦争に連鎖し、不退転に闘いを続けているアラブ赤軍より、心からの熱い握手と、共に闘いを持続させることをよびかけます。抑圧された人民の熱い怒りは、益々世界中のプロレタリアの絆を一つにし、戦場を一つにし、敵帝国主義者と、その手先のどんな妥協の小細工も許しはしないことを更に武装で表現しようではありませんか！

我々、抑圧された人民の言葉は銃であり、抑圧された人民のヒューマニズムが武装斗争であることをはっきりと帝国主義者たちに教えてやる時なのです。敵帝国主義者と、その手元イスラエルシオニストのしりうまにのつた日本帝国主義の岡っ引き佐藤反動政府は、アラブ赤軍三戦士の戦争をヒューマニズムという彼等の言葉で陰べいしようと必死になっている。彼等がヒューマニズムと言えはうほど、我々は、抑圧された人民の歴史を想起するだけだし、抑圧されればされるほど、我々は、強くなるだけだとい

「情報とは、真実を伝えることであり、真実の最良の形態は武装斗争である。」

「世界革命の波を同質にとらえる」なんて格好の良いことを言う戦争を知らない革命家たちは、三戦士が現実には彼らの呪文を越えて斗っていることに気がつくがくせんとして、日本革命の放棄的傾向などど敗け負しみを言いかねないのですが、日本革命の蜂起的傾向の萌芽がこの斗いでしじみ判らない人々に、世界なんて軽々しく言ってもらいたくありません。

同志たち、友人たち  
日本の岡っぴきに追いまくられ、ローラー作戦においまくられ、そのリアクションを、てぐすね引いて待っている岡っぴきの波に乗るな！

私たちの戦争は公然とはじまっている。

PFLPの同志たちと共に、ドイツ赤軍派の同志たちと共に、トルコ人民解放軍の同志たちと共に、世界革命戦争統一戦線の構築にむけて更に大胆に私たちは進む。そして、真に斗う日本のあらゆる友人たちと手をつなぐ用意がある。世界の帝国主義者打倒にむけて私たちの差し出す手を握りしめてほしい。そして日本の友人たち、私たちは日本革命に当然責任をもち斗うことを約束する。国外から現在しうるあらゆる協力を望んで引きうける用意がある。

友人たち、斗いにむけて大胆に進もう。  
戦争は始まっている。

六月一日

在アルジェ

うことを、更なる斗いで教えてやろうではありませんか。

宗教という情念を帝国主義と結合することによってシオニズム運動を人工的に創りだし、パレスチナ人民のすべての土地を収奪し、パレスチナ人民を殺りくし、すべて追い出したシオニストイスラエルに、我々の斗いが正当であること以外、何も認める権利はない。我々アラブ赤軍三戦士のパレスチナ戦争への参画は、国境を越えたプロレタリアの情念は、帝国主義者に抑圧されているという現実において一つである。パレスチナ人民と、世界の人民の利益の為に、プロレタリアの斗いが一つであることを表現した。

我々は、歴史の帝国主義分割戦争によってひきさかれた国境を越えつづけるであろう。そして、現実存在する生地日本革命に同時に責任を負うであろう。

斗う同志諸君、友人たち

世界の諸情況は、日本革命が、世界の人民戦争の波に連鎖し、共に斗うことを要求している。革命の根拠地は、人民であり、革



命の世界的な逆流は、日本革命戦争の、巨大な成長をうながしている。歴史的に武装解除された情念を武装すること、歴史的に、日本人民が自らの手で斗争術を発見した火つけ、うちこわしの様に。徹視的な情況認識は、武装解除された情念で、武器をとり、とりかえしのつかない失敗を犯すだろう。

同志たち、友人たち、父親たち、そして母親たち、国境を越えたアラブ赤軍兵士は、生活として斗いを知ったし、国境を超えた革命は、深く、日本革命にたどりつくだろう。我々は、歴史の中で革命の献い犠牲となった数多くの無名戦士のように自らの生活を、斗いとして貢ぐだろう。我々は、あらゆる困難を、我々のバトスのバネとするだろう。

三戦士の最後の言葉は以下である。

「我々は、どこでも死ぬ用意がある。そして、地獄でもう一度革命をやる為に先に行く。同志たち、友人たち、我々は決して失敗はしない。我々の斗いに對し決して、葬列をくりだすな、祝賀

祭、こそが、我々の革命的死にふさわしい」

六・一五集会に結集された斗う友人たち、死をいたむことなく、革命的に斗いの献い犠牲となった樺さんと共に、アラブ赤軍兵士の死を、祝ってやってほしい。革命は、今のぼりつめようとしている。あらゆるアラブ人民そして、エジプト、リビア、シリアなど、アラブ諸国の政府にまでも熱狂的に讃えられたパレスチナ人民赤軍兵士の熱い敵権力への怒りを自らのものとし、共に進まんことをよびかける。同志たち、友人たち我々の斗いの情念は、常に日本人民と共にあり、共に進撃していることをちかう。

一九七二年 六・四

一九七二・六・一五 集会にむけて

アラブ赤軍

在 アルジェ

## アラブ赤軍からのテーゼ

### \* アラブ赤軍

A 我々はテルアビブ銃撃戦を、かく戦った

世界史的な帝国主義者間の抗争の展開は、一方の軸に巨大な世界プロレタリア独裁の萌芽を形成し、現在、世界的規模による真に闘う部分の結合世界革命戦争統一戦線が、確実にその意識性を持って流動を開始している。特徴的には第三世界の武装闘争主体と、先進国階級闘争の質の結合として表現される都市ゲリラ派とか、過激派とか呼ばれるもともと先鋭部分との武装闘争の共有に表現される。(トルコ人民解放軍の在トルコ、イスラエル高官殺害、ドイツ赤軍派によるベトナム侵略戦争反対のアメリカ兵の誘拐、日本赤軍派(在アラブ戦士)によるテルアビブ空港襲撃、ヨーロッパパオイストによるベンガルディッシー支援ハイジャック、ドイツ赤軍と、パレスチナ戦士による日本赤軍戦士岡本同志の奪還闘争などが目につく)。

こうした世界革命戦争統一戦線構築にむけた意識的な闘争交換の

戦術は、日本赤軍派が、六九年六月、世界党——世界赤軍——世界革命戦線の戦略を定立した世界史的認識が、その矛盾の直接的、集約的環としての第三世界人民によって、敵との攻防の中で、実践的な行動様式として登場しているという現実であると言える。

パレスチナ革命においては、シオニズムと対決するパレスチナ人民の闘いの質が、自然発生的に世界革命戦争へと、その回路をたどっている。それは、シオニズムの第一次大戦以前から現在に至る歴史的経緯の中から証明されるようにシオニズムが、世界の帝国主義者間の抗争の巨大なヘゲモニーを持っており(流通機構、通信機構、宇宙に至るブルジョアジーの戦略的利益を、シオニストがかなりにきいていること)中東に人工的國家イスラエルを設置することによって、第三世界の自然源(石油、ウラン、ダイヤモンド鉱石)搾取、収奪する拠点となっており、一方ヨーロッパ、アジアを共産主義Mから防衛するための、世界帝国主義の戦略的位置にあり、イスラエルの存在そのものが、世界の帝国主義者の表現なのである。それ故、イスラエルに奪われた土地をとりかえす闘いは世界的な帝国

一九七一年二月、日本赤軍派と同一の意識性を持って「赤軍派を世界の人民戦争の波の着実な相互逆流を通して、戦略的に主体を構築する」という意志統一のもとに、アラブ支部建設におもむいたアラブ赤軍は一年有余に渡る世界の各戦線との認識の交換、PFLPとの共同武装闘争の貫徹を持って、その更なる主体の世界的人民戦争との実体的連鎖を継続しつづけて来た。しかし同時に日本赤軍派と同一の意志で世界に出発した日本赤軍派Ⅱアラブ赤軍の、日本への質的な戦争の逆流は、不完全なまま、アラブと日本の赤い共通の

こうした観念の世界性という認識を打ち破る闘いこそ、アラブ赤軍によつて表現されたテルアビブ空港襲撃による実践を通したアンチテーゼなのであった。主要にそのことを意識した闘争であつたと同時に、パレスチナ・アラブ大衆に勝利の確信を伝える闘いであつた。(アラブ諸国政府が、イスラエルにたびたび攻撃をうけつつも国連に苦情をうったえるというだけで、大衆はイスラエルの不敗を確信しつゝあつたし、パレスチナ大衆・アラブ大衆は、世界中にみすてられたという孤立感を強くもつていた。この闘いのあと、数千キロ離れたところでも我々を忘れていないという大衆の強い確信は停滞していた状況を再びフェディーン志願としてぶちこわしつつあり、日本政府の対応にアラブ人民は日本商品ハイセキと石油売買禁止の声でこたえ、クウェード、イラク、エジプト、リビア、アルジェ、シリアを含む民族政府が闘いをたたえ、生き残つた同志岡本へ

事實關係を提示すれば、日本赤軍派からの通信は一九七一年二月よりわずかに三回にとどまっております、七一年一月をもつて、我々と日本赤軍派との関係は音信不通という結果となつてゐる。支部建設準備から現在に至るまで、物質的、人的な援助は一切なかった。その意味では日本赤軍派に対し日本革命を領導しうるいくつかのうちのひとつという認識しか正直なところもちあわすことが出来なくなつてゐた。同志殺害の後、一九七二年四月、日本赤軍派再建の任にあたつてゐる同志から一通の手紙をうけとつてゐるが、現在の情況はその責任關係などがまったくはつきりしてゐない。現実の武装をあらゆる形で共有すべく準備した我々にとって、日本赤軍派の対応は不備の連続であつた。（日本赤軍派は多分、アラブ支部から強力

**B** 世界赤軍構築に向けたアラブ赤軍からの予備テ―ゼ

(佐とんどの赤軍派及び諸党派の文章、パンフ類が半年以上手に入っていない状況にあるので獄中の同志たち、諸党派の認識がどの様

な経緯にあるのかさだかではないが、一応我々アラブ赤軍派の、世界党——世界赤軍——世界革命統一戦線構築の革命戦争途上の世界と日本にかかわる問題点について簡単に展開しておくべきだと考えている。

#### ① その歴史的な位置

世界史的な波が、第三世界の武装闘争を軸として、国境を越えた闘い方を引き出し、世界的な革命戦争に至る対峙段階にあること。第三世界の人民、それに連鎖した先進国の武装闘争派が意識性としても、実践の形態からしても、帝國主義者の弾圧を攻勢としてその対峙段階を表現しており、先進国のゲリラ戦による味方内部の質と量の拡大が、第三世界の戦線（前線）を後方として支え、逆に第三世界の国境を越えた闘いが先進国の後方として支えるという相互関係から戦線（前線）と銃後が常に銃後と戦線（前線）として敵対置しうる質的な歴史的な位置にあること。第三世界の後方としての先進国の闘いの質が、戦線（前線）としてその抑圧者の命にとどめをさすか否かが総攻勢へのカギとなっている。

#### ② 戦争

ゲリラ戦は、世界的に戦略的位置を占めており、組織戦略の統合の環となっていること。その目的意識的な闘い方こそ、世界の戦場を一つにする方法であり、（総攻勢に至るところの）ことに、先進国のそれがとわれていること。しかしながら、なんというとも、日本の革命戦争の歴史の流れの中に、自然発生的な闘い方としてしかそれが定着していないこと。諸党派の「目的意識的な闘い」という

言葉に表現される闘いが、歴史の流れの正面な答えによれば、結局は、いわゆる「ゲリラ戦」が、ゲリラ戦でなく、近視的な日帝のリアクションとしてしか存在していないという事実をあげることが出来る。日本でのゲリラ戦は、七〇年ハイジャック闘争にはじまり、その後、無に等しいというのが歴史が証明している事実といえる。

#### ③ 長期的持久戦であること

それ故、革命戦争は世界プロレタリアを、世界の革命勢力との相互の認識を一体化するという共産主義化の闘いを、国際的地下兵站線（戦士の交換など）の実践を通して、前線——銃後——銃後——前線の、世界的同志的絆と、同質化を必要としていること。主要には、日本赤軍派が、先駆的という点においてであれ、日本革命を領導して来た事実をふまえ、もともと困難な中で、もともと困難な方法で、あらゆる日本の革命主体に現実の世界の流れを著実に武装闘争で伝達し、日本革命戦線を網羅するという作業こそ、逆に、世界の人民戦争の流れ、ことに現在構築されつつある世界革命戦線の主要な担い手として、説得力を持って世界史を領導するカギとなること。アラブ赤軍は、日本革命にとっては、現在の対峙期には銃後として位置しており、前線は常に、日本の風土、社会、歴史に規定された日本人民を解放革命する作業の主体者たる日本赤軍派であること。この陣型を軸に、持久戦争を勝ちぬかねばならない。

#### ④ 党——軍の在り方

日本の現在の状況の中で、人民を領導する党は大衆の武装の情念を引き出すためのゲリラ戦を通して、自らの存在を確固とした共産主

義者の党に高めない限り、再び、唯武器主義に転落してしまうということをはっきり認識すべきである。闘いは、武器の問題でなく、武装の問題であり、大衆と同次元の意識性、献身性、勇気しか持ちあわせておらず、大衆より学問的にマルクスを知っていることをひけらかしても、大衆はみちびきの糸として確信的に続くよりも、うんざりするのが常である。

プロレタリア世界そのものが、世界党——軍としての実態をいまだ持ちえておらず、その意識性に支えられた世界革命戦線への萌芽であるという世界共産主義政治の現在段階をふまえ、日本赤軍派は自国、世界（世界に直接かかわっている支部）の主体構築の作業の指定をゆき、ゲリラ戦を展開しても、日本の革命主体に対する提起（統合の軸）にはならないことを心に銘記すべきであり、いいかえれば、日帝の政治過程を軍事的に、リアクションとして闘いつづけるという旧来の闘い方だけでは戦争を準備する党としてのヘゲモニーがいつまでたっても確保されないことを知るべきである。

「大衆との共存関係」「戦闘にいたる勝敗の八〇％は調査活動にある」という戦闘の原則を、軍事という言葉で合理化し、いわゆる「軍人」のみに党のヘゲモニーをゆだねようとする建軍活動とは、潜在軍事の質を切り捨て、顕在軍事のみで闘おうとする敗北主義の道であり、プロレタリア革命の道案内人——すぐれた共産主義者である革命家を主体の側に創造する可能性を合理化するものである。党——軍という発想に欠落する未来の表現者としての共産主義の人格を根底から発見し、その過程における党の軍人化と軍の共産主義化を勝ちとらねばならないと考える。それは言葉のいじくりまわしから離れ、自らの力量を客観的に計算し、党の現実段階における能力に

応じたゲリラ戦を準備し、勝ちぬくその過程こそ、日本革命派統合の道であり、軸であることを再度わきまえるところから始めなければならない。

#### ⑤ 反スタ戦略派との徹底的な論争が必要である

歴史性からのスターリニズム、修正主義の把握をゆきにした反スタ論は日共へのアンチテーゼとしても、大衆に有効性がないばかりか、革マル・中核に表現され、感性的に蘇グループにもうけつがれている反スタ主義者によるスターリニズム（又は、もっと腐敗し、革命の歴史性を持たないブルジョア政治）は、世界の革命戦争の現実と、日本の革命戦争の中で客観性を欠く一助を担っている様に思われる。一国主義政治を打ち破る我々の組織戦略は世界革命戦線構築の、長期的な過程を経て、「社会主義」国家群を二者択一的な情況においつめる、「労働者」国家内部からの反修闘争を、世界革命戦線の共通の担い手としてその組織化を、実態的な連鎖とすることである。無責任な反スタ戦略は、自らを自閉症にする世界の人民戦争の中で、輝かしく戦略的立場をわきまえつつ闘っている（又は、支援している）いくつかの歴史的制約の途上にある「一国社会主義」国家の限界としてとらえず、敵対関係に陥らせてしまっただけである。真の革命に敵対するソ連に表現される修正主義路線を粉砕するということとは、自国の闘いの自力更生を基調とする世界革命戦線構築の実践的な世界共産主義政治再編の中に位置している。

#### ⑥ 単一世界党——世界赤軍——世界革命戦線構築にむけて 実態的な自国での闘いに裏打ちされた戦略論が、世界革命統一戦

線の領導の環であり、國際地下兵站線の確立活動（世界革命の永續性を保障する各國革命主体への質的な銃後の形成であると同時にこの確立にむけた闘いは、世界の帝國主義者と物質的に對峙する闘いであり、ことに第三世界の自然源——多くの民族解放戦線が解放区にそれを管理している——を、革命主体の共有財産として、革命派内部に生産活動を獲得し同時に帝國主義者の戦略的野望、自然源の略奪を阻止し、世界帝國主義者の再生産をプロレタリア階級の生産活動へと拡大発展させる對峙を作りだすという二重の意味を負っている）の中に、単一の世界党——軍の質を世界革命統一戦線構築の表現に内包しつつ、他組織との批判Mを通した同質化を発展させることが戦略的類型への方法である。そのことは、日本國內においても同様であり、純粹軍事を、又は他方、純粹戰略論を他党派との結合の軸とするのは誤りであり、世界の戦争発展を意識的に逆流し、認識論を一体化させるといふ方向に、組織実践をわきまえないならぬ。すべて現実を見ること、かぐこと、知ることから出発するのである。

以上、概括的な意志統一を軸として、アラブ赤軍は闘いの持続発展の任にあたる。日本の同志が考えきれない程、世界は狭く世界の同志が確実に同じ情念を持って一つの敵にむかっているという認識を我々は持っているし、それは日本の同志にも共有してほしい情念である。

日本革命戦争の銃後と同時に、パレスチナ革命の前線を担う我々の母体は日本赤軍派であり、戦争の永續性を内的、外的に保証しうる國際的な地下兵站線の形成とは、世界の戦争派並びに日本革命へ

の援後射撃であり、アラブ赤軍はそうした位置をふまえ、自らの力量に応じた力を発揮しつづける用意がある。もちろん、この地における敵と味方の力関係（味方を限定的につつまこんでいるアラブ進歩勢力（國家）とは抗争的でありながら協力関係にある）が、更なる味方内部の強化へと発展しつづけるアラブの現段階と徹底的な少数者としての自らが、日本革命の勝利にむけて困難な中を歩きつづけている日本の同志との情況には闘いの方法、戦争の認識も、現在差異はあると思うが根底的には世界革命戦争に至る闘争に内在する世界共産主義Mという一つの流れに位置しており、一つの敵にむかって戦場を一つにするための人類最後の世界革命戦争であるという同質の方法と認識の上に立つことこそ、自國での戦争形態が発揮されるものと考えている。

共産主義者であり、革命家であるという自己変革が主要に、三月以降問題になっていると思うが、自らの任務を死と引きかえに闘いぬくという犠牲性と献身性を通して闘った結果として生き残るものしか、自らのブチブル性の解体は困難であるうし、現在の日本の闘う同志たちが青砥同志（敵に知っているすべてを売り渡している。デマも真実も含め、とにかく知っていることを言っている）の様な弱さを露呈するのは個人的な問題というよりも、同盟の総体が、共産主義政治の団結と、兄弟愛を軸に形成されていない表現とも言えるのである。こうした「同志」がいる限り、アラブ赤軍の日本赤軍派への對話は成立しえない。もしも我々が機密を伝え、それが「同志」を通じて敵につづぬけになるなら世界の革命主体を裏切り、敵に売り渡すことになるのだから。敵はCIA、イスラエル秘密警察に表現される白色テロ団であり、萌芽しつづける真の戦線はひとつ

まりもなく一瞬にして世界革命の展望を喪失するだろう。そしてそれはあとでいかなる責任をとってもとりかえしのつかないことなのである。

パレスチナの戦士たちが、いかに敵を殺すかという感性と日本にいる戦士がいかに敵を殺すかという感性には、決定的な違いがある様に思われる。すでに生活体験として、敵と肉体情念でたちむかうパレスチナの戦士たちにとって、いかに殺すかという感性は、同時に自らの死の当然性をこえて闘いにいどむことを意味しているからである。しかし、日本の同志が、いかに敵を殺すかという場合、自分を決して危険な場所におかない様にしか戦っていない。我々は、はつきりとこの違いをみつめなければならぬだろう。このパレスチナ戦士（そしてその質を更にふみこえてつきすんだアラブ赤軍兵士）の質は、敵との関係など場所的に違う情況とはいえず、世界革命を領導するはずの日本赤軍派戦士が確保しなければならぬ内容であり、それは抽象的な論議ではなく自らの生活様式を、情念を、徹底化する作業としてあり、もっとも抑圧された日本の中の人民との謙虚な結合、根底への接近、同質化を通して始まるであろう。あらゆる反権力の闘いを革命主体の空間に位置させるという作業、プロレタリアの能動性を組織化する人民の導きの糸となる前衛の任務を、もっとも困難な中から学びとるという赤軍のころ・フェニックスとしてではなくことこそ、今、日本赤軍派に課せられている歴史的榮譽ある任務としてあるはずである。

### C 日本赤軍とアラブ赤軍の任務

イメージの先行的確信に裏打ちされた赤軍派の戦略論は、いまだザル的なところがないとは言えず、ことに現実の世界と日本のかかわりの組織論的な指定が不十分なために、日本赤軍派とアラブ赤軍の関係が明確でないことは相互の作業を困難にして来た。そのことを経験的な立場からイメージを確定し、関係を明確にしたいと考えている。

① 旧来の第一インターから第三インター（第四インター）に至る國際共産主義Mの歴史的な位置と、その限界をふまえたいうえで、我々の世界党——赤軍——世界革命戦争統一戦線の主体構築の闘いが単一の世界党建設を掲げ、軍事兵站線を軸として潜行的に準備する國際地下組織に保障された世界革命戦争への道であること。

この質にささえられた世界革命戦争統一戦線構築の過程は、世界各国の革命派物質的軍事的表現として世界共産主義政治を再編する位置にある。（その認識のもとに、在外支部は世界の革命派との批判——自己批判を運動として同質化させる作業を開始している）

② 現在、本来的には日本赤軍派は在外支部建設の母体であり、在外支部の認識を常に相互に同質化させる主要な位置にあり、その作業を通して自らの存在を、日本一國に規定された関係を越えて逆に日本革命への実践的な指導を可能とするのである。在外支部は、支部のある場所における前線としての任務を、場所を共有する同質

の革命派と共に軍事的にも担い、主体を世界に高めつつ、世界党建設の意識性を堅持し、日本革命の統後としての（すべての世界革命主体への統後となるが）国際地下兵站線を潜行的に準備し、その一個三重の闘いは世界党の萌芽を、日本赤軍派と共に担う位置にあること。

③ 在外支部は、赤軍指令部に直結し（現段階では本来的には母体たる日本赤軍派の軍事政治最高指令部）現段階で、各在外支部の責任者は同時に日本軍事政治最高指導部の一員であり、その指令部体制は世界党の萌芽の根幹となるべきである。在外支部の責任者ならびに在日指令部の代表は年一回定期的な会議を労働者国家などで持つことによって、相互点検し合う。（指令部の事務局を設置し、各支部の連絡にあたりこれは指令部の統括下におくべきである）現段階におけるこの軍事政治指令部は、日本革命の責任ある主体として日本革命派を再編し、日本革命戦争を準備し闘いを持続させるという最大の任務に集中することこそ、在外支部の質を逆に強化するのだということを確認した。

④ 自国帝国主義打倒を実態的に闘いぬくその内的な発展は、日本赤軍派及び在外支部の世界革命戦略の物質化にほかならない。しかし、在外支部の闘いは同時に、在外支部の存在地では勇敢に戦場を他の革命派と担うという観点があり（このことをぬきに、しゃべりまくっても同志的絆はうまれぬ）そのことをぬきに、日本赤軍派が機能として在外支部をとらえるという対応（過去一年有余はまったくそうであった）は、国際主義の現実に対峙するのだということ

を忘れてはならない。

⑤ 日本における革命戦争の発展は、世界の戦場を統後としてさえる国際主義の位置にあり、（ベトナム、パレスチナ人民の闘いにとって日本革命の発展は現在後方としての巨大な役目をはたす）それ故、在外支部の闘いは日本革命と強力に連鎖した戦略の次元で軍事政治組織総体に渡る絆を必要とする。在外支部の活動そのものが間接的、媒介的な、戦術次元ではないこと。この戦略的相互関係こそが、世界革命——日本革命の永続的な表現となる。

⑥ 国際地下兵站線を真の革命派の武器となる様建設する闘いは、国際根拠地化への実体的な布陣であり、この建設過程における修正主義政治路線との直接的間接的対決は三ブロック階級闘争の統合を必然的に軸化させ、真の革命派のヘゲモニーを逆に登場させ、世界的な革命と反革命の中間に位置する「労働者」国家や民族主義国家を分解止揚する萌芽を担う。

⑦ 各在外支部（これは世界中に三つで良い）は、相対的独自のMを展開しつつ、在外支部責任者を通して在日指令部との不断の意志統一による党——支部の関係を堅持しつつ、相互批判を通して常に自らを世界へと位置づけること。

⑧ ①②として、提出した問題はアラブ支部の現実的要請であり、現在の段階では日本赤軍派そのものの実態・存在も判らないが将来的にはこうした関係に質的結合すべきと考えている。と同時に

我々の母体再建にむけて可能な努力を貫くだろう。

この再建過程において「森一派に反対であった」という免罪符でよせあつめの再建が進むなら、自らの日和見を合理化した部分、闘いを放棄した部分を包含せざるをえないし、我々が日本の同志たちに要請するのは、真に革命に自らの生命をささげようとするひたむきな戦士の結合によって、小さな核からでも出発してほしいということである。もっとも困難な状況で、もっとも困難な方法で常に打ち勝ってきた我々にはそれがふさわしい。

待つこと、耐えること、思いきること、忘れることは、勝つことと相殺なんだと思う。三戦士は日本革命派への熱い愛と連帯をこめて、喜びに満ち、榮譽ある闘いを貫いた。世界赤軍への萌芽を担った彼らは「我々は地獄で再び革命を準備する。先に行つて用意し

ている」と言い残して出かけていった。

日本の同志諸君、共に大胆に進もう。

獄中の不屈の同志たちへの限りない尊敬をこめて。

△アラブ赤軍 六・一五V

(註) ① アラブ赤軍とは正確には、日本赤軍派在アラブ支部である。

② 我々が問題提起の対象としている日本赤軍派とは、正確には日本の革命戦争派（顕在・潜在を問わず）である。

③ 大衆という概念はあいまいであるが、まさしくそのあいまいに存在しているところの人々を含んでいる。



## 国際主義の問題について(テーゼ補)

### \*アラブ赤軍

今、日本革命にかかわる革命家の前に、一国主義者か、国際主義者かを例外なく問う事態が発生している。長い革命の歴史の中で、カウツキー主義者が常にそうであったように、革命史の現実が、目前に自らをも包摂する力として表現された時、それを、科学性、歴史性を持って対象化しえない結果として、一国主義者は常にブルジョアジーの側に大衆を領導する役割を果たして来たのだ。

ツインメルワイル左派によって引きつがれた国際主義者の普遍的質は、視点を変え、しかし、歴史的な革命の道のりの中で、同じ様に問うているのだ。

すなわち、抑圧された人民の側に立つという世界史の創造を受け持つ真の国際主義者の側に立つか、革命的言辭による社会排外主義的認識の庇護の側に立つか、が問われているのである。

域内の「平和」を主張したカウツキー主義者の眼が、実は、階級対立を民族問題にすりかえる結果を証明した様に、世界の抑圧された人民との、根底との結合を、革命的言辭ですましてしま

る現代カウツキー主義者が、革命戦争派を自称する中にまではびこっているという事実を、我々は驚きを持って知った時、この歴史の現実が日本階級闘争の認識論の限界として、必然的に結果している一つの証であることもまた、痛切に知ることが出来た。(この現代カウツキー主義者が無自覚であるがゆえに、真の革命派に益々全面的に敵対してくるというのを忘れてはならない。)

アラブ赤軍・PFLPの世界革命戦線構築にむけた共同武装闘争、テルアビブ攻撃の国際ゲリラ戦を、全面的に認めるのか否か、この選択こそ、国際主義者として世界革命の任務につくのか、よかれ悪しかれ、ブルジョアジーの側に立つのかの岐路であり、よけて通ること、中間的評価を許すことのない、日本の革命家にとっての歴史的メルクマールである。

自称国際主義者が、実は一国主義者であることを証明し、その一国主義的思考を無自覚化させている原因は、以下の三点にあると思われる。

① 世界史的な階級闘争史の無知から来る独断による一国主義

者への脱落。

歴史的な帝国主義者の分割戦争と、シオニズムによって作りだされた中東の階級闘争史を正確に把握することが要求されている。「イスラエル国家」が存在しているという認識は、すでに国際主義者の失格者である。これは中国が二つ存在しているという帝国主義者の論理同様、国連という帝国主義者のおしやべりの場でのみ承認された事実であり、真実ではない。

一九四八年、国連案としてアメリカ帝国主義者と、ソ連スターリン主義者が共謀してつくりあげた「国家」であり、その国連の「承認」によって、実力でパレスチナ人民を追い出し、創りあげられたアメリカ帝国主義の軍事基地が「イスラエル国家」であり、中国に表現される「労働者国家」は、イスラエルを国家としてみとめていないし、プロレタリア国際主義者の地図に、二つの中国がない様に、イスラエル国家という地図はない。

一九四八年以前に共存していたユダヤ人民とパレスチナ人民の抑圧の上に、シオニストによって作られた占領であり、それを実力で解放する作業は、プロレタリア革命の実践者の任務である。

民族解放社会主義の事業の闘いの中で、敵シオニストが世界帝国主義の主要な軸であり、世界革命の勝利まで闘争が持続するということを明確にしたPFLPの路線が、世界革命統一戦線の第一歩をふみだした同質の闘争部分との共同闘争として、必然的に我々との結合を開始したのであり、この闘争によって、世界の革命派が、世界革命統一戦線の志向性を持って結合を開始していることは、プロレタリア世界革命の巨大な前進である。

ヨーロッパ、アメリカ等の都市ゲリラ派は、シオニストに明確に革命を妨害されているので、我々の闘争を全面的に支持する立場に立つのである。(アイルランドのIRAの闘争などは、シオニストと英帝に日夜弾圧を受けている。日本階級闘争は、シオニズムとは直接的な対決を持たなかったが、世界的には、CIAと同質の任務をシオニストが果しており、ユダヤ人民とも敵対していることを忘れてはならない。)

パレスチナ革命に対する我々とPFLPその他、マルクス主義者のグループの認識は、階級闘争であり、民族間対立でも、宗教対立でもない。シオニストを中心として、それに忠実に従う日本のマスコミの、ユダヤ人対アラブ人、または、モスリムとクリスチヤンの対立という報道操作は、デマゴーグ以外の何物でもない。事実、アラブ各国に百万のユダヤ人が住んでおり、アラブ人民、アラブ政府もこれらのユダヤ人に敵対していない。

また、「イスラエル国家」の中で重要な帝国主義者の手先として手をくんでいるアラブ・パレスチナブルジョアジーの存在もある。このことは明確に、シオニスト帝国主義者と抑圧されたパレスチナ・アラブ、そしてユダヤ人民の階級闘争であることを物語っている。帝国主義者の基地「軍事国家イスラエル」にむけて、最大限の戦いを続行しているのは、当然の、プロレタリアートの使命感である。それゆえ、今迄、パレスチナゲリラ、ユダヤ人非合法組織が「イスラエル国」の内の人民(?)に被害を与えない闘い方をしていたのに、今回は無差別テロであるというのは、日本帝国主義者の都合の良い論理であって、一九六七年、ゲリラ組

織が活動をはじめて以来、今日に至るまで（そして今後もまた、

そうするであろうが）、イスラエルが、アラブ人民を理由なく殺しているのと同じ方法で、市バス、スーパーマーケット、映画館、レストラン、ホテルを、連日、破壊しつづけている。戦争が終ったという、シオニストのデマゴグを破壊する雄弁さは、闘いによって、今後も継承されるはずである。

② 帝国主義者に包摂されたマスコミ・ニケーションメディアに、全面的に依拠していること。（①の無知は、益々ブルジョアジーのニュースソースを、無自覚に信用するという結果を生む。）これは外からの人民戦争の波を日本革命と相対化させる作業を、益々むずかしくしている。今回の闘争に関し「無差別殺人」と認識することから出発する闘争の評価は、すでに、帝国主義者とシオニストたちの土俵の中で、左翼づらをして、おしゃべりをしていくことの表現である。

テルアビブ攻撃闘争は、帝国主義者とシオニズム、そして、その同調者への軍事・政治攻撃であり、その正当性は、歴史が証明するであろう。

プエルトリコ人、ユダヤ人総体に敵対した闘いであるというのは、シオニスト・帝国主義者の手先、ブルジョア・マスコミの一方的宣伝である。事実「イスラエル国」内のユダヤ人非合法組織は、闘いの支持を表明し、プエルトリコの闘う人民は「我々抑圧された貧しいプエルトリコ人民は、世界の人民の認めていないイスラエルに行くことはないし、プエルトリコの闘う我々は、PFLPと赤軍によって闘われた闘争を、同胞が殺されたからと、敵対す

撃さえ理解しえないだろう。

この闘争を契機として、結果しつづある世界の革命派、ことに先進国のグループとの結合の深さは、日本国内における革命戦争派の闘争による立場の明確さと、相互媒介的に成長していくはずである。

③ 世界の抑圧された人民の側（民族ではない）の情念に立っていない日本の「革命派」の中の一国主義者は、プチブルロマン的、自己満足の革命であることを自己暴露している。（抑圧された側に立っているという事実は、テルアビブ攻撃の雄弁さから、すべてを共有出来るはずである。六月十五日付、新左翼紙、富村順一氏の手紙が、一つのそれを表現している。）

このことはことに、日本革命戦争の現在が赤軍森一派によって決定的に困難な段階にあり、このことと二重写的に、テルアビブ攻撃をも闇に葬り去ろうとする日本帝国主義者の意図はもちろん、その森一派の責任を痛感するあまりに、赤軍派内部にさえ若干みられる傾向であるが、軽井沢銃撃戦と同次元にテルアビブ襲撃をみようとする軍事力学的視点である。

我々の闘いは、その場所の抑圧された人民の意志を表現し、世界共産主義運動との連関の中で、共産主義政治を軍事的に表現する闘いでなければならない。テルアビブ攻撃はまさに抑圧された人民の意志であり、パレスチナ革命にふさわしい戦闘であったのだ。（日本の羽田空港を攻撃するのはわけがちがうのである。）

そのことは、敵シオニストイスラエルがもつとも痛感したし、闘争の特長と、その波をおそれ、一ヶ月後の七月八日、シオニス

ることはない」と言明している。

抑圧された人民が、闘いに行く以外、行く意志を持たない「国」が「イスラエル」だからだ。そのことを、日本の一国主義者はまったく気付かず、プエルトリコ人は貧しい抑圧された民族であり、ユダヤ人はファシストに虐殺された民族であるという、階級性ぬきの、ブルジョア・マスコミのニュースから、闘争の評価をおしはかるうとしており、世界の抑圧された人民（民族ではない）に、実は敵対していくのである。

また、日本帝国主義者と、そのマスコミメディアは、あたかも赤軍三戦士が軍事的未熟で「仲間のバクダンが誤ってあたった」とか、突然変異的に事件があったかのような印象を与える為に、必死のマスコミ操作に奔走した。これはイスラエルシオニストが「いかに日本国民を我々の側に同情させるか」という観点から、殊に日本むけに操作したマスコミメディアの有効な得点といえる。

闘争直後の三十日と三十一日のBBC英帝放送でさえ、二人の戦士が任務を遂行し、自爆したことを伝えたし（そのあとは、日々ニュースがイスラエルによって操作されたが）、三十日と三十一日にレコーディングした、アルジェ、シリア、エジプト、リビアの支持声明、ファタ、PLO、アラブ連盟などの支持声明に、いかにこの闘争が、世界の波を作りあげたかが証明されている。

（彼等の支持とヨーロッパ、アメリカ、ラテンアメリカからの都市ゲリラ派からの支持声明の質とは明確に違いがあるとしても。）空港襲撃は、高度な軍事戦略的な標的であり、そのこのの意味を理解しえないならば、帝国主義戦争の論理、パールハーバー攻

トの白色テロルは、PFLPの公然組織のリーダー、ガッサン・カナファニーを殺すという個人テロルによる反撃を開始し、連日ベイルート内で、そのテロルは、銀行、PLOリサーチセンター襲撃として、人民をおびやかしている。

しかし、敵がそうすればする程、抑圧された人民の血は闘いを要求し、ガッサン・カナファニーの葬式に、奥平、安田同志の写真をかかげたマーチは、六万人の、ユダヤ人を含むレバノンの闘う人民の武装デモとして、ベイルート市内を制圧し、アラブでもっとも日和見主義のレバノン政府に、強力なプレッシャーをかけると同時に、抑圧された人民の情念が一つであることを証明している。この情念に連鎖し、共に立つことこそ、日本革命派の、世界の人民との、帝国主義にむけた反撃の一步一步を証していくであろう。

我々アラブ赤軍派は、日本の革命派が、世界的、地理的現実をふまえ、共に、更に大胆につきすすむことを、よびかけるものである。また、帝国主義者の手の中にある岡本同志を支える運動を闘いとして、日本で表現することを、再びよびかける。

## 8・16パレスチナ人民インドシナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会への メッセージ

### \*パレスチナ解放人民戦線

親愛なる日本の同志のみなさん。

世界革命へのコミットメントの表現としてパレスチナ人民のために殉死した同志たち、すなわち奥平（バッサム）、安田（サラ・ハ）を追悼する京都集会をあなた方がとり行なっているこの歴史的機會に際して、私は、PFLPの名において、あなた方に戦闘的な挨拶を送るものです。

親愛なる同志のみなさん。

われわれは帝国主義・世界シオニズムやアラブ反動といった反動的・ファッショ的な付属物一切を伴うに対する闘争の単一性のみならず運命の統一性によっても相互に結びつけられています。この同志的な紐帯に加えて、一九七二年五月三十日のロッド空港における「ディア・ヤシン」作戦での奥平・安田同志の殉死とともに一層の強化がもたらされました。彼らの殉死は、プロレタリア国際主義の崇高な理想、つまり全世界で解放と社会主義をめざして闘っている革命家を結び付ける理想を強調、強化するに至りました。

二名の殉死者の血は、人民武装闘争の道程を導き、世界革命の革命的分遣隊の結合を更に推進し、強化する方向にわれわれを導

く烽火となるでしょう。

われわれは、あなた方の光栄ある集会に参加できないことを極めて残念に思います。しかしながらわれわれは、このメッセージを通じて、日本の大衆および革命的勢力に対し、PFLPの全てのメンバーが二名の英雄的殉死者に対して抱いている深い愛情と尊敬の念を保証するものです。われわれは、これらの殉死した英雄を産み出し、また、彼らの殉死を追悼し、これら二戦士の、崇高な革命的動機にケチをつけようとした帝国主義的・資本主義的、排外主義的プロバガンダを非難して立ち上っている日本の大衆に対し大いなる賞讃の辞を呈するものです。

PFLPの内部においてわれわれは、わが戦士たちと日本の闘士とを結び付ける一連の殉死を誇りに思っています。われわれは、囚われの闘士、岡本同志を誇りに思っています。

これらの三名の同志および進歩的な日本の大衆に対するわれわれの態度を表明するのに、全世界のあらゆる革命勢力、とりわけ帝国主義とその反動的・ファッショ的従属物に対して大打撃を加えているインドシナの英雄的人民の前にわれわれの誓いを新たにすること以上によいものはありません。

抑圧された階級および人民の勝利が達成され、そして人間による人間の収奪がこの世界から根絶されるまで、われわれはいかなる犠牲をも物ともせず闘争を推進することを明らかにします。

われわれはこの場を借りて、戦闘的な英雄たち——帝国主義的、資本主義的なデマゴギーに断乎として対抗している——が活動していた京都大学の学生たちが帝国主義的・反動的・ブルジョア的プロバガンダを完全に拒否することの表現として奥平・安田同志の写真を大学の門（時計塔）に高々と掲げたことを、われわれは常に想起いたします。

親愛なる同志のみなさん。

われわれの共通した闘争の道程は、いかなる困難があろうとも、

### 遠い戦場より

### \*アラブ赤軍・重信房子

日本の同志、友人たち

革命の松明が、この集会に結集したすべての同志、友人たちの炎となって、燃えつづけているのを、遠い戦場から確信する時、私の革命の情熱は、更に赤く、更に深く、日本の同志たちと一体に燃え続けています。

隊伍を整え、共に進もう。帝国主義者をこの炎の中にたたき込み、焼きつくし、我々の広野を打ち開こう。

革命家たちの決意とともに進むことを確信していただきたい。われわれは、わが殉死者たちの血によってこの道程の渴きをいやし続けるのです。先月のガッサン・カナファニー同志、そしてガザにおける指導的同志の一人であったアーマド・オムラン同志の殉死はわれわれの闘いを続ける決意を示す例でしかないのです。

世界の革命勢力の間の同志的プロレタリア国際主義万才、

抑圧された階級ならびに人民の闘争万才、

インドシナ人民の解放闘争に勝利を、

人類の敵に死を、

革命闘争の殉死者に栄光あれ。

パレスチナ革命に敵対する帝国主義者、シオニストのテロルが、テルアビブ闘争後、PFLPの同志を殺害し、傷つけている。我々は、帝国主義者に教しえてやらなければならない。次は、お前たちの番だと。敵のテロルは、我々の隊伍を益々強化し、我々の革命を養っているだけだということを幾度でも、武装闘争で答えてやる。革命闘争は、勝利まで決して消滅しないし、革命戦争は、世界の姿を一つにつなぐ唯一の術である。パレスチナの同志たち

は、赤軍三戦士の闘いの隊伍となつて深く、スクラムを組んで進撃している。

共通の敵に向かって、我々が遠い戦場から進撃する時、革命の松明を高々とかかげた日本の同志たちが、我々と同じ様に立ち、世界の戦場を一つに結ぶために進撃するのがみえる。我々の敵は一つだし、我々の味方は団結しつゝある。

日本の同志たち、友人たちがそうである様に、我々も、困難を闘いのエネルギーと化し、共に進むことをちかう。私はいつも、ここに居るし、あなたたちは、いつも私のとなりに居る。私は革命戦争の一戦士であることの幸福と榮譽をはっきりと知ったし、

## 連帯のあいさつ

### \*日本PFLLP医療委員会

日本の闘う兄弟たち！

ロッド空港で命をかけて闘った、世界の最も優秀な同志の闘いの勝利をたたえる集会にささやかな現地からの連帯のあいさつを送ります。

ここ、南レバノンで人民の医療にたずさわって、はや一年が過ぎました。毎日のように山と難民キャンプを往復するコマンド達にはげまされ、イスラエルの空から、山からの攻撃にも、いつも速攻の反撃と対応を準備している部落の人民にかこまれ、ロッド

パレスチナの闘う人々と、エジプトをはじめとするアラブ諸国の人民の反発を買っています。

ブルジョアジャーナリズムの目に見えない地の根底で、畑仕事を共にしながら、巡回診療の中に全ての被抑圧者の流す汗と血の中で、人民の真の革命は育っています。

如何に世界を支配していると豪語するアメリカを先頭とした帝国主義者、サイオニストがデマを流そうと、祖国を追われた人民の血潮に流れるいかりは、世界の抑圧された人民の心を、その闘う肉体を給し、日々巨大な飛行機と、戦車と無差別な人民殺害、子女虐殺の前に、着々と闘う陣型を整えています。

南レバノンの貧民達は、良く知っています。イスラエルに住むパレスチナ人と、国籍を持たない「ユダヤ」移民達は知っています。

如何にサイオニストが人民を虐殺し、無差別逮捕し、無差別攻撃しているのか、いったいイスラエルという国が、真に認められるのかどうか。

戦後、ソ連、米国の国連政策の中で、闘う人民達を、新植地主義で再編成していった世界の平和共存政策の、最も黒い地図は、今や赤い血で色どられています。

先日、レバノンの貧民が、コマンドを助けたといつて、レバノン政府に逮捕されて行きました。レバノンの貧民は、イスラエルの空撃とタンクで家を焼き打ちされ、なおレバノン政府にひっぱられていくのです。

彼らはパレスチナの闘う人民と結合しつゝあるのは明白です。

次にむけて進んでいるはちきれそうな情熱をこの集会に結集したすべての同志たちにわかれ合つてほしいと思う。

三戦士の英雄的な闘いが、パレスチナフェダインの道しるべとなつて、赤々と燃えている。日本の同志たちに限りない求愛と、限りない挑戦を込めて、旅立った三戦士の意志を深く継承し、共に歩き続けよう。

日本の同志、友人たちよ！

八月十六日集会にむけて 遠い戦場より

空港の闘いの勝利の喜びをわかれ合えたことを、まず伝えたいと思います。

悪質な日本帝国主義者とジャーナリストは、三戦士の闘いに対して、無差別殺人という、まさに彼らの日毎行なっている本質を、彼らの最もおそれる戦士達の代名詞としてでっち上げました。

帝国主義者と、彼らを恐れるプチブル反動政権は、みごとにその本質を現わし、イスラエルと和解し、平和共存しようとし、言動を左右させています。エジプト政府の最近の政策は、ますます

そして全ての国で、帝国主義者と反動政権が、反革命の結合をすればする程、人民は、より固い絆を作っています。

日本の闘う兄弟達、はじめて日本で、パレスチナ革命に連帯する集会が持たれたことを、全てのPFLLPの兄弟達と、レバノンの人民に伝えたいと思います。

三人の尊い革命的犠牲の精神は、我々日本人の生んだ、偉大な革命戦士の魂です。パレスチナ人民のその闘いの中でも、一段と映える栄光と賛美と教訓、はげましを与えた彼らの戦士としての全人格、全魂は、子供から老人までに、世界革命の生々しい現実を焼きつけました。

私達のささやかな部落の診療活動ですらも、この日本人戦士の闘いの精神の一部として受けられる栄光に輝いています。

世界の到るところで、どんなに小さな灯であろうとも、その燃えつつある革命の魂のひびきと共鳴する闘う戦士達は、明らかに既存の党の権威を必要とせず、自らの輪を広げ、闘いの輪を厚く、広く形成していくでしょう。

たとえ私達の活動が、小さな傷口や、つかれた人民の寄生虫病を治すという平和な仕事であるにせよ、日毎半市民、難民として生きているパレスチナの人々、そして医者もなく、バスもない山村に生きるアラブの貧民達が、日本の戦士をたたえるのと同じように、我々に感謝のことばと、そして「我々も日本に行つて闘う、世界のどこへでも、あなたといっしょに行こう」と真剣に語ってくれます。

国境を越えた意識は、ことばの壁をこえ、毎日の生活の中で、

否応なしに共に泣き、共にいかり、十年の計をもった闘いに、小さな、けれども赤いほのおをともして行くことでしよう。

粗末なブロック家のコマンドの寢室の壁に、奥平、安田、岡本戦士の新聞切り抜き写真が、そしてガッサン・カナファニーの顔写真が並べられたこのキャンプの朝は、文字通り、世界革命の核となる思想性を獲得した戦士達の無言の連帯のほほえみ、無心の子供の朝の握手で始まろうとしています。

我々の日本の闘いの質を継続させ、広げ、パレスチナ人民の闘いを強めて行くことの喜びを、三戦士の哀悼の言葉にして、今日の仕事に急ぎます。

ロッド空港闘争勝利万歳！

世界革命戦士よ安らかにねむれ！

一九七二年八月十日

## 革命二戦士追悼に向けて

### \*奥平純三

一九七二年五月三十一日は、我々にとって忘れることのできない日となった。三人の革命戦士は歴史を記す巨大な石版の上にギリギリと深い爪跡を刻み込み、革命と反革命の姿を明らかにすることによって現代の本質を白日の下に晒し、既に開始されておりやがて全面的に本格化するであろう革命戦争を具現することによって未来を象徴した。ここに我々は、はっきりと「我等の時代」を知るのである。

三人の「現代の英雄」達は、自ら意図した通りその行為を通して、世界が正に一元化しつつあるが故に空間的な普遍性を、そしてその未来との関係の故に時間的な普遍性を獲得した。その行為を通じて、過去幾多の人間達が実際に流した、或いは流そうとして流しきれなかった血と汗を、凝集し暴発させ飛躍させ、さらに計り知れぬ巨大なエネルギーを我々に還元したのである。

我々は一時たりとも三人のことを頭の中にはっきりと据えておかずにはいられない。死んだ二人の流した血は、夏の赤々と燃えるア

ンタレスの光に更なる勢いを与え我々の情熱が冷めるのを許さないだろうし、その澄んだ思いは、凍てつくような冬のシリウスの透徹した青白い光となって我々の意識のすみずみまで隅なく照らし出すのだと思う。彼等の生は永遠であり死も又永遠である。

歴史は決して繰返さない！

後退することは断じて許されない！

断固として現在の地平は離れなければならない。我々は今まさに同質の為すべきことを十分に為しきれていないことを知り、大きな口をたたくのをやめじっと沈黙に耐えつつ力を充足しよう。常なる自己検証をもって秋に備えよう。このことを以って彼等の行為と死に報いることこそ最良の道だと信じる。

さあ、更に第二の封印を解き放ち、赤き馬と大いなる剣を持つ者を生み出させ！



# デイル・ヤシン作戦勝利万才！

## \*VZ58・来見弘

### I

全世界のプロレタリア人民の皆さん！とりわけアメリカ帝国主義を頭目とする一切の帝国主義・軍国主義・反動派・そして今やプロレタリア階級斗争にはっきりと敵対するに到っている現代修正主義とその同調者に対する激しい戦闘を全ゆる所で、日々くりひろげているプロレタリア人民戦士の皆さん！

私はここで大勝利の中に完遂されたデイル・ヤシン作戦、にもかかわらずそれを支えてきた我々国内の組織の全く対照的な大敗北！敵への全面屈服を厳しく自己批判し、新たな再生の道を探り、テルアビブ斗争のあの偉大な成を確実にわがものとし、戦列を打ち固め、一步一步を前進していくことを表明したいと思う。

我々プロレタリアートの正義の闘いが進撃を続ける以上、一切の悪の根源！帝国主義！政治公安警察の攻撃、弾圧は熾烈をきわめてくる。そして敵の弾圧が激しくなればなるほど我々プロレタリア戦士はプロレタリア革命、プロレタリア階級斗争の原則を一層堅持し、妥協なき闘いを持続させねばならない。

このたびのテルアビブ斗争においては敵の大攻勢の前に我々が一切の対応をなすこともできずに全面的に屈服していったこと、即ち任意出頭としての供述と、とりわけ中心メンバーの自由はそこにいかなる理由があったにせよプロレタリア階級斗争の原則からの逸脱・敵対であり、階級的裏切り行為である。だがそれだけではない。あの巨大なテルアビブ斗争を準備し、支えてきた当の我々が、敵への屈服を自己批判し、それを基底としてかの闘いを

総括し、その豊かな意義をわがものとする作業を一切行い得ずに沈黙してきたことは更に犯罪的事であり、それ故我々は早速にプロレタリア的責務を果たすことを要請されている。

私はここに以上の階級的裏切り行為によってプロレタリア階級斗争内部に混乱と動揺、不信を持ち込み、ひいてはかの偉大な闘いの意義を陰蔽し、また低め、泥を塗りたくり、正義の闘いとしての革命戦争に泥を塗ったことを先ずもって自己批判する。そしてこの自己批判は我々の組織が敵の攻勢の前に全く崩壊してしまっているとは言え、我が組織の名における自己批判でもある。

テルアビブ斗争はまさに偉大な斗争であった故に様々のコメントや批判等が提示されていながら、今一つ主体的に問題の核心に迫っているものがないことは否めない。これは先ず我々こそが他に率先して成すべき当然の責務を果たしていないことにもよっているであろう。テルアビブ斗争から既に四カ月余が過ぎてしまっている。我々の自己批判とその深化の作業はあまりにも遅きに失ったと言わねばならない。にもかかわらず私は今我々のおかれてあるこの現実から出発するより仕方がない。この惨憺たる状況から何が何でも再生するために自己批判の深化の作業をはじめよう。

### II

テルアビブ斗争は現代における「国際主義」をすさまじき実践によって具現した。過渡期世界としての現代がまさに世界革命戦争の時代、全世界のありとあらゆる階層、階級を革命戦争の渦の中にたたき込み、全世界的規模でのプロレタリアートとブルジョ

アジーが闘いを交え、激烈な死闘をくり広げていく時代であり、かかる真に世界を舞台としての闘いにおける国際主義が従来我々を深く抱えていた口先だけの国際主義、一国の窓（しかもその窓は狭く、しばしば曇ったガラスがはめてある）から展望した結果としての「一国主義」、せいぜい世界からの深遠な「意味付与・解釈」に終始した認識運動的国際主義等々とは決定的に異なることを実践的に指し示し、かのエセ国際主義にとらわれていた我々の恥しい姿を白日の下にさらしたのである。「現代！世界革命戦争の世のプロレタリア国際主義とはこうやるんだ！」——我が同志の放った弾丸は我々を呪縛する「一国主義」の妖雲を打ち払ったわけである。とは言え我々を捕えてきた小ブルのエセ国際主義の呪縛の力はあまりに強く、またあまりにも長く我々はそれに捕われていたので、我々の闘いに対して仰天して言葉を失うもの、おずおずと従来の「国際主義」から解釈を下そうとするもの、「日本での革命はどうするのだ？」等とこっそりささやくもの、またかの呪いにすっかり心を奪われてしまっているものは「あれは日本階級斗争からの逃亡である」と叫び、我々の闘いの周辺で右往左往している。しかしこのような諸君は、目をしっかりと見開いて現実の世界を舞台とした戦闘をじっくりとみつめてみるが良い。最終的にブルジョアジーを絶滅する世界革命戦争の中軸的な闘い！世界党建設の闘いが不可避にかかる国際主義を要求し、この課題が世界の到る所に吹き出ている現実を。

テルアビブ斗争のまさに偉大な第一の意義はその素晴らしい計画性、英雄性、献身性をもって先進資本主義国内プロレタリアート

に巨大な課題をつきつけたことにある。

先進資本主義国―帝国主義国内の革命戦争派の未成熟、低迷、要するにその後進性の故に米帝とソ修社帝という二大反革命の強力な包囲・重圧に耐え切れずやむなく中国共産党がとった米中会談、日中国交回復等の所謂「革命外交」路線は現実には米帝―南ヴェトナムカイライ政権、米帝―シオニズムと激しい闘いをくりひろげている革命武装勢力に対してはやはり大きな打撃を与えた。この意味において我々帝国主義国内の革命戦争派は巨大な二重の責務をおわされているのであり、我々はこれに思うとき、激しい戦慄を憶えないわけにはいかない。中国共産党の「革命外交」に対するヴェトナム労働党―南ヴェトナム解放戦線の批判やミュンヘン・ゲリラ戦を評価しない中国共産党へのパレスチナゲリラの批判はまさに我々にこそ向けられていることをはっきりと肝に命じなければならぬ。従って我々における国際主義はまず何よりも米帝―南ヴェトナムカイライ政権、米帝―シオニズムに対する闘いへの直接的参加として実現されなければならない。一国内の階級斗争の成熟の度合い等の「お家の事情」に規定されない、また間接的な支援斗争でない斗争こそが要請されるのである。しかも現代過渡期世界における国際主義は我々にとってのみかかる闘いとしてあるわけでは決してない。米帝―南ヴェトナムカイライ、シオニズムへの闘いはまさに世界のプロレタリアートにとっての第一義的な共通の責務であって、かかる直接的な戦闘への参加は、テルアビブ斗争によって世界のプロレタリアートの国際主義の規準として打ち樹てられたのであった。直接的な戦闘への参

加はこの意味において決して我々が何かしら、負い目を感じてやるといったようなプチブルインテリ的な闘いではなくて、まさに世界党建設のための不可避の闘いとして闘われるのである。つまり三英雄の弾丸は先進資本主義国内に於て革命戦争を準備し、実践している全ての先進的プロレタリアに対し、彼らが世界党建設の闘いにかかる国際主義をその契機としておし進めていくかを鋭く迫ったのである。この問題を避けて飽くまで一国的枠内で党建設をすすめていく諸君はたとえ彼らが表面的にテルアビブ斗争を支持しようとする結果的にはテルアビブ斗争を否定し、その巨大な意義に目をつぶるものであるし、また一方で世界浪人ならぬ世界浮浪人的に主体の立脚基盤抜きにテルアビブ斗争を美化・讚美する諸君もまた結果としてその否定に繋がっていくと言わねばならない。

六〇年代後半の階級斗争を領導し、今では構革派の諸君さえもが口にする「組織された暴力と国際主義」というスローガンの二重化され、極めて抽象の中にとどまったその内容を世界党建設に一元化される具体的な内容として獲得すること、しかもかかる世界党建設の闘いが不可避に無数の「テルアビブ斗争」を含み、まさに重要なモメントとしてあること、我々先進資本主義国内の革命戦争派はこの課題を必ず成し遂げなければならない。この意味においてテルアビブ斗争を「国際義勇軍」として評価するだけでははなはだ不十分である。奥平、安田、岡本の三英雄、志なかばにして倒れた山田同志、そしてまた丸岡同志は決して三〇年代のスペイン人民戦線への義勇軍やその他諸々の義勇軍ではない。決

定的に違ふのだ。ただこれに比肩するのはチェ・ゲバラの闘いであらう。ゲバラの闘いはもちろんある意味で三英雄の闘いを大きく凌駕している。しかしゲバラの闘いが「国境を越える闘い」として闘われ、それはまた「世界へ」と普遍化されるものではありながらも、飽くまで中南米大陸革命をいかに勝利へ導くかという中南米大陸革命の枠内での戦略として提示されたのに対し、テルアビブ斗争はただ世界からのみに規定された闘い、飽くまで世界革命戦争戦略の一環として闘われたのであった。もちろんそれは極めて抽象的であり、その端緒としか言いようはないが。要するに国際義勇軍というように何かしら国内の革命戦争―党建設の闘いから外的なものとしてとらえることは決定的に誤りであり、歴史を正しく総括していいと言わねばならない。彼らは国際義勇軍では断じてないのだ。では何か？

テルアビブ斗争の偉大な第二の意義は世界階級斗争の中に初めて「世界武装プロレタリアート―世界赤軍」を生きた姿として、極めて端緒とは言え登場せしめたことにある。まさにこの一点においてテルアビブ斗争は世界階級斗争に金字塔を打ち樹てたのである。第一に述べた巨大な課題を我々につきつけ得たのである。

我々は従来、プロレタリアートという概念を（そう、まさに概念を）あれこれこねくりまわし、解釈し、意味付与し、頭を混乱させ、つかぬかのような観念遊びを放棄して実践の中に突入していくか、飽くまで観念を追い求め、神々しい幻のプロレタリアートに行きつくか、いづれかの道を辿ってきた。前者は当然ながらブントに代表され、後者は革マル派に代表される。しかし共にプロレタリ

アートを生きた姿としてつかみ得なかったことにはかわりはない。それ故世界プロレタリアートとなると最早純粹概念として我々の階級斗争の彼岸にあった。

一九七二年五月三〇日テルアビブ・ロッド空港に降り立った三同志はこの彼岸にあった世界プロレタリアートを荒々しく闘う生きた革命戦士として一挙に此岸のものとした。世界階級斗争は漸く「世界プロレタリアート―世界赤軍」を現実を持ったのである。しかしもちろんそれはほんのささやかな端緒でしかない。何千万何億というプロレタリアが闘いをくりひろげていく時のまさに文字通りの世界プロレタリアートからすればはなはだしく貧弱であり、単純であり、未だ抽象の固い殻に覆われている。にもかかわらず一度現実を生きた姿態を持ってあらわれたこの「世界プロレタリアート」―「世界赤軍」は世界革命戦争としての階級斗争の中でダイナミックな展開の課題を我々につきつける。この課題こそが第一の意義として述べたところの世界党建設の闘いに外ならない。

さてかかる画期的な意義を持ち、それ故に我々に巨大な任務を背負わせたテルアビブ斗争が、その意義の実現を目指して不断の目的意識的活動として準備され、実行されたかと言うと決してそうではない。それはこの実践の結果であり、むしろこの実践そのものが、それを実現した路線に矛盾し、敵対し、我々がそれ故にこの闘いを従来我々の路線総体の総括として総括した結果に外ならない。それ故我々は次に従来路線とテルアビブ斗争との関係についてみなければならぬ。

ここでは二つの項目に分けて論じる。第一は一向過渡期世界論とテルアビブ斗争との関係であり、第二は第三世界主体論とテルアビブ斗争との関係であり、また一向過渡期世界論と第三世界革命主体論との関係である。

① 一向過渡期世界論の一つの頂点としてのテルアビブ斗争。

我々が「赤軍」No.4として純化された一向過渡期世界論及びそれを軸とした赤軍派の理論（とりわけ第二次転換路線以前）に大きく影響され、それに依拠してきたことは否めない。まさにテルアビブ斗争は一向過渡期論の極限に実践された斗いと言えよう。

一向過渡期世界論の最も優れた点は世界的規模での「Pr||Br」関係を保証する一本の赤い糸を手に入れたのである。レーニンが「万国のプロレタリアよ団結せよ」と並べて「全世界の被抑圧民族よ団結せよ」と叫んで世界階級斗争を謂わば二元化されたスローガンとして提出したのに対して世界的規模での「Pr||Br」関係という単一の戦場として世界をとらえたのである。こうして世界をただ階級斗争の場として、しかも全世界第一のPr階級斗争の戦場として把握することによって一向過渡期論は理論を世界の解釈・意味付与の場から生き生きとした階級斗争の現実へと解放した。このように実践をこそ前面に押し出しつつ、一方で一向理論は独特の歴史把握を行なう。ロシア革命を境として「Pr||Br」攻防関係においてBrの

攻撃性・能動性、Prの防禦性、受動性という関係が逆転し、Prが攻撃性、能動性を獲得し、Brは防禦的、受動的立場に追い込まれたというものである。これは「赤軍」No.4に三つのテーゼとして定式化されていることはあまりにも有名だが、このような歴史把握が主観的恣意的であることは明らかである。が、それはさておき、この二つの基礎視座を基底として攻撃型階級斗争論が展開され、現代過渡期世界における攻撃型階級斗争が世界革命戦争として物質化されることが主張され、プロレタリアートの普遍性・世界性・能動性・攻撃性、ブルジョアジーの民族性・一國性・受動性・防禦性、世界階級斗争の世界的同質性・同時性等が語られる。そして運動の組織の型として世界第一世界赤軍―世界革命戦争が提起されるのである。

この一向理論はとどのつまり第一の実践視座から実践第一主義的傾向が結果し、第二の歴史視座からその歴史法則的性質に規定されて理論の唯物論的体系化、歴史法則の発見・定式化の傾向が結果するのであり、しかも両極への分解が結果する。この二者斗争の二律背反は一向理論の当然の帰結である。なぜなら一向理論が今まで述べてきたように実践主義と主観的歴史把握のアマルガムであり、日本の新左翼、更には先進国新左翼の運動の総括を世界階級斗争の総括として批判し得ない、即ち先進国共産主義運動の敗北と修正主義への転化、新左翼の登場、一方で中国に継承され第三世界の民族解放―社会主義として波及する革命戦争の現実とそれによる先進国内革命派の革命の現実性への接近という世界階級斗争をトータルに批判し得ないからである。そしてこのことは資本主義（帝国主義）の内在的批判の欠如に帰因している

のである。

しかしこれでも先の根拠的理由とは言えない。一向過渡期世界論は何故に現実批判を資本主義―現代帝国主義批判として成し得なかったであろう。これが解明されねばならない。それはこうである。一向過渡期世界論は世界的規模での「Pr||Br」関係を基礎視座とすることによって理論をまさに実践の理論たらしめたのであり、理論の、ころがり弁証法、的展開（注1）はその極限としての「世界第一世界赤軍―世界革命戦争」へと到達した。問題は次である。このようにころがり弁証法の展開が世界第一世界赤軍―世界革命戦争を提起されるや否や、理論はそこで停止せざるを得ない。だからここで問われることは理論を転倒すること、ころがり弁証法がその極限に提示した「世界第一世界赤軍―世界革命戦争」から理論を構築すること、とりわけ「Pr||Br」から理論を構築すること以外にはない。世界党建設をいかに勝ちとっていくのかを中心軸として全理論を再構築することである。一向理論はここにまですすむことができずにその一歩手前で立ち止まってしまった。ここには一向理論に内在する理論の体系化の傾向が暗い陰を落としていたのである。

このように一向過渡期世界論は理論のまさに「環」をつかみ得ぬままにその自然成長性に拜跪し、それ故に実践第一主義の傾向を一方に、唯物論体系化の傾向を一方に生み、二極分解を引き起こし、その極めて優れた点にもかかわらず抽象性の固い殻にくるまったままに固定されたのである。

かかる限界から見ると、テルアビブ斗争を世界党建設の重要なモメントとしての国際主義の典型として、一から目的意識的に

準備し、遂行し得ることのできなかったことは謂わば当然であった。

さて、このような一向理論に我々実践者が依拠するとき、実践第一主義に純化するのは当然の帰結である。即ち一向過渡期世界論のPrの能動性・攻撃性、世界革命戦争、Pr階級斗争の世界的な同質性・同時性といった諸概念を直接的に、生のままだに実践にうつすということになるのである。我々の斗いはまさにこのような一向理論の諸概念の直接の実践化に外ならなかった。かかる諸概念が本当にリアルに感覚（そう／感覚だ）されていたのである。しかし実にこのことこそこれらの諸概念が極めて抽象的なものに過ぎないことを物語っているのである。「階級斗争における実践からの規定を受けての理論の原則的な」階級斗争における「プロレタリアートの能動性・攻撃性」―何と抽象的な、それでいて魅力あふれる、そしてわけのわからないことばであろう／このことばをこそ奥平同志は胸に秘め、パレスチナに向ったのであり、そしてこのことばに魅せられて我々は全世界を股にかけての作戦―国際ゲリラ戦を共に語ってきたのであり、そして奥平、安田、岡本三同志はまさに「世界プロレタリアート―世界赤軍」として能動的・攻撃的に、しかも世界にふつと湧き上る革命戦争の質をもってイスラエル―ロッド空港を奇襲したのである。

このようにテルアビブ斗争は一向過渡期世界論の極限に実践され、それ故にその限界をはっきりとした形で示した。一向過渡期世界論がそもそも唯物論的体系化の傾向を持ち、それ故新たな理論の展開はただ抽象的概念を基底とした実践の中に求められざる

を得ないのであり、しかも実践とその基底概念とは直接的な、極めて抽象的な関係にあるのだから実践からの規定を受けての理論の原則的な展開は成され得ない。現実の階級斗争の波に大きく左右され、ブレを引き起こさざるを得ないのである。一向過渡期世界論の生みの親、塩見同志の最近の論文にみられる右へのブレと、りわけ最も優れたものとしての国際主義の放棄、一国主義への後退の中にこのことは如実にあらわれている。(注2)

この限界はテルアビブ斗争が一向過渡期世界論の極限に実践され、実践されるや否やそれが巨大で豊かな内容をつきつけるが故に完全に露呈し、もはや一向過渡期世界論にはテルアビブ斗争は彼岸のものとなったのである。

#### ④ 第三世界革命主体論とテルアビブ斗争

我々が国際軍―国内ゲリラ軍(現実には国際軍への支援組織でしかなかったが)として世界革命戦争に参加していった時、日本階級斗争は本格的武装斗争の未だほんの端緒期であり、武装斗争をはじめようとする全ゆる組織、グループがそうであるように斗争主体の純化過程を辿るという事情によって第三世界革命主体論へと傾斜していったのである。しかもそれだけではない。我々の場合一向過渡期世界論に依拠していたということがあり、先に述べた一向理論の難点によってそれは更に拍車をかけられ、そこへと固定化されたのであった。どういふことか。それに答えるためには先ず第三世界革命主体論の歴史的背景とその大概の構成をみてみなければならない。

六九年秋の敗北と本格的武装斗争―軍事問題の提起によって様

の主体は生れず、革命主体は第三世界人民であり、市民社会極少派たらざるを得ない革命戦争派(第三世界革命主体論ではこの市民社会―帝国主義国家内の革命戦争派の発生の根拠が全く説明されず何かしら天から突然に降って湧いたような突然変異が何かで生じたかのようにならねない)は不断の自己否定を通して斗っていくものとしてあるというものである。ここから「世界の農村で世界の都市を包囲せよ」「帝国主義国内革命戦争派はヴェトナム解放武装勢力の分遣隊として武装斗争を展開せよ」「ヴェトナム人民の一発の弾丸、一機の飛行機として帝国主義を攻撃せよ」等々のスローガンが提出される。そしてこの基本戦略から当然ながらPrの否定(太田竜はプロレタリアにかわる概念として「弱民」を提起している)、先進資本主義国における党建設の否定、合法的諸活動の大半を第二義化もしくは否定が導き出され、運動・組織路線として戦闘主義、少数精鋭主義、戦術主義、軍事力学主義、軍事召還主義が結果としていく。

これが第三世界革命主体論のアウトラインである。先に述べた様に第三世界革命主体論と一口に言っても様々のニュアンスがあり、ここでの概略は若干単純化し過ぎのきらいがあるが、その核心は以上であると言ってよからう。

さて次に一向過渡期世界論に依拠していた我々がこの第三世界革命主体論に傾斜していったことの解明のためにも両理論の内的関係をみなければならぬ。

一向過渡期世界論がその革命的意義にもかかわらずその限界を、ところがり弁証法、の極限に提起された「世界党―世界赤軍」の地

々の組織・グループが第二次共産同の党内斗争を先達としながら様々の角度から、仕方でも本格的武装斗争の課題に取り組んでいた。この時のこれらの組織・グループにとって先ず重要であったことは合法斗争から本格的武装斗争(↓非合法斗争)への飛躍期であったが故に自らをかける武装斗争を担う主体へと飛躍・純化することであった。この主体の純化過程は「飛躍期」においては当然経過すべき一過程であり、純化は徹底的であればある程良い問題は次にある。この純化過程は一つの過程であり、従ってそれは止揚されるべき過程であり、そこに固定化されては決してならないという点であるにもかかわらず六九年秋以降の本格的武装斗争の飛躍期―端緒期の様々の諸困難性の故にこの過程を固定化する傾向が生じてきた。広汎なプロレタリア人民に依拠した荒々しい武装斗争への端緒・純化の過程をあたかも本来目指すべきものとして固定化し、そこに安住する傾向、一言で言えば斗争の飛躍に伴う新しい自然発生性・自然成長性への拜跪である。この傾向は様々の色合いを持ちながらも一般的にはプロレタリアートへの不信・輕蔑・合法的諸斗争への不信・否定・輕視・革命理論への輕視・蔑視と実践第一主義、実践における党の否定、テロリズム等の内容、気分を持つ。この傾向は赤軍派をも含め、主には無党派の武斗グループを多かれ、少なかれとらえてきたのであったが、この傾向を理論化し、固定化を完成させるものこそ第三世界革命主体論に外ならない。この理論にも種々の色合い、ニュアンスの差異はあるが、共通するのは「帝国主義―市民社会」第三世界―植民地社会」を世界の基礎矛盾として把握し、市民社会には革命

平で立ち止り、そこから理論の転倒化・再構築にまでつきすまず、それ故に実践第一主義的傾向を理論の唯物論的体系化傾向への二分解と対立、要するに理論の抽象化を招き、更にはその到達した最高の表現としての「世界党―世界赤軍」を何か抽象的なものとして遂には理論の彼岸にまで押しやってしまう点に持つことは既に述べた通りである。一向過渡期世界論こそが日本階級斗争史上初めて本格的武装斗争を生み出すことができ、また赤軍派の斗いに規定されて多くの無党派武斗派集団が一向過渡期世界論に傾斜していきながらもこの限界の故に無党派武斗派集団の無党派性を解体し、赤軍派に吸収することができずにかえって無党派武斗派集団にその存立の基礎を与えたのであった。そしてこのことは現実の赤軍派の実践の中に明確にあらわれており、「軍」党の戦闘主義、実践第一主義の一発主義の傾向は根強く、最近では赤軍派自身が無党派武斗派へと解体されつつある。(注3)

今述べた点こそが第三世界革命主体論との内在的関係を生み出しているのである。

ではいよいよ我々にとっての一向過渡期世界論―第三世界革命主体論の関係を述べていかねばならない。

我々が武装斗争へと参加していった時、武装斗争は端緒期であり、しかも我々が無党派グループとしてあったことによって一向過渡期世界論に依拠しつつも自己の無党派性を解体することなくそこに固定化し、無党派戦闘派として闘いをすすめてきた。更に時期が端緒期であったことは次のことを意味した。三〇年代の先進資本主義国における革命斗争の敗北、武装解除と共産主義運動

のbrへの屈服・変質・修正主義への転化、革命の現実性からの乖離、その後の所謂旧左翼への即自的批判として登場した新左翼とその成長、それが本格的な真の共産主義運動へと飛躍していくとき（日本の革命運動も大よそこの軌跡を辿ってきた）先の先進資本主義国内の共産主義運動の修正主義への転化に対して唯一革命の現実性を堅持し、共産主義運動を発展させてきた中国共産党、そしてその流れの第三世界人民の民族解放・社会主義革命の拡がりともますます豊かになる革命の現実性へと接近し、そこから多くのことを学び、教訓としていくことは当然であり、またそうあらねばならない。そもそも新左翼の運動において本格的武装斗争開始の前夜とも言うべき六〇年代後半の斗争は「ヴェトナム反戦」斗争として明白にあらわれているように第三世界の革命の現実性からの直接的な規定性を受けているのであり、真の共産主義運動―本格的武装斗争を担う党建設の斗いに突入するやこのことはより切実な問題となってくるのである。従来のヴェトナム反戦というような直接的な、抽象的な、それ故外的な規定を受けるにとどまらず軍事技術上の極めて具体的な問題から党建設の原則の問題まで全ての領域にわたって貪欲に学ぶこと、即ち我々の運動への深い内在的な規定を受けるまでになる必要があること、このことは極めて理にかなったことであり、最低限必要なことである。

△端緒期△に運動が必然的に要請したこのような事態が我々の場合のように無党派武斗派グループとして一向過渡期世界論に依拠しつつもそこに固定化し、しかも端緒期の運動の陥穽としての新しい自然成長性への拝跪の傾向へと向っていったことに更なる拍

車をかけたのであり、自然成長性への拝跪を理論化して合理化、固定化する第三世界革命主義論へと乗り移っていったのであった（とりわけ国内において）。

かかる一向過渡期世界論から第三世界革命主体論への乗り移りは国際軍の場合、現地パレスチナの生き生きとした、荒々しい、まさに圧倒的な革命の現実性がたぎっているが故に第三世界革命主体論として理論化されてはいないながらも、若干のそこへの傾斜があったことは事実であり、従ってテルアビブ斗争がこの第三世界革命主体論の気分を表現していないとは言えない。とは言えテルアビブ斗争はやはり一向過渡期世界論からの規定を圧倒的に受けているのであり、先に述べたその限界性の故に第三世界革命主体論への傾斜を背後にもつものであると言えよう。

ここで第三世界革命主体論に対する批判的総括をしなければならぬがそれは次節で触れたい。

## N

本節ではテルアビブ斗争の偉大な勝利と全く対照的な我々国内組織の大敗北に焦点をしばって総括していきたい。

我々が一向過渡期世界論に依拠しつつも本格的武装斗争の端緒期に特有の新たな自然成長性の中に落ち込み、第三世界革命主体論へと乗り移り、そのことを固定化し、全く自然成長性に拝跪することになったこと、またその歴史的論理的背景については既に述べた通りであるが、そのことが我々においていかなる内容を持つていたかを詳しくみていこう。

先ず理論的にはどうか。レーニンには次のように言っている。

「手工業性という概念には、訓練の不足ということのほかには、まだ別のあるものが含まれている。一般に全体としての革命的活動の範囲が狭隘なこと、このような狭隘な活動にもとづいてはすぐれた革命家の組織などが形づくられるはずがないのを理解しないこと、最後に―そしてそれがかんじんの点であるが―この狭隘さを正当化して特別の『理論』にまでたかめようところみていること、つまりこの領域でもやはり自然発生性のまゝに拝跪していること、これがそうである。」（何をなすべきか）

我々の場合、この「特別の理論」こそ第三世界革命主体論であった訳であり、そもそも理論そのものへの軽視・蔑視の傾向が根強くあること、従って軍事斗争の展開に伴う様々の困難な諸課題・任務を系統的・計画的に整理し、また解決していくことができないのである。それは即ち現代過渡期世界における革命戦争派として世界党建設に向けての綱領獲得へと接近することができなかったということに外ならない。そしてこれは次の内容である。

- 依拠すべき階級・階層分析
- 反スタロツキズム止揚と左翼スターリニズム規定の克服
- スターリン主義の克服

以上の諸課題に全く手がつけられなかったこと。

○ △世界―日本△関係の原則的把握ができず、つまりそれを世界党建設の斗いの不可避のものとして把握できずに具体的な

情況に規定されての直観的把握にとどまったこと

以上のような理論的諸課題についての曖昧性を残したままに、従って理論的な立脚点を構築せぬままに（もちろん組織的に）

○ 中国共産党―毛沢東

○ ヴェトナム労働党―ボーグエンザップ、ホー・チ・ミン

○ キューバ共産党―ゲバラ、カストロ

○ その他ラテンアメリカ、アフリカ etc

の経験、諸著作への接近が行なわれ、それは当然ながら非系統的な、思いつきの個々バラバラの吸収であり、とりわけ運動組織路線上の課題に偏って学習されたこと。（このことに関し

て言えば、一向過渡期世界論に依拠し、我々と同様に新たな自然成長性に拝跪する傾向のある赤軍派の諸君が組織として立脚すべき地平を獲得することなく、個々バラバラにゲバラ、毛沢東、ホー・チ・ミン等々へと接近していることにも全く同根の問題がある。まさに赤報派の矢草三郎君が的確に指摘しているように連合赤軍の粛清が明らかになるや否や、森君、永田君は「無私、破私立公の精神やマルクス・レーニン主義に立脚した科学的態度」がなかったと言って批判され、マルクス、レーニン、毛沢東、金日成、ゲバラ等々から個々人が学んだ内容をもって批判されているのである。」（矢草三郎、革命戦争勝利の道とは何か、査証五号）というところへ行きつくのである。赤軍派の同志達はこの点に深く心をいたすべきであらう。）

次に運動路線においては、プロレタリアートへの不信、自己の



思えば上から合法諸斗争からの召還、軍事冒險主義、ともかく一発やる「主義」という路線である。本格的武装斗争への飛躍、その端緒期に必然化される主体の純化過程を絶対化し、固定し、その上に立って武装斗争を展開しようとする時の当然の帰結である。この「四畳半」の中の陰謀的軍事冒險主義は我々の場合、ただ四畳半の中にこもっているわけにはいかず、その矛盾を拡大していった。つまり「外」との関係は第一義的に考えていたから、この関係によって運動路線における極端な秘密主義、閉鎖主義は貫徹されることなく無原則的な非合法の枠の乗り越えが行なわれることになった。「外」との関係は原則的に調整、処理することができず、完全な場当たり主義に陥入り、合法部門への無原則な介入が行なわれ、それ故に国内における非合法活動は「四畳半」の中のやせ細りを強要されつつ、それをもし得なくされながら完全な無方針に終始することになったのである。

次いで組織路線ではどうか。結論から言えば戦斗団主義、少数精鋭主義、陰謀家主義であり、「外」との関係における水ぶくれ主義、半非合法主義である。「外」からの要請による人員獲得が、第三世界革命主体論の結果する戦斗団主義、少数精鋭主義、合法諸斗争からの召還からは成し得ることができず、それ故に完全な「一本づり」方式となり、半非合法主義に陥ち込むのである。もともと戦斗団主義、少数精鋭主義として結果した組織路線は組織の意志統一の規律、従って団結の質が全く定まっておらず、個々バラバラであり、義理人情型組織となり、まさに反帝武装斗争を展開するという一点を除いては全く何らの共通性も有していない

われたそのやり口はブルジョア法を大きく踏み越えたものであった故に尚更であった。任意出頭の承諾と供述、中心メンバーの自供という形で我が組織の大敗北は先に述べてきた我々の組織のあり方に深く根ざしているのである。

更にここで言及せねばならないのはかかる政治警察の弾圧に対する政治的反撃についてである。我々が合法諸斗争からの召還・戦斗団主義であったためにこの政治的反撃を自ら組織することが全くできなかった。合法的諸手段をフルに駆使してこの政治的反撃を組織し得ず、敵への屈服をより完全なものとしたことへの無念さ、口惜しさは格別である。我々はここに政治的反撃を全くやり得なかったことを痛切に自己批判したい。そしてこのためにもこの敗北が我々の組織的敗北であったことを分析し、明らかにしてきたのである。

政治的反撃ということについては、我々と同様の組織路線を持つと考えられる所謂「黒ヘル」グループがあれ程にすばらしい斗い（彼らの斗いと断定し得る何らの確証を我々は持っているわけではない）を展開しながら何らの政治的反撃を組織することなく（もちろん指名手配されている同志達の見事な逃亡はそれだけで立派な政治的反撃であるが）追いつめられていつているのを見るとき、この感は一とおである。

さて最後に以上述べてきたような根本的な難を何故に第三世界革命主体論は結果するのかを述べよう。

第三世界革命主体論の最も根源的欠陥は理論の中に理論そのものの反省の契機が全く欠落しているという点に求められる。即ち理論の発生の根拠及び理論提起主体の発生の根拠が全く説明され

組織なのである。組織においては、とりわけ共產主義者の組織においては団結の質は決定的な意味を持っているのであって、これこそが組織の全活動を左右する。我々の場合のように、人員獲得という組織の最大任務の一つが、厳格な規程の完全な欠落の故に全く、個々人の主観にまかされざるを得ないというような義理人情型組織の団結は全くもろいものである。「義理」とか「人情」とかいったものは極めて強い団結を生み出す時もあるが、結局それはブルジョア的なものであって、政治警察との攻防においては何とも脆弱である。我々の雪崩を打った敵への屈服はその最も良い例なのである。

最後に総体としてみると、こうである。系統的な、周到に準備され、考えぬかれ、築き上げられた組織とその活動ではなくして、事実尻をたたかれ、全くの場当たり主義的に、何となくしにいつの間にかできていったという風な組織であり、その活動であり、それ故に合法・非合法の正しい関係がなく、全くのデタラメであって、合法と非合法とのズブズブ合法主義と、極端な秘密主義とのアマルガムなのである。要するにすぐ目先のことでしか見えなく、目的意識的な、系統的な、計画的なすぐれた革命家の組織、世界党建設の斗いとして遂行されていなかったということである。以上、我々の国内組織について検討して来たわけであるが、かかる内容を持つ組織が政治警察の追及に耐え切れないことは自明のことである。とりわけテルアビブ斗争に関する我々国内組織の壊滅を目指した政治警察の弾圧は極めて熾烈であり、家宅捜査の無制限の実施、差し押え、任意出頭呼び出し、別件逮捕等にあら

ず、その初めから所与のものとして、何かしら天から降ってきたかのように扱われること、理論の彼岸に追いやられることである。カントにおける物自体と同様に第三世界革命主体論は先進資本主義国内の革命戦争派を理論の彼岸に追放し、それ故に理論そのものの発生の根拠をも同じく理論の彼岸に追いやるのである。そもそも理論は自らの発生の根拠をしっかりとその内に把握していなければならぬ。今、何故に世界階級斗争の中で第三世界革命主体論が先進資本主義国内において発生し、一種の流行となっているのか。第三世界革命主体論はこの点を全く解明できない。梅内君よ、君は一体どうしてあのような理論を展開し得るようになったのか。「目が覚めた」などとネボケたことを言うのはやめて自らの理論にしっかりと責任を持つがよろう。AさんやB君やC君ではなくまさに梅内君自身が何故あのように「目が覚めた」のかじっくりと頭を冷やして考えてみるべきであろう。自らの理論の発生の根拠そのものを総括し得ない理論ほど無責任極まりないものはないのだから。

このように第三世界革命主体論は自らの発生の根拠、理論主体の根拠を理論の彼岸におしやることによって、それに依拠する実践者にとっては自らを理論の圏外におくこととなり、運動・組織路線は路線とは全く言い難いものとなって完全な場当たり主義に陥入り、新たな自然発生性の中にしっかりと根を下してしまうのである。

I・IVにおいて自己批判の作業の第一歩としてのテルアビブ斗争の革命的意義の確認、総括と我々国内組織の大敗北の総括を行なってきた。本節ではこの総括を踏まえた上で新たな再生の道、路線について若干ふれてみたい。

結論から言えばこうだ。世界革命戦争を闘い抜き、日本帝国主義を打倒し、世界プロレタリア独裁を樹立し、社会主義を組織し、共産主義へ向けて次第に自らを解体していく党の建設と、その下にあるプロレタリアートの軍隊、世界赤軍の建設の大道へと着実に一步を踏み出すということである。世界党建設―世界赤軍建設の大道へ、これが我々のスローガンである。一切の活動をこのスローガンの下、そこへと収約する形で闘いつていくつもりである。我々はテルアビブ斗争としっかり結びつくことによって世界党建設の最大の課題である国際主義をこの手に固く握りしめている。まさにアラブ赤軍派が言うように「アラブ赤軍・PFLPの世界革命戦線構築にむけた共同武装斗争、テルアビブ攻撃の国際ゲリラ戦を、全面的に認めるのか否か、この選択こそ、国際主義者として世界革命の任務につくのか、良かれ悪しかれ、ブルジョアジーの側に立つのかの岐路であり、よけて通ること、中間的評価を許すことのない、日本の革命家にとつての歴史的メルクマールである。」(国際主義の問題について(テーゼ補)・序章九号所載)ということなのであり、日本の革命戦争派にとつても未だはつきりとした態度をとり得ないという状況の中で、我々こそがはっきりとテルアビブ斗争を、世界党建設の最も重要な闘いとして評価している。それ故に我々は宣言しよう。初めから目的

底的批判として書いた「帝国主義論」に対し、この現代帝国主義論はスターリニズムへの根底的批判である。またレーニンが「帝国主義論」の序言に自ら書いているように「この小冊子はツァーリズムの検閲を顧慮しながら書かれている。だから私は、自分の仕事をきわめて厳重に、もっぱら理論的な人々と共に経済的な分析にかぎらなければならなかったばかりでなく、政治についてやむを得ずわずかに論及する場合も、非常に用心深く、暗示でもって、すなわちインソップのことばでもって(中略)言いあらわさねばならなかった」というのに対しては、我々は主体の実践によりひきつけて理論展開をしなければならぬであろう。その他の理論的課題を羅列的に述べると

- 反スターロッキズムの止揚
- スターリニズムの克服(全体系にわたって)もちろん現代帝国主義論を基底として
- 藤本進治・G・ルカーチの運動組織論批判
- 藤本哲学の根底的批判
- 第三世界革命主体論等の非マルクス主義革命論批判

平田市民社会論―共同体論の批判

この課題遂行のために我々は様々の革命戦争派の経験を貪欲に学ぶつもりであり、とりわけ共産同分派斗争から多くを学ぶつもりである。

ところで先の課題と共に第三世界の経験・理論からも貪欲に吸収しなければならぬが(このことは何よりも先に述べた国際主

意識的に、周到に考え、準備し抜き、世界党建設の不可避の闘いとして無数のテルアビブ斗争を断固遂行していくことを。

我々の政治警察への完全な敗北は徹底的であり、階級斗争へのあの裏切り行為は決してぬぐいされ得ないものである。それ故にこそ我々は何故あのようなことになってしまったのかを徹底的に考え、分析し、新たな再生の道、自己批判の道を探ってきたのである。今我々は著しい後退を余儀なくされている。しかし漸く我々は新たな道の端緒をつかんだ。我々は今しっかりとした一步を踏みだすのだ。

さて、我々の世界党建設への闘いは如何に勝ちとられるのか。それは今までに十分に示唆してきたところではあるが、ここでもとめてみれば次のようになるであろう。

一向過渡期世界論を(世界党)の地平から転倒し、理論を再構築すること、内容的には世界的規模での(Pr)Br関係視座をしつかりと堅持した上で、一向過渡期世界論の抽象性を豊かな具体性でもってかえるために攻撃型階級斗争論を清算するのではなく止揚すること、国際主義の具体化即ち世界党建設へ向けての具体的な活動としてとらえること(具体的な戦闘への参加、兵士等の交換、各国支部建設等要するに全世界の革命戦争派とのまさに具体的共同行動として遂行すること)公然たる革命の輸出入。

またこのためには一部で手がつけられ始めている日本における具体的な階級・階層分析と調査は不可避(民族問題、政治的民主主義問題との関係)であるし、何よりも早急に成し遂げられねばならないのは現代帝国主義論(レーニンが第二インターへの根

義の実践として遂行され、学ばれる)、従来の非系統的なバラバラの学習でなく、系統だてて吸収するためにも、今述べた理論的課題の解明と不可分である。

最後に組織路線について一言。

我々の闘いとる組織は完全な非合法組織であり、堅忍不拔の革命家の組織であり、それを支える非公然組織である。テルアビブ斗争の大勝利と我々国内組織の大敗北、そしてミュンヘンオリンピック村ゲリラ戦に於てはつきりとあらわれたように、我々は国内の政治警察ばかりでなく、国際的な公安機構・CIAやイスラエル秘密警察と斗わねばならないのであり、厳格すぎる程の厳格な組織をつくらねばならない。それ故に従来我々を深く抱えてきたプチブル的な運動、組織への我執は先ずきっぱりと捨て去らねばならない。例えば同じ色のヘルメットをかぶってその数を競い合つてうれしがるというようなことはもういい加減にやめねばならない。そのために我々は日本共産党から多くを学ぶつもりである(とは言え、現在の日共から学ぶものは何もないことは言うまでもない)。

## VI

我々は漸く自らの地歩を固めた。我々はここで一向過渡期世界論にそして共産主義者同盟赤軍派に別れを告げよう。今まで述べて来たように我々は圧倒的に一向過渡期世界論の影響下にあり、赤軍派がその力量不足のせいもあって国際主義から後退していく中で、謂わば我々が共産同赤軍派の国際部を代行してきたわけで

あったが、ここできっぱりと共産主義者同盟赤軍派に別れを告げよう。我々は我々の道を歩む。不拔の世界共産党建設の大道を。我々の出発は輝しい、祝福されたものでは決してない。あの偉大なテルアビブ斗争の大勝利にもかかわらず……。我々は政治警察への全面的な屈服という汚れた淵から出発する。しかし我々は自信をもっている。さあ、根底的な自己批判への道へ！我々はPFLP、トルコ人民解放軍、西ドイツ赤軍派そして全世界の世界赤軍派と共に歩む。

○ディル・ヤシン作戦大勝利万歳！

○奥平、安田、岡本同志に続く！

○世界革命戦争勝利！

○世界党！世界赤軍建設の大道へ！

(注1)「ころがり弁証法」的論理展開とは実践との不断の相互規定によって理論が螺旋状に展開していくことである。G・ルカーチの組織論はこの一つの典型である。階級斗争の過程の意識II党という把握である。またもう一つの典型が藤本進治氏の運動・組織論である。プロレタリアートの内的矛盾の展開として全てが語られるという階級形式！党形成論なのである。

(注2)塩見同志は彼の執筆になる「革命戦争派の綱領問題」(序章七号所載)、「所信表明」(査証No2)、「今回の問題について」(査証No3)……以上執筆順……の三論文において一向過渡期世

生産手段の奪取等が語られていること)。にもかかわらず、日本II世界社会主義革命戦争の三つの発展段階、即ち防禦！対峙！反攻の突っ込んだ内容叙述に於ては、世界党！世界赤軍建設の極めて重要な活動としての国際活動はスミに追いやられ、わずかに抽象的なことばで語られるにすぎなくなる。そもそもこの論文は、日共革命左派との理論斗争が目指されているのであるから、日共革命左派に完全に欠落している「国際主義」(そしてそれは共産同赤軍派の輝しい旗じるしであった)をこそ前面に押し出すべきであるにもかかわらずである。塩見同志は「国際主義」を高々と掲げ、日共革命左派との厳しい党派斗争を遂行するかわりに国際主義を投げ棄て、毛沢東思想に解体されていくことによって日共革命左派へと屈服していったのである。この傾向は連合赤軍の斗いの後に書かれた「今回の問題について」に於て更にはっきりとあらわれ、社会主義革命路線を放棄し、完全に国際主義を棄て去り、革命戦争さへをも清算する方向へと向っているのである。連合赤軍の斗いはまさにテルアビブ斗争と同質のもの、プロレタリア国際主義をあの悲惨さをもって実現したのであり、浅間山荘の五名の戦士の撃った弾丸は、テルアビブで三戦士の放った弾丸とまさに同じ質のものであったにもかかわらず、全くこのことを評価することができず、銃撃戦の革命的意義を清算する方向で連合赤軍の斗いを総括しようとしている。これは先ず、銃撃戦から肅清問題を切り離して問題にしようとする態度、更にその肅清問題を「路線方針問題や、その他の諸問題も現在の攻防の要因になっ

界論の輝かしい国際主義を投げ棄てていく過程を見事に表明している。「革命戦争派の綱領問題」では国際主義はしっかりと堅持され、更には日本！世界！関係の原則的な把握が追求されている。曰く、「国際的拡散！依存主義に反発する余り『国際根拠地！国際的地下活動』！革命の永続性(世界的軍事の主動性)の思想性と路線、計画的推進を重視し！自国に踏みとどまり、地下体制を強化し、国内統一戦線の強化を地盤に、軍事技術と非法法活動を結合し権力の侵攻、制圧体制を突破する姿勢の強調はいくら強調しても強調したりないことだが！単純自立主義、事実上の反スタ主義(敵対的党派斗争)に陥ち込む傾向を克服する為です。国際活動(世界委！各国支部建設、大後方(根拠地化)！国際地下体制獲得策)が同盟活動の戦略的部分であることをあらためて確認しなす為です。従来の先駆的、本質論議的傾向をもった、あるいは世界戦略からのストレートな演繹法による世界党！世界赤軍の主張を自国の革命戦争の推進との関連で内的に明確にし、更に国際委と日本委との関連をはっきりさせることを通して、種々な諸傾向を政治的組織的総体の関連の中で克服せんとしたのですが思うようにはいかなかった。」塩見同志はまさにこの方向で更に問題を追求していくべきであった。そして何よりも何故に「『思うようにはいかなかった』のかを考えてみるべきであった。『所信表明』(破防法公判での陳述)ではこれがかきりと後退し、次のようになっってしまう。権力規定の問題、民族問題、農民、小Brの問題等が検討されているが原則は堅持され、社会主義革命路線ははっきりと前面に打ち出されている(中小資本の打倒、

れて、副次的な問題！普遍的問題でありながらも！として存在し、徐々に主要で普遍的な問題として登場しつつあるということだ」というような極めて観念論的視座から切開しようとする態度の結果にはかならない。かかる視座、態度からはあの連合赤軍の斗いの強烈な衝動のあとでは次のように社会主義革命路線を放棄するの無理からぬことである。いささか長くなるが引用しよう。

「この武装斗争(『世界』と『日本』)とを一体化し結合させ、「社会主義」と「最少限斗争」を一体化し結合させる過渡的綱領を軸とする反帝反米の人民民主主義革命(反戦、反ファシズム)反生活破壊をプロレタリアートのヘゲモニーで徹底して行い、全面的社会主義革命に発展させる)で始まるプロ、人民、大衆に立脚し抜く社会主義革命戦争路線)を正しく導く革命政治路線のポイント」

④世界！極東！日本の政治的危機と不均等発展の経済的矛盾の日本への集中への合成として日帝は極東の危機と一体に、アジア侵略、ファシズム、生活破壊の大攻撃を展開せざるを得ず、又、この攻撃は、国際的人民の逆包圍状況故に、その権力再編、階級階層再編は限界性をもっていること。

⑤労働者階級は、この攻撃と一定の限界性に対して、徹底して敵支配階級を孤立させ、他階級、他階層を統合すべく、今すぐ直接の社会主義の実現をめざすのではなく、全人民を統合する「反戦、反ファシズム、生活危機突破、人民民主主義革命」を提起しなければならぬ。

⑥その核心点は、政治的、軍事的斗いの対象を「プロ人民の反戦、

反ファシズム、反生活破壊の要求に直結する米帝、自衛隊、警察と金融資本や、大独占、悪質官僚に絞る。

◎中小資本、官僚に対してはプロレタリア的統制管理は貫徹するが、資本主義的生産を当面許容する。以下略

武装斗争にもいろいろあるというものだ。これは急進市民主義的武装斗争の典型ではないか。塩見同志はまさに急進市民主義的武装斗争に純化したのであり、テルアビブ斗争をも深く規定した輝しい国際主義は完全に放棄されたのである。

(注3)塩見同志は「今回の問題について」(査証三号)で述べている。「この敗北の総括として(六九年秋大菩薩の敗北……)我々

々は第三世界の人民との連帯、民族解放、社会主義の支持、(アジア共産主義、キューバ共産主義の発見であり、とくに自己をベトナム人民、ベトナム労働党の日本分遣隊として扱えたこと)を思想的、政治的基軸に……」(傍点は来見)、また上野同志は述べている。「日本で一九六九年赤軍派が誕生したのも、日米帝国主義の第二次大戦后世界再編に対して抗日革命戦争グループ(朝

一中一べ)の革命的質が、日本に上陸するものとしてであった。」  
「テルアビブ斗争を支援し、第二次大戦后世界克服の共産主義的政治に向け奮闘努力し、世界共産党世界赤軍を組織せよ、組織せよ、組織せよ」(査証五号)

ここには単なるコトバのアヤ以上にはつきりと第三世界革命主体論への傾斜があらわれている。  
(くるみ・ひろし VZ-58)

## 戦闘宣言

### \*アラブ赤軍

世界の同志たちノ

とりわけ、日本の同志たちノ

テルアビブ統戦の勝利的貫徹を、世界・日本の同志たちと共に喜びたいと思う。

テルアビブ統戦、ミュンヘン・オリンピック遊撃戦争として引きつがれた、被抑圧人民の雄弁な炎をノ この松明をノ 日本の闘う人民の闘争に点火し、更に共通の敵にむかって闘い抜くことをアラブ赤軍は誓うノ

松明は小さく不滅であるが故に、世界帝国主義者にむけた正確な引き金となっている。

抑圧された人民のオリンピック祭が始まっている。

帝国主義者は、空々しいお祭り騒ぎを準備し、我々は、プロレタリアートの真の祭を準備するノ

戦死した日本の二戦士、バーシム・奥平、サラハ・安田、今尚闘っているアハマド・岡本、そしてパレスチナ、ベトナムで斃れた

無数の戦士たちに、我々の闘いの決意をノ 愛をノ あきらかにしたいノ

それは、現在、世界のあらゆる最前線で闘っている同志たちとの、更なる共同闘争の確認であるノ 更なる世界革命戦争へ向けたプロレタリアートの、強固な決意の証しでありノ 呼びかけであるノ  
我々アラブ赤軍は、テルアビブ統戦を次のように明確に位置づけるノ

第一点 「別個に進んで一緒に撃てノ」という世界革命統一戦線の戦略地平を実体化し、同質の革命的党派による共同武装闘争は、独自に敵を撃破するだけでなく、数乗倍のダメージを共通の敵に与えるという現実を証明したノ

第二点 先進国反動政府と日和見共産党に二重に抑圧され続けていた全世界の革命的諸党派に対し、自らを武装闘争に組織し、武装闘争の戦略的地平における闘いの有効性と可能性を明らかにしたノ  
第三点 この、世界革命統一戦線の実体化、その現実を構築するにいたった第一歩は、急速かつ流動的な武装闘争を全世界的に同質

化し、革命的潮流の大合流を世界史にうながしたものである／

このことは更に、我々アラブ赤軍を次のように規定する／

第一点 真の世界戦争派、すなわち真の国際共産主義者は、自力更生による世界革命統一戦線の構築をモラルとしなければならないこと／我々のモラルは、我々の革命にあること／すなわち、我々アラブ赤軍のモラルは、我々の革命にあることを明確化している／

第二点 国境を越えて闘うことが目的化されるのではなく、国境を越えた時間的・空間的な戦争形態そのものが世界革命の根拠地を構築することを、我々に確信させている／

第三点 したがって、現在の、我々の戦闘の全ての目的は、勝利することである／

テルアビブ銃撃戦からミュンヘン遊撃戦争にいたる我々の戦闘は、世界革命におけるパレスチナ革命の位置を明確化した／

それは、敵イスラエルとの闘いが、第三世界の民族解放社会主義戦争であると同時に、世界帝国主義の先兵シオニストとの闘いであるという先進国革命であること／一個二重の任務を必然化したものとして／

すなわち、パレスチナ革命は、世界革命の最前線であることにあって、ベトナム革命と同質に位置づけられる／

日本の同志たち／

したがって、次のことを強く呼びかけたい／

世界帝国主義の城日本帝国主義国の戦争は、世界革命の最前線であり、すべての前線にとっては銃後後方である／

日本の同志たち／

ベトナム革命、パレスチナ革命の銃後後方としての共同軍事行動の任務を強化せよ／

シナプロレタリアート人民の情念を共に共有し、共闘の力を共産主義者の闘争を、共産主義の政治を創造することを急務とせよ／

それは、全ての闘争に勝利すること、全ての戦闘に勝利することによって、真の地下党を構築することから始めよう／

そして最後に、全ての同志たち、闘うアラブ赤軍から次のことを呼びかけたい／

世界革命の兵站線、革命的プロレタリアートによるシルクロードを形成しよう／

共同軍事行動による最前線銃後後方の任務の共有化、世界プロレタリアート独裁にむけた戦闘を全世界的に組織しよう／

共有の敵に対して、ひるむことなく、あくまで非妥協的な戦闘を闘い抜こう／

我々は、更に進撃し、アラブ赤軍を世界赤軍に改組し、地球上のどこでも闘う用意がある／

地下兵站線と武装闘争を確実に準備する／

それが、日本における革命にむけた、我々のスタンバイである／戦場で会おう／

1973



# テルアビブ銃撃戦争一周年5・30行動へのアピール

## \*アラブ赤軍

本日の五・三〇リッダ空港襲撃戦争一周年集會に結集された同志諸君、友人達！

不滅の連帯を更に確認し、世界中を戦場とするプロレタリアの正義の闘いを、更に、更に発展させることを誓います。革命への我々の一歩一歩が、革命運動を切り拓き、革命への我々の貪欲さが、敵との攻防の中で味方を鍛え、固めつつあります。

一九七二年、非妥協の攻勢によって、赤軍兵士、バーシム・奥平、サラーハ・安田、アハマッド・岡本が切り拓いた地帯は、現在のパレスチナ革命の新たな攻防のステップとなった事が、この一年のパレスチナ革命主体の変革と情勢の中に明らかにされています。それはまず第一に、パレスチナ革命の歴史が悪化しているように、進歩的であれ反動的であれ、民族主義政府の国家政策の展開が、「アラブの大義」に名を借りた圧力機関として存在して来た事。パレスチナ革命の永続的エネルギーが対置された時、その民族主義政権の政治とヒモつきに革命主体を弾圧して来た、PLO右派を中心とする革命内妥協主義者が、今、登場の余地とヘゲモニーを喪失される、

新たな革命の段階のステップとなったということです。

パレスチナ革命は、進歩的民族主義者によってアラブ革命の利益のためという形で常にパレスチナ人民の利益を肩代わりされて来たし、そのために、逆にパレスチナ人民の解放闘争の独自性を全面化し得ず、「民族的団結」という反動政権の空文句に引き戻されて来た歴史的事実は、パレスチナ革命指導部のブルジョア民主主義の妥協を許して来たことに起因していました。それ故、シオニストイスラエルとの非妥協的対応に、常に妥協して来たアラブ民族主義者の政治と一体になって妥協を目論んで来たPLO指導部は、リッダ空港銃撃戦争そのものばかりではなく、リッダ空港襲撃戦争によって左傾化した人民の非妥協的エネルギーが、ミューン・闘争を経て、更に、かたくなな、自然発生的な国境を越えたゲリラ戦の熱狂的な革命主体として湧きあがって来る過程で、妥協主義者PLO右派が非妥協的ゲリラ戦を弾圧し得ない立場に立たされたのです。即ち、人民の海によって支えられたゲリラ戦争が、右翼指導部が「もしもこのゲリラ戦に敵対するなら、人民によって糾弾される」

という現実を創出したのです。このことは民族主義政府と一体となって妥協を目論む革命内妥協主義者に楔を打ち込んでいます。彼等は闘争そのものを承認しているのではなく、人民のエネルギーに規定されて斗争を承認せざるを得ない立場に立たされています。言い換えれば、PLO総体が右派によって規定される機関から左派に規定される機関として現在登場しつつあります。それがこの間の五月二日から現在に至る、レバノン内戦におけるパレスチナ革命に対するレバノン反動との対決の過程で、右派の妥協主義者の目標の無い協定調印が人民や革命主体によって粉碎され続けているという現実の中に表現されています。

このリッダ銃撃戦争が切り拓いた地帯、闘争の攻勢における陣形と非妥協的ゲリラ戦の激化の潮流は味方内部を更に動員出来る姿勢へと転換させ、ミューン・闘争の妥協のない戦闘を引き出し、更に拡大させています。

そして第二に、このリッダ闘争はシオニズムへの国家総動員体制の下に管理されているイスラエル占領地において、地下革命戦士が具体的な調査任務を担い、貫徹されているが故に、占領下地下組織の形態を持統的な組織へと質的に高める契機をつくりあげたのです。ヨーロッパのバリ五月革命の経験者として、現在本国内にいるユダヤ人留学生の本国内における「シオニズム打倒——国家解体」の闘いは、大衆運動の次元から地下兵站線の担い手へと、更に深く進んでいます。

そして第三に、このリッダ闘争は帝國主義本国内で育った我々日本人革命戦士との共同闘争であるが故に、パレスチナ革命がパレスチナ革命の統一戦線PLO機構のみならず、アラブ革命統一戦線

更に、世界革命統一戦線への三重の陣形に支えられることによって、逆にパレスチナ革命を保障すること、言い換えれば、世界革命の一環としてのパレスチナ戦線としての自らの位置を実際的に知らしめたことです。

このことは、今回のレバノン反動政府とパレスチナ革命の対決において、レバノン・ソ連派共産党やレバノン民族主義者に、パレスチナ革命防衛のために初めて武器を持たせ、レバノン反動に対して銃撃戦を組織し得る地平まで到達しているというアラブ段階におけるパレスチナ革命の統一戦線の現実的な進展として大きく評価し得る地平にあります。

一九七〇年、ヨルダン内戦の際、ヨルダン人民と共闘し得なかったパレスチナ革命は、今、レバノンにおいて先進的部分と強い絆を結びつつあります。

更に第四にリッダ空港闘争は、先進国革命主体と第三世界民族闘争の地下統一戦線を模索し得る突破口となっています。地下で手をつなぎ、相互に援助し合い、共同の敵を打倒するために、ヨーロッパ革命派を中心とする実体的な動きが開始されています。

この模索こそ、我々が世界革命を勝ち抜く主体——世界党を創出する第一歩としての世界革命統一戦線構築の実体的表現なのです。

日本の闘う同志諸君！ 友人達！

世界の闘う人民によって開始された潮流——世界革命戦線を共に担うために、今、武装闘争派の日本における世界と共通の質と共同の意志に支えられた革命戦線を構築しよう。

日本における前線を切り拓き、パレスチナ及び世界の前線の銃後として闘い抜くことを始めよう！

国際主義に連ぬかれた非妥協の戦闘を準備しよう！

この、敵との非妥協に連ぬかれ、世界の友人と共に歩み始める戦闘の持続こそが、真の革命主体を地下に掘げながら革命戦線を打ち鍛える過程になります。綱領論争、総括論争は実践的な闘いの中に位置しなければ、他党派との不毛な観念合戦に終始してしまふ危険があります。

同志達が今、アフリカ、中東、アジアに巨大な侵略を高度に押し進めている日帝の意図と武装闘争によって着実に対峙し、敵のプログラムの粉砕しながら味方を打ち鍛えることを火急の任務として闘い抜くことを確信しています。帝国主義者、シオニストの汚ない圧殺行為はわのけ、共通の敵を日本の国境を内側と外側からメチャメチャに撃ちこわし、更に大胆に進もう！

「日本にあるイスラエル大使館は、パレスチナ人民の代表がそこに住む権利があるのだ」と若いパレスチナ戦士、私の友人がいつも言うように、イスラエル大使館の存在に表現されるシオニスト・イスラエルの世界中に拡がる不当な存在を粉砕し、そしてまた、アハマッド・岡本に表現される革命戦士を我々の側に奪還し、更に、共通の敵を攻勢によって撃ち破ろう！共に、更に進撃を続けることを誓おう。

同志、森君の遺稿集、並らびにさまざまなパンフレットを昨日受け取り、読みました。今、さまざまな言葉が語られていることと思います。ただ、ただ、「敵への反撃」と「敵への報復」そのことを我々は任務としなければならないと思います。連合赤軍の死んでいた同志達もそれを望んでいる筈です。

最後に、本集会においてアラブ赤軍の同志達、バーシム・奥平、

サラハ・安田、アハマッド・岡本、オリイド・山田、達がいつも歌っていた「赤旗の歌」を彼等と共に歌って下さい。赤旗の歌、私は世界中の闘う人々から更に学び、更に進みます。我々は常に一つ

だし、今、この集会における結集された同志達と共に、私はその会場の中に存在し、会場の中で同様に、同じような情念と同じような敵への憤怒をこめて、その集会の中に居ることを、そして、私達の闘いのそばにいつも、あなた達闘う日本の人民が居ることを確信し、更に、更に登りつめ、更に我々の闘いの任務を誇りを持って闘い続けることを誓います。また会う時まで我々は常に一体だし、そして、私達はこの栄誉ある任務を引き受けながら、日本革命戦争を闘い抜く同志達の一步一步を、ジッと、しっかりとこちらから見つめています。

同志達！私達は日本における闘いの革命戦線の開始を、革命戦線の構築を、今、その火急の任務を貫徹されんことを心から願っています。

バーシム達の攻撃的な戦闘による死の一周年に際し、私達は更に闘いを、そして、その栄誉を心に誓うだけです。

同志諸君！友人達！

戦場を拡大させ、その一つに結ばれた戦場を拡大させ、その一つに結ばれた戦場で再会しよう！  
その時までさようなら

リッダ空港闘争一周年記念集会に向けて

アラブ赤軍兵士 重信 房子

## テルアビブ銃撃戦争一周年5・30行動へのアピール

### \*パレスチナ解放人民戦線

諸君の英雄的同志が、我々パレスチナ人民が日々闘い続けて来た、シオニスト・イスラエル帝国主義者に対する戦線に合流し、共同闘争を実現してから一年を経た。

将来、世界中の人民が、リッダ空港のデイルヤン作戦を思い起すとき、我々、パレスチナ人民の目的を日本人三戦士が共有し、その目的のために、彼らが自らの生涯を犠牲的に、闘いの中に捧げたことを必ず思い出すことだろう。

同志、奥平（バーシム）、安田（サラハ）は彼らの総てを、生命までも投げだした。彼等の肉体は死んでも、彼等の戦闘的魂は今なお生き続けている。

事実、パレスチナの地に流された彼等の血から、我々の革命、運動は学び続け、その血は、我々の団結をより一層強いものになっている。

同志、岡本（アハマッド）は、いまだ、敵シオニストの牢獄にとらわれの身となっている。しかし、彼は、革命的行動の鮮明な爆炬となった。彼は敗北を知らず、決して帝国主義者に屈服することはないだろう。

この三人の同志は、我々人民大衆の心を惹きつけ、我々パレスチナ人民の闘いの構築と貫徹の志を持続させる支えとなっている。

この数ヶ月間、我々の革命斗争は、数多くの敵の攻撃を受け、そ

れに対して斗って来た。しかし、我々は屈服しない。それどころか、我々パレスチナ人民、レバノン大衆と共に、ベイルートでのパレスチナ指導者に対するイスラエル帝国主義者の白色テロを許し、それと共謀するレバノン政府への抗議行動に立ち上っている。

イスラエル帝国主義者の占領区域において、革命的人民は占領に抗して闘い続けている。

一方、ベイルートにおいても、我が戦士たちは、レバノンの革命的人民とともに、あらゆる帝国主義権力と妨害を決して受けいれることのない存在の権利を死守している。

我々の闘いは挫折することを知らない。何故なら、地球上のいかなる敵も、我々が被抑圧人民の闘いの拡大を押えることなどではしないのだから。

我々は諸君の成功を祈っている。そして、諸君の協議会の勝利的成功を期待している。

忘れてはならない！我々の革命の殉教者たちは、唯一、世界革命への道の敷石とならんがために命を捧げたことを！  
プロレタリア国際主義万才！

革命の殉教者となった栄光ある戦士達万才！  
抑圧され、飢えたるものは必ず勝利する！

## テルアビブ銃撃戦争一周年5・30行動へのアピール

### \* PFLP 日本人医療隊

5・30リッダ闘争一周年記念に際し、レバノン内戦の戦陣より日本の闘う皆さんへメッセージを送ります。

そして、メッセージの初めに、我々PFLP日本人医療隊が何ものであるかを知ってもらわなければなりません。

我々は、一昨年よりパレスチナ難民の闘い、特にイスラエルに故郷を追われ、アラブ諸地域をさすらうパレスチナ人民が祖国奪還のため一丸となって闘っている闘争を支援しようと、パレスチナ難民キャンプ及びレバノン南部国境での医療活動を行って来ました。もちろん、PFLP医療委員会の要請に応じ、最前線での救護活動と難民キャンプでの診療活動を中心に一年間を闘って来ました。そして今は、四月中旬以来、ベイルートの中心にある最大のキャンプ「シャティール」で闘っています。

あの四月十日早朝のイスラエル白色テロによるPLO指導者の暗殺事件は、レバノン民族主義者と進歩主義勢力を含む十万人にも及ぶ武装デモを引き出し、それにおびえて緊張した政府軍の反革命体制の敷いたヒステリックな状況の中で行われたものです。

もちろん、パレスチナ人民は、反動政府の動向など百も承知です。

レバノン軍によるパレスチナ民兵のかっさらい、ゲリラによるレバノン政府兵士の人質捕獲の応酬の間に、コマンドたちはいつものように静かに布陣を終り、重戦車の倒来を待ち受けました。

私たちPFLP日本人医療隊は、救急袋をかつき、ザンゴウを握り、夜警とともにバトリールを続けました。

遂に、敵のタンクが発砲して来ました。

難民キャンプの方々が家々が土煙りとともにくずれ落ち、電線が火を噴いてはじけ、戦士が走りまわります。しかし、タンクは対戦車砲の前に一歩も攻撃には出て来ません。空からハゲタカのようにフランス製ミラージュ戦闘機がおそって来ますが、パレスチナ人民は一歩も逃げ出しません。五十年間逃げ続けてたどりついたキャンプが、今攻撃されている時、彼等にはもう、そこから先へ逃げる気などないのです。

政府軍は「停戦」を呼び始め、いつも日和見の代表になるPLOの右派は陣型の外から、それに応じるよう、呼びかけて来ます。

しかし、アラブ大学学生の武装蜂起、PFLPゲリラによる、ベイルート空港、トリポリ空港砲撃、ヨルダン軍からの脱退軍団、ヤルムーク正規軍の国境内進攻などの支援が陸続と続き、レバノン軍は南部国境から後退し、レバノン民族解放軍の支援に体勢を組みかえなければならぬ始末でした。

私たちの救援活動は、未だささやかな闘争かも知れません。前線の要請に応え、負傷者の応救手当て、そして輸送を通して、パレスチナ解放闘争を支援し、レバノン民族解放運動民兵に守られ、私たちが孤立しているのを恐れるのではなく、パレスチナ解放闘争を闘

しかし本質的には、昨年日本人三戦士によるリッダ空港銃撃戦争が新しい多数の国際都市ゲリラ戦の引金となって、ミュンヘンオリンピック遊撃戦争、バンコクイスラエル大使館襲撃、ミュンヘン遊撃戦士奪還闘争、ハルツーム大使館占拠闘争など一連の遊撃戦争を展開したパレスチナゲリラ戦士の闘いに引き継がれ、反動政府をふるえ上らせて来たのです。それだけではありません。レバノン南部国境からイスラエル占領地区に向けて出撃を続けるゲリラの日常闘争が、ついに、イスラエル、アメリカ、レバノン反動政府のヒステリックな三人四脚をあらわにし、「レバノン内戦」というパレスチナ解放闘争の後方基地・難民キャンプの全面攻撃へと走らせたのです。

一方、昨年来、民族主義者及びレバノン共産党の民兵育成、労働争義・学生運動・農民暴動と続いた反政府運動が激化する状況の中で、そのレバノン解放運動の高まりがパレスチナ解放闘争と連帯してゆく現実を恐れた政府軍が、指揮官フランジェをアメリカ帝国主義のカイライとして前面に登場させ、5月2日・難民キャンプを重タンクで包囲するという気狂い行動を起させたのです。

う人々が決して孤立などしてないことを保証する闘いが、やっと成立し始めたところです。そのことは、私たちを無限に力づけてくれます。パレスチナ人民を無限に支援する運動が始められています。五・三〇リッダ空港銃撃戦争一周年記念集会に集まられた皆さん、日本人三戦士の教えた国際主義の意義が、今、パレスチナ人民とレバノン人民の結合を導き出すまでになっています。パレスチナ解放闘争主流である「右派」の「和平停戦」における無原則な譲歩はパレスチナ人民、レバノン人民の闘う人民によって怒りをかっています。

パレスチナ解放のみならず、真の、アラブ全体の革命への引金として、このパレスチナ・レバノン・日本人民の結合がどう飛躍するかが今、問われています。

日本の闘う皆さん、日本の革命的な世界武装派の思想がアラブ革命と結合し、大きな流れを作り出し、世界革命へ向けて胎動し始めていることを報告できることを我々、PFLP日本人医療隊は誇りとしています。

圧倒的な結合の質の獲得を、多数の連帯の強化を訴えて、メッセージにかえます。

日本三戦士の銃撃戦勝利万才！

パレスチナ・アラブ革命勝利！

世界革命戦争万才！

在ベイルート

73・5・20

## 7・24宣言

### \*アラブ赤軍

同志たちによって、日航ジャンボハイジャック闘争は、非妥協的に闘われた。その目的は不屈に獄中で闘っている日本の同志・友人を奪還すること並びに、帝国主義者に搾取された巨万の人民の労働の代価のほんの一部を、帝国主義者からとり返すことにあった。しかし今、日本帝国主義者は、デマと中傷の驚くべき宣伝によって彼等の立場の延命を計っている。

帝国主義者は、今回のハイジャックによる政治犯奪還の我々の要求を拒否し、まったくのデマによって、人民を納得させようとしている。即ち「ハイジャッカー側からは何の要求も出されていない」という驚くべき詭弁である。我々は日本時間七月二十一日午前十時には、既に我々の要求する政治犯釈放の為の名簿と、その秘密移送の方法を、日本国内から秘密裡に要求していた。(手渡したのである)我々は、CIA、シオニストテロ団の移送中における妨害を考慮し、政府に対し秘密裡に我々の指令に従って動く命令をした。

しかしその要求を拒否という即答を行わずにもみ消し、タイムリ

確認すべきは、乗客を虫けらのごとく無視した帝国主義者共の「人命尊重」と、女性兵士によって、自己の死をもいとわず買かれた「人命尊重」の真実である。

そして又、日本帝国主義のずるいマヌーバーに対し、乗客の命を確保しつつ、ジャンボジェット機をこっぱみじんに爆破したことも又、我々の当然の権利であったことは明確である。我々はこうした日本帝国主義者のみせかけの人命尊重というポーズを断固とした闘いを持続することによって暴露し、人民並びに乗客にかわって報復

## 日本の戦士に呼びかける

### \*アラブ赤軍

同志諸君、友人たち、とりわけ不可視の戦士諸君。我々は今回の闘いを教訓化し、更に世界中の戦士ときたえあい、政治的確信を武装闘争として表現しつつ、世界革命への道を進撃することを誓う。そして着実に攻め込むプロレタリアートの時代へのこの端緒を、闘いを共有するあなたたち同志友人諸君に捧げる。

今回のハイジャックによる共同武装闘争も又、テルアビブ闘争を引きうけた我々赤軍のいまだ端緒でしかないことを、我々は正當に認め、更なる飛躍にむけて進撃する。と同時に、ブラックセブテン

ミットまで引き延しておいて、あたかも心配顔で、先に日本よりドバイに到着した朝田社長並びに運輸大臣に対し、その事実を知らせず、万全を期すよう指令するなどのポーズをとったのである。この一切の事実から乗客に長期の困苦を味わせるどころか、乗客の命を見捨てたのは田中——小林(佐藤栄作のブレーンで日航会長)であり、乗客の安全と命を救ったのは、我々の同志たちであったことが明確である。

我々同志女性兵士は、機内でハイジャック闘争に移った直後、不良弾を発見し、乗客の安全と闘争の貫徹をめざす強い意志に支えられていたが故に、とっさに自らの体を不良弾の上に被い、飛行中の爆破を最小限にいとめたのである。この犠牲的精神と無私の革命への献身があったからこそ、乗客に対する安全は保障され、高い戦士のモラルに支えられながら、闘争を更に非妥協的なものと貫徹しえたのである。この女性同志の断固とした革命性を我々は、深い愛と連帯を込めて闘う日本の同志、友人、戦士諸君につけておきたい。

を宣言する。更に我々は、抑圧者、日本帝国主義者によって、長期に獄中で拘留されている同志、友人を必らず奪還し、世界中の革命戦場の戦士として共にきたえ合い、戦いを持続することを宣言する。

日帝に死を！

シオニストファシストに死を！

ハイジャック闘争貫徹万才！

世界革命万才！

バーが初めて登場したと同じ現象——すなわち、PLO右派指導部の革命への圧力として表現される「Son of Occupied Land などという組織は実在せず、ハイジャックは暴挙である」と非難する帝国主義たちとの二重奏を、我々はパレスチナ人民との結合において粉碎する。

行動と犠牲の上に輝くテルアビブ闘争三戦士の闘いを、我々の革命のモラルの出発点とし三戦士の生を学び、死を継承しつつ進撃する世界中の抑圧された人民のための闘いを、更なる国境を越える武装

闘争で証していくことを、あなたたちに約束する。世界中の共に立つ国境をこえた戦士たちの日本革命との連帯は、武装闘争を媒介に、相互に戦線をきたえ隊伍を固めつつある。もう幾度、我々はこう呼びかけてきただろう。「日本の同志諸君、友人たち、戦線を地下に統一し、隊伍をととのえる時だ」と。そして今、闘いを終え、確信に満ちた我々の呼びかけには変わりない。そればかりか、隊伍をととのえ、共にすすむことが如何なる敵帝国主義者の策動をも打ち破る術であることを、更に更に確信を込めて、日本の同志、友人に呼びかける。

「そんなことは判っている」等と言わないでほしい。何故なら、各組織に結集している一人一人のひたむきさが、無用な分裂と内ゲバを結果として描きつづけているのだから。一面的な近視眼と党派エゴイズムは、敵帝国主義者に猶予ばかり与えつづけてきた。我々は敵の敵を射程に闘わねばならぬことを知らなければならぬ。党派エゴイズムが人民のためという大義名分で、内ゲバをくり返している。内ゲバが単なる党派の保守であり、エゴイズムである現在の状況においては、プロレタリアートのエゴを、敵帝国主義者への反撃の力として組織し、改造し合う展望へと向ってはいかないのだ。我々は不屈に日夜闘いつづけている世界中の抑圧された人民のために闘いを組織するのだ。自分のために闘う奴は又、自分のために自己供し、自分のために戦線逃亡を企てる。友人たち、同志たち、自己保身のための党派闘争、空論は相手にせぬがよい。

我々はこう言ってやらねばならない。「蜂起」「戦争」と大仰な言葉をはく前に、毎日三十分の体操で、体をきたえた方がよいと。

いる。「社会的活動のかわりに、彼ら（空想的社会主義）の個人的な考察活動があらわれ、解放の歴史的條件のかわりに空想的な條件があらわれ、次第に行われるプロレタリアートの階級への組織化のかわりに、かつてに案出した社会組織があらわれざるを得なかった、彼等にとっては将来の世界史は、彼等の社会計画の宣伝と実行とに帰着するのである。なる程彼らは、その計画において最も苦しんでいる階級としての労働者階級の利益を代表すると自認している。彼らにとってはプロレタリアートは、この最も苦しんでいる階級という立場で存在するだけなのである。」もう悪無限的な解釈、論議はやめた方がよい。革命の情熱を社会主義用語とやらでふきとばし、観念化させることは、何一つ解決しないのだから。君たちは無知を笑い、マルクス主義理論武装とやらを競ってしてきた。

それは何を生み出したか？ 勝手な解釈で、相手をとくふせる道具にしかなりはしなかった、しかも大学生の本棚の中で。闘いの必要性に要求されて、むさぼるマルクスレーニン主義は生き物のようであり、ただ他党派にやつつけられないように、又はやつつけるためにめくるマルクスレーニン主義は、紙屑のようにはかないものである。日本の同志諸君、友人たち、われわれの任務は世界中の帝国主義者とその手先を、地球的規模、宇宙的規模で抹殺することにある。すなわち抑圧された階級の手宇宙をとくもどす作業である。

そのために必要な日本における闘いは世界中の後方として日本の前線を構築することにある。帝国主義本国の前線創出の闘いを、世界中の闘う人民は後方として、日本人民の日夜の闘いを支えている。味方の連係プレーをつよめながら、持久的な前線と味方を同質にう

敵自衛隊、機動隊は、日夜、我々と敵対するために、肉体訓練をもつて帝国主義者共に飼いならされているのだ。わずかな時間の体操を毎日持続し得る精神力と、その自己管理こそ、蜂起戦争を生きたブーゼとしうるのだということを知らなければならぬ。「世界党」「世界プロ独」という前に一つ位、外国語を日本語と同じようにしゃべれるよう、日夜、持続的な努力をすべきである。世界党派闘争を、日本語でしか指定していない党派の思い上った空論主義は、益々、日本の一国性へと逆もどりする。真面目で、ひたむきなおしゃべりに同情的である程、世界革命の現実寛大さを持ち合わせてはいないのだから。

「綱領」「綱領」と叫ぶことより（その綱領も普遍性をもたないため、一年位でひっこめられたりする代物である）日本革命統一戦線のルールをまずつくるべきである。そのシンブルなルールを認めて結集する様々な世界観が行動によってつちかり普遍性こそ、真の綱領を導くものであり、ずるい希望を同居した「党派性」というひとよがりを解体するのだ。だからといって、我々は党派性を否定しているのではない。敵との闘いによって示される真の党派性は、革命の方向を与え、人民を党派闘争の中で改造しあうものだからである。ただ現在、各党派が、党ではなくてその志向性をもったグループであるという各自の客観的な位置をみとめることである。共通性、評価を認め合う関係の中において、はじめて各自の否定的な側面を改造しうるのであり、違いをさがし合う一見まじめでひたむきなおしゃべりは、現在の革命の段階においては利敵行為である。

空想的社会主義者に対しかつてマルクスは、彼等をこう批判して

ちきたえ、掘りおこし、生活を革命する作業に内在するモラルこそ、未来のモラルを表現し、不滅のプロレタリア綱領をうちきたえる。生活のない戦争きどりはやめた方がよい。戦後、崩壊した共産党を現実の世界革命のレベルで再建する一歩は、武装闘争を承認する小さなグループの統一戦線の内容として指定されるルールをつくりながら、今こそ始めるべき時である。「それならアラブ赤軍の考えは統一戦線党にたどりつく」などと言いつくすあらゆる左翼小児病患者の懸念をもとめず、われわれは単一の党形成のために今、統一戦線構築の作業に内在するプロレタリア政治の相互改造をふまえつつ、その作業への着手をよびかける。

「左」「右」の日和見主義は合法主義によって育成されてきた。合法主義者の建軍、建党は武装闘争ではなくコミューンシャルによって人民の注目を集めようとする。連合赤軍の同志諸君もまたその誤りを犯した。すなわち戦線の統一を非公然にはなく、公然と大衆にしゃべりまくることによって、真の大衆への言葉「武装闘争を自ら不可能におとしこめていった。太田竜以下、あらゆる個人グループもまた、このことに無自覚に先進的な人々を説得するつもりで、敵権力に、われわれの陣型を教えている。われわれは今こう呼びかけねばならない。戦線を地下に統一し隊伍をととのえる時だ」非公然から公然と闘争を経て登場せよ、非合法から合法活動を創造せよ、その逆、つまり公然から非公然、合法から非合法であってはならない。

われわれは日本階級闘争の最良のテーゼとして、赤軍派の問題意識を軸に、世界革命戦場に飛翔し闘いを始めた。しかし最良のテー

であったその内実は、今、われわれ自身によって、その一国性、合法主義、一面性と抽象性を批判されつつある。われわれの積極的批判とは、真の世界性の認識、それに規定された日本階級闘争における非合法、非公然の革命の蓄積、立体的、現実的なその任務を、武装闘争表現によった、あなたたち闘う同志、友人、戦士と交通形態を獲得することにある。

われわれはわれわれの国境をこえる武装闘争こそ、あなたたち日本の同志諸君との最高の対話の交通形態であると確信している。又同時に、赤軍派が提起した現在の日本階級闘争における最良のテーゼが、日本諸党派の狭い枠組の中で、日本のみの党派闘争の自然成長性として終始し、世界革命戦場の発展段階をブルジョア新聞によってしか対象化しえていなかった日本革命戦争の世界との交通形態の不在という当時の限界性を痛感した。今、われわれが引きうける任務の軸に、非公然、非合法の日本の同志友人との交通形態を、確実に構築していく作業があることを実感している。日本の武装闘争を承認するあらゆるグループ戦士たちにとってわれわれは、現在、統後として存在しており軍事的、兵站的に可能な、真の連帯を開始する用意がある。われわれは赤軍派や、その他の真面目で根底的で又権力につづぬけのおしゃべりが現実の中で解体され、新たな闘いのプロレタリア権力の萌芽が、その内側、外側から未来に在るいと湧き上ってくるのを、ここから、日本階級闘争の歴史として見るこ

とが出来る。

同志諸君、友人たち、革命の統一戦線の準備会草案を練るために、あらゆる戦線から、ある日、ある場所に、闇から闇へと、プロレタ

リアートのアンテナを通じて結集しよう。われわれは日本に行って共にその作業を担うことを約束する。われわれが孫悟空になるのではなくお釈迦さんになって敵帝国主義者の全智全能をわれわれの掌で操作しようように、世界党——世界赤軍は世界中の（日本の）革命統一戦線構築に向う世界共産主義運動の中に赤々と孕まれている。

同志諸君、われわれの現在の立場、すなわちあなたたちと共に、統一戦線を担おうとするわれわれの立場はこうである。

①六十九年、日本赤軍派が定立した三つのテーゼ

(1)階級闘争の世界史的段階の規定（一九一七年の支配階級としてのプロレタリアートの現出）からの世界武装プロレタリアートのテーゼ  
(2)この現実の規定された現代帝国主義の分析からプロレタリアートのブルジョアジーに対する逆制約の能動のテーゼ  
(3)世界党——世界赤軍——世界革命戦線の陣型に領導される単一の永続的同時、同質的な世界革命戦争による世界プロ独へのテーゼ

をわれわれの主体的立脚点とする。この三つのテーゼに対する積極的批判、検証——発展豊富化が現実の世界情勢の客観的要求であると認識する。

②それ故、われわれは現代世界が帝国主義諸国、社会主義諸国、第三世界階級闘争として現出されつつも、三ブロックの階級闘争が同質化を深めていると認識する。即ち民族解放闘争は世界性をもった闘争であり、開花しえていない帝国主義国内闘争の世界性と同質の革命戦争を内実とし、社会主義本国内の真の国際主義への萌芽、プロレタリア権力の改造にむかう反修闘争と結合した世界単一の共産

主義運動として、その目的及び闘いを必要としていると認識する。

③その現実において世界革命戦争の前線、銃後、後方は即ち、銃後後方前線として、帝国主義打倒の闘いを可能ならしめていると認識する。それ故、先進国革命主体論の一面性と第三世界革命主体論の一面性（ベトナム分遣隊的認識）を単一の世界革命戦争の戦略論の欠落として批判する。それ故われわれは市民社会内部に戦争の物質的基礎を構築すべき戦略展開をもさくする。

④又第一インスターから第三インスター（第四インスター）の公然合法の組織論を止揚し、地下組織体制の強化と、武装闘争による建軍、建軍の過程、即ち世界戦線構築のその過程に目的に単一の世界党——赤軍建設は、内実化すべきと認識する。それ故、公然、合法の国際会議は現在の攻防の段階において、有効でないと認識する。

これらの問題から

☆われわれは、武装闘争によって、プロレタリア政治を、世界共産主義運動として組織しつつ、更なる主体へ即ち世界赤軍の改組にむけてたゆまず進撃する。

☆われわれは単一の世界党——世界赤軍形成にむけて世界中の（日本の）あらゆる党派に世界革命統一戦線構築を共に任うことを呼びかける。

☆われわれは国境をこえる共同武装闘争の闘争形態を世界共産主義運動のプロレタリア政治の表現として堅持する。

☆われわれはプロレタリア国際主義と組織された暴力を世界中の各本国での革命の旗印とする事を呼びかける。

☆われわれは世界中を非公然非合法に移動し得るプロレタリアのシ

ルクロードを世界中の同質の戦線と共に相互に構築し合う。

☆われわれは帝国主義者の兵站到勝ちうるプロレタリアの兵站を革命の蓄積として準備する。

☆われわれは反帝反シオニズム反反動反修を武装闘争によって表現する、革命を堅持する世界中の同志友人を仲間とする。

☆われわれは一国の革命に至る過程を武装闘争によって闘いぬいている世界中の同志を軸にした、その自主更生を主体として闘う。（われわれは既成の国家が、いかに革命的であろうとも政策が歴史的制約にある現在、それらの国家に依拠しない。制約をうけない。）

☆われわれは世界中の各組織に対し各国革命闘争が（それに表現される党派利益）が、世界革命の利益に従属すべきであると宣言する。（それ故無駄な内ゲバは愚の骨頂）

☆われわれは共同武装闘争を目的化しない。しかしそれが相互の持久的な共同作業の出発点であると原則的に認識する。

☆われわれのすべての革命の財産は共通の目的に向うすべての闘う人々のために解放される。

☆われわれのいう武装闘争とは合法主義者、右翼日和見主義者のそのエスカレーション路線ではなく、建軍、建軍を包摂する武装闘争であり、一見それと切断された大衆の自発的闘いと結合する。

そして更に愛すべき日本の同志、友人、戦士諸君。今、世界的規模で武装闘争によって行われている政治犯奪還闘争を、国境の内側から帝国主義本国、日本から開始すべきであると宣言する。我々は幸運にも世界中の戦線との連帯の強化の中で、その戦術を可能ならしめている。武装闘争を勇敢に闘い抜いた結果として、長期獄中に



あり完結で闘い抜いているあらゆる個人に対し、我々は必ず奪還でその戦士の名誉を回復するために、闘い必要がある。闘いぬいた同志には同志の返礼を我々は行う。それが革命のマナーである。そしてそれを主體的に任うべきはあなたたち日本の同志たち友人たちである。

我々は国際主義と抑圧された人民の暴力を組織し、敵のあらゆる装飾を粉砕するために更にすすむ。我々は行動と犠牲の上に燃える

革命を堅持する。日本の闘う同志、友人、戦士諸君。共に戦線を地下に結合しつつ、別個に敵を撃ちつつけよう。我々は赤々ともえる帝国主義本国日本国内の革命の火の手をその強い不滅の炎を我々の胸に描きつつ進撃する。

行動と犠牲の上にもえる革命万才！

一九七三年七月二四日

## 日航404便ハイ・ジャック闘争万才！

### \* 日本赤軍―VZ 58

―次の文章はこの間の闘争に関する我々の基本的見解である。

★全世界のプロレタリア人民の皆さん！

七月二〇日の日航四〇四便ハイジャック闘争は米帝国主義を頭とする全世界の帝国主義―反動派―イスラエルシオニズムと結託し、帝国主義支配秩序を強力に維持している日本帝国主義に対する世界革命戦争派の共同武装闘争として貫徹されました。

日本帝国主義は、石油資源の九〇％以上を中東に依存し、メイド

インジャンパンの商品で埋め尽しており、アラブへの経済的侵略―収奪を徹底しておこなっており、そうであるが故に、中東世界の安定した秩序を要求しています。そしてこの秩序がイスラエルシオニズムの反革命によって根本的には支えられている以上、パレスチナ人民の闘いは不可避的に日本帝国主義を極めて重大な敵対者として浮上させずにはおきません。更に日本帝国主義はイスラエルを承認しているだけでなく、自衛隊幹部のイスラエル軍との交流、軍用品や資金の援助、又、テルアビブ闘争の時四〇億円近くの金を渡してい

る事実などにみられるようにイスラエルに加担し、アラブを抑圧しつつけようとしています。

日本帝国主義は、アラブ人民に対して悪事を働いているのみならず、内外に対する侵略・抑圧・反革命を押し進め、今や世界のプロレタリア人民の共通の敵として立ち現れてきています。それは単に人を殺したり、収奪したりするというのとは根本的に異なり、地形を変え、海の色を変え、地球そのものを破壊していく性格となっています。まさに全人民への寄生の構造は人類史上最悪のものとなっています。

又、日航は半官半民の「国策会社」であり、日帝の対外侵略の第一の担い手を運ぶ役目を引き受けています。その上、その巨大化した情報網によって、日本の政治―公安警察ばかりではなく、CIAやイスラエル秘密警察にまで世界の闘う人民を売り渡しているのです。

この日帝と、その出先機関―日航を世界革命戦争派が攻撃対象とすることは、どこの国にあっても全く正しい道理になったことでもあります。

★親愛なる同志・友人の皆さん！

闘いは「第三世界人民」に依拠した地点にあったのでもなければ、外から日帝を包囲する戦略の中にあつたのでもありません。正に世界プロレタリアートの発展段階として、パレスチナ解放闘争においては前線の位置に、日本帝国主義打倒においては銃後の位置にという世界革命統一戦線内部の弁証法的関係を展開させる闘いとしてあ

ったのです。今日、世界は最後の全世界的階級攻防のまっただ中にあり、プロレタリアートとブルジョアジーが地球規模で戦争をし、世界プロレタリアートの攻撃型陣型は、徐々にブルジョアジーをしめあげていきつつあります。この時代にあつて、今回の闘いは全く歴史的必然であり、階級闘争の発展に正しく適応したものです。しかし、気をつけて前進していかなければなりません。イスラエルが、テルアビブ闘争後にその同じ質で反革命戦争をいどんできて大量のテロをおこなったように、今回も敵は、ハイジャックの質に応じて必ず攻撃をしてくるでしょう。合法主義者・中間主義者は全てかかる銃を軸とした「反革命戦争」によって一人残らず殺されるしかないのです。勿論、逃げてばかりいては敵の思うつぼです。世界革命戦争は、人類最後の唯一正しい戦争であり現実のあるがままの世界の階級攻防を正しく分析し、一貫した政治的立場をもって計画的に前進すれば、必ず勝利は我々のものとなります。

★ブルジョアジー及びその手先となっている諸君！

我々は諸君らに警告しておく。諸君らが搾取の上に安座し、欲望をほしきままにし、プロレタリア人民の生き血を吸いつづける限り、諸君らをその肉体を含めて粉砕する。諸君らがどの地域にしようとどこへ逃げようと赤軍は必ずその任務をやりとげる。

★日航四〇四便の乗客並びに乗務員の皆さん！

あなた方が、いわば犠牲になり、大変な迷惑をこうむったことは事実です。それは認めざるを得ません。しかし、それと同時に今回の

闘いにおいてそれは不可避であったこと、その一切の責任は今日の諸矛盾の根源となつてゐる日本帝国主義と、その上層部にあることを明らかにしておきます。口先では「人命尊重が第一」などとわめきちらしながら、その実自らの政治的利益を冷酷に計算しているのが彼らなのであり、その為には「乗客の生命」など彼らにとってはどうでもいいことなのです。重要なこと、自己に不利なことは、人民に対して一切明らかにせず、支配秩序の維持の為にはどんな悪事なこともやるのが彼らなのです。

全世界でますますプロレタリアートとブルジョアジーの非和解的階級対立が顕在化してきてゐる以上、中間的立場は許されず、どちらかの側につくしかないのであります。我々は、敵になるか味方になるかの選択を要求します。そして、皆さんといつの日か必ず、手を握り合い愛や悲しみや怒りを共有しながら、進める日がくる事を信じています。

★再びプロレタリア人民同志・友人の皆さん！

世界革命戦争の矢は既に打ち込まれてゐます。人類史上最悪にして最強の敵に対する矢は、世界革命戦争統一戦線の布石であつたテ

ルアビブ闘争によって、そして世界革命戦争統一戦線による共同武装闘争である日航ハイジャック闘争によって、更に勇敢なバレスチナゲリラ戦士諸君の闘いによって、力強くうちなされてゐます。我々は、自ら生み出した矛盾を解決する能力がないばかりか、一層拡大することしかできず、社会的悲惨の根源となつてゐる帝国主義を、歴史のくずかごに投じる為に全世界のプロレタリア人民とともに進みます。

我々は、世界単一のプロレタリア独裁を樹立し、賃金奴隷制を廃止し、あらゆる隷属状態からの解放を実現する為に、同志友人の皆さんと共に進みます。

我々は、PFLP、西ドイツ赤軍派、トルコ人民解放軍、その他の多くの世界革命戦争派、無数のゲリラ戦士達と共に進みます。

★日航ハイジャック闘争万歳！

★ディルヤン作戦勝利万歳！

★バーシム奥平、サラヘ安田両戦士万歳！

★アハマド岡本尊厳！

★全世界の無名戦士とプロレタリアート万歳！

一九七三年八月

## パリ共同声明

### \*日本赤軍・SOLO

コミュニケ

一九七三年八月一日

我々日本赤軍ならびに「被占領地の息子たち」は、日航ジャンボジェット機のハイジャックが我々の非妥協的且つ連続的な闘争を高く強調したものである事を宣言する。我々のハイジャックは帝国主義者、シオニストを恐怖させるものだった。全ての抑圧された人民は互いに何千キロも離れてゐるにもかかわらず共通の敵に対する固い団結によってその国民性の相違に起因する困難に打ち勝ってきた。

世界帝国主義とシオニズムは世界の抑圧された人民の国際的な闘争に対しエゴイスティックに自らの利益を守ろうとした闘いを強化しようとしてゐる。彼らは「国際的な運動でテロリズムを引止めよう」長時間に渡って罪も無い乗客を苦しめた非人間的なテロリスト達を処刑せよ！」と叫んでゐる。

我々のハイジャック作戦を非難する大合唱に参加してゐるのは帝国主義者・シオニストや反動体制ばかりではない。PDFLPのようなバレスチナ抵抗運動の一部の指導者ですらも自らの立場が世界革命と抑圧された人民に敵対するものになり、敵に大きな利益を与

えてゐる事に気付かず、それに加つてゐるのである。

1 誰が非人間的で誰がテロリストなのか？

ベトナム人民を虫けらのように殺し続けているアメリカ帝国主義、ベトナム爆撃に使用されているナバーム弾の九〇%を生産し送り出している日本帝国主義、理由も無くリビアの飛行機を撃ち落し一〇〇人以上もの人々を殺害したシオニスト達に対する正確な判断を行わなければならない。

2 全ての抑圧された人民の前に、東京の日航事務所に手渡した要求書に説明されてゐる我々のハイジャック作戦の目的を宣言する。

a 日本帝国主義により長期に渡り拘留され、妥協を拒否してゐる日本赤軍政治犯の一部の釈放

b 日本帝国主義が日本及び世界の抑圧された人民から強奪してきた金をほんの一部ではあるが人民に奪還すること。日本帝国主義は労働者を搾取し、世界の人民の汗と怒力の結晶を強奪し、軍事力によって人民を抑圧してゐるのである。

3 我々の闘争は又、共通の敵に対する連合した武装闘争を通した

抑圧された人民の固い連帯の真実の例を創り、帝国主義とシオニズムに導かれた世界の反革命勢力の同盟に対する直接的な闘争の中で実践関係によってこの連合の重要性を示したものである。

4 この闘争は、その科学技術と堅固な防護策によって不慮の構造を築き上げたと考えている帝国主義のもろさとその組織の虚偽を暴露するものでもあった。我々革命派は、帝国主義者の機械と科学技術が提供し得るより以上の強い可能性を持つ事が証明されたのである。

5 我々は又、この作戦を通して日本帝国主義のシオニストへの隠れた外交的政治を暴露する事を目的とした。日本帝国主義は、我々の同志によって闘われたリッダ空港作戦の後莫大な額の賠償金をイスラエルに支払っているが、これは彼らがパレスチナ人民の闘いに敵対している事をはつきりと示すものである。彼らはそれを機に、イスラエル—アメリカ—日本の反革命同盟を強化しようとし、イスラエル建国二五周年記念祭には大きな派遣団を送ったのである。

6 ハイジャック作戦は日本帝国主義の虚偽と我々の闘争を矮曲しようとして来た彼らの策略をあばくものであった。この作戦はパレスチナ革命と帝国主義の胎内に於る日本人民の闘争との団結を強調したものである。

日本帝国主義は、世界の人民に対し様々な馬鹿げた嘘を並べる事によってこの真実を蔽い隠そうとしている。これは、シオニストや世界帝国主義によって支配されているアラブ人民やアジア人民を彼らも又抑圧している事を示しているのである。

彼らはシオニストにこの作戦に敵対する手助けを頼み、東京—イ

を払ったか。

a 我々の戦士の一人は飛行中、手榴弾の暴発という事故の際、完全に革命的な自己犠牲の精神の下自らの身体で手榴弾を蔽い、生命をかけて乗客の生命を救った。

b 残りの戦士達も、乗客の生命を守り、強固な意志と革命的モラルの下で闘争を貫徹した。

c 戦士達は乗客と乗務員の安全を確認した上で飛行機を爆破し、任務を堅実に履行した。彼らは飛行機が爆発する直前、最後迄機内に残っていたのである。

全てのこれらの事実により、誰が乗客の生命を救い、誰がドバイにいる間乗客を苦しめ安全を顧みなかったかは明白である。

我々はこの軍事作戦が成功裏に終わったことは明白である。その協力者であるファシスト・シオニズム、世界帝国主義に対する報復としてジャンボジェット機を粉砕する正当な権利を高く宣言する事が出来る。

8 平和を愛するヒューマニストのように見せかけようと努力している日本帝国主義の真実の性格は次の事実が暴露しているものである。

a 新植民地主義者としての日本帝国主義の真実の姿と目的はそのアジア・アフリカ・中近東への経済侵略に現わされている。一九七二年、彼らはイラン反動王国やアメリカ帝国主義と共にイランの油の共同の会社を創設し日本で消費される石油の四〇%以上をそこからまかなっている。このことはイラン反動体制との関係性を更に明らかにしている。又彼らは同じ年、日本産業の為にイ

スラエル間に電話のホットラインを開設し、ハイジャックに関する情報が入り次第イスラエルからアドバイスを送ってもらうようにした。日本に於ては、イスラエル軍将校と日航の会長であり佐藤首相の知的指導者の一人であった小林の指揮の下にハイジャックに対峙する本部を設置し、更にはこの本部は乗客の生命を救う為のものである。かの如く人々に信じ込ませようとした。

次の事実、帝国主義者が乗客の生命を無視し、我々の要求を受け入れずに長時間に渡って乗客とハイジャッカーを苦しめ続けた事を明白に示している。それは、帝国主義者が乗客が殺されるという事すら意に介さなかった事を示すものである。

我々の日航に対する要求書は、日本時間、七月二日土曜日午前九時三〇分に東京の日航事務所に手渡された。その直後我々は日航事務所に電話をし、要求書を開封して指示通り行動するように申し入れた。約五分後に五台のバトカーが事務所に急行した。これが事実である。

帝国主義者とシオニストの計画は、時間切れになるところまで要求を拒否する意向を明らかにせずには要求を看過することになった。彼らはその事を、乗客の安全を守る為にと称してドバイに人を派遣する事によって陰蔽しようとした。そして彼らは、七月二三日正午に脅迫状を郵便で受け取ったと嘘を発表したのである。

彼らはこのようにして乗客とハイジャッカーを故意に危険にさらし、同時に自らの真実の立場を陰蔽しようとしたのである。

7 誰が本当のヒューマニストなのか。

我々のコマンドは何をし、乗客の生命を守る為にどれだけの努力

ランに於ける石油化学と銅鋳業に関しても同盟を結んでいる。

b 日本国内に於ては日本の小資本を排除・併合してアメリカと日本の共同資本による大産業を奨励している。

c 共同資本により彼らはアジア・アフリカ・中近東に経済侵略を行ない、世界帝国主義・世界シオニズムと日本帝国主義の連合を深めようとしている。

d 彼らは帝国主義者の為にタンカーを創る事によって中近東の石油を搾取する援助をしている。彼らは今、イギリス帝国主義の為に世界最大の超大タンカーを二台英国会社の依頼により建設中である。これら全ての事実を陰蔽する為に彼らは「我々は中近東の平和が早期に実現する事を希望している。我々は闘争とは無関係のところにいるのだ。」と主張している。実際はこれは単なる見せかけにすぎない。彼らは世界帝国主義と世界シオニズムに不完全ではあれ協同しているのである。

9 結論として

全世界の革命派と連合した連続的な闘争を通して、我々は日本帝国主義とそのデマゴギー又、彼らと世界帝国主義・世界シオニズムとの結合、アジア・アフリカ・中近東に於ける共同の経済侵略を暴露して行く。我々は我々自身の力と資質に依って闘う。

我々は、帝国主義者とシオニストとの平和共存の構図の下に人民の闘争を解決する事を拒否するものである。我々は我々自身の闘争によって革命を完遂する為に精根を傾け、世界の抑圧された人民の権利を奪い返し、全ての反動勢力と帝国主義やシオニストを黙許し革命を制禦しようとする者達に立ち向っているパレスチナ革命の成

功を勝ち取る迄闘い続けるだろう。

全世界の革命的友人諸君！ ハイジャック作戦の本質に対する様様な懸念や質問に対して明確な解答を行う事は我々の任務である。もちろんシオニストや帝国主義者の権勢の下にある敵の報道機関が作戦中に配布した我々の最初のコミニケと機上からのコミニケを無視した事は我々も知っている。

闘うアラブ——パレスチナ人民！ 我々はあなた方の闘争とその決意が後退しないよう呼びかけたい。そしてリビアの兄弟達にも、我々の同志である戦士達を共通の目的に対して闘っていく共通の目的

を持った革命派として遇してもらう事を願うものである。

日本——アメリカ——イスラエルの反革命的関係を打倒せよ！  
全世界の抑圧された人民の連帯万歳！

パレスチナ革命万歳！

ヨーロッパ革命万歳！

日本革命万歳！

世界革命万歳！

被占領地の息子たち

日本赤軍

## 闘うあなたへ、アラブよりの招請状

### \* 重信房子

元気ですか？ 楽天家の私は、いつものように元気です。楽天的であるということは、物事に対して、あらゆる考えをめぐらすから結果として、楽天的になれるという意味なのです。だから楽天家って、せんさいで、ナイーブで、気の強い自信家になんてとうていなれっこない人のことではないかしら。だからと言ってあなたが悲観主義なのは、何も考えないからだとか、気の強い自信家だと言っている訳ではありませんけどね。

とにかく、心と心の熱い交流をしようあなたに、闘いにむけての招請と連帯を伝えるべく、手紙を書きはじめました。

雄弁な人が多すぎて、その氾濫のために、武装闘争表現が、あたかも場違いのように日本階級闘争に反映される時、また、党派の御都合主義に、闘いの営みがてんでんばらばらに分解されてしまう時、とてつもなく奇妙な冷静さの中で、私は、哀しみや怒りを抱きとめています。リッダ闘争がそうであったように、そしてまた、今回のハイ・ジャック闘争がそうであったように、日本の左翼世論が、表層をめくりながら、私たちの闘いをたたえたり、批評したりする時、私の感動と想いとは確かに違うということに

気付いてばかりいます。

国境を打ち破る闘いは、国境の内と外で、ひたすらに準備されているという世界の革命の現実を通り抜けていると、日本の国境は、あたかも、左翼的世論によって国境がますます高く押し上げられているように感ずるのです。

外からの力より内側からの国境をぶっこわす闘いが、どんなに効果的であり、力になるかは、もっとも判っているはずの左翼の人々の手で、国境の壁が高くおしあげられているように感ずる私がナンセンスだと、あなたは思いますか？

平島某だとか、アラブ屋の自己顕示欲が、連日、お茶の間をにぎわすのもよいでしょう。私たちの闘いの飛躍が、彼のスーツ、サハリルックを新調するかいれどきと心得ているこの商人にとって、近い将来家を一軒買う位のギャラだって稼いだせるでしょう。彼にとって、アラブ赤軍の闘いは、願ってもない商売なのですから。こういう類の人種は、どんどん帝国主義者の道案内人として、アラブ乞食の本領を発揮し、アラブ人民尚びにアラブ赤軍の同志諸君に撲殺される道を歩いているから、まだ始末は良いの

です。

ところが、紙くずのように機関紙の束をつみあげて、まったく真剣に人民を愚弄している友人の多いのは、腹立ちと侮やしさがこみあげて、まともに文章を書くとうると、言葉を失ってしまうものです。

こういう人々は、日本で反日共系として自己規定しながら、日共と同レベルのP.L.O指導部などの意見に無批判に盲従する権威主義の機関紙左翼に多いですね。自分の身のまわりの革命に対する尺度が、少し場所を変えたり、現象を変えて現われると、革命の物差や尺度がとたんにちぐはぐになってしまいうようです。物の見方、考え方が、日本で偉そうに世界革命や国際主義を言えても、パレスチナの抑圧された人民の現実を踏み台にして、観念や抽象して思い描く憧れの中だけの、パレスチナ人民という空想と結合しているのです。そういう人たちですから、その反映として、日本における闘いなんて、国際主義武装闘争のつもりで、無計画なことばかり繰り返しています。本人が、まだまだと思っているから余計たちが悪いのです。私だって、日本に居た時は、そんな風にやっていたのですけれど。今も私が、そういう人たち風になっていたら、今、こんなのにんびり、手紙を書いているどころか、シオニスト・テロルに足下すくわれて、生きていなかったかもしれません。また、闘いの一つも成功していなかったでしょう。

何故って、私たちは敵を利するようなおしゃべりを一切やめてしまったのです。私たちは、誰と手を結んでいるとか、私たちがどこを攻撃するとか、私たちの力量はこれくらいあるぞとみせび

衛は未完成だったというか、なかったのです。

今、日本はどんな空気ですか。こちらの新聞には、ミッドウェー母港化反対の闘う友人たちのことが伝えられています。

連赤問題は、資本主義批判が足りなかった、なんていう観念論議は、まだ続いているのですか。うんざりです。そんな総括論議がはじまると、賛成したり、応戦しなきゃいけないかのように、資本主義批判とやらが、熱中のまよになるのです。一種の流行みたい。甘ったれたおしゃべりの繰り返しをしていると、いざ出陣の時にまた、同じことをくりかえすにちがいないと危惧しています。真面目で根底的であればある程。

世界の現実規定された日本国内の闘いを実践することのみが、資本主義批判や戦略論の内実を検証するんだと思うけど、ああやって、字野経めくって、党派の機関紙よみあさっても膨大なわからないことばかりで、理論がないと実践ができないというけれど、党派の機関紙パンフの、ごてごてした無内容に規定されて実践するとしたら、私たちに何がある？ どの党派も、世界を語るけど、じゃあ始めようって時になると、おそろしく一国的、合法主義になる。自己批判、自己批判で、誰にあやまっているのですか。真の人民なら、そんなとききたくもないし、示してほしい。さあ、いまだ病んでいないんだから。私たちの根拠地、人民の心は、いまだ病んでいないんだから。

とにか、世の中毎日動いているんだ。国境の外側から、世の中毎日動いているんだ。もしあなたが、国境の外側から、世の中毎日動いているんだ。もしあなたが、国境の外側から、世の中毎日動いているんだ。

らかすことは、一切、やめてしまったのです。日本を離れて以来。そりゃあ、色んなおしゃべり、事実の伝達は、ああ、そんなことまでやっているのか、と人民を驚かせたり喜ばせたりするでしょうが、敵をもっと喜ばせるだけなのです。本当は、敵は、私たちを根っこから、とりはらおうとしているのですからね。

私たちに一〇の力がある時、私たちは、一割を武装闘争で表現します。逆に、武装闘争は、九割の非公然の非合法の陣型に支えられていなければ、出来ないし、持続的でない、というのが世界で闘う私たちの実感です。だから、日本でがんばっているあなたも、私たちの一：九の陣型を研究してみて下さい。

今の日本じゃ、九：一ぐらいで闘おうとするから、敵の先制攻撃を許してしまうし、一発的になってしまうのでしょう。それに、帝国主義者の保守性と表裏のブルジョア・イデオロギーによってうみ出される内ゲバが、またまた、闘いをむずかしくしています。党派政治というものが、党派の正当性を絶対化し、プチブル的に防衛ばかりを考えるので、団結のかわりに内ゲバだけが増殖されています。党派がこぞってふりまわす「目的意識性」とやらは何ですか、あれは。成田や、相模原や、北富士や、闘っている人々が、信頼と憧れで、「目的意識性」とやらに領導され、闘いをゆだねることがあったかしら。私たちは成田世代というか、成田の土の中から学ばせてもらったという気はあるけれども、プントも、中核も、革マルも、どこも、闘う成田の農民を直接には前衛として闘争を指導することはなかったと実感しています。彼ら農民たちにとって、彼らの自発的闘いと全的に結合を求めうる主体、前

います。私はあなたとともに闘い抜くことを約束します。

もし、あなたが、闘いの場を外側に出すなら、キャンパスを空っぽにしても、人々をさそい合って、外の現実をみることも、闘うことも必要だと思っています。外に出てくると、どこで死んでも、どこで闘っても一つだと判るでしょう。

私が招請する意味は、日本革命をほり出すことではないのです。日本革命、内側の闘いを世界の現実の要請に従って闘いぬくためのみなのです。

世界の闘いは、徐々に一つの輪につながれているので、あなたが片道切符で出てくれば、ヨーロッパでもアメリカでもアジアでも、私たちと出会うでしょう。どこに行っても仲間同志のアンテナで、知らないあなたが、闘いのために徐々に私たちのもとへ近づいていることを知ることができます。闘う世界中の仲間の連結で、あなたが出国した一ヶ月後位から、アラブ赤軍のもとに、あなたの存在が知られるでしょう。さあ、片手に荷物をさげて、知らない街に出て来て、私たちとともに闘いを始めましょう。

そして、あなたが働きながら、革命にむけて学び、待機している間に、私たちの仲間が、戦闘開始の招請状を確実に送るでしょう。多分一年間の間に、どこでも旅立つことは簡単です。無銭旅行はあなたの革命を検証するでしょう。どこかで、待つこと、耐えること、思い切ることのうちにつちかわれるあなたの革命の更なる情熱は、私たちと共通の思いに貫かれていくことでしょう。

お金がないと外国には居られない、なんていう帝国主義者のうそっぱちな宣伝は、彼らの都合によるものです。片道切符と少し

ばかりのお金があれば十分です。世界中に、のん気で、革命をめざす仲間がちらばっていて、仕事のこと、住みかのこと、食べもののことなど、自分のことみたいに気を使ってくれるでしょう。

アジア人もいれば、ヨーロッパ人も、アフリカ人もたくさんいます。だから頼ってばかりいて良い、というのではありません。本当は、自分が頼らなくても平気になった時から、頼ることができるようですからね。どこでも働いたり出会ったりして、仲間を経て、必ず出会うのですから、様々な街できたえることです。

まるで東京から大阪に、大阪からどこかの街へ、そんな風に、世界は拡がっています。簡単なことです。

プロレタリアのアンテナは、世界中を網羅していますから、あなたは、守られ、調査されて、来ることでしょ。

どこかの街角で闘う人に出会うでしょう。そうしたら、私のもとに来る方法を尋ねて下さい。必ず方法があるからです。

あなたの到着を待っています。握手の為に。

もう秋ですね、日本は。やぐざで底抜けにやさしかった多くの仲間たち、どうしていますか？ キャンパスは、あたたまっていますか？

街角は、私たちのために待機していることでしょう。

再会と出会いのために、私はまたまた、楽天的に毎日楽しくやっています。

では又。元気で。

九月二〇日

## 11・2パレスチナ革命連帯集会へのアピール

### \*アラブ赤軍

同志諸君

今、被占領下で斗いぬいているアラブパレスチナユダヤ人戦士の巨大な攻撃のニュースが、その犠牲的英雄的死と共に刻々と伝えられている。

西部戦線、北部戦線の戦争の持続を、戦争の拡大をまさに、敵シオニスト・イスラエルの心臓部において不退転に斗いぬいている。ソ連にバックアップされた民族主義政権の限界と、米帝を駆使した世界シオニズムの全力投入によるイスラエルへの援軍援助は、国連の介入を可能ならしめ、新たなバルフォア宣言の土俵を築きつつある。

「領土を主張し、国境を決定しない」シオニズムの侵略は、アラブ諸国へ地理的に侵略することのみならず、すでに第二次世界大戦によって、描き出された世界の全国境への侵略すなわち、反革命の側からの、帝国主義本国の経済政治への侵略を行うことによって、世界帝国主義をシオニズムの利益に向けて整列させつつ、イスラエルを地理的に包囲するアラブの包囲網の更に外側に、世界的陣型の反革命包囲網をひいている。この包囲とは、とりもなおさず、世界

の抑圧された人民総体への反革命包囲の証であり、まさに、帝国主義の擬制の世界性をうちかためつつ、世界中の抑圧された人民包囲にむけた階級的対峙の陣型である。この帝国主義シオニズムの反革命の陣型を世界革命戦争によってうちやぶることこそ、パレスチナに縮図された世界中の抑圧された人民の勝利への道である。それ故バルフォア宣言を承認している既成の社会主義国家群は、国際主義と世界革命の敵対者なのである。

被占領下で斗いぬく、パレスチナおよびユダヤ人民の斗いと結合し、更に、アラブ民族主義国の政策の抑圧に抗して斗いぬくアラブ人民の戦列を拡大し、ユダヤ人の反シオニズム反帝斗争を世界中に強化し、共に反帝反シオニズム斗争を掲げて斗いぬく戦略こそ世界革命戦略であり、世界革命戦線創出のまさに国際主義によって貫かれ、国境を真にもたない抑圧されたプロレタリア人民の斗いの出発点である。

我々は、現在の戦争を世界革命戦争として持続し、拡大し国境をうちやぶって進撃する世界革命戦争統一戦線の隊伍をまさに今、うちかため斗いぬくことが要請されている。



日本帝国主義は、シオニズムならびに米帝との反革命同盟の絆を  
楯に、独自の勢力圏拡大にむけたアジア侵略を着々と準備している。  
世界中の抑圧された人民の、共通の利益に向け、共に隊伍を整え  
よ！

シオニズムならびに帝国主義が存在するかぎり、パレスチナ解放  
はありえず、抑圧された人民の解放は真に存在しない。

本日、結集した同志諸君。更に、日本における世界革命の隊伍を  
ととのえ、日本国内に革命戦線をうち固め、共通の人民の利益のた

めに、共通の敵にむけて持続的な戦争を開始しよう。  
我々は、離れた戦場で攻勢の戦斗を不滅に準備しつつ拡大され、  
一つにつながれる日本の戦場で出合う為に今、更に隊伍をしっか  
りと紐む。

同志諸君 戦場で再会しよう！

バルフォア宣言粉砕集会にむけて

アラブ赤軍

## 11・2パレスチナ革命連帯集会へのアピール

### \* PFLP 日本人医療隊

十一月二日 バルフォア宣言糾弾粉砕集会に集まった日本の友人・  
同志・各戦線の皆さん！

私たち日本人医療隊は、パレスチナ解放斗争への更なる支援と連  
帯行動を要請することによって皆さんへの連帯の挨拶にかえます。

現在、パレスチナ・アラブの人民は一丸となって、イスラエル・  
アメリカの間に結ばれているシオニズム——世界帝国主義の野心の  
全貌をありありと目にし、彼等を打倒するまで闘い抜くことを誓い  
合って斗っています。

私たち日本人医療隊は、その最前線で一步も退かず、微力ながら  
パレスチナ解放のため全力で医療活動を展開中です！

私たちの闘いにとって、心の支えとなるのはパレスチナ人の「解  
放にむけた正義の闘いの決意」であり、それを支え連帯している日  
本の革命的人民の意志です。

結集された日本の友人・同志・各戦線の皆さん、パレスチナ・ア  
ラブ解放斗争への更なる支援と連帯活動を要請します。

# 1974

## 赤軍宣言

### \*アラブ赤軍

1・31シンガポール石油基地襲撃斗争からクウェート日本大使館制圧斗争に至る十日間の武装対峙ゲリラ戦を、PFLPと共に闘い抜いた我々赤軍は、斗う日本の同志・友人にこの斗争宣言をもって、更なる前進を誓う。と同時に我々は世界革命戦争の地下武装対峙情勢を、更なる共同行動をもって、顕在化せしめ、共に闘い抜くことを斗う日本の同志・友人諸君に呼びかける。

アラブ赤軍・PFLPによる1・31シンガポール石油基地襲撃斗争は、現代の世界帝国主義の政治的・軍事的・経済的・地理的生命線に向って、非妥協に闘い抜かれた高度な戦略としてのゲリラ戦であると同時に世界的な革命勢力の新たな再編と結合を目的に追求した。世界革命統一戦線政治の高度な到達段階を証す現代革命の人民戦争陣型の着実な萌芽、プロレタリア共産主義運動の勝利的飛躍として決定的重要性をもって体现された。そしてこの証は、連続的なクウェート日本大使館制圧斗争との結合によって、シンガポール石油斗争の意義を更に如実に世界中の人民の前に示したのである。十月中东戦争を契機として帝国主義政治に包摂された民族主義政

した。

そして更に解放戦線の石油襲撃 1) 敵の兵站の破壊は、持続的に続けられ、呼応したアジア人民による石油基地襲撃は、フィリピン新人民軍、インドネシア革命勢力によっても、各国内で革命斗争の表現として着実に貫徹されつつづけている。

我々の任務は明確である。帝国主義政治によって終らされようとする二つの戦場を、すなわちインドシナ革命戦場とアラブ革命戦場を、非妥協の人民戦争をもって不滅にうちかため、更に拡大させ終らされようとする戦場を一つにつなぎ、世界革命戦争を準備することこそ、先進国後進国革命勢力に課せられた歴史的な、そして共通の任務である。共通の敵が今、彼らの言葉で「和平」を叫び、インドシナのアラブの市場争奪をくり返している。例外にもれず、日本帝国主義は、中国との平和共存をもくろみつつ、アジア・アラブ人民に見せかけの援助を示すことによって、更なる侵略と抑圧の布石を敷きはじめている。日本刀による侵略の時代から日本帝国主義は今、技術という刃をかざしつつ、第三世界人民に対する抑圧を公然と開始しているのだ。

こうした動きは、人民抑圧機関としての民族主義政権と利益を分かち合い、技術と石油の交換という二人三脚によって、米帝との共同反革命体制を堅持しつつ独自の勢力拡大に向けて、長期的路線の転換を急速に促進している。この日本帝国主義の転換の困難を、国内において日本人民下部労働者階級に転化することによって、搾取形態を強めつつ、帝国主義利益を損わずに行われるが故に、インフレ物価高を更にまん延させ、強制的な警察権力によって、革命的人民の反抗・英雄的突出を予防的にしめ殺そうと奔走している。

権の人民抑圧機関としての顕在化と、同時に相互媒介的にパレスチナアラブ革命主体に顕在化した「民族主義」か国際主義かの、現在ツインメルワルド会議の決断は、パレスチナ「建国」を妥協政治によって帝国主義者からゆずりうけるのか、それとも人民の武装勢力によって非妥協にうちたてるか、今、二つに一つの選択がつけられている。

そして、帝国主義政治が、ソ連修正主義と共にくり上げた和平会議のテーブルでは、人民抑圧機関としての民族主義政権の手によって、パレスチナ問題が語られようとしている。一方、「和平」を実現することによって帝国主義マスメディアから「解放」をのみ得られたヴェトナム革命戦争は、更に不屈に更に功勢をもって非妥協に闘い抜かれていく。

十二月二日には、ヴェトナム解放戦争兵士による南ヴェトナム石油タンク襲撃が成功裡に貫徹され、サイゴン反革命空軍陸軍のエネルギー源の半分を破壊し、すでにヴェトナム革命戦争が、南ヴェトナム反革命軍の心臓部において燃えつつづけていることを如実に証明

この情況下における1・31シンガポール石油基地襲撃斗争、更には、この斗争を契機として連続されたクウェート日本大使館制圧斗争の意義は、次の様に確認される。

まず第一に、シンガポール石油基地襲撃斗争はヴェトナム革命戦争との実質的な連帯であり、有機的に結合したヴェトナム人民との共同作業として存在している。

我々によって選ばれた標的シンガポール・シェール石油基地こそ、ヴェトナム反革命軍に対する最大の軍事エネルギー供給源であり、ヴェトナム解放戦線の石油攻撃によって激減した反革命運動にとって、シンガポール・シェール石油基地こそ、その供給ストックの最大死活的位置を示していたのである。同時に、イギリス、オランダ合資によるシェール石油はパレスチナ革命における明確な敵対者としてシオニズムとの結合を公然と示して来た。このパレスチナ・ヴェトナムの眼前の敵を打倒し、パレスチナ・ヴェトナム革命戦争の共通の利益をめざした我々の闘いは正義である。

第二に、シンガポールが帝国主義利益の地理的戦略地点として存在し続けていることは明確である。アラビア湾、インド洋、マラッカ海峡に至るアジア向け石油の政治的中継地点であると同時に、国際共産主義運動の、革命的武装対峙戦を闘い抜く、アジアの革命的人民に対する庄殺拠点として存在しているのである。

タイ労働者学生の英雄的反帝斗争、カンボジア、ヴェトナム人民の武装攻撃、フィリピン人民、インドネシア人民の反帝反動斗争が、インドシナ全域に燃えつつづけている現在シンガポールこそ、帝国主義者にとって唯一の強固な反革命陣地であるのだ。イスラエルシオニズムと結合したシンガポール政府軍はイスラエル国産武器ガ

ブリエルを購入しているばかりか、シオニズム反革命から軍事訓練を受けることによってインドナ革命の中で、米帝シオニズムの手先として、地理的戦略的な反革命の役割を演じてきた。このシンガポールに、我々抑圧された人民の戦場を創出することこそ問われているのだ。

第三、非妥協に闘い抜かれた十日間におよぶ斗争表現は、我々抑圧された人民の政治の表現としてあった。すなわち、妥協主義者、帝国主義と復讐するための手段としてのみ仕組まれたアラブ民族ブルジョアジーの石油供給ストップのドーカツに対し、我々革命勢力の手段が非妥協な敵の破壊にあることを指し示す闘いとしてあった。彼ら民族ブルジョアジーは妥協のために、そして我々抑圧された失うべき何も持たない人民は非妥協の戦士としてのみ、石油について語ったのだ。民族主義ブルジョアジーは、英・米帝・シオニズムに打撃を与えるアラブ資産外貨の銀行引きあげには手をつけず、石油ドゥカツのみに終始した事実をもってしても、民族主義政権が彼らの利益の貫徹として石油を道具に使っていることを示していたに過ぎない。

彼らにとってパレスチナ問題はひとつの商札に過ぎないのだ。その商札になることを認めることが権利の回復だと吹聴するのはアラブブルジョアジーと、パレスチナの右翼反革命のみである。我々、十月戦争の不波の続行を叫ぶアラブ・パレスチナ人民と共にその意志を表現する石油基地の完ふなきまでの経済的・軍事的破壊をめざしたのである。

第四に、歴史的に資源を独占してきた帝国主義企業に対する我々の挑戦である。植民地侵略によって収奪搾取をもって人民抑圧の上

に築かれた石油メジャーを解体する我々の闘いは、正当な人民の権利としてあることを我々は確認する。

第五に、この一連の闘いは、日本帝国主義のアジア・アラブ侵略反革命政策に対する、我々世界の闘う人民からの容赦ない戦争宣言である。親アラブという口先の言いわけを通じて石油を人民ではなく日本独占企業のために確保し、日本独占企業によって商品化された物資をもって、侵略を更に深める日本帝国主義に対する我々の反抗である。田中訪アジアによっていみじくも表現された日本帝国主義の経済侵略の本質は、闘うタイ、インドネシア、フィリピン等のアジア人民の抗日戦線を拡大し続けている。

この状況下における一連の闘いは、日本帝国主義本国の革命主体としての我々と、日帝の搾取を日夜受けているアラブ人民、アジア人民によって共通に闘われたが故にアジアにおける反日米帝斗争を軸に、拡大発展する国境を超えた共同行動の方向を示している。

そして第六に、主体の側からいえば、世界革命をめざす世界中の革命勢力に対する世界革命統一戦線構築の呼びかけの闘いであると同時に、アジアにおいてアラブ・日本戦士によって闘われ、アジア人民の強い絆と支持のもとにもたらされたこの一連の斗争は、世界のプロレタリア革命運動の自力更生の闘いの方向性、すなわち現代人民戦争のプログラムを急速に描きはじめている革命的潮流の現実認識を示すものとしてあった。これらの点をシンガポール石油基地襲撃斗争の前提的意義として確認すると同時に、クウェート日本大使館斗争を経た総括的意義としても同時に我々は確認する。

我々の目的は、シヨビジネスではなく敵の石油基地を全面的に破壊することにあった。この非妥協な軍事的制圧、経済的ダメージ

を与えることこそまさに現代の革命戦争を表現し、不屈の抑圧された人民の意志の証しとして存在しているからである。

しかし、我々の闘いはこの目的を貫徹しえず、敵の石油基地全破壊に至らなかった。にもかかわらず今回のシンガポール石油基地襲撃斗争は、勝利として結着した。確実な政治的勝利として結着したのは何故か？

それは、四戦士の不屈のプロレタリア精神によって非妥協に表現された戦斗陣型によって証明されたのである。日本帝国主義を始めとする密集した反革命によるだましうち、トリック等の試みをはねのけ、不屈に不退転にスタンバイしえた戦士のモラルにある。

このモラルはすなわち、世界革命戦争を闘い抜く我々の陣型の中で一歩／＼培われた現実認識が生み出したものに他ならない。そして、このモラルと同質に結ばれた赤軍PFLP残留部隊によって、敏速に練られたクウェート日本大使館制圧の連続的攻勢は日本帝国主義を始めとする反革命の試みを敗北せしめたのである。クウェート日本大使館制圧は、敵と味方の力関係を逆転させることによってすべての同志たちを再び戦場へ生還せしめたのである。

ここで我々は身をもって一つの教訓を獲得した。攻撃こそ、非妥協な攻撃こそ日本帝国主義・世界帝国主義シオニズムに対する我々人民の防衛手段であることを。我々は闘う戦士の不屈の同志達を軸に困難を我々の有利へと転化した。それはただ敵に向って放たれた我々の革命に対する実在を賭けた忠誠であり、シンガポールとクウェートで共通に抱かれたそのカチキズムの堅持であった。そしてこのカチキズムは、敵と闘うという現実において、敵と闘うという現実認識によって、必然的に整えられる隊伍が生み出す質、すなわち

世界的な広がりをもって進行しつつある世界革命をめざすあらゆる戦線の統一過程をふみこえている我々、多くの同志戦士達の共産主義運動の現実の姿である。

日本の同志友人諸君／＼ 敵と闘うという現実において共に隊伍を整えよ。敵と闘う現実こそ人民に向って開かれた党派斗争であり、思想戦・組織戦としてあるのだ。我々抑圧された人民の防衛は、敵に対する攻撃にある。我々は今、勝利的確信をこめ、日本の闘う同志・友人に共通の闘い、共通の革命戦争を共に担うことを呼びかける。

日本の闘う同志・友人諸君／＼ 我々は日本の内と外で、共通の敵に向って共に闘い抜くことを更に約束する。そして日本の戦士諸君、日本の革命戦争、世界革命戦争を共通に担う隊伍を更に組もう。我々には多くの戦士諸君が我々の基に一人でも多く到着することを心から待っている。出会い、共通にわかちあう戦場から再び、日本革命戦場へ、世界革命戦場へ向う我々と、新たな戦士たちの闘いは、日本——世界の交通形態を着実に地球の深部に構築されるであろう。

戦士諸君、国境を越えて結集せよ。我々はどこでも戦士諸君を迎えるであろう！

そして最後に日本ブルジョアジー諸君／＼ 我々は君達の絶望的な統治形態を一つ／＼着実に破壊することを、更に大胆に押進めることを宣言する。我々は世界中の闘う人民の戦列の一つを担い、あらゆる君達の死角から戦争を続行する。我々はただ抑圧された人民の正当な意志を証明し続ける。我々は、不屈に執拗に解放を求めるが故に、君達の我々に対する弾圧とその強化が、我々の戦列を強め、鍛えるだけであることをはっきりと宣言しておこう。

## 4・14 シンガポール・クウェート作戦勝利ノパレスチナ・アラブ人民連帯集会へのアッピール

### \*パレスチナ解放人民戦線

アラブ民族解放闘争と共に闘う、パレスチナ革命闘争の現実、敵世界帝国主義・シオニストとの非妥協の闘いを日々勝利しつつ

主義者、ファシスト、反動主義者、修正主義者達に死をもたらしている。今や、我々、パレスチナ解放人民戦線は、世界の同志たちとともに、世界革命の第一歩、パレスチナ革命の勝利を確信している。

十月、中東戦争を闘ったアラブ人民の革命への意志は不滅であり、その闘いの最中に悪企みを計った修正主義、妥協主義者たちは、非妥協の人民戦線を構築したアラブ・パレスチナ人民の闘いの前で、世界帝国主義・シオニスト共と一緒に寝え上っている。

先のシンガポール・クウェート連統武装闘争は、アラブ・パレスチナ人民の闘いが、共通の敵・世界帝国主義者共を打倒するために十分な共同軍事行動を展開できることを、日本の人民・アジアの全人民・アラブ・パレスチナ人民の前で明らかにした。

勝利するパレスチナ革命の最前線では、今、「敵は誰か、味方は誰か」を選別するのとまどう必要がある人民、兵士は一人としていない。「パレスチナ革命に勝利を」パレスチナの解放を」という闘いのスローガンを片時も忘れる者は一人もいない。

全ての革命的人民、同志たちノシンガポール・クウェート連統闘争で勝ちとったアジア・アラブ・パレスチナ人民の固い連帯の意志を更なる闘いへと組織することを、ここで確認しようではないかノ

もちろん、我々パレスチナ解放人民戦線は、そのアラブ・パレスチナ人民による非妥協の持久的人民戦争の陣型を構築すべく、全ての革命の困難と闘い、敵世界帝国主義・シオニズムとの戦争に全力をかたむけて来たし、今後とも闘い続けることを誓っている。

我々、パレスチナ解放人民戦線は、日本の人民とともに、共通の敵、米帝・日帝を筆頭とする世界帝国主義者を打倒するため、闘いを用意している。武器を、兵士を送る用意があるノ

そして、テルアビブ銃撃戦争を共に闘って以来、共同軍事行動を不断に展開している日本赤軍の同志たちを筆頭に、共に闘う決意を連帯した多くの同志達は世界中で闘い、そして勝利している。帝国

そして、プロレタリア国際主義の旗のもとに全力で闘うべく用意している日本の革命的な人民、同志たちノ共通の敵に向けた、真の人民の闘いを組織しようノ

5・30テルアビブ銃撃戦争を闘った三戦士たちのように、7・20日航機H・J闘争を闘った戦士たちのように、シンガポール・クウェート連統武装闘争を闘った日本赤軍の戦士たちのように、我々もまた、革命のために何時、何處でも闘い、死ぬ用意があるノ同志たちノ

最後の勝利を得るまで共に闘おうノ日本革命万才ノパレスチナ革命万才ノ世界革命の勝利万才ノ

一九七四・四・二

## 4・14 シンガポール・クウェート作戦勝利ノパレスチナ・アラブ人民連帯集会へのメッセージ

### \*アラブ赤軍

革命的人民・同志たちノ

我々は、シンガポール・シェール石油基地襲撃爆闘争——在クウェート日本大使館制圧闘争を闘ったバセル・エル・コーバイン隊、ガッサン、カナファニーニ隊であるノ

日本とパレスチナの革命的人民の意志を闘いによって代表した世界革命戦争統一戦線軍の兵士であるノ

全ての人民・同志たちノ

我々の闘いの勝利は、アラブ・パレスチナ・アジア・日本の人民の勝利であり、我々の闘いの貫徹は、日本革命、パレスチナ革命闘争の勝利まで、更に共同軍事行動を展開することによってのみ遂行されなければならないと確信している。

そして、我々は、その確信を、本集会へ結集された全ての革命的

人民・同志たちへのメッセージとして表明したいと考えているノ

我々の更なる闘いは、米帝・日帝の反革命同盟の本質的な環である日米安保体制粉碎、日本革命戦争を闘う、日本人民の闘いへと今、再組織されるべきだと確信しているノ

そして、その闘いはすでに日本人民の革命性の中で開始していることも知っているノ

革命的人民・同志たちノ

我々、アラブ赤軍は、以上の如く、闘いの現実を報告してメッセージにかえたい。

バセル・エル・コーバイン隊  
ガッサン・カナファニーニ隊

## リッタ空港闘争二周年5・30集会へのアピール

### \* 赤軍

本日のリッタ闘争二周年集会に結集した闘う同志諸君！

共通の敵に対する更なる闘争の継続こそが、熱い連帯の証しであることをまず我々は確認し、共に闘う同志、友人に心からの集会アピールを送ります。そして、リッタ闘争以降、共に我々の隊伍となつて、力づく我々の闘いを支持支援している諸団体、同志友人に心からの感謝と連帯を送ります。

今、リッタ闘争の切り拓いた意義が、歴史の経緯の中で、まさに明きらかにされています。4月のPFLP・GCによる断乎とした被占領地内武装対峙戦にひきつづき、この集会より二週間前PDFLPの同志三名による被占領地内武装対峙戦は、リッタ闘争以来熱望されていたパレスチナ人民の非妥協な戦闘の現実化としてアラブ人民の中に新たな希望を深めています。エジプトを中心とする右翼民族主義政権の帝国主義、資本主義への旋回は、パレスチナ人民、アラブ人民を抑圧、搾取する体制を強めるのみならず、シオニズムの人工国家を認める「和平工作」と一体であるが故に、国内矛盾を増殖し、不滅のパレスチナ革命への希望を引き出してきたのです。この希望を実現する唯一の道は、パレスチナの革命戦場を拡大するこ

と以外には、存在しません。果てしなく革命戦場を不断に拡大するこの非妥協の陣型こそ、真のパレスチナ解放を克ちとるもとも困難な、そして、もとも近道として、世界革命の最前線陣地としてよこたわっています。

今回の、PDFLPの同志諸君による同志奪還闘争に対し、シオニストの子供たちを自らが銃撃、見捨てることによって、闘いを妨害し、「報復」という口実によって、レバノン国内を即日襲撃し、四十数名を殺害したシオニスト・イスラエルは、同時に更に深い国内国外矛盾を自らが生み出し、一歩一歩墓場への退却を余儀なくされています。我々は、革命的勢力と手を握り合い、更なる任務——共通の敵シオニズム、帝国主義打倒の闘いをひきうけることをここに誓います。

同志諸君戦場で握手を！

リッタ闘争万才！

第二、第三のリッタ闘争万才！

人民の団結万才！

帝国主義者に死を！

シオニスト・ファシストに死を！

5・30リッタ闘争集会にむけて

一九七四・五・二〇

## リッタ空港闘争二周年5・30集会へのアピール

### \* パレスチナ解放人民戦線

二年前のきょう、同志バーシム、サラハ、アハマッドの三戦士は、帝国主義・シオニズム・アラブ反動派に対するパレスチナ人民の闘争に連帯するべく、イスラエル占領地のリッタ空港へと足を踏み入れた。

彼らのこの闘いは、反帝国主義の闘いが全世界にわたって強く結ばれている、そのまぎれもない事実をはっきりと証明したのだ。彼ら三人の日本人戦士は、そのリッタ空港における英雄的な闘いが、彼らの生命をかけるに値する革命的任務であることを十分理解していたにちがいない。そして、彼らの強固な意志は、彼らの闘いがパレスチナ人民と日本人民の帝国主義打倒に向けた革命的連帯の強い絆となることへの確信によって裏うちされていた。

この英雄的な闘いから二年が経過した。私達は、きょうの日に際して、私達の闘いの発展を今一度振り返ってみたい。まず最初に述べねばならない最大の点は、帝国主義・シオニズム・アラブ反動派の一体となったパレスチナ人民の闘いへの圧殺攻撃にもかかわらず、私達の闘いはますます前進しつつあるということです。この事実を、

次々と大きな犠牲を強いられつつも前進するアラブ人民の、強固な決意と深い確信によって可能ならしめられている。

私達が失った犠牲の中には数多くの同志の生命すらも含まれていた。PDFLPの公式スポークスマンであり、政治局員であったガッサン・カナファニー、ガザ地区におけるPDFLPグリラ組織の指導者であり、政治局員でもあったゲバラ・ガザ、占領地域三角地区の指導者であり、中央委員会のメンバーであったバセル・エル・コーバインとサディーク・アス・サディーク。この他にも多くの同志が闘いの中でイスラエル・シオニストの手にかかってきた。

昨年十月以来、敵イスラエル・シオニストは敗北に敗北をかさねてきた。しかし、アラブ反動派はこの数限りない同志の革命的な闘いによる成果を、彼らが「中東和平」と称する、アラブ、イスラエル間の闘いの「平和的解決」のデッチ上げに利用しようとしてやっとなっている。彼らがいくらかわめこうとも、こうした試みがパレスチナ人民の正当な権利を無視するものであることは明らかであろう。彼らのいう、ヨルダン川西岸とガザ地区における「パレスチナ国家」

の持つ本質は、イスラエル・シオニストの一九四八年の侵略を承認する、イスラエル、そして帝国主義のカイライ国家のデッチ上げであることをはっきりと見抜かねばならない。そして、それこそパレスチナ解放運動の正統を導く彼らの陰謀であろう。私達PFLPは、こうした視点に立って、いわゆる「ジュネーブ和平会談」やヨルダン川西岸とガザ地区における「ミニ国家」案を断固として拒否してきた。私達がめざす、パレスチナにおける民主的社會とは、あらゆる差別と抑圧のない、そして宗教、国籍を問わずあらゆる人民がこの民主的社會の建設に参加できるものでなければならぬ。私達は、そうした民主的社會へ向け実現に闘いつづけるであろう。たとえ、いかなる障害に直面しようとも、いかなる犠牲を強いられようとも、

## リッタ空港闘争二周年5・30集会へのアピール

### \*パレスチナ解放人民戦線総司令部派

リッタ空港の記念日に際して日本の同志たちが参加し、われわれが誇りとしているこの戦闘は、自由の問題が世界中至るところで起っていることを示しており、さらにまた帝国主義に反対する人民の利益と幸福のために進められねばならないことを示しています。

我々の革命の全ての戦線で戦っている同志たちは、日本の同志たちと挨拶を送り、尊敬の気持ちを表明します。

われわれの同志たちは岡本公三が彼の同志たちのもとに戻り、世

私達の闘いが勝利の日まで続けられるであろうことを私達は確信している。

！今は亡きバーシム、サラヘそしてとらわれの身となったアハマド同志の英雄的な闘いを再度ふり返り、パレスチナ、日本人民の共通の敵である米帝国主義とその追従者打倒への更なる決意と、強固な連帯を確認しようではありませんか。

プロレタリア国際連帯万才！

全世界の反帝勢力の団結万才！

パレスチナ人民と日本人民との絶えざる連帯万才！

我々は必ず勝利するぞ！

一九七四・五・三〇

界の帝国主義とシオニズムに反対する斗争に再び参加出来るよう彼の解放のための闘争を続けることを約束します。

我々は日本人民に挨拶を送るとともに、日本人民とパレスチナ人民の友好を誇りに思っています。我々PFLP・GCC（総司令部派）は帝国主義とシオニズムに反対する国際的斗争に挨拶を送ります。

中央委員会委員 ファダル・シュル

五月二十一日

## ハーグ仏大使館占拠闘争勝利万才！

### \*日本赤軍

三名の戦士によるハーグ仏大使館占拠同志奪還闘争は、日本赤軍の同志「フルヤ」を捕虜にすることによって戦う人民の熱い連帯と、地下から地下へと巡る人民の交通網を断ち切ろうとした日帝・仏帝どものたくらみが、わずか一ヶ月半余りの甘い夢でしかなかったことを彼らに思い知らせた。

同志「フルヤ」の逮捕によって、仏帝は国内の闘う人民の組織を破壊しようとして、卑劣にも極秘の裡に捜査を展開し、またそれを受けて日帝も、国内の地下兵站線を破壊しようとしてヤッキになっていたのである。そして同時に、パレスチナ革命と共闘してきた日本赤軍の歴史的真相を歪曲し、パレスチナの革命的人民の闘いの歴史的真相をも歪曲し、「パレスチナ問題が解決しつつある現在、日本赤軍は孤立し、ヨーロッパでの無展望な闘争を計画していたのだ」などとデマ・キャンペーンに狂奔していたのである。しかし、世界の闘いの現実には、帝国主義者共が考えるほど、国境によって分断され、甘言によって分断されてはいない。今回の闘争によって日本赤軍は、断固として、世界の革命的戦線に次の諸点を明らかにした

のである。

一、帝国主義者に対する闘う人民の陣型は、日々着実に整えられ、日本赤軍をはじめとする世界革命戦線派は、いつ、いかなるところでも、帝国主義者に対し闘いの火蓋を切ることが出来るのだという事。

二、しかもそれは、今回のように奪還を予想した敵の警戒網を更に深く越えているのだという事。

三、多くのすぐれた闘争形態がそうであるように、今回の闘争によって日本赤軍は、これまでの幾多の闘いの歴史を継承し、更に一歩、大使館占拠という闘争形態を進めた事。この様に、実践の積み重ねによって定着した闘争形態は、不可視の戦線の闘争にイメージを呼びおこさせ、そうした中から戦線相互の連帯と共通の世界観と歴史観を持つに至る。偉大な武装闘争としての言語である。四、同様に、同志奪還という闘争も世界中の革命の戦線に語りかけ、勇気づける偉大な闘争である。



このように、日本赤軍は、その闘争の歴史の上に、今回の闘争を勝利し、更に、その思想とその闘いの現実と、そしてその方向性を全世界の革命の戦線に對し明らかにしたのである。

今回の闘いによって、帝國主義者どもは、ますます共同した攻撃を組んでくるだろう。しかし、彼らが共同した闘いを組めば組むほど、彼ら自身の姿、帝國主義者としての世界性を明らかにするのである。それは、ますます味方の陣型を広げ、世界の革命戦線が一つの戦線として世界帝國主義と對決する、世界史の必然的進歩を、敵が一步一步はまり込んで行くということを意味している。そして味方の側の陣型は、今回の闘争に對する敵の反撃などをはるかに越えて、着実に勝利している。

日本の同志諸君！

## 声明

### \* 日本赤軍

#### 声 明 1

我々日本赤軍は、オランダの仏大使館での新しい任務・即ち赤軍

された人民と共に、世界革命に向けたあらゆる戦線がすでに進行しているということである。

我々は世界革命が達成されるまで、絶え間なく、世界中の戦場で帝國主義者や同様の敵と闘い、前進することをくり返し宣言する。

(一) アラブ人民の資源を奪取するために、世界的帝國主義組織の一派として昇進したシオニストと共謀するフランス・オランダそして日本帝國主義者達は、次の事を知るべきである。

もしあなた方が我々の同志を監禁したとしても、我々はあなた方の手から、確実に彼らを奪還するだろう。たとえあなた方が十人、あるいは百人の我々の同志を監禁したとしても、我々は十倍、百倍の結果をもって報復するだろう。

あなた方が我々の同志・友人に對して卑劣な弾圧を続ける限り、我々は組織的に、より以上の報復をするだろう。

これは我々の闘争の規律であり、革命のモラルである。

(二) 我々の世界中の同志達！！

日常的に人民の同一の敵と闘っている同志達！！

我々は、我々の革命戦争の過程で、仏警察による同志逮捕という困難な局面の内に、多くの同志・友人達に出会ったことを心から感謝する。

この事で得た教訓を、我々は、より一層確固な世界革命戦線構築に向けた武装闘争を完成させる進歩とすることを誓う。そして、我々の同志を奪還するための作戦の勝利が、世界の人民の前に、この誓いの証明として明らかにした。

我々は、敵の組織的な妨害策動を背景とする多くの困難さや、妨害のないうる前進など有り得ないことを、世界革命に向けた日常的斗争

日本赤軍の闘いは、戦場こそいかに離れているように思えても、日本の革命の戦列の中で、とどろくに腕を組んで闘っているのだ。パレスチナは遠く離れた戦場ではない。世界革命は遠い未来の題目ではない。今、世界の戦線は、抑圧された人民の言葉・武装闘争によって結ばれている。この現実を目をつぶったいかなる革命運動も、もはやありえない。

日本赤軍は去っていった軍隊ではない。日本赤軍はパレスチナを進軍し、ヨーロッパを進軍し、アジアを進軍し、そしていつも、日本を進軍しているのである。

ヘーグ仏大使館占拠闘争勝利万才！

日本赤軍万才！

世界革命万才！

兵士奪還闘争を宣言する。

(一) この闘争型態は後に続く非妥協の革命闘争の一段階であり、我々日本赤軍の革命の総路線である。

これは我々日本赤軍が、何時、いかなる処においても世界中の抑圧

からの教訓として理解している。

我々の同志奪還闘争万才！！

世界革命戦線の進撃万才！！

世界帝國主義打倒！！

一九七四年九月一日

#### 声 明 2

オランダにおける作戦に関する日本赤軍声明 2  
日本赤軍は、オランダ仏大使館の作戦に對して以下の声明を宣言する。

(一) 我々の革命的行為は、我々の計画書に従って進行している。仏・オランダ・日本帝國主義者敵共は、我々の勝利や、我々の同志が提出する「新しい諸要求」の主張をぐずぐずと遅らせることで、我々の作戦貫徹を卑劣な手段や戦術で失敗に終らせようと企てている。三人の同志と同志フルヤユタカは、我々の革命の計画に従って、また強固な我々の革命的規律とモラルの実践によって完璧に行動している。

パリの革命的な同志達に對する非妥協的作戦と、(仏政府に對する)警告は、共通の敵に對する共通の闘いとして固く結合し、連帯していることを明らかにしたのである。

(二) 日本赤軍は、我々の同志の要求に従って直ちに行動するよう仏・オランダ・日本帝國主義者達に冗談抜きに警告する。

我々の警告にもかかわらず、もしあなた方が我々の要求に応じない

のならば、我々は更なる攻撃を加えるだろう。

あなた方は、あらゆる結果の責任を負うことになるであろう。

人質の生命は我々の同志が保護している。しかし、彼らの運命はあなた方の手中に、我々の要求を履行するか否かの意志次第である。あなた方には選択の自由がある。だが我々には正当な我々の闘争に殉ずる断固たる決意がある。

我々は常にそうして来たり、今もそうである。

我々はこれからもその様にし続けるだろう。

(三) 世界中の同志・友人達！

シオニストと結託している仏帝国主義者は、公然とあるいは隠然と、同じくシオニストと結託しているオランダ帝国主義者に責任を転嫁することで、またオランダへ同志フルヤを移送し、この様な難問を仏国内から締め出すことによって、仏の世論を欺こうとしている。

日本帝国主義者もまた、彼らが我々の同志を征服し、囚人として逮捕することを期待しながら仏・オランダと共謀している。

それでは、世界帝国主義の筆頭、米帝はどうか、あるいは、仏・オランダ・日本帝国主義へと貫通しているシオニズムはどうか、帝国主義者というものは、どこでも同じだということを我々は明確に理解している。

世界中の同志・友人達！

我々の共通の敵を打倒する、我々の闘争を結果しようではないか！我々の組織された革命的闘争を拡大し、深化させようではないか！世界革命統一戦線を組織しようではないか！

仏大使館占拠闘争勝利！

世界革命統一戦線に向けた、前段階闘争勝利！

世界革命に向って前進せよ！

一九七四年九月一六日

## 声、明 3

世界中の同志・友人達！

日本赤軍は、オランダにおける作戦（仏大使館占拠）が勝利であったこと、特に我々の逮捕されていた同志を尊厳することに勝利であったことを強調する。また我々は、次の事を宣言しよう。

(一) 全ては作戦通りである。日本赤軍の同志が単独に、革命的方法によって実行した。作戦の妨害や、同志を逮捕した敵・シオニストと同盟し共謀している仏・オランダ・日本帝国主義者の連続的な陰謀やマヌーバーにもかかわらず、それらの企てを見通していた我々の同志は、どんな手がかかりも与えることなく、堅固に赤軍兵士のモラルを保持し、最後まで彼らの任務を確固として貫徹した。

(二) この勇敢な作戦を通して、日本赤軍は正面から敵と向い合うこととなった。即ち、敵の銃弾には我々の銃弾で応え、彼らの攻撃には攻撃的な逆襲で対応することである。これは、敵帝国主義者に対する、唯一の革命的な非妥協の路線である。

世界帝国主義組織の軍事警察と、自ら考えている米帝の率いる敵の攻撃は、人民を抑圧し、搾取するばかりでなく、人民の革命的に組織された力をも制圧しようと、彼らの最後の武器であるあらゆる種類のマヌーバーと策謀を実行している。

世界中の同志・友人達！

敵のあらゆる策謀を壊滅するために、我々は諸経験の教訓・今回の教訓を共有するべきである。

(三) 世界中のブルジョアジー・帝国主義者諸君！

あなた方は、作戦を貫徹した我々の同志が与えた教訓を忘れてはならない。

あなた方は、それ以上空虚さをつのらせるような反革命策動をやめなければならない。

日本赤軍は、今回の作戦の目的を、我々の同志を解放すること、一定程度の報復に限定した。

日本赤軍は、我々の同志を八月中に釈放するように、さもないと同志解放闘争の責任を負うことになるだろう、と仏権力に対して八月中旬に警告を発した。仏権力はこの警告を無視したばかりか、途方もない手段で同志・友人を弾圧し続けた。

敵からのこのような状況のために、我々は革命のルールとモラルに従って攻撃を開始したのである。

(四) 世界の資本主義者諸君！

あなた方が、世界の革命的な同志や人民を弾圧し続ける限り、我々の革命のルールとモラルは、この作戦のみで消耗することはない。それはまた、世界中の抑圧された人民の解放が達成されるまで持続し、我々を領導してゆくであろう。

あなた方のデッチ上げたエセ・ヒューマニズムは、帝国主義者のためのものにすぎないことを暴露し、白日のもとにさらすことになるだろう。それは、世界中の被抑圧人民の解放のために闘っている真の正義と、革命的ヒューマニズムによって壊滅するであろう。

(五) 前進せよ！

敵に向って、より攻撃的な攻撃を貫徹せよ！

世界中の同志・友人達！

我々は、我々の主要なスローガンが、武装闘争による被抑圧人民の解放であることを保証する。！

我々は、被抑圧者の共通の敵に向って闘い続けることを証明する！日本赤軍の同志奪還作戦勝利万才！

前進せよ！

世界革命統一戦線を組織せよ！

被抑圧人民解放のための世界革命万才！

一九七四年九月一八日

## Ⅱ

人民の交通情報網を組織せよ！世界革命戦線を組織せよ！

## パレスチナ解放・テルアビブ銃撃戦勝利万才！

### \*世界革命戦線情報センター

一九七二年五月三〇日、日本プロレタリア階級闘争の只中から、世界革命へ向けたその強固にして熱き真紅の意志を抱いた三つの魂が、パレスチナ解放闘争の最前線を担い、世界帝国主義がその野望をあらわにした新植民地主義の犯罪的根城・近代シオニスト国家・イスラエルの中枢戦場で果敢なる銃撃戦を展開した。

テルアビブ・ロード空港は、近代シオニストの略奪に抗して開始されたパレスチナ解放闘争の現実を隠蔽するため、あたかも砂漠の盗賊が築いた砂上の楼閣に等しい国家「イスラエル」によるパレスチナの地に強盗的に引かれた国境線と表裏一体の、世界帝国主義にのみ向けて自由に開かれた反革命的窓口でしかなかった。

三戦士の、死を賭した銃撃戦によるゲリラ戦術の展開は、あますところなく、その実態を暴露することに勝利的に成功した。

イスラエルダヤン国防相に率いられた国境警備隊は、三戦士の姿におびえ、反革命軍の残忍性を発揮、聖地エルサレム巡礼その他の市民もろとも「内戦配置体制」の強権的射殺をもって応戦した。また三戦士を自らの犯罪性にひきつけ矮小化した「白色テロ」のレッ

テル貼り、世界帝国主義者どもの共通したキャンペーンで裏貼りしようとした。

しかし、我が三戦士の銃によって語った「真実の情報」・パレスチナ解放闘争の中に位置づけられる「テルアビブ銃撃戦」の歴史的必然性と正統性を抹殺することはできないだろう。何故なら、ウエトナム・インドシナ人民の解放闘争に同じくパレスチナ人民にとって、全アラブ・パレスチナの地は、パレスチナ解放に向けたゲリラ戦の戦場である。テルアビブ空港もまた、その戦場の一つにすぎない。抑圧されたパレスチナ人民は、その戦場で日夜闘っている。わが三戦士が、世界革命へ向けた熱き想いを実現せんとして、抑圧されたパレスチナ人民と真紅の糸で結ばれた意志を引金に込め、敵シオニストとその後方の影を支える世界帝国主義を撃つことに、なんのためらいが要ったろうか。なんの躊躇も要らない。引金から銃口までに共有される世界革命の現実過程を体現し、銃口の前に標的化される全ての敵を我が生命とひきかえにしても撃つことに、我々の真実があるからである。

奥平剛士同志、安田安之同志の赤き血は、今まさにパレスチナ人民がその解放闘争の中で流し続け来る血の海に溶け、あのツバマロスからハイジャック闘争に参戦して斃れたバトリック同志の熱き想いと交錯しつつ、日本革命——アジア解放——世界同時革命の戦略を一步進撃せしめた。

岡本公三同志は、残虐陰謀の極限をゆくイスラエル国防軍の捕虜となりつつも、よく、世界革命兵士として反革命軍事裁判闘争をも闘い続け、「抑圧された人民の真実」真実の言葉「武装闘争」テルアビブ銃撃戦を戦い抜いている。

奥平、安田二戦士の血を讀えつつ、二つの魂へ「地獄での革命を誓う」ことによって追悼する。

岡本同志の尊厳をもって、その魂としよう。

そして、更に我々は、三戦士のきりひらいた、日本——パレスチナ人民の共同軍事行動による武装闘争——世界同時革命の地平を、一步も後退させることなく追撃しつづけることを決意表明する。

テルアビブ銃撃戦勝利万歳！

日本——パレスチナ人民の強固なる連帯・共同軍事行動の進撃万歳！

日本赤軍派——アラブ赤軍——PFLPによる世界統一革命戦線の実現万歳！

世界革命戦線の更なる進撃万歳！

(一九七二年八月十日)

## テルアビブ銃撃戦闘一周年

### \*世界革命戦線情報センター

テルアビブ銃撃戦闘から一年を経た今、パレスチナにおける共同反革命の陣形は、四月十一日、イスラエル・シオニストギャングによるレバノンP.L.O指導者への白色テロルから、レバノン政府軍によるパレスチナ・ゲリラ弾圧、それに呼応したイスラエル軍のゾラン高原への集結、米帝国主義軍隊、第六艦隊の東地中海への進駐として、露骨に登場してきている。このことは、しかし、パレスチナ解放闘争が第三世界の被抑圧人民の民族解放闘争としてあると同時に、世界帝国主義及び、その手先、シオニスト・イスラエルを敵とした、社会主義革命闘争として、正に、ベトナム革命戦争と同様に、ゲリラ戦による武装闘争を現実過程とした国際共産主義運動の最前線として、即ち、アラブ民族主義をも越えた、パレスチナ・アラブ・世界革命戦争の最前線としてあることを、いよいよ先鋭的に示すものでしかない。

今日、パレスチナ、インドシナ人民を筆頭とする、全ての被植民地人民、被抑圧人民―北米インディアン、南米インディオ、被抑圧人民、アフリカ被植民地人民、アイヌ人民―等の自然発生的な民族解放闘争は、新植民地主義、帝国主義打倒、社会主義革命戦争として、帝国主義国家を逆規定し、その潮流はコミンテルンの解体、

第三インターの破産以後、国家的に分断された先進帝国主義本国内の共産主義運動を自らの戦線の後方として対象化しつつ、米ソの平和共存体制の下、全ての闘争を局地戦として収斂・構造化せしめる枠を突破する武装闘争を媒介に、帝国主義本国内の真に戦闘的部分との結合を、世界革命戦線としての意識性の下、勝ちとうとしていく。

一九七二年五・三〇、テルアビブにおける日本人三戦士の闘いこそは、觀念次元へと後退していたプロレタリア国際主義を復権せしめ、帝国主義本国内のプロレタリアートが、第三世界、被抑圧人民の民族解放社会主義革命戦争を対象化せんとする意識性の下、武装された軍隊の最前線と銃後・後方との結合が共同軍事行動においてのみ果されねばならぬこと、共同軍事行動によってのみ、国際主義は現前化されることを可視化したものとしてあった。

支配―被支配、抑圧―被抑圧の関係性は、ブルジョアジーとプロレタリアートの関係性へと一元化し得るものとしては存在せず、先進資本主義社会―後進国植民地社会の関係性においても存在し、先進国プロレタリアートは、自らの生産・労働行為において、植民地国家人民に対する抑圧機能を果していること、更に、改良主義、経

済主義的闘争は言うに及ばず、一国主義的階級闘争の総過程が局地戦争の構造化を保障するものとして機能することを、被抑圧人民による民族解放社会主義革命戦争は明らかにする。

それ故、局地戦争として構造化された被抑圧民族、被植民地国家人民の闘いの勝利は、帝国主義国家本国内における武装プロレタリアートの登場なくしては勝ちとられないことを、先進国プロレタリアートは第三世界の民族解放社会主義革命戦争によって対象化された地平から、自らの武装の問題として確認しなければならぬ。

我々、I・R・F（世界革命戦線）情報センターは、パレスチナ解放・東平、安田二戦士追悼国際集会を契機に活動を開始し、共産同赤軍派とP.F.L.Pとの戦略論争が到達した地平―共同軍事行動Vによる世界革命戦線の創出、世界赤軍の構築への進取、を堅持する赤色宣伝活動を公然任務とし、「十一月パレスチナ国際週間」を始めとするI・R・Fの革命政治活動の任務をA工作隊Vとして実践しぬいて来た。またI・R・Fの創出に向けた活動者会議の実現を契機に、プロレタリア国際主義を明確に把握べく、A世界革命戦線協議会Vの設置をうながすアラブ赤軍、ヨーロッパ赤軍の創出に向けた革命主体との戦略論争を開始しつつ、世界赤軍建設に向けたI・R・Fの過渡期構造をA代行任務Vから、自らを明確にI・R・Fの情報機関として位置付けた実践任務へと組織化し、今日に到っている。

我々は「いずれにしても日本の武装人民大衆を全ての基本とする」が故に、被抑圧人民、武装闘争のみを自らの表現とする人民に依拠し、日本における階級闘争を、パレスチナ、ベトナムを始めとする民族解放・社会主義革命戦争の後方として規定し、銃後・後方とし

ての任務を貫徹しつつ、日帝打倒の闘いを世界革命の最前線として構築せんとする。

「一国におけるプロレタリア闘争の利害を世界的規模における闘争の利害に従属させて、ブルジョワジーに対して勝利を制する民族が、国際的資本主義を打倒するために最大の民族的犠牲を払う能力と用意を発揮しなければならぬ」として提起されるプロレタリア国際主義の内実は、蜂起の時のみ、あてはまるのではなく、現在の、闘争のあり方として問われるものでなければならぬ。即ち、前線―銃後の一個二重の機能を、他の同質の戦線との呼応関係の形成、後方としての機能の活性化―共同軍事行動の任務の強化として貫徹することである。

我々は、武装闘争を闘う人民の階級情勢を世界革命運動の状況として把握、「人民の海、人民の軍隊」の創出、革命的人民による武装闘争―人民の真実を交通させる戦線の確立、世界革命戦線の創出へ向けた戦線の情報網の構築、を闘う人民が闘争の中で全てを学ぶように、我々もまた闘いの中でのみ世界を学びつつ、世界赤軍―世界党建設の闘いを展開してきた。それが我々の、三戦士が切り拓いた地平を堅持せんとする、闘いの現実である。

アラブ反動派、シオニスト・イスラエル、米帝の反革命攻勢にも拘わらず、パレスチナのP.F.L.Pを先頭とする革命戦争派は健在である。パレスチナ革命に対する一般的な支援の意志表示は、資本主義の世界性に規定された一国主義的限界を突破し得ぬ階級闘争が、水ぶくれ的に国際主義の体裁を有したものでしかないことを我々は断言し、世界革命戦線創出の意識性の下、戦士的連帯の更なる強化をこそ、と我々は主張する。

## 7・20日航機H・J闘争貫徹勝利！

### \*世界革命戦線情報センター

全ての兵士友人諸君へ！

世界革命戦線情報センターは、七月二〇日、日本赤軍、SOL O（被占領地域の息子達）の共同軍事行動作戦として闘われた日航機H・J爆破闘争を、その政治目的、組織性、計画性、革命的モラルにおいて断固として支持することを表明します。

昨年の五・三〇テルアビブ銃撃戦IIデイル・ヤシン作戦同様、帝国主義ブルジョアジー、シオニスト、反動共は、その手中にあるプロパガンダ機構をフル動員しH・J闘争及び世界の闘う人民の真実を陰蔽、歪曲し徹底した報道管制のもとで、H・J闘争をブルジョア・ヒューマニズムの問題と犯人割り出しへとその焦点を移行させ、乗客の生命が云々、狂気のサタであると言ったような反テロ・キャンペーンを繰返している。

そしてまた、それに同一歩調をとるように、PLO右派指導部も国境を越えたゲリラ戦士人民の、世界帝国主義、シオニスト、反動諸勢力に対する非妥協的闘いに水をさすように、今回の闘争を「C・I・Aと帝国主義者の陰謀である」とか、「パレスチナ解放の闘いとは無関係である」といったような表現で非難し、まさに帝国主義者、シオニスト共を左から補完しているといった存

イスラエル・アラブ反動派、そしてなによりもシオニスト・イスラエルとの裏取引・結託を強めつつ、中東に於ける侵略反革命策動に狂奔する日本帝国主義に対する闘いの開始であり、その具体的な獲得目標は、アラブ赤軍重信同志のTVインタビュー、バリーに於いて我々の同志が明らかにした日本赤軍とSOL Oの共同声明、またアラブ赤軍よりの「7・24宣言」「日本の戦士へ呼びかける」等によっても確認されるように、日本の獄中で不屈に闘い抜いている革命兵士の奪還、そして帝国主義者によって搾取された人民の労働の代価、そのほんの一部を帝国主義者の手から人民の側へ取り返すというパレスチナ人民と日本人民の権利を主張する闘争として闘われたのである。

我々は今回の闘争を一般的に支持するにとどまらず、その切り拓いた地平を保証し発展させるためには次の如く確認する必要があると考える。まず第一には、日本とパレスチナの革命を結合——共有化する闘い、世界革命戦争としてパレスチナ革命・日本革命を同時同質に闘い抜く必要性と可能性を体現した。第二に、日本赤軍とSOL Oによる極めて緻密に組織された共同軍事行動として、国際武装革命派の国境を越えた人民の軍隊、世界革命戦線の創出へ向けた五・三〇テルアビブ銃撃戦が獲得した質を更に強固な各国武装革命派の結合の中に継承発展させ、全世界を戦場化する闘いとして実体化した。つまり、七・二〇H・J爆破闘争が実体化した革命戦争は世界の革命勢力の相互認識の一体化を推し進め、武装闘争の表現によって闘う兵士・人民の交通網・交通形態を獲得するという真の共産主義の闘いを国際地下兵站線構築の実践を通して、最前線——銃後、銃後——最前線の世界的結合の同質化を勝ち取ることによっ

在になり下ってきている。しかし、パレスチナ解放闘争は、五月のレバノン内戦等を見ても明らかにしたように、「民族主義」に基づいた闘いの質からパレスチナ人民とレバノン人民の戦線における結合を軸としたレバノン革命、階級闘争としてのパレスチナ・アラブ革命の質を展開し始めており、シオニスト・イスラエルが世界シオニスト機関、帝国主義諸国家からの援助、後援によって中東領域における手先として存在している限り、アラブパレスチナ人民の解放闘争はシオニスト・イスラエル打倒の闘いを必然的に帝国主義打倒の闘いへと前進させなければならないことは明らかである。そして、更にシオニスト、帝国主義者共との熾烈な闘いを展開しているパレスチナ解放勢力に対して妥協と共存を計る一方で、パレスチナ解放の闘いを裏切り弾圧を押し進めているアラブの反動諸勢力との結託を強めている修正主義者たち、解放勢力内「民族主義」右派分子との非妥協的闘いもまた貫徹していかなければならない段階にいたっていることも明白な事実である。

七・二〇日航機H・J爆破闘争は、全世界の被抑圧人民、諸革命戦線隊員へ向けた非妥協的武装闘争によって革命的人民が語る真実の闘争アピールをもって貫徹された帝国主義・シオニスト・

で、現代過渡期世界の革命戦争の方向性を指し示したものである。

とりわけ、日本新左翼諸党派が陥ち入っている一國主義と合法主義の枠を大きく突破するものとして、日本階級闘争において決定的に欠落している非公然——公然、非合法——合法闘争の質を日本の革命派総体の現実に対して自らの実践をもってつぎつぐたものとしてある。第三には、パレスチナと日本の両地点に於いて、極めて大胆なH・J闘争と完全なる非公然闘争が同時的に軍事展開されたことを日航機爆破の勝利貫徹で認識し、更に進撃する共同軍事行動の地平を、全世界の革命戦争派が闘っている非妥協性と同質のものとして高く評価しなければならない。第四に、アラブ赤軍が自ら語っているようにH・J戦士のモラルと闘争主体のモラルの革命性がある。つまり、「武装闘争を勇敢に闘い抜いた結果として長期獄中にあり、完結で闘い抜いているあらゆる個人に対し、我々は必ず奪還することによってその戦士の名誉を回復する」という、日本革命運動史上初めてとも言える政治犯の実力奪還を要求する革命的モラルの重要さである。日本帝国主義ブルジョアジー共は、自らの手で逮捕拘留している革命戦士が奪還されることによって引き起こされるであろう彼らの威信の低微、プロレタリアートとブルジョアジーの階級攻防の質的变化に恐れをなし、要求書の存在をあやふやにし、実行不可能な要求であるというようなデマゴギーを流し続け、H・J闘争の矮小化を計ったにもかかわらず、日航、日本政府につきつけられた「要求書」の真実は、日本帝国主義特有の狡猾な政策による「パレスチナ問題」（本質的にはパレスチナ問題などとブルジョアチックに限定された問題でないことは明らかであるが）に対する反革命性をハッキリと暴露し抜き、日帝を世界革命戦争の戦場に引



きずり込むにいたっている。

我々は、以上のような確認に基づき七・二〇日航機H・J爆破闘争を単に支持表明だけに終わらせることなく、闘いの質を自らに引き受け、更に強固な世界革命戦線の組織化を勝ち取っていく決意である。

今回の闘争でも明らかにされたように、日本帝国主義は、昨年のテルアビブ銃撃戦以降シオニスト・イスラエルに対し多額の賠償金を支払い、謝罪使節団を送るなど結託を強め、パレスチナ人民に敵対して来た。日帝が言う「日本は中東問題に關しては中立である」云々といった態度が、真赤なウソであることはパレスチナ人民はおろか全世界の被抑圧人民が一番よく知っている。それは、「世界的エネルギー危機」という中であって、帝国主義重化学工業の延命の鍵である「石油」が欲しい日帝が、その利害をめぐって中東に対する侵略（経済的進出）反革命政策（パレスチナ解放・反帝・反シオニズム・反アラブ反動派の闘いに対して諸帝国主義と「イスラエル」との結託）を強化するための二枚舌の虚構でしかない。我々は、パレスチナ人民とともに今春の中曽根通相中東歴訪による石油利権の確保策謀、中東諸国大使会議によるエセ「中立」主義の徹底化、そして今回のH・J闘争後の謝礼使節団派遣など、全て日本帝国主義が方針化した新植民地政策の一貫としてあったものとして断固糾弾してゆかなければならない。

我々は、このような日帝の中東侵略反革命に対決し、政治的暴露を徹底的に行いつつ、闘うパレスチナ人民そして全世界人民の革命の真実をプロパガンダし抜き、世界の武装革命派との緊密なる交通情報網の構築を勝ち取り、相互の理論、物資、兵士の交流をうなが

ことにより、日本に於けるパレスチナ革命連帯運動の全てを合法的枠内に陥し込めようとする傾向については、断固粉砕し抜くつもりである。

第二には、七・二〇日航機H・J爆破闘争のもつ一般性と特殊性を、H・J闘争一般の評価の中に解消してしまう傾向である。その第一には、「日本赤軍」と「SOLO」の共同軍事行動主体に關して、「日本赤軍」あるいは「SOLO」という闘争主体の实在性に疑念を差しさむ傾向があるが、「日本赤軍」とは明らかに日本に確固として存在する闘争主体が名乗った名称であり、「SOLO」もまたしかりである。我々は、全ての武装革命派が「赤軍」という革命主体に冠せられる名称を使いべきだとさえ考える。我々のいう赤軍とは、ロシア革命時のレーニンとトロツキーによって指導されたロシア赤軍のその理念を正しく継承するべき革命の軍隊であり、世界革命の貫徹に向けた国境を越えた革命の軍隊・人民の軍隊である。例えばそれは、一人、共産同赤軍派の諸君を意味するのでは決していない。むしろ非公然↓公然の武装闘争過程で、国境を越えた革命の軍隊・人民の軍隊として公然と登場して来るであろう全ての「日本赤軍」を、我々は断固支持する。

その第二には、七・二〇H・J爆破闘争がパレスチナ人民の革命闘争と遊離した闘いであったという観測を通りこして憶測的な立場の主体が持つ傾向である。七・二〇日航機H・J爆破闘争は、昨年の五・三〇テルアビブ・リッダ空港銃撃戦と同様、難民キャンプを初めとしてあらゆるパレスチナ人民から支持を得て熱情的に歓迎されていることは、PFLP日本人医療隊の同志からの報告及びアビーラムにも明らかにされているし、それ以上の解説は蛇足である。

革命的人民のプロパガンダ機関任務を更に貫徹しつつ、日帝打倒そして世界の帝国主義、シオニズム、反動派を打倒する更に強固な戦線の形成へ向け闘いを展開する決意を表明する。

最後に我々は、七・二〇日航機H・J爆破闘争評価についての誤った傾向を指摘しなければならない。

第一には、闘争の内実が明らかにするにつれ、闘いの支持、積極的擁護を始めつつあるが、闘いの最中であって敵のデマ、誹謗中傷等の逆プロパガンダによる一大キャンペーンが張られ闘いの矮小化が計られ、闘う人民の側からの反撃が最も必要とされている時に、「闘いの政治目的が明確でない」などと文字通りの日和見主義を標榜する傾向があったことである。H・J闘争に限らず、革命的人民の闘争目的は常に、極めて明確に用意されているものであると確信するところから、全ての革命的人民との連帯が始まるのであり、闘争目的を更に明確に組織することから連帯を生産してゆかなければならないのである。闘争の一戦術あるいは特定の闘争組織主体による戦術展開は、何かしら権威主義的な公式機関による評価がなければ自らの政治表明を行えないなどという没主体的、没階級的諸君を「反革命」と規定することから百歩退いたとしても、我々は批判し続けなければならない。我々は闘争を貫徹する組織の主体性、階級性が明確であり、政治目的としての敵の指定が正しい限り断固として敵と同志をみきわめ、闘争の正しさを支持し積極的に擁護する革命政治の徹底を計らなければならない。革命運動内にプチブル政治を持ち込むことによって策動する諸君に対しては、あらゆる妥協を廃した闘いを、我々は以後展開するであろう。例えば、パレスチナ革命連帯運動の展開を、自らを大衆運動機関として規定する

その第三の傾向は、五・三〇テルアビブ銃撃戦そして七・二〇日航機H・J爆破闘争のもつプロレタリア国際主義の内実を、国際義勇軍活動としてしか位置づけない傾向である。我々がこの間主張してきたプロレタリア国際主義の質とその内実とは、確かに義勇軍派兵という実体化をも含むものである。しかし、プロレタリア国際主義の義勇軍活動は決して散発的な義勇軍交換Ⅱ軍事契約主義としてあるのではなく、明確に前線と後方・後方と前線との相互連関関係として実体化を勝ちとるべく組織される人民の赤色シルクロードⅡ国際地下兵站線の創出と工作する任務を基底として実践活動するのであり、その義勇軍活動こそが、真のプロレタリア国際主義の旗のもとに一層の拡大強化されることが世界革命戦略の第一歩として問われているのである。

七・二〇H・J爆破闘争主体とその政治目的はそのように、パレスチナ人民をはじめとする世界の革命的人民が行ってきたH・J闘争の質を更に強化継承した戦略戦術として評価されなければならない。我々は、H・J戦術そのものが全面的に正しい闘争形態であるとは決して規定し得ていない。世界革命戦争の対峙段階にいたる現代過渡期世界において、革命戦争の主要な戦術は敵のせん滅戦を中心として断固組織した戦略戦術で闘われるべきであり、全てのH・J闘争は明らかに持久戦略闘争によって敵の姿を暴わにし、戦術の遂行過程における闘争主体の共産主義的モラルⅡ兵士のモラルを貫くことにより全世界人民の革命闘争へ、真の革命、闘争宣言の真実化を計るものでしかない。H・J爆破闘争における全ての同志達は真実の体現を革命兵士として貫徹したのである。我々は、その評価軸を見失って、H・J闘争の負の側面をわめきたてる小ブル的人道主義の

エセモラルを断固として粉碎する。我々のモラルとは、共産主義者としての、兵士としてのモラルだからである。

七・二〇日航機H・J爆破闘争は、国境を越えた革命の軍隊・人民の軍隊―世界革命戦線の創出へ向けた目的意識的闘争であり、五・三〇テルアビブ・リッダ空港銃撃戦と同質の偉大な闘いである

ことを確信している。

☆七・二〇日航機H・J爆破闘争万才ノ

☆七・二〇日航機H・J爆破闘争の地平を、世界革命戦線の更なる  
実体化・進撃へと断固組織化を勝ちとれノ

## シンガポール・クウェート連続武装遊撃戦争万才ノ

### \*世界革命戦線情報センター

我々、世界革命戦線情報センター（IRF・IC）は、一月三十一日、日本赤軍とPFLPによって組織された「バセル・エル・コーバイシ隊」によるシンガポール・ブクム島・シエル製油所襲撃爆破闘争（シンガポール作戦）、そして二月六日、「ガッサン・カナフ・アーニ隊」による、クウェート日本大使館占拠、「バセル・エル・コーバイシ隊」奪還闘争を断固支持し連帯することを表明する。

シンガポール作戦は、ベトナム・インドシナ人民をはじめとするアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の人民との固い戦士の団結をかちとり、帝国主義者・シオニストの東南アジアにおける重要な反革命戦略拠点の一つであるシンガポール、そして国際石油資本（メジャー）の一つであるシエル石油株式会社に対して行なわれた闘争である。

シンガポール政府は多数のユダヤ国際資本を受け入れており、シンガポール人民を搾取しており、またシオニスト・イスラエルの軍事顧問団を受け入れ、シンガポール反革命軍隊の強化にあたっているのである。又、シンガポール政府は、今回の闘争（シンガポール作戦）に対して一見柔軟的態度をよそおいつつも、ダブル・エル・ミサイルを装備する高速ボートを、「ラジュ号」近辺に配置してい

たことを我々は見落してはならない。

今回の作戦の攻撃目標となった、シンガポール・イースタン・ペトロリアム社は、英蘭合弁会社のローヤル・ダッチ・シエル石油会社の系列会社であり、ブクム島製油所は東南アジアで最大の石油基地であり、また米帝の東南アジアにおける米海軍（第七艦隊）、米空軍の燃料補給源としてあり、ベトナム、インドシナ人民に敵対しているのである。

シエル系石油会社はシオニストの資本投下が行われており、アラブ・パレスチナ人民から石油を搾取したうえで、更に全世界の人民を搾取し肥えた国際石油資本（メジャー）であり、シエルはその中で三位の位置を占め、東南アジア一帯の市場独占をめざしているのである。シエルを始めとする国際石油資本は、いわゆる「石油危機」なるものを、アラブ反動派Ⅱ王国ブルジョアジーと結託したうえで、全世界に反革命的策動をめくらし帝国主義的利益をつらぬいているのである。

2・6クウェート日本大使館占拠闘争は、シンガポール作戦貫徹過程で諸々の反革命策動をめくらした日本帝国主義政府の対応を糾弾し、昨年十一月二十二日発表した「新中東政策」なるものの欺瞞性

をあばき出したものであり、1. 31 12・6 闘争は、帝国主義者

・シオニストの拠点・反革命包囲網に対する攻撃の一環であり、パレスチナ・アラブ・ベトナム・インドシナ人民・全世界のプロレタリアート解放へ向けた正当なる闘いである。

日本帝国主義者は、シェール製油所襲撃爆破闘争の情報がシェール石油・シンガポール日本大使館を通じて外務省に伝わるやいなや、羽田空港、シェール石油日本支社、そして日本の革命兵士を不当に拘留している東京拘留所、中野刑務所を始めとして、全国二千名以上の機動隊を配備すると共に、「犯人割出し」と称して佐々警察庁外事課長と大高警視庁警備部参事官をシンガポールへ派遣し、また革命兵士を射殺せんという意図のもと狙撃警察官を同行させたのである。

あの偉大なる5・30テルアビブ・リッダ空港襲撃戦、7・20日航機日・J爆破闘争以降、革命兵士の国際的団結・共同軍事行動に恐怖している日帝は、ICPO（国際刑事警察機構）をはじめ、各国秘密警察と連携したうえでその弾圧を強化している。昨年十一月タイのバンコクで開催された、アジア学生国際会議に参加しようとした京大同学会の同志の強制送還、そして本年一月、我々の同志の強制送還などはその一例である。

今回の闘争に関しても、二月一日、日本赤軍とPFLPの共同声明が発表されるやたち二日、大阪の新左翼社を被疑者不詳、強盗・逮捕・監禁容疑という全く不当なる口実でもって捜索し、同時に国際電々（KDD）料金センターをも捜索したのである。KDDに対する捜索は、日帝ブルジョア憲法の第21条「通信の秘密」にすらふれるものであり、我々はこの様な弾圧を絶対に許してはならない。そして四日には、我々の同志を不当検束し、五日には新左翼社

（東京）、我々の事務所、同志の自宅二ヶ所計四ヶ所を前述した容疑で不当捜索したのである。

同志・友人諸君！

日帝の本質は明らかである。「人命尊重」とはさながら革命兵士を射殺しようとし、欺瞞的な外交政策をひっさげてパレスチナ・アラブ人民をあざむこうとしても、その本質は帝国主義者としてのものであり、シオニストと結託したものであることを全世界の人民は知っているのである。プロレタリアートは、帝国主義者、シオニスト共が全世界の人民を抑圧している限り、奴らに対する攻撃の場所や時を選ばないし、全世界を戦場とする闘いに何の躊躇もいらないのである。

プロレタリアートは、「抑圧された人民の言葉は銃であり、その表現は武装闘争である」ことを自らの実践によって明らかにするのである。

日本赤軍・PFLPによる共同軍事行動万才！

帝国主義・シオニスト・アラブ反動派打倒！

世界革命戦線の進撃万才！

世界革命戦争勝利！

二月十二日

## アラブ・パレスチナ革命、不退転の武装闘争を！

### \* 世界革命戦線情報センター

先ず初めに、日本赤軍I.P.F.L.Pの共同軍事行動、シンガポール・ブクム島、シェール石油基地爆破襲撃闘争、在クウェート日本大使館占拠、英雄兵士奪還の勝利的な貫徹を断固支持連帯して祝したいと思います。

この連続武装闘争がきりひらいた、世界革命へ向けた革命戦争派の新たな質は、米帝を初めとする世界帝国主義者ども、国際ユダヤ資本を初めとする国際石油資本（メジャー）及びその策動指揮下の反動・反革命分子どもをふるえ上らせ、中東石油資源に群がる新植民地主義者ども、世界の憲兵を自認する米帝国主義軍隊を初めとする反革命軍どもの兵站線（石油ルート）をアジア、パレスチナ人民が自らの意志でたち切つてみることができ、全世界の被抑圧人民の前に明らかにした。

この新たな武装闘争の開始は、アジア、アラブ人民の、世界革命へ向けて前進する革命情勢の真実であり、全ての被抑圧人民へのメッセージであると考えなければならぬ。

何故なら、この闘争を通して、アジア人民への、パレスチナ人民の炎の意志の表明が語られているからである。中東・アラブ・パレスチナ人民は革命の意志に燃えている！それは、あの「二つ、三つ

のベトナムを！」と叫んで真の国際主義者！プロレタリア国際主義の栄光の旗のもとに闘い、たおれたゲバラの思想を継承し得ているパレスチナ解放闘争の現実が「燃えている」などと手ばなしで傍観することはできない。世界革命の炎を全世界に向けて噴き上げ

ているのである。それは、一貫して「アラブをハノイに！」の合言葉のもとにPFLP（パレスチナ解放人民戦線）が、一九六七年以来テールし続けてきたアラブ民族解放闘争とパレスチナ解放闘争の結合環、アフリカの民族解放闘争アジアの民族解放闘争との結合環の実態、PLO（パレスチナ解放機構）というアラブ、パレスチナにおける連合戦線にとどまらないANF（民族統一戦線）への実質的な、全世界的な解放戦線機構の創出（潮流化するパレスチナ・アラブ人民大衆の意志の結集が「炎」となって燃え上がり始めたことを意味している。世界中を火の海に化そうとしている。

★

昨年ばっ発した第四次中東戦争も、その一つの現われである。しかし、反動アラブ諸政権は、自らのパレスチナ解放闘争への反革命性を陰へいするため、アラブ民族解放の「大義」を、パレスチナ解放という「大前提」のたな上げによる「石油武器論」なる形式

論理にねつ造し上げることによって一國主義のおくを一步も踏み越えようとはしてない。そして「または締結される和平」は、一九四七年の国連決議「パレスチナ分割案」の承認である。

何故、アラブ連合軍が、反革命イスラエル軍國主義に勝てないのかという巷の愚問は、米帝Ⅱ国際ユダヤ資本ⅡシオニズムⅡイスラエルという帝國主義の環の存在が一九四一年となってアラブを収奪している敵だからだということを知れば氷解する問題である。しかし、何故、アラブ民族の解放とパレスチナ解放が一元化しないのか。何故アラブ反動政府は、パレスチナ解放に敵対するのかわかることを問うことが、今、燃え上っている、アラブ、パレスチナの革命の炎の本質を見極めることであり、中東における現実の問題である。

本来、パレスチナ解放闘争は、英仏植民地主義と闘うアラブ民族解放運動の中で闘われていた闘争である。しかし、英米仏の後押しするユダヤ人移民政策Ⅱ「イスラエル（ユダヤホーム）」建國とアラブ民族國家獨立とを離反させることによって達成可能となったアラブ諸國の民族主義政府は、その存在のためにはすでに政權樹立以来「パレスチナ問題」を一たん植民地主義のターゲットとして売り渡してしまおうという歴史を繰り返して来た。その結果、エジプト革命が一步前進するたびに、植民地主義者たちはイスラエルを軸とする反革命軍の派遣でこれを抑圧しようとした。（一九五六年、スエズ運河國有化と同時に、イスラエルのシナイ半島侵略、イギリス、フランスのエジプト上陸。）エジプトとシリアのアラブ連合結成すら抑圧された。（一九七三年五月、反革命軍によるレバノン内戦Ⅱ反動政權の樹立）。イラクの革命のけん制（同年七月、米帝のレバノン上陸、英軍のヨルダン侵攻）。つまり、全アラブの民族主義革

命は前進するどころか、ソ連のイスラエル承認（一九四八年）にみられるように、パレスチナ解放を十重二十重に封殺しながら、遂には、米英仏によるヨルダン王國などのかわいらしい政權すら生み出してゆくのである。

### ☆

三次にわたるイスラエルの領土拡張軍事行動の犠牲になったパレスチナ人民は、近隣のアラブ諸國への死の逃避行を繰り返した。のみならず、その近隣諸國內では、ヨルダン王フセイン、及びレバノンの反革命弾圧下でパレスチナ人民は更なる死に直面し続け、ナセル反動政權下では解放闘争はおろか難民としての身動き一つ自由には出来なかった。四百万のパレスチナ人民は死に絶えんとしていた。

だが、カナン語で「闘、勇者」を意味するというパレスチナ人民は、一九六四年、ついにPLOを結成し、アラブ諸國に点在する人民の力を結集し続け、（六五年アルファタの武闘宣言。PLOの結成）、ついに一九六八年三月二日、買弁的なアラブ諸國から獨立したゲリラ隊九千が、四万のイスラエル正規軍をアル・カラメで撃退し、強盜國家「イスラエル」への日常軍事戦闘を開始し、一方では、リビア革命（一九六九年）の成功を情勢としながら、今日にいたっている。

### ☆

その間、アラブ民族主義國家及び反動政權は何をしたか。

一九七〇年、非妥協の日常闘争でイスラエルに捕えられた戦士を奪還すべくPLOの旅客機四連続ハイジャック闘争を契機に始まったヨルダン内戦においても、各國政權の援助と引きかえに、思ワクをも背負ったPLO正規軍（PLA）をヨルダンから召還させ、

多くの革命的戦士を大死させた。（この時のヨルダン政府の弾圧を忘れないとして、アルファタ内には「黒い九月」軍団が分離して結成された）。ヨルダン内戦も三度闘われ、遂にはヨルダン・イスラエル反革命連合軍がゲリラを一掃するための大侵攻に出た「ジェラシの戦い」が最後になってしまふ。その時も、アラブ諸國は、全てを黙殺し、PLAは骨抜き軍隊、（パレスチナ人民は、かげで、プラステック・アミー」と呼んでいる）になり、PLOの代表部は、アルファタ派のヤセル・アラファト議長を中心とする右派Ⅱ実権派と、PLOから脱退して、非妥協の日常武闘を主張するPFLP等の主流派とに大きく二分してしまふのである。

そればかりか、アラブ各國は、自らのアラブ反動政權の存在すら危くするという理由で、パレスチナゲリラの武装闘争を抑圧管理するための「カイロ協定」が右派との間に締結され、パレスチナ難民救済の命題と引きかえに「難民キャンプ地以外での武器携行を一切禁止する」ことを余儀なくさせる暴挙に出たのである。

米英仏の帝國主義コンビネーションによる「イスラエル軍事政權」の強化は、その間に五倍増、十倍増を続け、ソ連派の胎頭とアラブ反動派、ソ連派の共闘そして分離を繰り返すアラブ諸國とイスラエルの軍事・経済上の戦争は、目をおおるばかりの惨状をアラブ側にもたらし、アフリカにおける米帝Ⅱイスラエル新植民地主義の侵攻を思うままに放置させる結果となって、これまた今日にいたっている。

パレスチナゲリラの聖地「ジェラシ山」及びゴラン高原は、イスラエルに占領され続け、追われたゲリラ兵士の前にはイスラエル軍と同様にレバノン政府軍が銃口をつきつけるありさまが一九七一年

以来続くのである。

しかも、散発的な「イスラエルへの逆侵攻」を繰り返すしかないゲリラの日常戦術展開をみて図に乗ったイスラエル軍と秘密警察はアラブ各國、ヨーロッパ全土のパレスチナ解放闘争の兵站線をたたき、都市ゲリラとしての戦力を一掃しようとICPO（国際刑事警察機構）と結託して、政治局員、情報部員への白色テロ、暗殺を企てたのである。全アラブ、ヨーロッパ各國の武装闘争も、遂にその暴挙と自らに荷せられる弾圧の前に立ち上り、西独赤軍を初めとする武装革命派の国際的な連帯抜きには、各國帝國主義（Ⅱ国際ユダヤ資本Ⅱ世界シオニズム）Ⅱ世界帝國主義の反革命同盟軍を打倒しきれないことを、身をもって知ったのである。

### ☆

その、世界的な革命情勢の進撃を具体化したのが、一九七二年五月の日本赤軍とPLOの共同軍事行動によるテルアビブ銃撃戦であった。そして、その潮流は、ミュンヘンオリンピック遊撃戦、ベコンク闘争、ハルツーム闘争等へと受けつがれ、七三年、日本赤軍Ⅱ被占領地域の息子たちによる日航機HJ爆破闘争を勝利的に貫徹し、今回のシンガポールクウェート連統遊撃戦へと戦いつがれているのである。

ヨルダン内戦時に、パレスチナゲリラの大進撃を恐れてヨルダン革命を封殺したアラブ反動諸國政權、昨年のレバノン内戦時にパレスチナ・アラブ人民の社会主義革命が全アラブにひろがることを恐れて反動アラブ政權への新たなテコ入れをした米帝、ソ連社帝も、第四次中東戦争を契機に、先に上げたANF（アラブ民族統一戦線）が反動政權を否定した人民レベルの革命的連帯をつくり出している

今日の状況を認めないわけにはいなくなっている。PFLPを初めとする非妥協のパレスチナ解放闘争の大道が、アラブ・パレスチナ人民の固い意志で、不屈に押し進められていることを黙殺することは出来なくなっている。そして、その真のパレスチナ解放へ向けた戦いを続ける、PFLP、黒い九月軍団、被占領地の息子たち、パレスチナの鷹等の武装遊撃戦が、真のパレスチナ、アラブ人民の意志を代表していることを認めないわけにはいなくなっている。したがって、シंगाポール・クウェート連統遊撃戦には、パレスチナゲリラの中でもあの隠健派とみなされていたアルファタ派までが「連帯支持声明」を公然と出すにいたっている。「石油武器論」で国際石油資本と二人三脚を組むアラブ反動諸国は、アラブの大義というエゴイズムに「パレスチナ解放」の大前提をつきつけられて口をつぐんでいる。中東石油資源に群れる日帝を初めとする経済大

国、新植民地主義者たちは、ノド元にかみつかれて身動き一つできなくなっている。

★

世界革命へ向けて燃えるアラブパレスチナ人民の意志を代表したシंगाポール・クウェート連統遊撃戦万才！

日本赤軍・PFLPの連帯した共同軍事行動を初めとする、世界革命戦争派の進撃万才！

そして、日本の革命的人民とアジア、アラブ人民の連帯万才！

この新しくひらかれた武装闘争の質を受けつぎ、更なる遊撃戦争を勝ちとり、世界革命戦争の大進撃を勝ちとるべく、不退転の日常闘争を続けよう。

一九七四年二月十五日

## ハーグ仏大使館占拠同志奪還闘争勝利！

### \* 世界革命戦線情報センター \*

全ての革命的同志・友人兄弟諸君へ！

世界革命戦線情報センターは、日本赤軍の同志による9・13ハーグ仏大使館制圧同志奪還闘争を断固として支持し、闘争の勝利的貫徹を共に喜び、更なる戦列の強化を勝ち取ることを心から訴える。

ハーグ仏大使館制圧闘争は、敵の弾圧に対しては如何に闘うべきかを、捕虜になった同志に対しては、奪還することによってその名誉を回復し、なおかつ敵に打撃を与えていく革命主体のモラルを、武装闘争Ⅱ革命戦争の実践を通して表現した闘争であり、ヨーロッパ各国の武装革命戦線との緊密な共闘関係Ⅱ共同軍事行動作戦として、敵の弾圧の真つただ中において戦い抜かれ勝利した闘争である。敵が、いかなる弾圧、防衛体制を敷こうとも、闘う人民の非公然の地下ルートはいつ、どこでも敵の防衛線を突破、粉碎しうることを明らかにした闘争である。

72年5・30テルアビブ銃撃戦によって切り拓かれた、プロレタリア国際主義と武装闘争の新たな地平は、その後、7・20日航機H・J爆破闘争、シंगाポール・クウェート連統武装闘争、そして今回の仏大使館制圧闘争へと引きつがれたのである。

これらの闘争が、実体化した革命戦争は、世界の革命勢力の相互

の認識の一体化を推し進め、武装闘争の表現によって、闘う兵士・人民の交通網・交通形態・情報網を獲得するといふ、真の共産主義化の闘いを国際地下兵站線構築の実践を通して、最前線Ⅰ銃後、銃後Ⅰ最前線の相互連関的な世界的結合の同質化を勝ち取ることによって、敵Ⅱ帝国主義ブルジョアジー・シオニスト・反革命共に分断抑圧されている世界の諸革命戦線の連帯、結合を、共同軍事行動の実践によって追求していったものである。

そして今回の闘争は、PFLPとの同志的連帯共闘関係の中から、被抑圧人民の民族解放闘争としてあると同時に、世界帝国主義、シオニズム、シオニスト・イスラエル、アラブ反動派を敵とし、社会主義革命戦争の内実をもった、国際共産主義運動の最前線としてあるパレスチナ革命戦争の中で、自らを鍛え武装を勝ち取ってきた日本赤軍が、その戦列隊伍を国際的な地下兵站線の着実な組織化として、全世界を革命戦争の戦場とするべく、先進帝国主義本国へと進撃を開始した闘いであった。

プロレタリア国際主義と武装闘争の旗を高く掲げ、一国主義と合法主義の枠を突破し、敵権力の目に見えない人民の交通網・情報網人民の赤色シルクロードⅡ国際地下兵站線の確立こそ、今、我々は

急がねばならない。敵は帝國主義ブルジョアジー・シオニスト・反動共を、いつ、どこでも撃破し得る戦線を構築していかなければならぬ。

革命勢力の国際的結合団結に恐れおのいた、敵権力・反革命共は、奴らのあらゆる力を動員して弾圧に乗り出してきている。

日本赤軍「古屋」同志の、パリでの逮捕を起点とした仏帝警察権力、日帝警察権力、ICPO（国際刑事警察機構）一体となった弾圧は、逮捕・国外追放等、明らかに反革命予防弾圧・予防検束をあらわしたものである。また、日本国内においては、日本赤軍とその支援送り出しルート解明と称して、おなじみの「相関図」をデッチ上げ、東京・大阪・京都をはじめとする全国数十ヶ所を不当捜索しているのである。更にまた日帝警察は、ICPOパリ本部へ警察官を送り、国内には「国際刑事課」なるものの新設を計り、国際的な弾圧体制の強化を目論んでいるのである。

我々は、これら一連の国際的反革命弾圧を強く糾弾すると共に、日本赤軍の同志をはじめとする全世界の革命的同志・被抑圧人民との強固な連帯団結によって、必ずや、帝國主義ブルジョアジー・シオニスト・反動共をこの地上から一掃する闘いを組織するであろう。敵の弾圧こそ、我々にとっては試練であり、敵が弾圧に狂奔すればするだけ、我々はより強固な革命的隊伍を築くであろう。

同志兄弟諸君！

すでに、世界革命戦争の火蓋は切って落されているのである。

パレスチナで、アジアで、ヨーロッパで、中南米で火の手は上がり着実に戦線は拡大し強化されているのである。日本赤軍とPFLPをはじめとする、各国武装革命派との連帯共闘は強化されこそす

れ、弱まることは決してない。

日本赤軍の同志は、世界の被抑圧人民・革命兵士と共に、共通の敵に向けた真の人民の闘いを組織し、世界革命戦争勝利への進撃を日夜続けているのである。

かつて、日本からパレスチナへと延びた一本の赤い糸は、テルアビブ三戦士の尊い血の犠牲のうえに、今や、全世界へと張りめぐらされ、アラブ赤軍―日本赤軍の建軍武闘路線の下、各国革命戦争派との世界的規模での真紅の連帯を深め、国境を越えた人民の軍隊・革命の軍隊―世界革命戦線―世界赤軍構築へと一歩一歩前進しているのである。

革命とはその暴力性と世界性においてこそ真実である。

人民は、世界中の、いつ、いかなる場所に於いて、どのような方法でもって敵を倒す権利があるのである。

武装闘争を「テロル」だなどと叫ぶ輩には、「抑圧された人民の言葉は銃であり、その表現は武装闘争である」「武装闘争こそが抑圧された人民のヒューマニズムである」と言っただけではないか！

同志諸君！

世界革命戦線情報センターは、更に進撃することをここに誓う！そして、全ての革命的同志・兄弟諸君が日本赤軍の同志諸君と共に進まんことを心より願う！

9・18 ハーグ仏大使館制圧同志奮闘勝利万才！

プロレタリア国際主義万才！ 日本革命万才！

パレスチナ革命万才！

世界革命戦線の創出を、世界革命戦線協議会へとまずもって組織し、世界党―世界赤軍・建設の第一歩へ！ 世界革命戦争勝利！

### III

## 不滅の最前線陣型——アラブ・パレスチナ革命

## シオニズムの展開と移民政策の帝国主義的構造

### \*アラブ赤軍

未完のそして不滅の最前線、パレスチナの戦列から

ラマダン（イスラム暦九月にあたる。このラマダン月一ヶ月、朝日が登ってから日没まで、回教徒モスリムは食事をとらない。マホメッドに神が教義を伝えたイスラム教誕生の意味のある祝い月となっている）の最中、ナセルが死んでから丁度三年目、一九七三年、九月二十八日「The Eagle of the Palestinian Revolution」を名のる二名のゲリラ戦士は、オーストリアのチェコ国境近くで、イスラエルに向おうとするユダヤ移民を乗せたオーストリア鉄道の列車を制圧し、作戦を開始した。戦士たちが人質と引き換えに要求した唯一の目的——オーストリアにあるソ連ユダヤ移民の為に中継キャンプを閉鎖すること——は、十数時間の闘争スタンバイの後、オーストリア政府によって受諾され、人質四人をウィーン空港で釈放し、戦士たちは無事リビアに生還し、闘いそのものは成功裡に落着いた。

相も変わらず、作戦と無関係であることをがなりたてることによ

のシオニズムの政策を助ける施設・国・団体に対し、同様の攻撃を行う」と宣言した。

オーストリア首相クライスラーは、「東欧系ユダヤ人のイスラエル行きにウィーン近郊の中継キャンプを利用する集団移民は、今後、キャンプを使用出来ない。しかし個人が通過する分には構わないが、しかし今後オーストリア通過移民者は、生命の危険がある事を考慮すべきである。こうした仕事は本来的に国連で行うべきである」と語っている。国連当局は、「ユダヤ移民は、難民扱いではなく、国連の難民救済としては行えないし、我々の範疇の仕事ではない」と語っている。オーストリアにあるユダヤ移民の為に中継キャンプは、シオニスト建国以前から国としての体裁作りとして、シオニズム運動を通じた移民増加を押し進めて来た、

Jewish Agency が行っているが、過去の東欧のユダヤ移民のほとんどが使用して来たと言われている。去年にも三万人以上が使用しているし、又、人工国家イスラエルに失望してソ連に再び帰国するユダヤ人が増加し、ソ連政府からの再入国許可を求めて待機するユダヤ人のたまり宿ともなっている。だからこの中継キャンプ閉鎖の措置は、移民受け入れに奔走し国体を維持しようとするシオニストの人口増加政策に大きな打撃を与えるが故に（もつと根源的なシオニストイスラエルの激昂は、無視すべきパレスチナゲリラの要求を、一国家がすんなり政策変更として受け入れた事にあるのだが）、十月に開かれるEC更には、米・ソ・国連に働きかける事は必至である。

って存在証明に必死だったPLOスポークスマン氏の発言は、

「パレスチナ革命と無関係の行為」が実に、オーストリアという一国家政策の変化を生み落したことにやっと気付き始め、沈黙してしまっただけ。又、「野蛮なテロル」の要求を受け入れ、オーストリアウィーン近郊にあるソ連ユダヤ移民中継キャンプを閉鎖することを決めたオーストリア政府に対し、イスラエル当局は激昂し、駐オーストリアイスラエル大使は、国交断絶もあり得ると、捨て科白を残して、イスラエル本国の緊急閣議の為帰国した。その後、メイア首相がオーストリアにのり込み、「The Eagle of the Palestinian Revolution」の約束など反

古すべきたと迫ったが、オーストリア当局は、メイア首相直々の交渉にも首を縦に振らなかった。メイアとオーストリア首相クライスラーの会見中、「The Eagle of the Palestinian Revolution」は声明をバイルートから発表し

「オーストリア当局は、我々パレスチナ人民との約束を履行する義務がある。もし反古にすれば更に我々は闘うし、今後、世界中

### シオニズムの発生と移民政策の重要性

何故、移民政策が国家の要を成しているのかは、シオニストイスラエル人工国家帝国主義の前線基地としての存在が明らかに示しているのだが、その事はシオニズムの発生と成長過程を簡単に述べることによって、歴史的に明らかにすることにしよう。

シオニズムの発生発展は、世界的な封建制から資本制社会の発現と発達と、相互規定し得る深いつながり合いを持っている。シオニズムの表裏にある反ユダヤ主義についてふれば、シオニズム発生から少しさかのぼって、四世紀前半には既に顕著に現われている。封建制を社会的に統制していたキリスト教社会におけるユダヤ教に対するキリスト教徒の社会的制裁の強化として、ユダヤ人迫害が全ヨーロッパ的に行われている（だが、これはシオニズムを現出しない）。ユダヤ教の排他的性格とキリスト教の腐敗墮落を告発する立場故に、キリスト教社会と相入れない側面を持ち、三二四年のニカイヤ会議（コンスタンチヌス大帝が、キリスト教を公認の宗教として後のローマ帝国再統一を経た後）以降正当化された新約聖書を認めないユダヤ教徒に対する異端扱いとして、ユダヤ人に対する迫害が強化された。このキリスト教—支配体制による統制は、ユダヤ人に対する職業・地位を追放することによって、逆にユダヤ人に流通経済資本主義体制への先導力を持たせたのである。何故なら、利子取得を禁じているキリスト教徒にかわって、ユダヤ人の多くが金貸業に従事することによって、十一世紀には各国の財政政策のヘゲモニーを持ち得る立場になり、各



国支配層とのゆ着・敵対を最先端で引き受けることになるのである。しかし、イギリス産業革命に到る十九世紀初頭の資本主義への萌芽が、貨幣経済・流通機構の必然的な拡大によって社会的に反ユダヤ主義が登場して来る。これは、宗教性としてではなく、物質的な社会関係の要請として行われるのである。その点は、四世紀の反ユダヤ主義・キリスト教社会からの迫害と異なつた資本主義経済の萌芽によつてもたらされて来るのである。貨幣経済の発達には必然的に国家としての集約へと、すなわち民族排外主義の強化と、国家の枠内での産業革命を通したブルジョアジーによる支配体制の確立をもたらし、資本主義経済を植民地支配として再編強化しつつ、それが宗教という装いを通して貫徹されていく過程であつたし、その世界的な封建制からの脱却と、資本主義の抬頭に、ユダヤ人排斥運動が強固に生み出されていくのであつた。そして資本主義初期・資本主義の経済発展によつて、各国ブルジョアジーに排斥されたユダヤ人が生み出していくシオニズムは、各国ブルジョアジーの抗争と矛盾の寄生によつてユダヤブルジョアジーによつて操作された帝国主義政治の産物であつたが故に現在、資本主義・帝国主義・植民地主義と結合し、抑圧された人民への直接的な弾圧の先兵となつてゐることもシオニズムの階級的位置を明らかに示している。

こうした封建制から資本主義・帝国主義的發展によつて深まる反ユダヤ主義に対処して形造られる方法は、多くのユダヤ人社会主義者からユダヤ人ブルジョアジーに到るまで、逆に孤立の固定化として結果する「シオンの丘に我々がホームを！」というシオニ

ズムの枠組の中での、ユダヤ民族主義と社会主義建設の夢想であつた。このシオニズム運動の原型の創始者はユダヤ人排斥運動の吹き荒れているヨーロッパで活動していたベレス・スモレンスキ（一八四二〜一八八五）と、ドイツにおける真正社会主義の理論的支柱であつたモーゼル・ヘス（一八一二〜一八七五）であつた。ヘス等の真正社会主義に対しマルクスは、階級対立を隠蔽するものであるとして、共産党宣言の中で批判している。一つの階級の他の階級に対する闘争を表現せず「真の要求ではなく、真理の要求を、プロレタリアートの利益ではなく、人間的本質の人間一般の利益を代表する」と自認した真正社会主義者モーゼル・ヘスによつて去勢された社会主義が、シオニズムへと再構成され空想的理念を持ち込むことによつて、パレスチナ本来の住民・パレスチナ人民の排斥と虐殺の上に、ユダヤ国を創るという抑圧機関として登場して来るのである。

この、十九世紀後半から提唱されたシオニズム運動は、ヘルツェルによつて明確な方向性が示され一八九七年には第一回シオニスト会議によつて、パレスチナにユダヤ民族のホームを作ること、その為にユダヤ民族意識を目覚めさせる為、各国の法になつたシオニスト組織を作りユダヤ主義を統一し、ユダヤ人をパレスチナに一人でも多く移民させることなどを決定した。既にこの時、ユダヤ人を故郷へ帰還する運動として宗教性を装いながら、ユダヤシオニスト指導者は「建国」を目指していた。一つの国をあらゆる形で作り上げる為には、ユダヤ人がとにかくアラブ・パレスチナ人口をしのぐ過半数にならなければ都合が悪いことも彼等は知たと言ひ訳けてある。

つていた。そして、ヨーロッパ帝、殊にイギリス帝国主義の植民地主義の片棒をかつげば、英帝国主義の広い属領からパレスチナをかすめ取る位いのことは出来るに違いないと、益々、野心を燃やすのであつた。一九一八年の第一次大戦のオスマントルコの敗北で、パレスチナはイギリスの委任統治という形の植民地下にあつた。この本質を宗教で包み込んでユダヤ主義を作り上げ、世界中に既に同化しているユダヤ人を引っぱり出す為に、シオニズムは操作されていったのである。第一回、シオニスト会議の内容を推進すべく、各国帝国主義支配者に働きかけることによつて、帝国主義政治と結合し共存するシオニストの野望と、一方には、各国帝国主義者達のシオニズムを利用した野望、すなわち自国内ユダヤ人の力と自らの権力機構のヘゲモニーへと統合しようとする野望が、帝国主義者とシオニストの二人三脚となつて組織的に開始された訳である。そして、シオニストは、帝国主義者たちがある時自国内ユダヤ人の脅威にいつか約束をたがえるばかりか、翌日には路頭に放り出されるかも知れない事をよく知つていたので、パレスチナ人を追い出してパレスチナをのっ取ることを目的化しない訳には行かないことを、シオニズム運動の中で確信的に既に知り初めていた。だから建国の合法性を確保する唯一の手段は未だ、パレスチナで人口の一割にも満たないユダヤ人口を移植する事が火急の仕事だったのである。それ故、シオニズムはパレスチナへのユダヤ移民を要として運動の発生から今日に到るまで、目的化し続けて来た訳である。パルファア宣言による英帝とシオニズムの相互扶助の密約や、イギリスのインド植民地化時

代・第一次大戦をはさんでの中東における石油の発見による植民地争奪戦のシオニズムの介入、戦後の英帝の衰退によるシオニズムとのヘゲモニーに寄生しつつその目的を遂げ続けて来たのである。そして一方、帝国主義者の野望も又、シオニズムを養つて来たと言ひ訳けてある。

建国移民運動シオニズムは、英帝とのゆ着をバックに組織的な力を急速に拡大し、一九〇二年にはイギリス帝国主義の植民地政策の先兵として役立つアフリカにユダヤ国を創る（現在のウガンダ）という案が、イギリスからもたらされて来る。シオニズム運動の提唱者ヘルツェルなどは、建国を目的化していたが故にパレスチナに固執せず、ユダヤ人の為の国家を合法的に獲得しえる機会であるとして、この案を受け入れることを主張したが、東欧系ユダヤ人を中心とするグループは、パレスチナの地というユダヤ教の目玉商品がなければ世界中のユダヤ人にシオニズム運動を納得させえないとして反対し、一九〇五年にはその意見が多数を占めヘルツェルの案は廃棄され、パレスチナ侵略は公然化されていくのである。（一九世紀後半の、ロシアにおけるボグロムを契機にロシア系ユダヤ移民が増加し、一八七〇年にはパレスチナに既にユダヤ人の為の農学校が設立されていたし、第一回シオニスト大会にも東欧系ユダヤ人の力が強く、この潮流はポーランド・ワルシャワ蜂起の際も、右からソ連の侵略に抗してポーランド人民と共に反ソ戦線を開いたり、ナチと手を組んだりして来た事も事実だし、現在においても初代大統領ワイツマンやメイアに見られる如く、イスラエルの支配権力を占めている。）しかし、当時ブンド（一

八九七年に組織され、ロシアにユダヤ人自治州を創る立場を持ち、レーニンは一貫してこのブンドの方向を排外主義の孤立政策として批判していた。）や、正統派ユダヤ教など、左右からシオニズムは批判されていたし、未だユダヤ人の中の小さな勢力に過ぎなかったし影響力も小さかったのである。ロシアでのボグロムによって移民を決意したロシア系ユダヤ人の百万人以上はアメリカに移民したし、パレスチナに移民したものは二万にも満たなかったことがその事実を示している。第一次大戦終了の翌年、一九一九年のパレスチナ人口は七〇万であったが、うちユダヤ人は五万六千に過ぎなかったのである。しかし、帝国主義の力と過速度的に拡大するシオニズムは、イギリスのユダヤ財閥ロスチャイルドなどの力を得て、一九二八年には九三万五千のパレスチナ人口の内で一五万一千に達している。こうしたシオニズムによる移民政策——パレスチナにおいて、過半数以上の人口をユダヤ人が獲得すること——に対し、一九二〇年にはパレスチナにおいて、アラブパレスチナ人の移民反対反シオニズム運動が、アラブ一帯に起っていた反植民地反英反仏帝闘争と結合して起って来たのである。イスラム教は、ユダヤ教に対しては教典の民として認めていたが、キリスト教社会の如く異端視する風潮はなかったし、シオニズムの移民が大量に行われる以前は極めて平和に共存していたのだが、このシオニズム運動が自分の土地を乗っ取るうとし、自分達を排除しようとしていることを知ってから、パレスチナにおける反帝反植民地闘争として反シオニズム—反移民政策として表われて来るのである。しかし、この発生当時は反ユダヤ主義ではなく、反シオ

ニズムの傾向、つまりユダヤ人総体を対立の相手とするのではなく移民の流入に対する対抗であった。この自然発生の反シオニズムの反ユダヤへと駆りたてたのは帝国主義であったし、シオニストに広大な土地を売ることによって、肥え太った大地主や大司教（現フェイン家）が、更に反ユダヤ民族排外主義をとおし、帝国主義と手を組んだ結果として広がるのである。又、シオニストは、反シオニズムを反ユダヤ主義と恣意的に混同させつつ、シオニズムを維持発展せしめるのであった。シオニズムの機関「ユダヤ国民基金」は、パレスチナのブルジョア地主からの土地買占めを急速に進め、帝国主義者の援助によって持ち込まれる新機材による農耕・開拓によって、移住入植者を更にふやしていった。この過程一九二〇年に、ヒスタドルート（ユダヤ人労働総同盟）は設立され、ユダヤ人労働者の保護の名のもとに反英ストを行うパレスチナアラブ労働者のスト破りを行ったり、職場から巧みにアラブ人労働者を締め出すことに奔走し、移住政策の先兵をなしていった。（現在、このヒスタドルートは政府を含む労働者百万人以上を加盟せしめ、シオニズム教育宣伝の場として有効な労務管理機関としてある。既に、パレスチナの経済をユダヤ人が暴力的に占有し得る様になってから、初めてアラブ人に加盟を呼びかけたが、このヒスタドルートへの参加はユダヤ人社会への同化—シオニズム承認の踏絵として、アラブ人労働者を招き入れようとしている。ヒスタドルートによって保障される非加盟より高い賃金と生活保障という現実の選択は、既に四万人近いアラブ人労働者をその加盟に追いやっていく事に階層社会としての国家体制の強

さ、上は東欧ユダヤから、下はアジア・アフリカ・アラブ系ユダヤ最下層に、アラブパレスチナ人が位置づけられている支配構造をヒスタドルートが支えているのである。）

こうしたユダヤ人の侵入シオニズム運動の拡大は、度々の衝突を生み出し、一九二九年には反英・反シオニズムとシオニズムの衝突が嘆きの壁事件として表われたが、当時のイギリス初代労働党内閣は、ユダヤ移民の制限を行うと警告するが、イギリス支配社会に深く侵入しているシオニズムとそれと結合した保守党は、圧力によってそれを撤回させ、逆に労働党内閣をシオニズムを許容する傾向を生み、シオニズムを助長させたのである。勿論英帝国主義は、パレスチナブルジョアジーとユダヤシオニズムの両者を植民地支配として都合良く統治するべく処置としていたが、その犠牲を強要されたのはパレスチナアラブ人であった。一九三三年にヒットラーがドイツで政権をとると、反ユダヤ主義の迫害がすすむにつれ、移民人口は増加し、一九三六年にはパレスチナ総人口一三三万人のうち、ユダヤ人は三七万人にまで膨張していった。アメリカに恐慌がおこり、アメリカへの移民がパレスチナに移民に向うことを一番望んでいたのは、シオニストユダヤ機関であった。彼等は、恐慌も反ユダヤ主義ヒットラーファシズムも全て建国の為の道具と心得ていたのである。ユダヤ機関に戦後つかまりイスラエルで処刑されたアイヒマンは、自分はシオニズムの理想主義を汚してはいないのだと自己弁明する過程で、シオニストの恐るべき行状も事実として暴露されている。つまり、一九四四年、カストネル（シオニストブタベスト委員会の責任者）と、

アイヒマンは秘密交渉を行い、シオニストが望む数千名のブルジョアユダヤ人をスイスに秘密出国させることと引き換えに、八〇万ハンガリアのユダヤ人を強制収容所送りすることを承知していたのであった。その他アイヒマンの証言を借りれば、数多くのシオニストが、ナチズムのユダヤ人狩りを手助けしてシオニストに役立つユダヤ人が貰い下げられていた事実が明らかにされている。シオニズムは、決してナチの Ауシュビッツを抗議する立場に居るなどという代物ではないが故に、現在もパレスチナアラブ人民にアウシュビッツ体制の弾圧を行っているのである。シオニズムは、ナチの反ユダヤ主義をパレスチナへの移民増加の促進剤として、むしろほくそえんでいたのである。そのことは後、一九六七年の六日戦争以降、アラブ諸国に住むユダヤ人を低賃金労働力として欲していたイスラエルが、アラブ諸国にユダヤ人をパレスチナに連れて来る為にシオニスト自らが、イラクのユダヤ教会を爆破し、「アラブ人がユダヤ人を殺しに来る」というデマによって、アラブ諸国に共存していたユダヤ人をパレスチナへと夜逃げさせたことにも引き続き表われている。彼等シオニストは、シオニズムの帝国主義的侵略を反ユダヤ主義への措置として隠蔽し、反シオニズムと反ユダヤを常に一体のものであったかのように振る舞って来たという訳けである。

しかし、ヒットラーの反ユダヤ主義のファナチズムは、パレスチナを当時抑圧していた植民地主義者英帝にも向けられており、ドイツ・イタリアの「英はパレスチナにユダヤ人を送る手助けを行っている」という英帝への攻撃は、パレスチナアラブ人にとって、

反英帝・反シオニズム反植民地主義を支えてくれる同盟者として  
落ちていったのであった。コミンテルンは、一九三五年からの反  
ファシズム人民戦線路線に到るファシズムの抬頭期をソヴェト政權  
防衛に求めることによって、明確な反英帝・反仏帝への闘いを示  
さず、この立ち遅れの時期に民族主義を自称するアラブパレスチ  
ナの地主・ブルジョア支配層に闘いのリーダーシップを逆に強め  
させる結果を生んでしまうのである。こうした一連の闘いの中で、  
最も突出したパレスチナ反英反シオニズム蜂起はアルカッサム  
の闘いと言われている。この闘いを契機に英のビール調査団派遣に  
より、パレスチナに二つの国創り構想が生れて来た。アルカッサ  
ムは、パレスチナ北部小村のモスリムの一人であった。彼は小さ  
なモスクの管理者にすぎなかったのだが、反英植民地闘争を呼び  
かける彼に呼応した蜂起軍は、七千名から数万へとふくれ上って  
いった。英軍は、ハジ・アミン・フセイン（イスラム法典の解説官  
で、イスラムの最も高い階層に位置していた）に、アルカッサム  
がお前の地位を横取りしようとして蜂起しているのだとハジ・ア  
ミン・フセインを英側に引き入れ、蜂起とゼネストをやめさせる様  
ハジ・アミン・フセインの手を使って行わせしめた。半年以上続い  
た蜂起は敗北し、権力は再び英とハジ・アミン・フセイン等のブル  
ジョア民族主義者の手中にしっかりとえられた。第一次大戦  
から第二次大戦まで、英国は「独立」という餌にブルジョア民族  
主義をてなづけて来たし、ブルジョア民族主義は、英帝のかいら  
いとして民族解放を植民地主義者の手の中に引き戻す役割りを多  
大に果たして来た。このブルジョア民族主義は、パレスチナ支配

階級地主層への人民の抵抗の力を反シオニズムではなく、反ユダ  
ヤ主義へ転じてつづつ排外主義的な方向を示し出していった。こ  
うした事態を帝国主義的利益を失わずうまく治めることに集中し  
ていた英帝は、一九三九年パレスチナ白書によってパレスチナの  
独立を約束し、アラブパレスチナ人の同意の枠内での移民の許可、  
ユダヤ人への土地譲渡禁止などを発表した。これはシオニスト  
の反英テロ活動を生じさせた。と同時に、世界的な帝国主義へゲ  
モノーが英帝から米帝へと移りつつあることを察知したシオニス  
トは、シオニズムのバックアップを英帝と米帝に求める為、米帝  
に対し強力な工作をするのである。

ヨーロッパ全域を彼らナチズムの嵐に抗し、自国の帝国主義的  
利益を貫徹するべく、反ファシズム統一戦線による第二次大戦の  
前夜が訪れる訳だが、そして仏・英の植民地下にあった中東全域  
は連合軍側の基地となるのだが、シオニストは、ドイツ・イタリ  
アと手を結びつつあるアラブ民族主義が如何に中東でドイツの為  
に有利な状況を作り得るかを英・米の首脳部に説き、ついにイギ  
リス国防省から、一九四四年ユダヤ人旅団独自の軍隊を作る許可  
をとり、反ファシズム反ナチ戦線を闘い抜くことを約束し、ユダ  
ヤ・ハガナ機関を始めとして一万人以上を英国で軍事訓練させる  
ことによって、来たるべき「国防」に着々と乗り出したのである。  
第二次大戦には二万の兵員を調達し、ダビデの星（現イスラエル  
国旗）をかかげて登場したのである。こうしてシオニストは、一  
方に英帝への懐柔作戦と、一方に反英テロの恫喝をもって、益々  
移民をふやしつつあった。非合法移民船によって、パレスチナ白

書の取り決めで無視しつつ移民を増大させ、その抜けがけを保障  
するテロ団「イルグーン」「ハガナ機関」などが、パレスチナ人  
・英国人への無差別テロを繰り返して行くのである。（後に、こ  
のテロ団が「建国」後正規軍となる。）

米帝は、中東の植民地支配を英・仏帝を駆逐しつつ石油利権を手  
に収めようという考えと同時に、既にアメリカ国内で動かし難い  
発言力を持っている二百万ユダヤ人を統轄し抜く為に、シオニス  
トとの裏取り引きを盛んにし、両者の同盟関係は第二次大戦直前  
から強化され始めるのである。英帝・仏帝にかわって米帝が、植  
民地争奪と侵略を世界的に開始しつつある時期と同じこの時に、  
シオニズムはアメリカ帝国主義との寄生関係を深めるのである。  
一九三九年には、ユダヤ人口はパレスチナにおいて四五万人に達  
し、パレスチナ人口の四分の一を占めるようになっていたが、更  
に反ユダヤ主義の波にのってその流入は増大し、第二次世界大戦  
後には六〇万人とパレスチナ人口の約三分の一へと伸びていった。  
シオニストは「建国」を世界の帝国主義者達に認めさせる為に、  
過半数以上の人口を占める為の手立て——ユダヤ移民の流入と暴  
力的にアラブパレスチナ人を追放することを、更に進めていくの  
である。こうした状況下におけるパレスチナアラブ人の闘いは、  
パレスチナでの反シオニズム闘争が階級性をはっきり明示し得な  
いまま、パレスチナの地主ブルジョアにリードされた民族主義と  
して巨大化し、親ヒットラー政策・反英帝反シオニズムとしての  
反ユダヤ主義として、第二次大戦までを發展させて来たのであっ  
た。この第二次大戦を闘い抜くコミンテルンの方針が、アラブ一

帯の植民地支配に抗して闘いを方向づけるのではなく、植民地へ  
の従属の強要としてアラブパレスチナ人民に映っていたが故に、  
反ファシズム統一戦線は反動的な結果を生んでいくのであった。  
スターリンの政策は、階級闘争としてパレスチナ・アラブ一帯の  
人民の立脚すべき基盤はもたらされず、第二次大戦後ドイツファ  
シズムの敗北によって民族主義総体が、決定的な挫折状況に直面  
し、シオニストにとって有利な条件を生み出したのであった。  
英帝にとって第二次大戦を境に、アフリカ・アジア・中東におけ  
る反英民族解放闘争が盛んになるにつれて、シオニストの反英テ  
ロの激化と移民制限の方策が、ナチのユダヤ人虐殺に同情的な国  
内・国際世論に政府の地位が脅かされる様になった。更に、この  
情勢を巧みに利用したトルーマン大統領のユダヤ移民一〇万人の  
即時パレスチナ入国を求める介入は、更に労働党内閣を脅かした。  
そして一九四七年四月、イギリスは国連にゲタを預けたのであっ  
た。英帝がパレスチナの植民地支配を放棄したのではなく、再支  
配の時をねらいながら、一時国連に状況を委ねるつもりだったの  
だ。その間にパレスチナ・アラブとの仲を親密にしておこうと、  
一九四八年イクラとの間に英帝は軍事条約を結んだりしている。  
当のイギリス自身、自分の利益の為にこらしたシオニズムが、  
米帝と組んで自国の植民地政策を無作法に駆逐するとは計算はず  
れだった訳けである。この当時、一元的な世界の帝国主義へゲモ  
ニーを貫徹しつつあった米帝は、アジアへの侵略を着々と準備し  
つつ一方、中東におけるシオニストイスラエル建国を保障するこ  
とを目差していた。反ファシズム統一戦線から、トルーマン・ド

クトリンによる共産主義封じ込めの対ソ冷戦期を画策していた米帝にとって、中東におけるシオニストの建国は帝国主義の前線基地として重要な戦略地点であったし、アフリカ侵略への足場としても大切なイスラエル建国に向け力をそそぎ出した訳けである。又一方、アラブ民族主義がドイツ・イタリア・日本のファシズムの側に立っていたことは、ソ連スターリニズムの一国社会主義政策の中で、パレスチナをユダヤ建国に向かわせるには充分であった。この力は、ソ連国内ユダヤ人の強力な援護によって建国路線がもたらされるのである。この一国社会主義建設は、英帝を中東から駆逐することによって自らの影響力を中東において強めるために、米帝と結果的に利益を分かち合うかたちで、パレスチナ分割による二つの国家づくりを推進したのであった。この路線は、コミンテルンの方針に従っていたパレスチナ共産党にも支持されている。パレスチナ・アラブ人にとってそれ故、共産主義政治そのものが受け入れ難い欺瞞に満ちたものだという不信感をつのらせ、パレスチナ共産党並びにアラブ諸国の共産党に対する結果はもたらされず、更に民族主義政治の領域における反植民地・反シオニズム闘争が続くわけである。米ソのヘゲモニーによって推進されたパレスチナ分割案を根拠としてシオニストは、一九四八年五月、建国宣言を行った。この分割案が四十七年十二月出されてから、これを認めないアラブ民族主義者との間に戦争が始まり、一年近く戦争は続いたのであった。

この戦争を生んだ国連決議案「パレスチナ分割決議案」は以下の通りである。

◎アラブパレスチナ国となる面積、一一、一〇〇平方キロメートル（七三五、〇〇〇人在住——うち、アラブパレスチナ人七二五〇〇〇人、ユダヤ人一〇、〇〇〇人）

◎ユダヤ国となる面積、一四、一〇〇平方キロメートル（人口、九九五、〇〇〇人在住——うち、アラブ人四九七、〇〇〇人、ユダヤ人四九八、〇〇〇人）

◎エルサレムを国際都市として国連管轄におく、二〇〇平方キロメートル（人口、アラブ人一〇五、〇〇〇人、ユダヤ人一〇〇、〇〇〇人）

以上に示される通り、ユダヤ人口は、全体の三分の一以下にもかかわらず、多くの土地を受けているばかりか、工業と大規模農業の可能な地域を占有することになる。又、アラブ国となるところにはほとんどユダヤ人が居ないにもかかわらず、ユダヤ国となるころには、アラブ人が半数を占めているのである。ユダヤ人のうち、一九四五年まで、市民権をパレスチナ政府から与えられている者は、一三二、六一六人のみで、その半数以下が従来から住み続けていたユダヤ人で、彼らは、分割案も建国も望んではいなかったのである。この著しく不公平な案が、平然と国連を通過することが出来たのは、ひとえに米帝の力によるものがあつた。米帝は、反対国の国連代表をやめさせ、本国に圧力をかけるなどして、従属国などの票の操作に尽力し、ソ連に追従するチェコスロバキア、ポーランドなども賛成票を投じたのであつた。反対は結局アラブ諸国と、少しのアジア諸国（インド・パキスタン等）のみだ

つたのである。パレスチナ問題の混乱に責任を持つべきは、英帝の他、「建国」を人工的に画策した全ての帝国主義者達であることは明確である。

この分割案によって過半数の人口移民を行う前に、「建国」を遂げたシオニスト達は、建国に反対するアラブパレスチナ人をパレスチナから暴力的に追放することによって、過半数以上の住民になることを考え出した。反英テロを指導して来たハガナ機関に、幾つかのこれまでのテロ団を加え、一〇万に登る国防軍を発足させ、パレスチナ人に対するテロと虐殺を開始した。第二次大戦中連合軍側について軍事技術を獲得して来た国防軍は、一九四五年結成されたアラブ連盟に指揮されたアラブ軍（イラク・シリア・ヨルダン・エジプト・サウジアラビア・レバノン）を打ち負かしつつ、国連分割案を更に無視したパレスチナのほとんど全域を占領したのである。彼等シオニストは「領土は主張するが、国境は決定しない」つまり力で占領した所は全て、イスラエル国家とするとして、キブツなどを建設し、領土拡張政策を明らかにしたのである。この戦争で、シオニストイスラエル側は、アメリカの強力なバックアップに保障されていたが、アラブ側はほとんどバックアップを持たなかった。この戦乱に最も責任ある英帝は、分割案に賛成し、未だ両者の再植民地支配を画策していた。アラブ側の弱さは明確であつた。エジプト（ファールク）や、ヨルダン（アブダラ）やイラク（サード）王制は、自己利益の為に英帝やシオニストに妥協して来たり、戦争が始まると、英帝と更に結合しようとして試みたりしていたし、アラブ諸国共産党は、コミンテル

ンの指示に従い、シオニストと闘っているアラブ軍を脱け、自国からいらい並びにそのバックに居る英帝と闘うことを呼びかけ、反シオニズム・パレスチナ解放には闘いの方向を示さなかった。

シオニズムという宗教の装いをした帝国主義の新植民地支配と結合した社会ファシズムは、ついに人工的に帝国主義者達の後立てのもとに、そしてパレスチナ占領の既成事実の上に「合法的」に建国を成し遂げたのである。パレスチナ人民・アラブ人民にとって「建国」は認められるものではなかったし、「合法的」な「建国」とは、帝国主義・スターリン主義の土俵の上、つまり国連というよその所で作り上げられたものに過ぎなかったのである。そして、一九六七年の六日戦争で更に領土を占領したシオニストイスラエルは、それも自分の領土だと主張している。

実に、一九四八年の建国前後に一〇万人、その後一九四九年に二十四万人、一九五〇年に十七万人、五一年に十七万人と、人工的な人口移植を行い、テロと帝国主義政治によって強奪した「国家」をテロ集団から国家的装いをこらす為に、急ビッチの移民政策を強行し続けた。既成事実の上に、更に既成事実を積み上げつつ、パレスチナ人を国外へと強制的に退去させ、その企てが成功しないともみると、村民全体を殺害するという形で（カフル・カシム村の虐殺など）パレスチナから、アラブパレスチナの人口を抹殺して行った。シオニストによって一九四八年までに、三〇万人が追い出され、一九四八年の戦乱を通して、シオニストによって一〇〇万人のパレスチナ人が、土地と家を奪われ難民化されたのである。現在のPLOの資料によると、六七年の六日戦争を経て、難

民は二百万を越え、世界各地に住まざるを得ない情況に陥れられている。全人口の散在情況は以下の通りである。

パレスチナ人口 約三、二七〇、〇〇〇人。

居住地

パレスチナ

三七〇、〇〇〇

ガザ

三七〇、〇〇〇

ヨルダン川西岸

七〇〇、〇〇〇

レバノン

二六〇、〇〇〇

ヨルダン

九六〇、〇〇〇

シリア

一七〇、〇〇〇

イラク

一五、〇〇〇

クウェート

一七〇、〇〇〇

サウジアラビア

二五、〇〇〇

アラビア湾土候国

一八、〇〇〇

エジプト

三五、〇〇〇

リビア

七、〇〇〇

西独

一五、〇〇〇

U・S・A

四五、〇〇〇

ラテンアメリカ

一〇五、〇〇〇

国連に登録されている難民だけでも一四二万人で、国連の七一年予算総額は、五、五〇〇万ドルで、うち半額を米帝が出している。このパレスチナ人の情況に比べて、パレスチナ被占領下ユダヤ移民とその子供達は、増加し現在二五〇万を越えている。一九六七年以降の増加は、アジア・アフリカ・中東のユダヤ人移民が多く、こうした「有色ユダヤ人」は、アラブ人の上つまり、ピラ

ミッドの下層に低労働力として雇われている。そうした下層ユダヤ人の経済闘争が深刻化し、ブラックパンサーを名のるブラックユダヤは、街頭市街戦をも展開して、経済要求闘争を闘っている。又、イスラエル国とシオニズムを承認した形で、合法的活動を保障されているソ連系イスラエル共産党は、アラブパレスチナ労働者との結合に遅れたまま、改良闘争を行っている。

シオニストイスラエルのリーダー達は、移民政策を更に強化している。それは、移民に入国したユダヤ人が、国内の不安定に再び、国外に流出しているのを被いかす為の、移民の数字の拡大のみならず、移民を恒常化することによって国防を拡大し、未だ戦争状態にあるアラブ諸国との現実を、人口増加によって「国」としてのリアリズムを装う必要にもせまられているのである。こうしたシオニズムの「領土を主張し、国境を決定しない」拡張政策にとって移民政策が重大な要となっていることは当然である。オーストリアにおけるユダヤ移民中継キャンプ閉鎖の為の闘いが行われている同じ日、ワシントン米下院においては、「ソ連ユダヤ移民制限が緩和されぬ限り、米ソ通商をさしひかえるべきである」という議論が行われていた。一九七二年五月のニクソン訪ソを象徴的には契機として、帝国主義侵略と結果的には利益を分かちあう形で、戦略的核兵器制限協定を準備しつつ、それに歩調を合せた取引——ソ連のアメリカ向け輸出の拡大とひきかえに、ニクソンの申し出を受けて、ソ連ユダヤ人のイスラエル移住に対する政策を緩和すること——を約束した。一九六一年から、一九七〇年迄 移住したソ連ユダヤ人の総数は、一万三三〇人であり、

一九七一年には過去十年間の数と同数の一万三九〇五人が移住し、一九七二年には、三万三四人以上に急速に増加している。一九七三年には、既に一万五四人が出国し、一九七四年には総計十万人を越すと予想されている。ソ連に居るユダヤ人の総数二二〇万人のうち、一割がイスラエル移住希望者となっている。一九〇一年、レーニンがソ連におけるユダヤ人の措置について、分離主義者ブントを激しく論争した同化か孤立かの論争は、革命五〇余年の社会主義国ソ連のうちに、その残滓を残したまゝである。そればかりか、ブント主義者へのシオニズムの侵蝕によって、シオニズム運動は、社会主義国内部に増殖され、クレムリンの統制をはるかに越える力量と基盤を持ち合わせている。こうしたソ連の政治は、シオニズムによって人工的に創られた「国家」イスラエル合法性を承認した上に、プロレタリア人民の敵シオニストイスラエルの人口増加の為の必死の移民政策を助けることと正比例して国内では、ブントの民族主義「同化ではなく分離」を更にファッショ化したシオニズムが、拡大生成されている。

一九〇一年ブントは、第四回大会において「ロシア社会民主労働党を『ロシア国家に住居している一切の民族の社会民主党の連合体』とみなし、ユダヤ人プロレタリアートの代表としてのブントは、そのなかに連合の一部として加入することを決定」したのであった。党を連合体とし、自らを独自の党として民族のみぞを作ることによって、反ユダヤ主義を固定化させるものとして、レーニンは単一の党と自治制こそ、ユダヤプロレタリアートを階級的に団結させるものであるとして、ブントの分離主義を糾弾し、

まづもって、プロレタリア的任務と、その観点から民族問題を取り扱うべきであると執拗に述べている。一九〇三年に、イスクラに掲載されたレーニンの文章は次の様に述べている。

「学問上の点で、全くなりたない特別なユダヤ民族という思想は、その政治的意義から言って反動的である。このことの争う余地のない証拠は、誰もが知っている近代史の事実と現代の政治的現実である。ヨーロッパのどこでも、中世紀の崩壊と政治的自由の発展とは、ユダヤ人の政治的解放、ユダヤ人が通用語から、彼らがその中で生活している民族の言語へ移ること、更に一般的に言って、周囲の住民とのユダヤ人の同化の疑いなき進歩と手をたずさえて進んだ。ユダヤ人問題はまさにこう立てられる、同化か孤立か？と。そしてユダヤ「民族」の思想は、その一貫した擁護者（シオニスト）にあつては勿論のこと、それを社会民主主義の思想と結びつけようとしているもの（ブント派）にあつても、明らかに反動的な性格を帯びているのだ。ユダヤ民族の思想は、直接にか間接にかユダヤ人プロレタリアートの中に、同化に敵意を抱く気分、つまり「ゲット」（都市の中のユダヤ人町）の気分を作り出すことによって、ユダヤ人プロレタリアートの利益に反するものである。……ところがブントは、ユダヤ「民族」の思想と、ユダヤ人プロレタリアの非ユダヤ人プロレタリアとの連合制案を広めて、ユダヤ人の孤立をのぞくどころか、それを強め法制化することによって、まさにこの唯一の可能な解決をさまたげているのだ。」

このレーニンの立場と思想は、ユダヤ「民族」という擬制を告発

しているのだが、現在のソヴィエト政権は、イスラエル“建国”を承認するという誤りを犯すことによって、国内ユダヤ人問題を更に擬制の“民族主義”に結合させて来たとし、結果として、シオニズムがこの社会主義権力の反映として、拡大再生されているということなのである。現ソヴィエト政権は、階級性としてのユダヤ人問題を国内において処理しきれていない現実——二〇万に上るユダヤ人の出国希望者——に対し、出国税としての教育税四八八〇ドルから二九二八〇ドルの課税措置という金財的プレッシャーによって、移民を規制しようとして来。しかし、こうした対応はシオニズムに通用し得ず、毎月六〇〇〇名が、出国希望の申請を行っていると言われている。このソ連の高い課税措置は、アメリカ・イスラエル・ソ連国内ユダヤ人の反抗にあつて成功せず、一九七三年に入って撤回することによって、アルジェリア・リビアなどのアラブ諸国から、公然としたソ連への政策批判を引き出すに到っている。アメリカは、対抗措置として、一九七二年七月、対外関係援護法案によって、ソ連のイスラエル移住の為に、イスラエルに八五〇〇万ドルの供与を決定している。イスラエル当局者の発表によると、一九七三年には六万人の移民が予想され、ソ連からは過半数を占めるだろうと言っている。ソ連の外交政策が、自国の都合主義による中東への対応であるが故に、これまで多くの戦闘的部分を反共民族主義へと向わせて来たとし、現在に到つてもそうである。対米外交においては、最悪国待遇を受けることを目指し、シオニズムに対する寛容を示し始めたのであったが、今回の中東十月戦争で、民族主義政権の戦争政策を支持せざるを得

ない立場から、米に最悪国の特権を求める方向から、新たな方向転換、すなわちソ連の政治外交総路線の転換を要求されたのである。

ソ連ユダヤ人移民者についてふれば、彼らが宣伝によって得た情報と、現実のシオニズム人工国家のギャップの明確さは、多くのソ連ユダヤ人を再度ソ連に戻らしめたり、イスラエル政府への抗議行動として、移民政策による人為的な国家創りを告発する結果を生んでいる。移民奨励がなされていても、その受け入れは、整っておらず、一九七二年に倍増し、更に増加する。ソ連ユダヤ人達は、一九七三年に、テルアビブ空港で坐り込みに入ったりした。移民を取り扱っているJ・A（Jewish Agency）二〇、〇〇〇人が、国内外でその仕事を受け負っている）は、一〇〇〇のプレハブをヨーロッパから仕入れたりしているが、第二次世界大戦後、ナチズムからのがれたユダヤ難民に、テントや堀立て小屋に入れたのと同様の部類に入るとひんしゅくをかっている。五一、〇〇〇件のアパートは空いているのだが、高すぎたり、場所が不便で納得がいけないと移民者は拒み、一九七三年一月には、ソ連ユダヤ人は割りあてられた部屋が小さすぎたり、隣人が社会がないことに抗議して、空港でのストライキを開始した訳である。（彼等は、イスラエルにおいて言葉が通用しない為）又、今年に入つて九〇万人のソ連ユダヤ人がイスラエルから出国し、ソ連の再入国を求め、ソ連政府の許可を待っている。彼らの多くは、イスラエルの社会、教育方針に不満を持ち、シオニズム・資本主義体制では、自分の子供達を教育するのは不安であることを訴えて

いる。最も根本的には、人為的に作られた“民族”であるが故に、言葉が通じず、皮肉にもユダヤ民族の為のイスラエルが様々な国から来た民族のゲットへの寄せ集めの様相を持っているのである。又イスラエルで一言に「ユダヤ人」というが、人種法が厳しく、父親がユダヤ人であっても、母親がユダヤ人でない限り、ユダヤ人としての特権は受けられないしくみになっており、ナチの人種主義を逆に継承する社会構造を持っているのである。

（一九七四年一月）

## パレスチナ革命の現段階

### \* 重信房子

#### フセイン提案以後のアラブ情勢

帝国主義者の改良とは、プロレタリア階級への攻撃にむけた帝国主義内部の矛盾の調整であり、プロレタリア階級の真の利益を解決することはない。しかし、この帝国主義の再編過程・改良は、逆に、プロレタリア階級に反映する過程で、プロレタリア階級内部の妥協主義者が、革命の道か反革命の道かに真の立脚を迫られる時である。このことは、プロレタリア階級とブルジョア階級の根底的本質的な階級対立の非和解性が益々深化していることの結果、そうした改良主義に道を開き、帝国主義者を結果的に援助しているのがプロレタリア階級内部の改良主義者であったことは、多くの歴史が我々に示して来た。そして、この過渡における人民の闘いは、もともと熾烈に味方内部の前衛のヘゲモニーを要求しており、真のマルクス・レーニン主義党に領導されるに至る試練の日々である。

に、戦争か平和か決定すべき決定的な年として一九七一年を位置づけるであろう」という強力な演説を行ったが、すでに大衆は、一九七一年十二月三十一日と一九七二年一月一日の間には何の変化もおこりはしないことを知っていたし、事実、そのとおりに結果した。一九七一年九月のシリア、エジプト、リビアの連邦制の発足は、対イスラエルへの戦線の構築を表現しつつも、実は、このアラブの連合が帝国主義者との取引・交渉におけるヘゲモニーの誇示以外の何ものでもなかったことを、はっきりと示したことであった。

そして一方、イスラエルは、帝国主義者、アメリカ、西ドイツの強力なバックアップのもとに、益々攻撃の手を固めている。一九七二年二月初旬、ダヤン国防相は次のように自信を語っている。

「ことし一九七二年は、エジプトとの交渉の年となるよう私は望んでいる。戦争でもなく平和でもないというエジプトの政策は、国内に多くの反体制のエネルギを生んでしまっている。もしエジプトが我々と解決にむけて話し合いをすれば、国内における学生のデモや反体制的動きはありえなかつただろう。」

こうしたアラブの状況に対し、アラブ諸国で最も反動的な帝国主義のカイライ勢力として常に存在して来たヨルダン政府は、一九七二年三月十五日、フセイン国王の声明として、次のようなプランを発表した。

(1) フセイン国王のもとに、アラブ連邦王国と呼ばれる新しい連邦国家を作る。

(2) ヨルダン川西岸とガザ地区で構成するパレスチナ自治国を作り、さらに現ヨルダンを自治国とし、連邦王国はこの二つの自治国で構成されるが、各自自治国は内政を司るそれぞれの政府を持つ。

(3) ジェルサレム旧市がパレスチナ自治国の首都となり、アンマンは従来通りヨルダン国家の首都となる。

パレスチナ革命戦争は、そうした世界の矛盾をはっきりと投影しつつけたまま、新しい闘いにむけて熱く重い待機をつづけている。それは、敵シオニスト・イスラエルとの闘いに表現される世界の帝国主義者との闘いと同時に、民族主義者が帝国主義者の改良の前にひざまずいていく過程で、逆に、人民・フェダイーン組織内部を領導する部分が闘いの側を抑圧するという形でしか組織を維持しえなくなっていることに對するフェダイーン組織内妥協主義者との闘いである。そしてこの革命主体内部の闘いは、パレスチナ人民・アラブ人民を質的・量的に動員することによって、真の普遍的な革命の戦線へと再編すべき試練の日々でもある。

一九七一年二月以来、イスラエルとの停戦の期限を境に、エジプトの大統領サダトは、「我々はもはや闘うしかない」という言葉の恫喝をイスラエルや国連に繰り返して来たが、それがブルジョアジーの感性をくすぐらないばかりか、一年間に及ぶこうした言葉の乱発によって、次にはくべき言葉を失ったまま、その指導の限界とむなしさを示して来た。そして、にもかかわらず、一九七一年秋「我々は今年の終りまで

(4) アンマンに置かれる連邦政府は、連邦王国の外交・防衛・経済問題に関して、全面的な権限を保持する。

(5) 国王が一切の最高責任者となる。

以上のような内容を骨子とするこの声明は、あきらかに、パレスチナ革命の担い手の一掃と、アラブ諸国との結合よりもイスラエルとの結合に国家利益を見出したカイライ政府の必然的な発展段階である。この声明はアラブ諸国からも攻撃を受けている通り、イスラエルとヨルダンの六七年戦争以降の秘密和平交渉の実質的な一つの結果に他ならないが、フセイン声明発表数時間後、イスラエル国会で、メイアは次のように述べている。

「このフセイン案は平和解決にむけた姿勢を表現していないし、合意にむけた原則的立場すらないことは明白であり、我々は拒否する。この王様は、自分の支配権の及んでいない地域をまるで自分の領土のように勝手に自治国を作るなどと言っているが、旧ジェルサレムはわが民族の歴史的な表現であり、パレスチナを認めるようなジェルサレムをパレスチナ自治国の首都にするなどというのはもつての他である。他のアラブ諸国は、ヨルダンのこの計画がすでにイスラエルとの秘密合意のもとに提出されたように吹聴することによって、過激なアラブ諸国を固めようとしている。」

イスラエルの現実の存在を認めることによってしか話し合いの基点はありえないという強力な姿勢をくずしていないが、一方こうした提案を媒介として、ヨルダン・イスラエルの単独交渉は、本質的にはフセイン案を軸として、合意にむけて益々進化するであろう。このフセイン案の骨子は、すでに一九六七年六日戦争直後、イスラエルの現副首相アロンによって提出されたアロン案と同じ本質を持っている。すなわち、「イスラエルの安全弁として、ヨルダン川西岸にパレスチナ人自身によって



選ばれた統治者と共存していく」というパレスチナをイスラエルのカイライにゆだねるという方法である。

一九六七年六月戦争—一九七〇年内戦以来、なすすもなくうずくまっていたアラブ民族主義者につきつけられたヨルダン—米帝—イスラエルからの挑戦は、彼等にとって深刻である。

一九七一年、ヨルダン政府軍がパレスチナ・コマンドを銃撃一掃したことに抗議したリビア、シリア、アルジェリアの各国政府は（アルジェリア、リビアは一九七〇年九月のヨルダン内戦以来だが）、断交をつづけたままである。リビアのカザフィーに表現されるアラブ・ナシヨナリストは、ヨルダン前首相ワスフィタル暗殺—人民の死刑執行—の執行者四人の釈放と保護を、エジプト政府に要求している。何故なら「ワスフィタルの殺害は戦争の延長としてのテロルであり、裁かれるべきは執行者四人ではなく、ヨルダン内戦の反動ブルジョアジーと人民の関係においてであって、それ故、こうした裁判の形態は無意味であり不必要である。」

この一貫した論旨はパレスチナ・コマンド側の論旨であり、法廷における弁護士論であり、そしてカザフィー等アラブ・ナシヨナリストの論旨でもある。アラブのナシヨナリズムに介入する勢力には容赦なく闘いで答えるという民族主義者カザフィーは、イスラム教世界の再建強化を一つのテーマとして、実践的でありながら宗教性を絶対概念とするが故に没階級である。カザフィーは、レバノン南部戦線のコマンド基地に多くのリビア軍を導入して、イスラエル戦にそなえてコマンドと共存させており、一方アフリカにおけるウガンダなどのイスラエルとの断交を促進させるといふことも行動的な動きを開始しつつづけている。しかし同時に、マルクス主義者はアラブ・ナシヨナリズムを破壊する勢力であるとして、中国や他の社会主義国と友好を持ちながらも、コマンド

内左派との統一戦線の形成や、またマルクス主義者を許容するスペースを持たない。いわば、アラブ国内においてはファッショ的傾向で内政を貫徹することによって、国内矛盾を隠蔽している。

イラクの政権を握るバース党政権もまた、バース党右派のシリア政府との緊張関係上、コマンド内左派とは友好関係を堅持しつつも、自国内のマルクス主義武装闘争派への弾圧政策は、ファッショ的である。バース党内左右両派の関係改善にむかって、すなわちシリア、イラクの関係がアサド（現シリア大統領）がバース党左派をクーデターで追放した一九七〇年十二月の時点より発展的な方向へ向っている。しかし一方、フセイン・プランの後、イラクがシリア、エジプトとの連合構想を呼びかけたが、現在のアラブ連合の行動派カザフィーの民族主義と、バース社会主義強硬派の非和解的な対立は、当面、現在のアラブ連合（エジプト、シリア、リビア）にはイラクの呼びかけを無視するという態度に出ている。その後イラクは、軍事同盟にも似たソ連との協力関係を強化することによって自らの立場を維持しはじめており、益々「アラブ民族主義」という形骸化された結果が露呈されているということである（もともと、調印された条文の中の「両国どちらかの侵略または安全がおよびやかされた場合協議する」ということは軍事条約ではないとイラク側は否定している）。こうした民族主義者内行動派は、中国、ソ連との関係を益々深めることによって米帝、仏帝、英帝の対アラブ諸国攻撃に対峙するという立場に存在している。

また一九七一年五月、政府内左派を一掃したエジプト政府は、それにとりなり国内矛盾に対し強力な弾圧政策をつづけて来たが、フセイン提案によって一つの決着を迫られたのであった。一九七一年九月以来、ハルワン地区における労働者の経済闘争・ストライキ闘争を軍隊をもって鎮圧し、国内矛盾をパレスチナ—イスラエル問題に眼をむけさせること

によって、おおいにかくそうとして来た。ことに一九七二年一月初旬、エジプト始まって以来といわれるカイロ大学・アレキサンドリア大学の学生・ナセリストを中心とする学生の武装学内占拠は、巨大な反体制の波として拡がり、サダトが常にナセルの忠実な踏襲者であるという態度をとって来たにもかかわらず、ナセリストからは「ナセルは我々を救ったけど、サダトはアメリカを助けている」という不満と反対の声がひろがったのである。こうした学生の反体制の波は、次のような要求をかかげていた。

- (1) 学生に戦争にふさわしい軍事訓練をさせるべきである。
- (2) 民兵を組織し、人民に武器を与え、民兵の指導者は人民自身に選ばれる人民の軍隊に再編すべきである。
- (3) 米帝・E E Cなどの資本投下を拒み国有化政策をすべきである。
- (4) パレスチナ革命に無条件の支持を与え、共に闘うべきである。
- (5) 政府の官僚機構を打倒すべきである。
- (6) 最近進行している右派ブルジョアジーの公務員登用を撤回すべきである。

(7) ワスフィタルを殺した人民の英雄を即座に釈放すべきである。しかしながら、ハルワン地区の労働者との結合が開始される以前に、政府軍は千余名の学生を逮捕し、はげしい弾圧の前に現象的にはその闘いは流産してしまったのであるが、逆に、この経験は学生に闘いの方法を教え、それによって成長しつつある労働者・学生の連携は、地下で手を握り合いながらパレスチナ革命派との結合を開始しはめている。この学生たちの強硬な蜂起の波にどぎもめかれたサダトは、国内における安定をまず確保にすることが先決であると考え、大衆に政府の努力の姿勢を納得させる戦術として、二月にソ連を訪れ、武器の要請をする一方、アラブ連合内政府間の連合の行きづまり打開を模索しつつづけてい

た。こうした時期に出されたフセイン提案に対し、エジプトは当然国内・国際的關係に規定され、アラブ諸国のフセイン案反対表明の頭目として反対を表明せざるを得なかったのである。またこの提案によって、スエズ運河の再開という政治焦点のヘゲモニーを堅持するためには反対の立場を明確にすることが必要であった。そこでサダトは、一九七二年四月六日よりカイロで開かれたパレスチナ国民会議の直前に、次のような演説を「劇的」に行った。「フセイン提案は、実はイスラエルの副首相アロンが画策したことが明らかである以上、ヨルダンとの国交を断絶するのは当然であり、国交の断絶を宣言する。帝国主義者の手によるものである以上、イスラエルとの闘いにおいて、ヨルダンとの断交はその位置の中で必要行為となった。エジプトはパレスチナ人の権利のために闘う用意がある。陸上でも海上でも闘いつづける。自由をもう一度手にするために、あらゆる犠牲を惜しまないだろう。パレスチナ人の権利に対して、いかなる譲歩・妥協も許しはしない。パレスチナの代表とは自らが武器をもって闘っている人民のことである。」

こうして、アラブ諸国の反動・進歩的民族主義者を一応ひとつの立脚点に結ばざるを得ないよう、挑戦者たるヨルダン—米—イスラエルは歩き出したかに見えるが、このアラブ諸国の自国利益による立場の選択はもろく、歴史的にそうなったように、言葉とはうらはらに、無力に国連—米ブルジョアジーに包摂されざるをえないだろう。唯一それを革命の後方として再編しうる道は、パレスチナ—ヨルダン革命の力強い攻撃の質にかかっている。

#### 民族主義政権は革命に敵対する

一九七一年以来、戦争でもなく平和でもなく停戦切れを経て来たアラ

諸國に対決したこのフセイン提案は、ヨルダン反動政権の未来の方向を明確に示している。すなわち一九六七年以降のパレスチナ革命の波が、必然的に民族解放社会主義革命に向って大衆を動員し、革命の波が反動民族政府ヨルダン王制との共存から打倒へと実践的に動き出して以来、このフセイン提案の内容は、同時に、反動民族主義者フセイン一派の課題であった。

一九七一年十一月カイロにおけるアラブ連盟会議に出席中「黒い九月の手」によって人民の死刑執行―暗殺を受けたワスフィタルは、ヨルダン反動ブルジョアジーのイデオログであり、この提案の推進者でもあった。彼は常に次のように考えていた。「民族解放の波は、その力量が巨大に我々をおそって来る時は身をすばめていったんその波をやり過ごし、背後から一撃を加えることが有効である」と。そのためにワスフィタルは、民族解放運動が武装においても戦闘的な時期には解放運動主体内部の切りくずしに奔走し、事実自ら「民族の犠牲」という一つのゲリラ組織を作ることによって抵抗運動の側にいるようなポーズをとりながら――そのことによって解放運動内妥協主義者を自分の側にひきこむ――、一九七〇年内戦時、ゲリラ組織内妥協主義者とナセルの手をかり調停にのり出し、シリア、イラク、エジプトなどの民族主義者と抵抗運動内部の日和見主義者のこぞっての協力で、停戦―カイロ協定を締結せしめた。知らなければならぬことは、民族主義政府の限界は革命を望まないという歴史的事実である。これを武装闘争によって粉碎することが革命の任務である。しかしこの永続性を放棄したパレスチナ革命は、ワスフィタルの「背後からの一撃」を結果としてしまったのであった。

すなわち、一九七〇年のカイロ協定以降、ワスフィタルの指令で、ヨルダン王の親衛隊がコマンドの右手狩り（銃を握れないようにコマンド

フセイン提案は、それ故この選挙によって、ヨルダン王制の一九六七年以前の統治領域（これも一九四八年の戦争以来、ヨルダン王制が六日戦争まで合併という形でぶんどっていたにすぎないが）、ヨルダン川西岸がイスラエルの統治領域に恒久化されることをおそれ、このフセイン提案によって、世界の帝国主義者のバックアップのもとに「権利回復」をねらったものである。メイアがいみじくも言ったように「このおめでたい王様は、一九六七年の戦争が何か事故か天災でもあったかのようにまるで敗戦という意識もなく、一九六七年以前以上の領土の王様となることを夢見ている」のである。

ヨルダン―イスラエルの「単独講和」への動きは一九六七年以降からあり、相互に傷つけない範囲で罵倒し合いながら、自己利益のために相互の共同作業として「フセイン提案」「選挙」を合意の上で行っていることは自明であり、この二つの作業は両者の思惑を進展させる布石である。

提案後の四月、フセインは、この案の説明のためにワシントンへおもむき、四月十二日には米帝から戦闘機F5ジェット二十四機を供与されるという約束をとりつけた。米帝の発展に役買った報酬である。ヨルダン外相アブダラ・サラハは、フセインの訪米の目的が経済・防衛の援助要請であることを明らかにし、次のように語っている。「米国側は、ヨルダン側の申し出を引きうけたと語った。このお蔭で、軍備の面からみて近代軍隊のレベルに到達し、ヨルダン政府軍の戦闘能力と軍備はアラブ最強の軍事装備国となるだろう」と。またフセインは、アメリカにおける記者との会見で次のように語っている。

「一九六七年以前のヨルダン―アラブの主権をとりかえすことが第一である。現イスラエル占領下のヨルダン川西岸がヨルダンの支配となったら、ジェルサレムで宗教の自由が認められるだろう。ジェルサレム

らしきパレスチナ人の右手を、ノコギリやオノで切り落すという作戦）から、一九七一年、ヨルダン領内の唯一の武装対峙拠点ジェラシのコマンド基地一掃へと結果したのであった。その後、この措置に怒ったアラブ諸国によって経済援助が打ちきられ、孤立させられたかのようにみえながら、実は、その本質を益々明確にし、イスラエルとの秘密交渉によって単独の安全対策に奔走する一方、米帝からの経済援助によって、国内問題を再建するという方向において、その新たな道を着実に歩み出していたのである。その新たな道の道標として、今回のフセイン提案があったことは言うまでもない。

しかし同時に、対イスラエルとの一つの関係が存在している。それは、一九七二年四月に行われたヨルダン川西岸のイスラエル占領下パレスチナ人居住区の自治選挙である。この選挙構想、パレスチナ人へのみせかけの自治計画は、すでに一九六八年からハムディ・カナン（ヨルダン政府の手先）によって始まっていた。しかし、この自治選挙によってもたらされる結果とは、イスラエルのカイイ立候補者が形式的に当選することによって、あたかもパレスチナ人の代表であるかのようにデッチ上げ、占領下の弾圧政策の推進者としてパレスチナ人自身が引き上げることには他ならない。

たとえば、コマンドの死に際し家族に送られていた六百ディナールの保証は停止される方向にむかい、選挙民は一定の収入取得者でなければならず、立候補者はイスラエル政府の許可が必要である。したがって、選ばれるものは当然イスラエルの手先であり、自治という名で逆にイスラエルとの経済的癒着を深めることによって、西岸のパレスチナ人自身が支持している真のパレスチナ代表・革命戦士たちの民族解放社会主義運動を圧殺し、イスラエルの存在をパレスチナ人に合法化させるという陰謀に尽きているのである。

は、オーブンシティーでなければならぬ。そこはイスラエルの首都でありヨルダン王国パレスチナ自治国の首都でもある。なぜ共存できないと考えるのだろうか。そんなことはありえない。またイスラエル占領下での選挙は、強制されて投票したものであると私は信じている。」

このフセインの発言は、あきらかに、パレスチナ人民の存在を圧殺しつづけて来たイスラエルの既得権を認めるものであり、米帝の後だてのもとに、アラブ諸国民族主義者の反撃にゆるぎなく進むための、イスラエルとヨルダンの「単独和平」の第一歩となっている。このフセインの動向に対して、イスラエルのジェルサレム・ポスト紙は、次のような論評をかかげている。「もしできることならこれからの戦争には巻き込まれたくないというフセインの決定を歓迎する。米国において行ったフセインの表明は、イスラエルの主権を認めるものであり、喜ばしいことである。しかし、フセイン案は国内における統治の矛盾の激化に対応した苦肉の策であり、弱さの露呈である。またこの提案をのめば、テロリスト・ゲリラが多くわが国内に侵入し、わが国にとって危険である。」

これまで、アラブ諸国は自国の個別利益の枠内で対イスラエルへの戦闘体制を堅持していたのに、フセイン王制は今やアラブ・ナシヨナリズムという言辞に惑わされることなく、米帝との反革命同盟、さらに間接的にも将来的にもイスラエルとの反革命同盟者として、明確に民族解放プロレタリア革命に敵対したことをパレスチナ人民は再認識しなければならぬ。それでは、一九七二年初頭から激しく動き出したこうしたアラブ情勢下で、闘う側の準備はいかになされているであろうか？

#### 革命派の動向とPFLPの分裂

一九七一年、ことにジェラシの敗北以降から、革命主体内部の試練は

勝利に至る歴史的必然的な過程として、今なお深々と横たわっている。

それは、敵イスラエル、世界の帝国主義者、民族主義ブルジョアジー、そして革命の担い手の中から妥協と譲歩をもくろもうとする部分との熾烈な闘争であり、同時にそれらは、左派——革命派——内部にもっとも反映されるが故に、かつ指導の質が要求されるが故に、革命のヘゲモニー構築に至る分解と統合の深い過程ともなる。こうした情況下に、イスラエルの攻撃は不断に開始される。一九七二年二月には、レバノン南部に対するイスラエルの攻撃がつづいていた。第三次産業・観光都市としての経済構造しか持っていないレバノン政府は、ジェラシ以降、多くのコマンドがレバノンに流入して来たことに深い恐怖を感じていた矢先の攻撃である。

レバノン政府はコマンドの応戦を禁止して、次のように語った。「コマンドがレバノン南部に居るために、レバノンの住民がおびやかされている。」この言葉は、ヨルダン同様コマンドの駐屯地をまず一掃しようとするイスラエルの戦術の勝利であり、イスラエルの攻撃によってレバノン政府がコマンドに圧力をかけることを見通しているからである。

(レバノンに対する攻撃で、イスラエルは攻撃・爆撃と同時に飛行機からアラビア語のビラをまいて「我々は平和をねがうものであり、住民に対しては爆撃対象とならぬよう注意を払っている。我々は危険分子フェダイーンのみを攻撃をかけるために行っている。何故なら、彼等はおがイスラエルの安全と平和に敵対するからである」と呼びかけ、人民とフェダイーンとの分断に心を配っている。)闘う側にとってもっとも困難な時期であるが故に、それを越えるヘゲモニーの要求は、分派闘争として、民族主義者・革命派の分岐をまた党内に形成している。

一九七一年七月のジェラシ敗北以降、ファタハ内部に形成された左派ヘゲモニーは、党内不満分子と結合し、右派リーダーからの命令を拒否

カ左派など)、PLOをそうした左派マルクス・レーニン主義党形成にむけて解体させていくという党形成の認識を持っており、戦略的には、アラブ党の形成という組織論とベトナム、インドシナ人民との実体的結合、先進国革命派との実体的結合——世界革命のイメージを持っているといえる。これに対し「右派」は、現在の段階で左翼空論主義のPDFLPなどと合体しても、何の新しい情況も担いきれないばかりに挫折であるという立場をとって来た。まずPDFLP内部の戦線を固めるべきであるとする立場である。

「左派」は、戦略的には正しい立場を直観的にふまえたつも過去左翼反対派としてしか論争を組織化しえておらず(過去のPDFLPの闘争、ハイジャック等の総否定、「右派」のリーダーへの人格的全否定)、パレスチナ革命戦争の発展継承を党内部に戦略的に敷衍させきれないばかりか、実践的闘いを媒介としない論争に終始して来たために、三月の党大会を無効であるとしてボイコットするという最後の戦術的過程で、別党は時期尚早であるとする「中間派」と「左派」の内部からも反対者を出し、結果的にはシリア、レバノンのコマンドを中心とするグループのみがPDFLPとしての道を歩き始めたわけである。「右派」の、PDFLPをまもれというナシヨナリズムによる党の組織維持の方向性は、多数派を党内にとどめつつも、矛盾を含んだ論争過程として今なお進行している。

一九五二年、イスラエル、英、仏の植民地支配への抵抗運動として始まったアラブ・ナシヨナリスト運動の組織を継承し、五〇年代後半ナセル主義者との統一戦線を媒介として、一九六七年、マルクス・レーニン主義党へとその地歩を固めて来たPDFLPの方向性は、一九六九年のPDFLPとの分裂、今回の「左派」との分裂に表現されるごとく、組織内における戦略論争を包摂しきれない一九五〇年代ナシヨナリスト運動

することによって独立軍団的傾向を保っていた。ジェラシの戦闘に対して援軍を拒否し、調停という形でエジプト、シリア政府の側に立ってジェラシの闘いを孤立化させることによって敗北を結果させたのはファタハ右派の責任であるとして、シリアのゴラン高原付近に独自性を保って駐屯していた。こうした左派の独自化に対し、右派のリーダーは食糧・財政・武器の補給を凍結するという形で攻撃をして来た。これに対抗した左派は、食糧・武器庫をおそって奪取し、右派が逮捕にのりだす過程で調停にきたアラファトに銃撃で応えるという一九七一年十月の事態を生み出した。しかし左派は、その後、右派とシリア政府によって武装解除させられつつも、一九七〇年から一九七一年のヨルダン軍とコマンドの闘いの過程で、ヨルダン政府軍からコマンドの側に寝返った革命的な元ヨルダン政府軍二千余名を中心に、右派とは相対的独自性を保ちつつ熾烈な党内闘争を展開している。

またサイカ、PDFLP総司令部派(一九六八年PDFLPから分裂した民族主義グループ)、PLAなどでも、マルクス主義者と民族主義者とののはげしいヘゲモニー争いがジェラシ以降顕在化している。こうした過程でワスフィタルを殺した「黒い九月の手」などもファタハ内から生まれて来たし、非妥協性が闘いの持続に要求されているが故に、行動によって提起される戦線の構築は革命主体にとって持久戦争を担う上で質的進歩といえる。

またPDFLPにおいては、ジェラシ以降一九七二年三月に至るまで党内闘争が進行していたが、ついに三月十日の党大会の初日、「左派」は別党(パレスチナ解放革命的人民戦線PPRFPLP)への宣言を発表した。この分裂は、パレスチナ革命の現状に少なからぬ影響を与えずにはおかぬだろう。「左派」はパレスチナ革命主体の左派との統一戦線党形成を主張しており(具体的にはファタハ内左派、PDFLP、サイ

当時からの指導部のパレスチナ革命へのプラグマチズムが、その原因といえると思う。しかし「右派」と呼ばれるリーダーシップは、ハイジャック闘争の計画実行者、ヨルダン・ジェラシの戦闘グループ、一九七〇年内戦の革命飛行場死守を貫徹したグループと、実際的にパレスチナ革命の質を領導して来たグループであり、空論主義とは比べものにならないダイナミズムを持っている。こうした実践が階級形成の突破口として巨大な位置を持ちながら、切り開かれた質を継承しえなかったが故に、戦術主義・アイディア主義として非難されている。そして党大会においては、ハイジャック闘争の現在中止を決定している。しかし、人民戦争は闘う人民によって選ばれ決定される戦争形態であり、その意味において国境を越える巨大な闘いに実践的な闘いを位置することなく、論理においてあれこれいうことによって、革命のダイナミズムを去勢するのは左翼日和見主義的でさえある。問われていることは、こうしたエネルギーを包摂する組織戦としての実践的な方向を示すことであり、結果論的なハイジャック闘争やその他の過去への批判は(事実、暴露合戦になっていた)、パレスチナ革命の損失である。

#### PDFLP三月党大会をめぐる

まず、「左派」は、PDFLPの三月党大会の開催中、次のような声明を発表した。

「我々左派は、右派の不能かつ疑わしき政策を非難し、パレスチナ解放革命的人民戦線の名の下に政治的イデオロギーの軍事的組織的独立を宣言した。抵抗運動の現在の状況の形態と構造は、抵抗運動が進展するにつれて必然的に通らねばならない状況に直面している。(一九七〇年九月、またはそれ以降に抵抗運動がこうむった敗北に示されるパレスチ

ナ・レベルにおける一連の極めて重大な進歩と一連の政治的軍事的後退に対し、一掃主義者が出て来る計画に対応しえなかったこと。またアラブ・レベルでは、アラブの降伏という後退がずっとつづいたこと、このことは抵抗運動の発展状況が必要としている任務を科学的に明白にしている。この危機は、抵抗運動が現在の形態であるなら、困難で錯綜したかつ新たな政治的現実における任務が遂行できないことから生じている。当時、客観的に十分成熟した状況があった時に任務を遂行できなかったにもかかわらず、その時のままの形態で現在の新段階の要請に応えることができるという主張は、非論理的である。抵抗運動のプチブル的構造がもたらした行きつまりを打開するには、プチブル的構造と構成に、ラジカルな変革、つまり抵抗運動指導部を左派が握ることにによって戦略にむけて再編すべきである。我々左派は、危機に対応してゆく枠組となるイデオロギー的総括と結論を、以下のように規定した。

(1) 新たなそして困難な政治的現実とは、パレスチナ、ヨルダン、アラブの規模における政治的發展により創り出されて来ている。

(2) この新しい政治的現段階は、断固としたラジカルかつ革命的な闘争領域を持ったプロレタリア的機関を必要としている。

(3) PFLPを含めた抵抗運動の敗北は、抵抗運動の右派のプチブル的構造が原因である。

(4) 抵抗運動の再生は、プロレタリア的領域を持った革命的機構に変革されることによって可能となる変革の度合にかかっている。

この立場から、左派は右派と長期の話し合いを持ったが、右派は共存の譲歩を示して来た。しかし、そうした譲歩は組織の行く手を阻むものとなるだろうし、革命的な左翼に変わらなければ、共存は革命の損失である。PFLP左派をも含んだ抵抗運動左派内部に、新たなラジカルかつ総体的な変革が創出されねばならぬということ、現実のうちかつ戦線

を創り出すのを妨害する『組織の統一維持』を固執する右派のやり方は、左派のイデオロギー的組織的な右派からの独立に際し右派との拒絶の道しかのこされなかった。我々は戦線の統一を維持することを望んで来たし、PFLPの革命的再編にも最大の尽力を行って来た。しかし、変革―抵抗運動のエネルギーを延命させるかPFLPの党維持か、という選択は我々にとって明確である。革命のエネルギーを延命させるが故に訣別を告げねばならない。PFLPをマルクス・レーニン主義組織に変革しうる可能性があるとするハバシユの意見は、左派フラクションによって否定された。(ハバシユも当初、一応、左派フラクションに入っていた。)このようにして我々は、投降主義右派の政策がもたらす障害をのりこえてゆくべきパレスチナ人民・アラブ大衆の革命継続の望みを維持してゆく方の道を選んだ。目下の危機をのりこえること、我々が被占領下の土地完全解放をめざす人民戦争の途上にはかかるヨルダン反動政権打倒のために連続した武装闘争をかかげること、アラブ官僚政策から完全に自由になること、あらゆる一掃主義者(国連も含む)を拒否し、戦闘的に民族的政治的な綱領の枠組の中に抵抗運動のすべての革命的部隊を包摂する民族的民主的かつ革命的戦線を構築すると共に、武装闘争のエスカレーション、反帝・反シオニズム・反反動勢力の同盟強化のため、社会主義圏・発展途上国の民族解放闘争・先進国の闘う人民との提携、そしてアラブの革命的な運動諸機関の統一にむけて、我々は立ちあがるであらう。

この「左派声明」に対し、その後PFLPの党大会を終え、記者会見の席上、ハバシユは次のような「第三回大会声明」を発表した。

「一九七〇年九月のヨルダン内戦以来、片やカイライ政権の一連の闘いを通じ、わが人民の革命が以前にもましてより厳しくより困難な新たな段階に直面したという事実が、ジェラシの戦闘後益々あきらかになっ

て来た。こうした情況に直面した革命の任務は、まず過去の段階の過程を研究し批判すること、それは新たな現実の科学的分析と、新たな段階の完全な理解とに結合されるものであるからである。行きあたりばったりの自然発生性への拝跪とか、性急な冒険主義的活動では、現在の困難な情況のうちかつことはできない。パレスチナ解放闘争とは、数十年にわたって闘われる長期人民戦争なのである。この人民戦争は闘いを通じて構築され、革命理論の視点と、簡単には絶望もしなければ無分別には動かないプロレタリア的決意に依拠した革命組織が領導する広範な革命戦争によって、初めて勝利を手中に収めることが可能である。

今大会の重要性とは、わが戦線が新たな情勢に対処してゆく準備の一步であるということ、この新情況は一九六七年中頃から一九七一年中頃まで我々が対処して来たそれよりもさらにきびしくかつ困難であるということである。大会では過去の局面を研究し、革命に後退をもたらした諸原因を分析した。そしてこの作業は、抵抗運動が現在存在している衰退情況が何故おこったかを説明している。大会は、抵抗運動の右派が担って来た中心的かつ基本的責任を決めるということとを自ら制限しなかったし、当然の帰結としてさらに「左派」の意図や諸計画や過ちをも含めての位置を考慮したのである。この大会の批判的な過去の局面からひき出し得た教訓を、PFLPは大衆の中に自らの情宣とカードルによって、大会でつちかわれたすべてを明らかにするであらう。今日、帝国主義からの完全な支持によりかかってイスラエルは卑劣な経済・政治・プロパガンダ等の計画によって、抵抗運動がかいくぐりつつある衰退の状況、そしてそれがパレスチナの大衆に及ぼす効果を利用し、イスラエルの長期にわたる利害を完全にするようなやり方でイスラエルと癒着し、かつ因襲的なカイライ指導者が昏頭をとって、にせのパレスチナ国をデッチ上げることによってパレスチナ人問題を解決してしまおうとしてい

る。オーブンブリッチ政策・パレスチナ労働者雇用・自治体選挙実施行、そして現在あるどんな計画も方法も、革命と大衆との間に大きな障壁を作りあげるためのものなのだ。そしてそれに呼応するヨルダン反動が存在している。さらに、アラブのブルジョア政権に現出した完全な不能性というものがある。大会は、抵抗運動が帝国主義・シオニズム反動の敵陣営と対決してゆく際に支持を与えてくれるであろう新たなアラブ民族解放運動の誕生と、その強化に必要であると考えうる時間の経過に注目した。第一点の研究と批判の過程と並行して、この新たな客観条件を理解することは新局面打開の第二の重要な点である。こういった視点から、当大会は以下の諸事項について、はっきり考察を行ったのである。

(1) 占領下にあるパレスチナ内部へのPFLP組織の拡大。現段階にあつて、イスラエルの計画に対決していくにあたりこの組織が確固としたものになり、かつ組織の有効性を増大させていくのを保障する組織的政治的綱領。

(2) ヨルダンにおける反動カイライ政権との我々の闘い。この政権は我々パレスチナ人民大衆の大きな部分に足かせをはめ、帝国主義・シオニズム・反動勢力の敵と闘ってゆく中でこの闘いを麻痺させているのだ。大会は、この政権に対決し、ヨルダン―パレスチナ民族戦線によって抵抗運動と協力してこの政権を転覆するというヨルダンの民族運動の役割の意義を記録にとどめた。

(3) 占領下にあるパレスチナおよびヨルダン人民の抵抗。そして、この抵抗運動を完全に破壊しつつし、かつアラブ大衆から孤立化させんとするイスラエル・帝国主義・反動の諸もくろみ、同様に、この抵抗運動を統制し、革命の内実のいかなるものも剝奪し、一つの党として降伏と譲歩作戦をもたらさんとする投降主義やブルジョア政権が試みて来た種種の策動。

(4) 根絶と降伏をめざしたもくろみ、そしてとりわけ、今回限りで正当な理由を払拭しアラブの運動全体を片づけてしまう手段として、一九五〇年代初頭に帝国主義が及ぼしただけの影響力をとりもどし、帝国主義との対決にあたり我々の側の国際的同盟を攻撃しながら一掃しようとする米帝の地位。

わがPFLPはこうした投降主義的対応を拒否し、解放への唯一の道は長期の人民解放戦争だけであるという戦略を断固として確信する。同様にしてPFLPは、『パレスチナ国家』なるもくろみはすべて我々の持っている解放の正当な理由を最終的に壊滅させるものであるから拒否する。この新局面と、それに関連した闘いの困難な情況に対決するため、今大会は以下の路線を記録にとどめた。

(1) 組織問題についての考察を中心の課題とする。新局面は、わが戦線の組織構造がイデオロギー的階級的な意味で革命組織構造に変革されることを要求しているのだ。我々が直面している新情勢にとりくむには、マルクス・レーニンの理論と、組織におけるマルクス・レーニンの思想の科学的前提に依拠した革命の立場以外不可能なのである。今やパレスチナ革命にとって中心となるのは、マルクス・レーニン党建設という科学的前提である。PFLP第三回大会は、政治綱領と同じ比重で組織綱領を重大なものとしなした。

(2) 広範なパレスチナ民族戦線——同様にヨルダン・パレスチナ民族戦線は、ヨルダンの反動体制に明確なラジカルな立場をとる政治綱領に合意する中で、わが戦線が完全に担うつもりである。これらの局面で、大衆運動に領導される広範なパレスチナ民族戦線構築に、我々が指導権を握ってゆくことが我々の基本的任務と考えている。

(3) 唯一、大衆のみが、現在抵抗運動がひんしている危機から脱出させる勢力なのである。こうした大衆を政治的軍事的闘争によって動員

していくことは、次の局面における我々の最重要な作戦の一つである。PFLPは常に大衆の中心にあり、大衆と共に闘い、彼等の目的のために、そして彼等によって目的達成ができるように、自らの戦術方式のすべてを再度考察するつもりである。

(4) 革命的暴力路線は、敵陣営との対決にあたり基本路線の一つでありつづける。我々が革命的暴力を行使するのは、大衆が闘う広い闘争の頂点となるのであろうし、補充的なものとしてではない。と同様に、我々の側の暴力行使は、過去のすべての経験と、それから導き出された教訓から恩恵をうけることになるのだ。

(5) パレスチナ革命の全未来にとって、総体としてのアラブ大衆運動とアラブ民族解放運動との一体化と結びついている反帝国国家の広汎なアラブ民族の戦線構築に参加することは、次の段階で我々がとうとうとしている闘いの主要なものの一つである。

(6) 全社会主義諸国、諸々の民族解放運動、世界的レベルでの国際的諸勢力の運動と我々の革命的連結を、世界的レベルで強化することは、国際帝国主義陣営と我々が対決し、人民の運動を打ち負かさんとするすべての計画と対決していく時に我々の力となるであろう。

以上は、PFLP第三回大会で問題となった事柄の主たるものである。こうした前提条件のすべては、PFLPが自らの幹部や党員をもって、大衆の中にもちこむ有効性と、公表によって貫徹していく大衆啓蒙と党活動の基本となるものである。今大会では、我々はPFLPシリア支部、レバノンにおけるPFLPの若干名の幹部と一緒に、二名の政治局員が行った分裂主義的活動について考察を加えた。現段階におけるわが組織の組織構造を自らマルクス・レーニン党に変革しえていなのは、急進的左派組織であったという事実がそのような現象を導き出した第一の主体的要素である。性急さという要因に加うるに、辛抱的な

さ、左翼、そしてマルクス・レーニンの装いの下にある人々の行動を左右する過激性にあるのだ。まずもってわが民衆が、そして革命の全勢力が、あらゆる分裂主義者のやり方と試みを非難する和我々は信じている。こうした分派主義者には新しい組織名と、革命の言辭の収獲しか、情況は与えはしないだろう。いずれにせよ、この一派に対して大会が持った態度は民主的な絶縁であり、単に敵側にとってのみ役立つ水かけ論や中傷のやりとりを拒むというものであった。と同時に、PFLPはこの分派現象に対し、イデオロギー的合法的かつ責任ある闘いをするので、我々はいかなる矛盾も敵との対決にあたっての我々の任務から我々の注意をそらさないよう、非常に慎重でありつづけるつもりである。我々は、大衆と歴史の宣言に従わねばならない。(以下略)

#### パレスチナ国民会議の「綱領」

こうした革命戦線派の動きは、PLO総体を変革するバネとして、なお一層の深化を要求されている。三月十五日のフセイン声明後、PLOは「フセインは、パレスチナ人民の運命を決定するという権利など持っていない」という反論を明らかにし、三月十七日ファタハはフセイン王制打倒を宣言した。しかしフセインに表現される敵の攻撃を、PLO指導部はPLOに所属するすべてのコマンド組織の統一によって乗り越えようという、コマンドの政治的軍事的完全一体化の案を提出して来た。

この試みは、一九六九年にも、PASOC (Palestine Armed Struggle Comands) という形で正規軍形成を呼びかけたにもかかわらず、戦略的にも軸がなく、指導の質もないまま、無媒介的な結合は必然的に一九七〇年には崩壊し(PFLPは反対し、PASOCに入らなかった)、現在

パレスチナ人民警察的役割としてのみPASOCは存在している。この統一構想は、右派PLOがアラブ民族主義者と訣別することのない相対的なPLO機構の実体は民族主義者の傘の下でダイナミズムを失う以外の何ものでもなく、マルクス主義によって武装されていない軍の全面合同は、ベトナムの解放戦線が築いて来た闘いの質とは全く異なるパレスチナ革命の真のヘゲモニーを圧殺するという動きに他ならない。PDFLPはすでに、この組織再編に全面的賛成を表明している。PRFLPとPFLPは、パレスチナ革命の現段階での必要性は認めながらも、実行の可能性については危惧し、批判的立場を堅持している。PFLPは、このコマンドの統一、ことにフセイン提案後益々強調され実体化に向っているコマンドの完全統一提案に対し、次のように語っている。

「この統一プランは、まず第一に必要性、第二に可能性によって語られなければならない。選挙—フセイン・プランからの反動のみでこのことが語られてはならない。基本的な戦略論の地平から語られるべきであり、敵との対決に際し用意しうる我々の力量を十分に考慮すべきである。この統一軍隊が、PLOの枠内で、各々政治的戦略論的違いを持ったまま一体化することが可能といえるだろうか？ 過去の経験と過去の抵抗運動の責任を明らかにすることなく統一化しても、闘う部分が敵との対決により有効な方向性を持ちうるかということが疑問である。」

こうした見解にもかかわらず、ファタハ右派を中心とする軍の統一化の動きは、四月六日から始まったパレスチナ国民会議で四日間の討論の末、統一軍隊実現にむけての採択を行った。(四月六日より開かれたパレスチナ国民会議は、ガザ地区・ヨルダン川西岸から八百人以上が出席の予定であったが、イスラエル政府の妨害で出席できぬまま五百人以上の各地の代表者が結集していた。)

PLOを中心とする民族主義者は、アラブ諸国の民族主義者と同じレベルの立場でフェイン案にふりまわされ、まるで亡命政府を名のらなければパレスチナ自治選挙―フェイン案によってPLOが有効性を失うのではないかという（そこまでいっていないにしても）動搖の裏返しとして、形式や組織いじりに神経を集中している。ただ着実な武装闘争の現実によってのみ、敵の欺瞞を打ち破ることができるといふ革命派の立場こそ、パレスチナ革命の可能性を表現するものである。

パレスチナ国民会議によって採択された内容は、次のとおりで、それは軍隊の統一にともなう新しい「政治綱領」として提出されている。

#### 〔四大目的〕

(1) パレスチナの内部に在るすべてのパレスチナ人を動員し組織化すること。

(2) パレスチナ人民とヨルダン人民の闘争を結合しパレスチナ―ヨルダン戦線をつくり、イスラエルとヨルダン王制からの解放をちとり民主的国家をつくること。

(3) 反帝・民族主義・進歩的諸派を包摂した統一戦線をつくることによって、パレスチナ―ヨルダン革命と固く結合させること。

(4) 民族解放の獲得の最終目的をもって、反帝・反シオニストの闘争を世界の勢力との協力関係でおしすすめること。

#### 〔戦略〕

(1) パレスチナ一國解放の闘争の持続とパレスチナ人の民主的統治の創造は、労働とふさわしい生活がすべての市民に可能となるであろう。革命に参加し支持したものとすべてに対し、保証があたえられる。パレスチナの正当性に同情的であったもの、敵に協力しなかったものにも同様

の保証が与えられる。国家は全市民に信念の自由を保証するであろう。

(2) パレスチナのどこかの部分にパレスチナ国家を作ることによってパレスチナ問題を解消するというすべてのプランに対して、断固として闘いつづける。

(3) 一九四八年以来敵の占領下に住んでいる大衆（ヨルダン川西岸の人民、ガザ地区その他の地域）と結合する。

(4) 被占領地からアラブ人を追放し祖国パレスチナをユダヤ化しようとする解決方法に対して反対する。

(5) 占領権力に対し闘うことができるよう、西岸とガザの人民を動員し、武装化する。

(6) 大衆が日々の利益を守ることができるよう、とくにアラブ人を組織化しようとするヒスタドルトに対して我々のシンジケートを作る。

（注・ヒスタドルトとは、シオニズムの先兵として活動しているイスラエル労働総同盟のことであり、リーダーの多くは政府与党で、約百万人のユダヤ人（イスラエル成人人口の過半数）と四万人のアラブ人組合員を持っており、アラブ人をこれに組織化することによってシオニズムの側に扇動している。）

(7) アラブ施設で労働するパレスチナ人を支持し、そして敵による労働の提供を拒否することが労働者にできるよう保証を与える。

(8) 占領地区の農民が土地から出ていかないう彼等に道具を与え支持する。

(9) 現在すんでいる国の人々が享受している法的経済的すべての合法的権利をパレスチナ人すべてに与えること。

(10) あらゆるレベルでパレスチナの女性を男性と同じ立場におく。

(11) キャンプの諸事情の面倒をみるべくPLOの監督のもとに人民委

員会を設立し、キャンプに在住するパレスチナ人の状況を向上させること。

(12) 敵と協力する者すべてをパレスチナ革命の第一の標的とする。

(13) 外国に移住しているパレスチナ人の利益の面倒をみることに。

(14) PLOは政治的軍事的に全抵抗グループで構成される。そしてパレスチナ人民のグループのPLO会員資格は、あらゆる民族グループ・個人に開かれている。

(15) PLOの活動はPLOを構成する全グループが会議を持ち、その後で組織化される暫定的政治軍事指導部がきりまわす。この暫定指導部は組織の総会（これはPLO中央委員を選出しPLOの解放戦略を実行する）を準備する。

(16) 暫定指導部は現在のPLOを構成している全カードルが入る。

(17) PLOはアラブ世界のパレスチナ人の諸々の面倒をみることによって、公的役割をはたす。PLOはパレスチナ人民の政治指導部でありつづけるし、どのようなことがらにもパレスチナ人にかわって発言しつづける唯一の組織でありつづける。

この政治綱領の内容は闊いの普遍的質を提起しているとはいえないが、全パレスチナ人の動員を役割とする限界性を持っているが故に、革命派とは必然的に違う立場から出発しつづけている。そしてそれ故、この民族主義的なPLOが、闊いの局面でアラブ諸国政府と同じ立場に立つてこれからも歩みつづけるということは明白である。そして、闊う主体はこうした枠に運動を留めようとする妥協主義者と訣別し、自らを革命の前衛としてきたるべく苦渋の模索をつづけている。

また一連に表現される味方階級の妥協主義者は、四月のイラクのバース党大会二十五周年にコスイギンが出席し、今後十五年間の友好協力関係の調印を行っている。一九六九年からソ連の援助によって油田の開発

を行って来た経済援助の結果であり、エジプトはミグ戦闘機の生産工場を建設する計画もあるという。（四月十一日付デイリースター紙の記事によると、このことを察知したアメリカは、それが本当ならイスラエルにアメリカは必要なファントムを今後供給せざるを得ないだろうという立場を表明している。）ソ連のアラブ諸国に対する経済援助は、國家間の枠内で「ギヴ・アンド・テイク」という形でしか発展しておらず、また政治力学の観点からのみ、米―中―ソの立場を見ることしかないこうしたやり方は、アラブ諸国内のソ連派共産党の民族主義者との共存を助けるばかりか、武装闘争の途上にあるパレスチナ革命に力の政治を民族主義者がおしつけることに一役買うばかりである。ソ連や民族主義者等の革命的言辭に期待する何ものもないことを、唯一武装闘争を通じてパレスチナ―アラブ革命の任務を遂行すべきことを闘う左派は過去の経験を通して知って来たし、試験の革命戦争持久戦の勝利にむけて、敵への攻撃を通して隊列を整えつつ進むだろう。そして、この現在の試験は巨大な戦火を結果するだろう。

一九七二年四月

# 不滅の最前線陣型——アラブ・パレスチナ革命

## \* アラブ赤軍

△序1▽日本の革命的同志たちへの  
メッセージ

5・30斗争一周年集會に結集された同志、友人たち、戦場から熱い連帯を表明する。日没間際の真赤な地中海を横切って今、レバノン空軍機が急降下しながら、無制限、無差別にパレスチナ人民居住地区、難民キャンプを爆撃しつづけている。アラブの同志、友人たちは今、敵の包囲に転化すべく、空港で、軍事基地で、外人居住区で、熾烈な戦いを続けている。カイロ協定を更に改悪すべく策動しつづけるアラブ諸国右派の表現として立ちあがるレバノン反動に反対し、少年たち民兵はグリラ戦士に続き、銃口を定め今、撃ちつづけている。

5・30斗争集會に結集された同志諸君、友人たち、赤軍兵士、パシム奥平、サラヘ安田、アハマド岡本の勇敢な闘いはパレスチナ革命戦争の新たな転換を引きだした。すなわち、政府体を喪失し、国家の形式を失いつつあるシオニスト反革命テロルの素顔を公然と登場させて来た。シオニストの反革命テロルは、良識的国際世論に非難されながらも、国家の仮面をすてたシオニストの真の姿、すなわち、一九四七年以前のテロリストぶりを発揮せざるをえない状況に陥れ込められている。

△序2▽未完の、人民の軍隊から出発しよう

闇から闇へと革命勢力、抑圧された人民の抵抗を締め殺して来た帝国主義者、抑圧者の歴史は今、闇から闇へと武装し、団結する被抑圧人民の無言の、しかし雄弁な闘いの持続の前で、声を張り上げざるを得なくなっている。「テロを国際的な協力で指止せよ」と。独自の時刻表と、独自のエネルギーで武装する術を得た抑圧された人民の長いスタンバイによってつちかわれた不意打ち。敵のプログラムと、敵のシンクタンクと、敵のダイレクションの死角の位置から、今、撃ち続けている。帝国主義者によって編み込まれた「道徳」に、抑圧された人民の道徳を対峙し、帝国主義者によって語られたことを呪いと復讐で透視し、今、着々と、自らを解放する作業を担っているこの世界中の戦士たちは、老人だったり女だったり男だったりする。こうした解放斗争途上にある戦士たちの自力ではいあがる生きざまに立脚し、世界革命戦争を押し開く一つの戦線を担う我々の革命に、アラブ赤軍のモラルがある。辺境から敵帝国主義者をねらい撃ちする闘い、この闘いは、我々を真の人民戦士として更に解体——改組し、敵帝国主義者・抑圧者に向けて、更にかたくなに武装させる。そして、このかたくなな武装が、地球的規模で、敵・帝国主義者の存命にむけた再編——妥協を奨励しようとも、世界中の抑圧された人民の意志が敵・帝国主義者を更に憶病にしようとも、我々は、それに制約されない。武装解除しない。ベトナム人民が闘いぬいている様に、我々は、逆に、宇宙的規模のプロレタリアの地下兵站戦・革命のシルクロードを闇から闇へとはりめ

革命の発展が、アラブ反動と必然的に敵対しはじめた一九七〇年から現在のレバノン政府との対決に至るすべての道のりは、パレスチナ革命の困難を表現しつづ、一方に不滅の左派を形成している。

世界戦争パレスチナ戦線で戦死した無数のグリラ戦士の一人として横たわるパシム奥平、サラヘ安田、更に、帝国主義者シオニストの捕虜となって現在の肉体的精神的弾圧の最中にある数千名のグリラ戦士のうちの一人として存在しているアハマド岡本の犠牲性、献身性に表現されるパレスチナ革命は、更に不滅に進撃する。敵の改勢は困難をくぐりぬける攻撃的戦闘を我々に今、準備させている。我々は、パレスチナ、世界の同志・友人と共に、この地平を維持し、発展させ、最後まで闘いぬくことを誓う。

同志諸君、友人たち、世界革命をめざす世界中のあらゆる戦士が被っている困難を、日本の戦線において共に支え、革命の日射しを共に浴びながら更に進めよ。

我々は、日本の同志友人たちに、限らない連帯の意志を込めつつ、行動と犠牲の上に燃え上る革命を堅持する。

世界革命戦場での再会を期して。

一九七三年 五月八日 アラブ赤軍  
五・三〇テルアビブ斗争一周年集會にむけて。

ぐらし、武器を渡し合い、作戦を練り合い、プロレタリア文化を掘りおこすだろう。この、世界的な戦線・戦場の統一過程こそ、プロレタリア権力を領導する主体を党——軍として蘇生させ、打ちきたえる過程である。

こうした戦いを担う世界中の革命戦争派の統一戦線構築の武装斗争を通した相互認識——その世界共産主義運動の胎内に、自己改造し合いながら、世界党——世界赤軍としての主体が、意識性を持って萌芽しつつ、世界革命戦場へと展開する。この、未完成の人民の軍隊の、敵・帝国主義者・抑圧者に対する徹底的な戦争は、戦場を拡大し、人民に承認された不滅の軍隊として世界革命戦争を闘いぬくだろう。世界革命戦争に向けた任務を引き受ける大胆な衝動は、我々を益々豊かにし、益々強い政治的確信によって血肉化されている。この着実で、まぶしげな感動を、闘う日本の同志たちと共に、握りしめよう。パレスチナ・アラブの同志たちと、共に分かち合っている様に。

△1▽世界革命主体と国際反革命同盟

今、可視・不可視の世界革命戦場が、重層的に準備しつづけている世界革命戦争への展開は、敵を延命の道——再編へと、益々急速にかきたてている。そしてノ連を筆頭とする「プロレタリア国家」群は、帝国主義者の延命——再編の時刻表の土俵で結果的には、相互扶助をし合っている。革命的友人中国人民の政府は、この再編を引き出したプロレタリア人民の後方でありながら、七〇年代国家政策の路線上から、世界革命を写し出すことによって、世界の武装革



命派を 踏みつける位置から、第三世界の、民族解放斗争と連携し合っている。すなわち、「国家は独立を求め、民族は 解放を求め、人民は革命を求める」この志向へのヘゲモニーが 統一された価値ではなく、抗争と戦術的統一・敵対を内在させているという歴史的な階級斗争の現実、中国の政策の発展段階と 正当に結合しうる主体が、既製の、抑圧された国家群——第三世界、アジア、アフリカ、アラブ諸国の民族主義政府——であるが故に、それらの国家権力と熾烈に対決せざるを得ない第三世界の更に抑圧された一段も二段も根深く革命を求める人民を切り捨てた立場、援助し得ない立場、間接的であれ、敵対する立場に立たざるを得ないのである。中華人民共和国成立二十三周年を祝った人民日報社説の中では次の様に言っている。「毛主席は、我々に、こう教えている。『世界大戦の問題については、二つの可能性しかない。一つは戦争が革命をひきおこすことであり、一つは革命が戦争をおしとどめることである』」『新しい世界大戦の危険は、依然として存在しており、各国人民は、かならず備えがなければならない。だが当面の世界の、おもな傾向は革命である』世界人民の革命運動の前途は、光明に満ちたものであるが、その道は、曲りくねったものである。各国人民の革命斗争の勝利は、主として、各国人民自身が斗争のなかで自覚と、組織性を、一歩一歩高め、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を、自国の革命実践に、一歩一歩結びつけることによってかちとられるのである。我々は、かねてから、各国人民の革命斗争を支持しているし、人民に希望をよせている。我々が、平和五原則の基礎の上に社会制度の異なる国々との関係を発展させ、各国人民との友好往来を拡大しているのは、国際緊張の緩和にとって「有利であるばかりではない

く、各国人民の革命斗争にとっても有利である。」この立場は、国内における政治・軍事・生産を一体化しつつ、敵と対峙する革命主体を蓄積、準備する中国の世界革命戦略に規定された現実であり、逆にこうした中国の斗いの方向は、第三世界のもっとも抑圧された人民を益々自力更生の世界革命戦争へと、自発的に向かわせている。もちろん、我々をも含めたこうした勢力は、中国の国家政策を無媒介的に非難しはしない。彼らは、行動によって、自らの存在証明する。ただひたすらに、武装斗争を準備し、長期の人民戦争の中で、結合・理解し合う同志友人として中国人民を承認し、中国革命の偉大な歴史を教訓とし、進みつつっていく決意を持っている。これらの無数の、必然的な世界革命戦争へのエネルギーは、ベトナム革命と一体化し、連鎖した世界の最前線として、敵を別個に撃ちながら闘から闘へと結合をより深部に定着させ、不可視の兵站線と戦場を共有し、供給し合い、敵との攻防の現実の中で新たなプロレタリアの世界地図を敢然と描きはじめている。そして、この自力更生のエネルギーは、帝国主義国城塞の、革命戦争派と有機的に結合することによって、更に斗いを二乗倍に強化し、世界革命戦争の統一戦線への萌芽として位置しようとしている。

ベトナム革命の永続的英雄的斗い、そして、プロレタリアの後方としての中国人民の存在に加えて、世界の武装斗争派の国境を越えた不滅のゲリラ戦争の現実という、この階級攻防の現実を、脅えと驚きを持って認識した世界の帝国主義者たちは、今、非妥協の革命のエネルギーを現前化させ、自ら具体的に認識し、更に新たに有効な戦略を練るべく様々な、もつとたくみな攻撃を展開しているプロレタリア国際主義との斗いを余儀なくされている。

こうしたプロレタリアヘゲモニーの増大による帝国主義国家群の一国的利害の分裂と帝国主義総体としての反革命同盟の矛盾の止揚の現実的帰結として中国国連加盟を必然化させた帝国主義諸国は、この世界的現実——プロレタリアヘゲモニーに帝国主義政治が逆制約され得る時代を、新たな戦略展開で乗り切ろうと、大あわてでしかも反動的で大胆な布石を敷きはじめた。米帝はニクソン訪中をその刃のかくれみのとし、インドシナの緊張緩和——実は一九六九年七月の、グアム・ドクトリンへの戦略的後退としてのベトナム停戦協定の空疎な「実体化」を通して、インドシナ侵略戦争から、アラブ・アフリカ侵略へと、英帝、仏帝を駆逐しつつ、帝国主義的利益を貫徹する為の一步を踏み出し、更に、アメリカ本国における矛盾を、ニクソン政治を通して清算しようとしている。徴兵制から志願制への移行、国内経済安定政策、ベトナム停戦によるドル価値の回復を宣伝し、その独善主義政策を幻想的にまきちらすことによって、反戦、反帝のプチブル的部分を武装解除させつつ、(国内世論を)ベトナム問題を軸に、「労働者」国家諸国との平和共存・国民経済の立ち直りを約束し、圧倒的なニクソン支持をとりつけることによって、本国内の革命的エネルギーを個別撃破しつつ(新たな大統領任期を)第三世界に対するブロック防衛という名の直接介入から手を引くことによって攻撃用核兵器を世界戦略として堅持しつつ、核を中心とする宇宙規模の米帝のヘゲモニー回復をめざしている。その活路を、インドシナ半島から更にアラブ、アフリカ人民の抑圧の上に夢想し、インドシナの戦争を教訓化した形で、一九七〇年のロジャーズ提案にかわる新たな支配体制のたくみな手を練っている。米国の一九七二年貿易赤字六四億ドルのうち二五億ドルを占める石

油赤字を、中東への侵略——新たな植民地主義の貫徹を「中東平和の実現」をもってきりぬけようとしている。その中心にはNATO体制の強化と、実質的には、十六番目の米州仲間になる強盗国家イスラエルとの軍事的強化を通して、地中海全域と北アフリカに及ぶ南東部方面への侵略のねらい方向を定めている。帝国主義者の自然源収奪の野心の前線基地イスラエルは、アメリカ帝国主義、ヨーロッパ帝国主義の重大な要として、その姿を益々明確にする時が来ている。すなわち、世界帝国主義体制の矛盾の表現が、インドシナ半島植民地から、アラブにまで更に拡大される時として、一九七三年以降の政治情勢が存在している。一九六七年、中東戦争におけるイスラエルの役割は、NATO戦略の中で重要な位置を示し、一九七一年十二月のNATO議会においては、米帝のレアド国防長官は、地中海域における海軍兵力を、イスラエルとの間接的な絆として永久化しアラブ諸国を海から封じ込めつつ、NATO戦略を貫徹すべきことを申し入れ、ジョセフ・ロン事務長官は、それにふさわしい十分な方向を検討中であることをあきらかにした。これは、ギリシアの第六艦隊基地から、イスラエルを結ぶ海洋を広げ、帝国主義勢力の安全防衛を確保しつつ、イスラエルへの海からの武装援助をもくらくむものであり、二重に第三世界人民、ことに、アラブ人民の革命の圧殺を促進しようとするものである。こうした米帝の、世界的な規模の転換——新たな侵略の道は、一方に、ヨーロッパ帝国主義諸国の転換と、必然的に相関し合っている。

一九七二年十月十九・二〇日に、パリで開かれた拡大EC首脳会議は、一九八〇年代に至るヨーロッパ帝国主義諸国の様々な思惑と矛盾をうきばりにしている。一応会議においては、一九八〇年まで

に、経済、通貨同盟を完成しつつ、統一通貨によるECの一元管理体制をとりつつ、更に、その二年後、欧州同盟を発足させ、政治的、経済的統合への目標を確認し合っている。しかし現実には、仏帝のNATO機構からの脱退を通じ独自の核抑止力保持による米帝からの独自化の上に、ECのヘゲモニーを自由経済政治利益として一体化させつつ対外政策を貫徹しようとする立場と、西独帝の、NATO軍事力を背景とする米帝との反革命同盟を強化し、東西欧州の兵力削減交渉による自由の脅威を、欧州防衛に米帝を更に結びつけることによって、当面の自由の利益を貫徹し、不動のものとしようとする立場は、露骨にぶつかり合わざるを得ない。更に米帝は、キッシンジャー発言に表現される通り「NATOは、防衛、安全保障を越えた共同体として拡大されなければならない。米帝は欧州との経済的差別なしの協調を望んでいる。」という立場、つまり米、ソの戦略兵器制限交渉(SALT)から、東西欧州兵力削減交渉によって、核防衛力の低下する欧州諸国に対し、(第二次SALTでは、米帝の在欧戦術核兵器や、地中海艦隊の核兵器までが、ソ連の中距離ミサイルとひきかえに制限交渉にのぼるといふ。すなわち、在欧核戦力が現象的には低下する。)その防衛とひきかえにECとの通商、貿易で、結合欧州に米帝の経済利益を、おしつけつつ、SALTを通じつつも、攻撃核兵力を独占化することによってNATO内の強力なヘゲモニーを維持したまま、現NATO体制を軍事から共同体へ、すなわち、米帝の経済貿易利益の場として有効なものとする拡大構想をもくろみ、ECを骨ぬきにしていく方向を示している。英帝は植民地の民族解放斗争の外からの強力な波と、国内における労働運動、経済不満、それにEC加盟に反対する強い波の中で、

ECにおける積極的な立場をひかえつつも、EC加盟による経済の立てなおし、対中国政策の再編をもって解体しつつある植民地主義支配の再編と、対外政策の活路を求めようとしている。又、EC加盟によって、英連邦加盟のアフリカの帝国主義の手先も、その経済的保護のもとにおき、新植民地体制を強化することによって、アフリカ諸国の全ての民族主義政権を孤立へと封じ込めようと画策している。

一九七三年五月の、ニクソン訪ソを現象的には契機として、その帝国主義戦略と結果的に利益を分かちあうかたちで、戦略的核兵器制限協定に調印しているソ連は、西独との新たな関係「改善」(第二次世界大戦以来、初の領事館の交換を一九七二年十一月一日に発表)と、ECとのコモン体制の経済再編を通じ、第三世界諸国との結合を自由利益優先の観点から強化し、中国の第三世界諸国との結合と競合し合っている。東西兵力削減交渉は、そうした全体系——NATOと、ワルシャワ条約機構を背景に「緊張緩和」の名のもとに、軍事から経済の再編にむけたヨーロッパ帝国主義、米帝、ソ連の新たな政策の展開であり、アラブ、アフリカ諸国が、そうした政治情勢のはざまに、新たな「発展の道」を迫られること、すなわち、そうした圧力に呼応せざるを得ない備えの乏しい現在の買弁的な民族主義政府の政治は、真の革命勢力を帝国主義者の土俵上にえじきとしておしあげようとする立場に益々行きつくのである。民族主義政権を、益々、排外主義へとかりたてるこの一方の、根源的な責任は、「プロレタリア国家」ソ連の戦略展開にあり、プロレタリア政治と無縁に存在することによって、国内においては、官僚主義が更なる官僚主義を生みつつげざるをえず、世界共産主義運動に

一国主義の濁流を流し込んでいるのである。米帝との「緊張緩和」をめざす討議の席上、ソ連は、ニクソンの申し出によって、ソ連ユダヤ人の、イスラエル移住に対する政策を「緩和」することを約束した。(一九七二年八月十四日のロックフェラーニューヨーク州知事の記者会見で伝えられている。)一九六一年から、一九七〇年までに移住したソ連ユダヤ人の総数は、一万三三〇人であり、一九七一年には、一万三九〇五人となり過去十年間の数と、同数の移民が行われている。(アメリカが一九七二年七月十四日に発効させた対外関係援権法案は、ソ連ユダヤ人の、イスラエル移住者として、イスラエルに、八五〇〇ドルの供与を規定している。)又、ソ連は、イスラエルへの移住者に対し、今までにソ連内で受けた学問の代償として、それ相当の税金を支払うことの義務を法令化した後、ユダヤ人防衛組織(TDL)の「ソビエトが、イスラエル移住者のぞむユダヤ係インテリに対する新課税を撤回しないなら、在アメリカソ連大使を誘かいする。というドウカツに表現されるシオニストの反抗と、米帝との間の裏とりひきによって、それを一九七三年に入って撤回し、アルジェリア、リビアなどの、アラブ諸国から、公然としたソ連への政策批判を引き出している。ソ連の、こうした政策は、二重の意味で犯罪的である。第一にそれは、人工国家「イスラエル」の合法性を承認した上に、プロレタリア人民の敵シオニストイスラエルの人口増加の為の必死の移住政策を全面的に支持していることになり、世界革命を裏切っている。そればかりか、第二には、ソ連の社会主義政治、プロレタリア人格の改造がまったく放棄されているが故に、シオニズムを「社会主義」国内で手ばなしに増殖し、ユダヤ人民をシオニスト化する反革命拠点を「社会主義」機構そのも

のとして持っていること、すなわち、革命への敵対をあらさまに形成していることである。

## ⅡⅤ アラブ、パレスチナの現状

### (イ) プルジョア民族主義革命の限界

こうした国際政治情勢におけるアラブは一九七二年のフセイン・リッダ空港攻撃斗争を経て、世界的には、ベトナム人民の革命戦争の不屈の対峙の反映の中で、アラブにおける帝国主義者の野望を、如何に、アラブ諸国政府・人民・革命主体が対峙化し、方向を提示しているのであらうか。一方には、中東、アフリカを範囲とする広い友帝、反シオニズムの民族主義政権の拡大強化による城内政治が存在し、それと相互の制約、逆制約関係を持ちながら、他方に、革命主体の真の民族解放運動が不滅に横たわっている。進歩的であれ、反動的であれ、少くとも民族主義政府は、革命主体の「部分」を表現することは、ありえない現実の状況にもかかわらず、革命主体の民族解放社会主義運動の要求そのものが、「部分」を民族主義政府に、かたがわりされることによって、逆に、独自性を全面化しえず、それと妥協する一時しのぎの対応が、革命主体内部に存在することによって、革命の停退を過去一貫して表現して来た。そして、民族主義政府が、ソ連や、中国との連帯の上に打ちたてる力が強ければ強い、その政治が、革命主体の中に反映され、相似形の民族主義者が増大し、革命の不可避の躍動を内側から圧迫外して来たという現実の中に、アラブ、パレスチナ革命の困難とそして又非妥協のエネルギの悲しい代価が横たわっている。

帝国主義勢力の、アラブ世界への直接的間接的侵略と、帝国主義の前線基地イスラエルシオニストの存在、又、帝国主義者との利益の山分けを生存の要としている右翼がいらい——ヨルダン、北イエメン、イラン、サウジアラビア等——の反動勢力、それに加えて、左、右の民族主義政府——エジプト、シリア、リビア、スーダン、チュニジア、イラク、など——に系列化し、強力な物質力を背景とする革命勢力内の妥協主義者、そして、真に民族解放社会主義を革命の旗印として進みつつづけているM・L主義者とそれを支持する左翼民族主義者、これらの一見複雑で重層的な力が現代のアラブの歴史情勢をかたち作っている。この情況の中で自由利益（自国内ブルジョア資本の利益）獲得の為に変転するアラブ、アフリカ諸国の民族主義政権は、帝国主義の力と、革命の力の前に左右（進歩・反動）への分解妥協を——そう促進されつつづけている。

この右派分解への急傾斜の第一例としては、スーダンのヌメイリ政権が特徴的にあげられる。

アラブ世界最大のスーダン共産党とアラブ民族主義者ヌメイリ派の統一戦線による連合政権が、一九七一年に、スーダン共産党のクーデターによって、ヌメイリ政権追い落としによる共産党の三日間勝利を見た時から、それは、いよいよ顕在化の一途をたどった。ソ連派共産党の三日天下、すなわち、共産党のヘゲモニーのもとに、ヌメイリ派を結合しようとした妥協的なクーデターの方針は、ヌメイリ派を支持する民族主義者、リビア、エジプト政府と連合したスーダン軍部によって逆クーデターに遇い粉碎されてしまった。共産党側にラチされていたヌメイリは奪還され、形勢を立て直したヌメイリの指令による共産党員への虐殺としてスーダン解放の共産主義化

る。

又、リビア政権は、パレスチナ革命をアラブ民族主義の立場から排外主義を鼓舞しつつ実質的な援助を行っている。強力な反英帝、反シオニズム路線は、アラブのみならず、アフリカにおける民族独立のオルガナイザーとしての位置も確定するものとして登場している。一九七二年四月、ウガンダのイスラエルとの断交、イスラエル軍人、技術団の国外追放、反英帝、英国籍アジア人追放に至る。ウガンダアミン政権の転換を促進させたのもガザフィー政権である。ウガンダ、アミン政権は、一九七〇年オボラ政権を帝国主義、シオニストの後立てのもとにクーデターで追放した後、一九七二年まで、イスラエルとの関係は維持されていた。一九七二年八月の、英国籍アジア人追放（商業の九〇％、工業の五〇％を英帝とのゆ着のもとにこれらのアジア人が独占していた。）によって、国内経済を一挙に再編するという転換を示している。（これら五万人近い追放されたアジア人の受け入れ先は、米、英、西独、イラン、インドなど。英帝から入国を拒まれた下層の、そうしたアジア人は、世界中の国を、たらいまわしにされているというのが実情である。）英国の植民地支配下にあったウガンダに対し、英帝は、技術、経済援助を行っていたが、このアミン措置に怒った英帝は、一千万ポンドの援助を停止し、米帝も、借かんと停止すると発表した。その時、これらの穴を「すべて、リビアが保障する。」と、カザフィーは表明したのである。又、アフリカ革命王殺の拠点、ローデシア、南アにおけるシオニストイスラエルの強力な絆は、政治的、軍事的に存続しているが、アフリカ革命の反帝、反シオニズム斗争の必然的な波が、チャド、ザイール、ニジェール等の、反動的な色彩の強い民

クーデターは終焉した。この辛勝によって再度ヘゲモニーを構築したヌメイリは、民族主義政権の域内政治から離れることによって、更に露骨な反革命性を発揮し、エチオピア政府（エチオピア政権は、米帝、シオニストのアフリカにおける侵略基地であり、エチオピアの占領下にあるエリトリアの首都アズマラの米軍カンニュー基地は、アフリカ革命の王殺のとりでとなつてゐる。）と、一九七二年に和解することによって、エリトリア革命を王殺する方向に向い、（エリトリア解放戦線の唯一の内と外の往来を保障しうるスーダン内での活動の禁止を、一九七一年より行った。）更に米帝と一九七二年七月から、国交樹立を行った。又、ウガンダ内戦の際、リビア空軍機によるウガンダ援軍の移動を、スーダン領空を侵犯したということとで阻止し、スーダンの逆クーデターの後立てとなつた朋友リビアのカザフィーとの不調和を公然と明確にしたのである。一九七一年には、アラブ連合（エジプト、リビア、シリア）に至る予備会談に出席し、連合への意志を示していたヌメイリ政権は（国内共産党の反対で、実現しなかったといわれている。）一九七二年には、スエズ運河に駐留していたスーダン軍の召還と、それに対抗したエジプト政府の、スーダン内エジプト人技師、教師の召還としてあらわれ、エジプト、リビア等との共同歩調から、独自の道へと、急速に動きはじめたのである。このヌメイリ政権ブルジョアジーの姿は、現在の世界情勢に呼応する自己利益の活路を求めるといふ民族の団結の空文句が最早人民大衆には通用しないこと、ソ連の傘の下でアラブ民族主義派内に居ること、の不利益を悟つたことから更に右傾化を強めた、米帝との利益をわかちあうかいらいの道の典型であり、アラブ民族主義政権の出口のない解決に対する一つの結果なのであ

る。

民族主義政権までも揺さぶるにいたり、現在、イスラエルとの断交を表明せしめている。カザフィーの民族主義反シオニズム運動が、アフリカ革命に強力なエネルギーを生みだしつつある反面、リビア国内における反政府運動の王殺、マルクス主義者の非合法化、イスラム法への回帰、（男の床屋が女の髪をセツしたりすれば、罰せられたり、泥棒は、片手を切りおとされるなどモスリムの法典をそのまま法令化）など、パレスチナ革命の不滅に斗いを呼びかけるものとも左の部分との敵対を深め始め、反シオニズム、反共の排外主義を提示している。

一九五〇年代のアラブ一帯に広がったアラブナショナリスト運動（そのパレスチナ人のグループが、今のPFLP）の、反植民地斗争の流れから、一九六八年革命に勝利した南イエメン政権は、アラビア湾の反帝、反イラン解放斗争、パレスチナ革命、エリトリア革命の海路基地として、革命を助けて来た。しかし、国内産業（農業、漁業）が貧しいばかりか、アデンが、スエズ運河から紅海に至る戦略的な場所に位置している為、オーマン、イラン、サウジアラビア、北イエメンの帝国主義の同盟者からの不断の侵略と、反政府クーデターの面策を受けて来た。一九七二年の北イエメンの侵略戦争に表現されたこの巨大な圧力に抗しきれず、一九七二年十一月、南北イエメン統一に調印するという停戦によって、妥協的、戦術的延命をはかっているというのが現状である。（「右翼民族主義者の、南解放の為の人民組織」という反アデン政府Mに、カザフィーは、五〇〇万ディナールの財政援助を行っているといわれている。）未だ経済的に未成熟なアデン政府が、アラブにおいて、革命的左派と結合

すればする程、アラブ諸国からの経済封鎖に出合い、国内の国有化政策も遅々としており、南イエメンの革命政府は困難な情勢の中に瀕している。

イスラエルと協力関係にあるイラン政権は、帝国主義者の野望をかたがわりし、一九七二年六月の、ニクソン訪イによって、更に政治的経済的にも米帝に依存しつつ、アラビヤ湾の海洋を占領支配するばかりか、ヨルダン政府の同盟者として、アラブ人民の革命に敵対を続けている。ことに、一九七二年には、日本の商人（イラン石油）日営イラン石油、米国（モービル石油）の三者の合併による「イラン石油会社」を設立した。日本の石油の四〇％以上をまかなう、イランに対し、日本からのイランへの投資は増大し、一九七二年八月には、経団連の植村甲午郎を筆頭とする日帝の訪イによって、日本、イラン投資会議を行い、更に、石油化学、塩化ビニール、銅鉱山開発など、大規模な合併による日帝の経済侵略と、利益をわかちあっている。

### Ⅲ (1) アラブ、パレスチナ革命の現状

#### (2) アラブ民族国家の終末的現状

ヨルダン政府は、一九七二年三月の、フセインブラン以後、その実現にむけて、精力的に、帝国主義者と構想を練ってきた。アラブ諸国からの孤立は、帝国主義者に、軍事的、経済的に依存することによって何の不利も生まなかったし、イスラエルとの直接和解へと、プログラムを進めることによって、帝国主義者との反革命同盟を強化し、和解へと、プログラムを進めることによって、帝国主義

者との反革命同盟を強化し、ヨルダン国内の反政府運動に対する安全弁を確保しつつけている。

一九七二年十一月の反フセインクーデター未遂に対し、三〇〇人の軍人逮捕、軍人の武器けいタイの一時禁止という措置をとったが、ヨルダン国内の人民のみならず、政府内の右派民族主義者さえも、権力奪取のチャンスをおぼえている不安定な状況にある。しかし、CIAにこみの人民に対する抑圧は巧妙に近代化し、スパイ網による反政府行動の摘発、パレスチナ革命指導者を死刑という従来の方法から、無期徴役へなど、人民への偽善的なポーズをとりはじめ、一九七〇年の力による弾圧から新たな弾圧へと動きはじめている。人民の矛盾は激しく、過半数以上の人口をしめるパレスチナ人民と、ヨルダン人民の地下共闘が育ちつつも、敵の近代戦に勝ちきる体制を会得しえていない為、人的、物的、（タイホによる。）多くの被害を受けている。

レバノンには、再三のイスラエルの攻撃に恐怖し、レバノン領内からのコマンドのイスラエル占領地への軍事行動を禁止したばかりか、この一年、レバノン軍のパレスチナコマンドへの妨害行動は、再三の銃撃戦を生みだして来た。保安対策のないベイルートの町は、CIA、イスラエルシオニストテロ団、ヨルダン王制のスパイが連日テロ活動をくりかえし、中東における帝国主義者の、地下情報センターとなっている。国内的には、物価、賃金問題から、数少ない工場の労働者が蜂起し、北部菓子工場、南部タバコ工場の労働者によるゼネスト、又、大学においては、教授と免への抗議、カリキュラムをめぐって、すべての大学が、ストライキから、反政府斗争へとてんかいたし、そうした人民の声を、軍隊出動と発砲による人民の殺

りくをくりかえすことによって、矛盾を益々拡大させている。これらの抵抗のエネルギーに保護されているパレスチナ革命は、米帝とゆ着したレバノン政府の弾圧に圧殺されえないし、政府は、そうするだけの力量を持ちあわせていない。しかし、こうした状況に甘んじたパレスチナ革命における合法主義は、シオニストの的確なテロルにあい、ベイルート市内において、無数の損害を被っていることも又、事実である。レバノン政府が、六〇年代のレバノン人民、パレスチナ人民の蜂起を米帝のギリシャの第六艦隊に出動を求め、人民の革命を圧殺した様に、米帝とゆ着したレバノン政府は、彼らの利益と、延命の為には、再度、帝国主義者のバックアップのもとに、進歩的民族主義者をリーダーとするパース党・イラク共産党・クルト族の連合したイラク政権の、一九七二年六月一日のイラク石油会社の国有化政策は、帝国主義の外国資本を国内から締め出すことによって、帝国主義者への一定の反撃を表現した。しかし、ヘゲモニーを持つパース党政権は、国内二〇〇万人に及ぶ北部クルト族とは、一九六九年にそれまでの抗争から妥協へと和解をうちたてているが、国内的には、ソ連のほう大な、バックアップによって、それらを支えているにすぎない。資本蓄積の十分な国家経済をのりきるべく、一九七二年九月にコモン加盟の意志を示し、（ソ連側発表）石油の国有化による国内経済の引きしめと、その活路を、ソ連との経済協力を強化する方向を定めている。

アラブの「盟主」エジプト共和国政権は、一九七一年の停戦切れ以来、斗争意志ばかりを声高に示して来たが、その無力さは、アラブ人民を、エジプト政権への失望から抵抗へと、転換させて来た。

ナセル時代のパンアラブ主義の遺産を国家統合の軸に置き、対外的には、ヨーロッパ帝国主義諸国、更には、米帝と結ぶことによって、イスラエルとの和解をもくろむ姿勢は、更に、国内矛盾を拡大させている。西独エアハルト内閣が、一九六五年にイスラエルと国交樹立を行ったことに対抗して国交を断ったエジプトは、一九七三年六月、七年ぶりに、西独との国交を回復させ、更に七月には、エジプト内の、ソ連軍事顧問団など、二万人のソ連人に対し、即刻立ちのきを要求した。「我々は、彼等の援助を最早必要としないし、ソ連は、我々の攻撃用武器の供与の依頼に対し、役に立たない武器しか与えてはくれなかった。我々は、イスラエルと闘うのだ」と、サダトは、反政府感情を、ソ連へと、責任を回避して、いきまいたのである。そして、九月一日には、アラブ共和国——エジプト、リビアの統合——計画を発表し、形態としても、政治、経済のレベルにおいても、一九七三年九月までに、この統合を実現する表明した。反共カザフィー政権は、統合によって、ソ連と断ってももちたえられる軍事力をリビア石油収入（年収三〇億ドル）をもとに強化し、対イスラエル戦へ、アラブ世界を動員し、米ソ平和共謀の抑圧を越えて斗争意志を示している。

しかし、サダト政権は、国内矛盾の激化、労働者、学生の反乱を、リビアとの統合による政治的、経済的立て直しの手段としてのみ、リビアとの統合計画を進めるにちがいない。それは、形骸化された統合と、一層の矛盾を露呈するだろう。何故なら、カザフィーの、純粋民族主義路線が、モスリム教典を絶対概念としつつも、フィリピン、インドネシアによる武装蜂起、アイルランドのIRA武装斗争派への武器援助と、アラブ世界を越えた実質支援を行っており、帝国主

ギと、二人三脚をもちろみ、イスラエルとの戦争ぬきの妥協を考えはじめているエジプト政府の対外政策とは、大きくないちがいが明確だからである。それに一〇〇%が、回教徒であり、部族ごとの閉鎖的な社会関係の上にならたっているリビアと、一〇%以上のキリスト教徒、「む多宗教国家」のジブトとの社会制の問題、又、石油の産油国であるリビアが、一人あたり、年収一丁〇〇ドルであるのに対し、エジプトは、一人あたり二〇〇ドル程度という格差など統合に至る様々な問題は何ら示されていない。計画発表後、現在に至るまで、サダト路線と、カザフィー路線はパレスチナ革命に対する対応の相違としても表れている。一九七二年九月二十八日、サダトは、パレスチナ亡命政府樹立構想を呼びかけた。しかし、これらの動きが、実質的なパレスチナ革命に対する行動規制以外の何物でもないと、発表の翌日にPFLPに拒否され、続いて、PLOも、この亡命政府構想を拒否している。九月五日のミュンヘン闘争以降、拡大しつつある国境を越えた戦争に対する帝国主義者の圧力に屈し、パレスチナ革命をアラブ民族主義の枠内にとめることによって、少しでも敵と、良い妥協をみつけ出そうとするサダトの意図は、成功しないばかりか、アラブ人民の反感を増している。又、一九七三年一月、タイでの、ブラックセブテンバーの在タイ、イスラエル大使館占拠は、エジプト大使の必死の交渉と、同かつで、ブラックセブテンバーが武装解除を行った為、メイヤー、ダヤンからも、そのやり方を賞讃されたのである。一九七三年三月のブラックセブテンバーによる在スーダン、サウジアラビア大使館における闘争においては、アメリカ軍用機でのりつめたニクソンの特使に飛行場の着陸を提供し、パレスチナ革命から湧き出た革命のエネルギーを圧殺す

る側に居ることを、はっきりと示して来た。カザフィーは、自らがクーデターの際、ハイジャックした様に、(スーダン共産党がクーデターで政権を握った後、イギリス療養中のヌール大佐を首班とする為、スーダンに呼びもどした際、彼の乗ったB・O・A・C機をリビアに強制着陸させ逮捕し、ヌメイリ側にひきわたし、処刑させた。「国家が、ハイジャックをするとは何ごとか」と、英国を、かんかんに怒らせたのである。)既製の秩序を尊重することよりも、信念に忠実である彼は、「アラブ民族の大義」の為の行動は、保証し、援助し、ことに、ブラックセブテンバーが、民族主義的色彩が濃い為、反共主義者の彼は、ブラックセブテンバーに対する財政的、物質的援助と、自国内の活動を保護している。

こうした両者、リビア、エジプトのパレスチナ革命に対するかわりは、エジプトを、リビア政権の活動に対する歯止めとして、又、エジプトのヨーロッパ帝国主義やソ連との急速な接近に対する歯止めとして現在進行しているが故に、第三者顔をして接近する米帝の侵入の余地を与えていると言える。それは、中東における反英植民地闘争と反シオニズム闘争の恨強い歴史に、ベトナム侵略戦争を教訓とした米帝の介入は、「平和解決」としてイスラエルに一定におさえつつたぐみに進行している。

エジプトは、ソ連顧問団の追放後弱くなった軍勢力を回復すべく、一九七二年九月には、エジプトザヤト外相が、英、ヒース首相と、武器供与に関する会談を行ったりしたが、その後再び、十月には、反ソ的民族主義者サデク国防相を解任し、ソ連への接近を開始した。ニクソンの大統領選までに、米帝と何とか「中東和平」に関する確約をとりつけようとするサダト政府は、再三のイスラエルのシリ

アへの攻撃に対しても、シリアの戦いへの参加の呼びかけに対しても、何ら答えるすべを持たなかった。十月には、シドキ首相が、ソ連を訪れることによって、関係改善に再び動き出し、その二週間後から、ソ連軍事顧問団が、続々復帰している。又、一九七三年二月には、新国防相イスミールが、ソ連、米國へ、サダトの特使として「和平」の糸口をつかむ為に出向き、同じ頃米國を訪ねたメイアと、ニクソンを通して間接的な打診を行ったりしている。国内的には、親サデク派の軍の不満の増大や、単一政治組織、アラブ社会主義連合内部の反サダトの力は増え、一九七二年につづく、一九七三年初頭からの学生の反政府運動は、増々激化し、労働者、学生、知識人の投獄、軍人や、アラブ社会主義連合メンバーの解任など、国内における反政府勢力を力によって、ファシシ的におさえつけている。

こうしたアラブ諸国の退却「和平」への企ては、民族主義政権が、米ソ政治のどちらかに自らを組み込むことによって、中東の「和平」を国連の大国政府にゲタを預けつつ、不安定な国内を、大国へと、責任をそらすことによって、自らの政権を、延命させているにすぎない。こうした「和平」はパレスチナ人民の権利——パレスチナ革命と無縁に存在しており、民族主義政権への反抗が、各国個別から、パレスチナ問題を軸としてすなわち、反帝、反シオニズム反政権の斗争へと、アラブ人民全体のコミニケーションを密にしつつ、進行している。すでに、エジプトでも、レバノンでも連日の市街戦、更に、シリアでも、反政府運動は、ざん定憲法から、モスリムを国教とするという一九七三年の新憲法への斗いとして表現され、パレスチナ革命の各組織と有効に連携し合いながら、その炎を深く燃やしつつづけている。しかし、人民の、自然発生的な、こうした斗

いは、強力な排外主義に常に包摂されつつづけて来たことは、アラブの斗いの歴史が証して来たことを忘れてはならない。今、民族主義政権の自己権力防衛の為の排外主義の鼓舞は、自然発生的な大衆のエネルギーを真の革命主体——M.L.主義者と結合することを弾圧しつつづけている。この民族主義政権の排外主義は、ソ連の一国社会主義路線によって、益々強い排外主義へと、かりたてられている。アラブ人民並びに民族主義政権の共通の敵、イラン政府との一九七二年十月のソ連、イラン経済協力条約や、イランに製鉄所を建設することのみかえりとして、イランから、天然ガスを受けるソ連の政策、ソ連派共産党クーデター失敗後の、ヌメイリ政権との、一九七二年十月の復交、イスラエルへのソ連内ユダヤ人移住者への借置は、民族主義者を反共主義へと、向かわせている。又、中国は、パレスチナ人民の権利を一貫して主張しつつも、ソ連との力関係によってアラブ、アフリカ諸国に介入するが故に、アフリカ革命の圧殺者、ハイレセラシェや、スーダン、ヌメイリとの援助関係を強化することによって、アラブ、パレスチナ革命、アフリカ革命に、間接的に敵対せざるをえない政策を生んでいる。

#### Ⅳ パレスチナの革命主体・世界革命戦争 派の主体——リッダ空港銃撃戦争

一九七〇年ヨルダン内線を頂点とするこの数年間の民族解放闘争の打撃的経験の中から、斗う革命主体は、民族主義政権によって与えられた公然のパレスチナ革命の基地、戦場を不可視の戦場へと割出すべく、地下組織建設を試行錯誤をくりかえしながら、しかし、

不滅に続けて来た。ことに、ヨルダン地下組織建設は、多くの犠牲を払いながらガザ地区における地下武装斗争を学びつつ、着々と進められている。そして、ヨーロッパ革命との結合——リッダ空港斗争、ミューンヘン斗争、再三のヨーロッパでのシオニスト白色テロによるパレスチナ革命の公然部隊への攻撃は、パレスチナ革命の、ヨーロッパにおける地下兵站を広げ、ヨーロッパにおける武装斗争派との結合を不可避にし、新たに、地下戦場を拡大させながら、国際的な戦線の共有として発展している。一方に、こうした国境を越えた攻防は、ヨーロッパ帝国主義者と、アラブ民族主義政権との妥協を益々困難へとむかわせ、パレスチナ革命めきの「和平」に、深くさびを打ち込んでいる。

「建国以来の敗北である。」と、ダヤン將軍に言わしめたリッダ空港襲撃斗争は、パレスチナ革命の攻防の形態を必然的に転換せしめた。一九六八年からの、PFLPのハイジャック斗争から、一九七〇年の革命飛行場における斗争と、パレスチナ革命戦争が、切り開いて来た国境を越えた戦争形態は、しかし、占領下の帝国主義者シオニストの軍事基地イスラエル内での戦場と、有機的な連結を行えておらず、占領下で闘うパレスチナ・ユダヤ人民に対し、意識性、ファナチックな共有を出現しつつも、具体的な、戦争の共有を内と外の陣型で支えざるには至らなかった。そのことは、革命飛行場斗争においても、敵の非妥協と、ヨルダン軍の包囲のもとに半勝利——すなわち主体的には敗北として結果したし、五・十一の、ブラックセブテンバーのテルアビブ斗争、ハイジャックも敵の非妥協——味方の妥協——だましうちを結果させたのである。それ故、リッダ空港襲撃斗争は、味方内部に対し、「ゲリラ戦における敵との妥協」

——敗北を、斗争の形態における非妥協性を示すことによって、味方内部を更に動員しうる質へと、その契機を作りあげた。そして第二に、リッダ空港の斗争は、シオニズムの国家総動員体制のもとに管理されている占領下において、地下戦士が、具体的に調査、兵站を任ふことによって貫徹されているが故に、占領地地下組織の形態を持統的な組織へと、質的に高めたのである。そして第三に、帝国主義本国内から育った我々との共同斗争によって、パレスチナ革命が、パレスチナ革命の統一戦線——PLO機構のみならず、アラブ革命統一戦線、更に世界革命統一戦線の三重の陣型に支えられることによって、逆にパレスチナ革命を保証すること、すなわち世界革命の一環としてのパレスチナ戦線の位置を闘う主体に実体的に知らしめた。第四に、逆に、先進国武斗派に対しては、（ことにヨーロッパの武装斗争グループ）自国帝国主義打倒の闘いが、第三世界人民の革命と地下で手をつなぎ前線——銃後を共有し合うことによって、先進国武装斗争派が、帝国主義本国内の戦争によって引きだされる敵の大攻勢によって、個別撃破されつつも、相互に支えあう前線——銃後——銃後——戦線の帝国主義諸国内武装斗争派と、第三世界人民の相互関係は、革命を防御する実体、すなわち、地下統一戦線を、自然発生的に求め合う地平へと到達する契機として、リッダ斗争は重要な位置を示したのである。この一九七二年の、世界的な統一戦線の志向は更なるリッダ空港襲撃斗争へと成長し、コミニケーションを拡大し、三大陸の革命派を陣地戦においても機動戦においても保証しうる革命主体へと、自己改造させつつ進撃するだろう。

リッダ空港によって示された闘いの質的飛躍は、九月には、ブラ

ックセブテンバーのミューンヘン斗争へと引きつがれ、敵のだましうちに對し、非妥協の戦闘を貫徹することによって、五月十一日に敗北したアリ・タハグルーブの斗争の不十分性を克服すると同時に、五月三〇日の斗争を発展させる世界的なプロバガンダを貫徹した。しかし、ブラックセブテンバーが自発的な戦闘であり、民族性によって支えられているが故に、国境を越えた戦闘を持統しつつも、戦闘のすべてを、外部からもこみ、その国におけるプロレタリア戦線、革命党派と斗争を通して結合するという目的意識を持たない無自覚さから、戦闘によって湧きあがるアラブ世界の人民（すなわち、ミューンヘン斗争における西独人民、タイのイスラエル大使館占拠斗争におけるタイ人民の存在、スーダンにおけるスーダン人民の存在）の組織化を放置している。しかし、ミューンヘン斗争後、ブラント政権と、シオニストの結合した在西独、パレスチナ、アラブ人民への弾圧——逮捕、国外追放、パレスチナ支援組織の活動禁止の措置——は、ドイツの闘う労働者、学生の戦線をゆるうごかし、ユダヤ人に対するドイツ人の原罪意識という、ドイツ——イスラエルブルジョアジーの口実をのりこえゆつくりと、着実に、パレスチナ革命への自発的な支持として、始まっている。

ブラックセブテンバーの不十分性は更に、タイにおけるイスラエル大使館占拠によって表現された如く、敵イスラエルとの対決から必然的に連関して問われるべき、タイ王制との目標のない妥協、又スーダンカルツームにおけるサウジアラビア大使館襲撃斗争にみられるスーダン政府への投降（彼等は、スーダン政府の寛大な措置を期待したが、仮面をぬいだヌメイリファシスト政府は、彼等に対し、パレスチナ革命と無援の暴挙として、普通の殺人罪を適用すること

を決定し、スーダン内での、PLOの活動を停止し、PLO代表と共謀して、逮捕するなどの措置に出ている。）など、敵と、その陣型に対する分析が、あいまいな為、巨大な戦闘によって切りひらいた地平を、有効に戦略化しえていない。PFLPは、より革命的に突進せんとする左傾化した大衆のエネルギーを、M・L主義の実践によって領導して来た党派であり、現在のにもそうなのだが、一九七二年からの、党内論争の過程で、反対派を包摂しえなかった狭さを、党形成をめざしつつ党内矛盾を止揚しつつある組織の未成熟として持っただけではなく、ミューンヘン斗争の政治犯選挙闘争を貫徹した元PFLPグループにみられるごとく、党内の戦闘的部分を党外へと、おしやわっていることも又、事実としてある。しかし、一九七〇年以降、矛盾を激化させつつ、敵と対決しえていないパレスチナ革命の指導部の官僚的枠組から自らをときはなち、PFLPと連携しつつ進むブラックセブテンバーの闘いは、パレスチナ革命内部の妥協主義者——PLOを牛耳っている右翼民族主義者、エジプトや、サウジアラビア・クウェートの手先——を益々明確に人民の前に示し、PLO政治の右傾化への逃げ道をふさいでいる。すなわち、国境を越えたPFLPや、ブラックセブテンバーの闘いに対するアラブ人民の熱狂的な支持は、PLOに対し、いやでも、支持声明を出さざるを得ない情況へと、おいこんでおり、PLOと民族主義政権との間の矛盾を拡大させ、彼等に選択を迫るものとして、重要な位置を示している。一九七二年の、ゲリラ戦の持統は、過去のPLO政治を右翼に制約される機構から、PFLP、ブラックセブテンバーに彼等を逆に制約させる機構として、すなわち、ファタ派内部の左右の分裂への促進として進行し、ファタ派においては、公

然とした反主流派が形成され、左右の銃撃を含む党内斗争が登場し、PLO内左派——PFLP、ファタ左派、PDFLP、ブラックセプテンバーなど——の統一的なコミュニケーションの強化が進行している。

又、一九七二年十一月にベイルートにおいてパレスチナ解放の為のアラブ支援会義が開かれ、世界中の革命勢力並びに、解放運動勢力が会議に結集し、世界的規模による反帝、反シオニストの闘いを闘いぬくことが決定された。パレスチナ解放運動の歴史、こうした世界的な革命勢力による会議は始めてであり、レバノン人民の左翼潮流を中心とした恒常的なこの実行委員会の支持体制の強化は、武装斗争を断固として承認した左派のヘゲモニーを包摂しうるパレスチナ革命ならびに、アラブ、アフリカ革命に対する人民の結集を示したのであった。アラブ人民のみならず、世界中から結集した革命党派との、戦略論の交換は、世界的に連鎖しつつあるパレスチナ革命にとって、大きな成果を残したのである。(日本代表として、招請された赤軍の手によるメッセージ並びに戦争宣言は、日本の革命派の、世界的潮流への登場と、その問題提起として、会議場において配布されたことも、日本人民の闘いの一つの段階を示したと言えるだろう。)アラブ総体の諸党派、並びにPLO内におけるこうした左派の質的拡大と強化は、左派のヘゲモニーによるもののみならず、アラブ人民の自然発生的なエネルギーの左傾化によって逆に左派の登場が支えられているものであり、左派のそのエネルギーを包摂する指導性が今問われている。従って、もしPFLPを中心とする左派が、客観的なその情勢を認識せず、主体的力量の帰結としてのみ理解するならば、左傾化したエネルギーを強力な民族排外主

南部人民との連帯の為の組織化、④シオニストの空爆にそなえ、キャンプ内の防衛措置の強化と、防空ごうの設置、⑤レバノンにおけるパレスチナ人民の政治的社会的権利を奪還する為の保護を決定している。

### △▽ パレスチナ革命と世界革命統一戦線

こうして、PFLPを軸とする革命戦場の拡大と、世界革命からの統一戦線の指定は、量的に、革命運動が、七〇年以来減少しつつも、左派の政治によるアラブ、パレスチナ革命へと、深部に運動を構築しつつある。こうした勢力の深部への拡大は、パレスチナ革命内の他力本願の民族主義政府の傘の下に居る様に、パレスチナ革命を、自己利益の場としようとする思惑を、粉砕しつつ、世界の同質の民族解放斗争並びに先進国革命主体と、実体的な連携を深めながら、パレスチナ革命を領導する方向をさし示している。いいかえれば一つには、シオニズムの存在がパレスチナ革命占領下のパレスチナ解放の闘いと同時同質的な戦略的地平に、ゲリラ戦を位置させて来たのである。こうしたパレスチナ革命の非妥協のエネルギーの結集と、世界的規模による革命戦争派の結合の動向をもっとも理解し、その対策を早く計っているのは、アラブ諸国の民族主義者ではなく、敵イスラエルと、そのテロ行為を保障する帝国主義者の補完物CIAである。

五月三〇日のリッダ斗争後、ガッサン、カナファーンPFLP中央委員に対するテロルを手はじめにベイルート市内の建造物の破壊、ミュンヘン斗争の二日後には、シリア・レバノン南部に対する機甲

義へと再び、向かわせる危険性を同時に孕んでいるのである。

一九七三年一月には、学生の反乱が続いているエジプトのカイロにおいて、第十一回パレスチナ国民会議が開かれ、ファタ内左派、PFLPを中心とするヘゲモニーのもとに、討論が続けられた。この会議においては、PLO機構の質的改造としての、民族統一戦線の創出の問題が、主要な討議として提出されている。この統一に関する方向は、①政治、情報、財政並びに人民の為の会議における、合同委員会の設定 ②政治、軍事レベルのカードル養成学校の設立 ③医療活動の統一などが決定されている。

この統一は、PLO参加各組織の政治的イデオロギー的組織的独立を維持した形態レベルにおける統一機関として、現在提出されている。

未だ戦略的方向と、軍事機関に関する方向性は、提出されていないが、新しい情勢に対応しうる統一戦線問題が、模索されている。

一九七〇年から七一年に至るPLOからの統一戦線機関の強化の提案は「右派の戦略の枠組に、革命のダイナミズムをおし込めるものである」として、PFLPを中心にした左派は、この方向に消極的な対応を示していたが、現在における統一は、むしろ、左派の戦術レベルにおける積極的なヘゲモニーをもって進められている。

この国民会議においては、ヨルダンにおける反動ヨルダン王制打倒を目的とする民族戦線の創出の必要性並びに、ヨルダン軍内への反反動プロバガンダの強化を決定している。レバノンに関しては、①レバノン反動勢力に対決する為の、レバノン人革命党派との共同行動、及び、共同のリーダーシップによる活動、②レバノンの抵抗運動の軍事的な統一組織の形成、③南部のコマンド基地を支える

部隊による侵略、ナバーム弾による村民の虐殺へと、その、反革命テロルをエスカレートさせた。これに対し、カザフィーは、即刻レバノン政府に打電し、「レバノン南部を防衛する為、リビア軍を派遣する用意がある」と伝え、シリアのアサド首相は「シリアの政府人民は、レバノンと運命を共にする為に闘う」と表明し、更に、イラクのフセイン副首相は、「イスラエル対抗に必要なあらゆる物資を提供する」と声明した。軍事的に武装力の不十分なレバノン南部のコマンドは、敵の圧倒的な軍事力と闘いうる装備を持ってはいないが、難民キャンプの人民を、敵からの敗走ではなく、対決へと組織化を強めている。こうしたイスラエルシオニストの無差別の侵略破壊行為は、同時に、アラブ諸国を恐怖にかりたて、国連提訴やイスラエルに圧力を加えることへの米帝への依頼心をかきたてている。レバノン政府は、イスラエルの思惑を望み通り、コマンド弾圧にのり出し、コマンドとレバノン軍の衝突さえ生み出されていた。こうしたシオニストの制限のないテロルは、PLO右派政治や、民族主義政府に対して効力を発揮したとしても、非妥協の革命を志向する革命主体は、人民の憎悪と復讐を組織し、新たなミュンヘンへ、新たなリッダ斗争へと、準備させるだけである。イスラエルは、ガッサン暗殺に対しては、リッダ斗争の報復であるとか、九月の侵略に対しては、ミュンヘンの仕返しであると口実をもうけながら、パレスチナ革命に対決する為にはパレスチナゲリラを孤立化させる以外ないとして、一九七二年九月から十回に及ぶ、シリア、レバノンへの「口実」のない侵略をくりかえし、シリア、レバノン政府が、パレスチナのコマンドを一掃しない限り、攻撃を続けると、くりかえし声明している。そして、PFLPや、ブラックセプテンバーが



敵の死角から攻撃をし、ヨーロッパ革命と連鎖した斗争を持続しつづけると、ヨーロッパ帝・CIAと結託したシオニストは、ヨーロッパ在住の、PLO代表部や、公然部分を無差別に殺害しはじめ、フランス、イタリア、ドイツ、ベルギーと、攻防は、アラブ世界をはるかに越えた戦場へと拡大している。ヨーロッパにおける戦場の拡大は、ヨーロッパ帝国主義政府に対し「テロ」恐怖を生み出し、在ヨーロッパアラブ人のみならずユダヤ人に対しても「対策」を考えざるを得なくなっている。

この動きによって、ヨーロッパ広域に居住するユダヤ人の中の、二重国籍を持つ彼等に対し、イスラエルシオニズムか、その国における国民として居住するのか、ユダヤ人自身に、シオニズムを問いかける結果を生んでいる。

「イスラエル国」内において、パレスチナ革命のゲリラによる施設の破壊が、移住して来たユダヤ人に、彼等の存在を問い、彼らのうちの何千人かを「イスラエル国」内に失望させ、再び国外へと出さしめた様に。こうして、シオニストが、いかに攻撃を組織しようとも、ヨーロッパの革命派に支援されたパレスチナ革命のヨーロッパにおける地下組織は、更に深く構築され、シオニストの、めくらめっぽうの攻撃は、ただ公然部隊へのダメージをあたえるにすぎない。一九七三年二月には、リビア航空もうちおとし、そして更に、国境を越えた戦争に、国境を越えたテロルを対置した帝国主義者の手先とシオニストのテロルは、ついに一九七三年四月十一日未明ベイルート市内で、同時多発反革命テロルを行った。（すなわち、革命のゲリラ戦の陣型に規定され、彼等も敵陣への、のりこんだというわけだ。）PLO指導部、PLOスポーツスマンのカメルナセル、

をめざす民族主義者を更に左右に分解させ、民族の枠内では斗いに勝ちぬけないことを知らしめるだろう。シオニスト・イスラエルは、粉砕したい相手——PFLPやPDFLP、ブラックセブテンバーなど——にたどりつく前に、これらの革命派は、四・一一反革命テロルを教訓化し、パレスチナレベルからアラブレベル、世界レベルでの連帯を同時一体的に打ち固め、世界中網の目の様な布陣をしくだろう。それに加えて、一九七二年十二月、「イスラエル国」内において、パレスチナ革命と連鎖した地下武装ユダヤ人、アラブ人グループ、赤色戦線の存在が、あかすみに出た様に、「イスラエル国家」の存在そのものを否定するユダヤ人民のグループが活動を不滅につづけている。シオニストの侵略政策は、シオニストの子供たちによって否定され、パレスチナ解放をめざすパレスチナ戦士と連携し、シオニストの心臓部において、斗いを組織しつづけている。

ベトナム人民が、帝国主義者の腹黒いだまし打ちに抗し、今も又、斗いぬいている様に、不可視の世界革命戦線の陣型は、ベトナム人民の後方として、逆に、ベトナム人民の斗いは、パレスチナ革命の後方、ヨーロッパ革命派、世界の革命派の自国帝国主義打倒の斗いの後方として、共通の敵に対する斗いを強化し、世界的な前線の創出へと発展しつづけているのである。

抑圧された人民の共通の敵に対決するこうした非妥協の戦線の創出こそ、アラブ革命との結合から、世界の深部の革命派との結合へと、すなわち我々アラブ赤軍をも、世界赤軍へと解体——改組し、日本革命戦争への兵站・銃後後方としての現在の存在と、その任務を明きらかにしていくだろう。そして、この時期における日本革命の前線の創出こそ、日本国内の先進的人民に課せられた急務である。

ファタ派反主流派で、左派とファタ人を変革して来たアブヨセフ、そして、ファタ指導部のカメルエドワンの住居にドアをうちやぶって侵入し、家族共々殺害し、部屋にバクダンをしかけて逃亡した。更に、PFLP事務所ビルディングをレバノン市民共々バクハシ、その際銃撃戦となり、数人の敵兵は、殺害されたが、巨大なダメージをうけた。又、小さな工場が、ブラックセブテンバーの地下工場であるとしてバクハシしてしまった。ベイルート市内そのものが、ゲリラの地下戦場であると同時に、敵の活動可能な無法地帯でもあり、こうしたレバノン政府の敵への予防措置の放棄は、翌日には、パレスチナ革命と連鎖したレバノン労働者、学生の数十万の政府への抗議、反政府運動へと発展し、首相の辞任問題へと発展していった。

四月十三日のPLO指導部の葬式には、ベイルート一帯の工場、商店が一せいに店を閉じ、パレスチナ人と共に葬列に参加し、その数は、はるか五〇万を越えていた。（レバノン人口の二〇％以上にあたる。）アラブ諸国民から、パレスチナ革命への忠誠と、哀悼の電報が続き、アラブ諸国政府に対し、巨大な葬列は、抗議のデモ行進となって、夜遅くまで続いていた。この敵の反革命テロルに対し、サウジアラビア、モロッコなどの右翼民族政権も、パレスチナ革命に限りない支援を送ることを声明し、アラブの結束による反イスラエルの強化を呼びかけている。こうした反動政権の更なるパレスチナ革命の物質力や、財力を背景にした介入は、パレスチナ革命をアラブ排外主義への道をひらき、民族主義を鼓舞したかたちで、再び、パレスチナ革命を民族政権の掌の内へ引きいれようと動き出している。四月十一日のダメージと、その教訓は、パレスチナ解放

この戦争に向う現実の世界的で歴史的な要請は、世界革命に勝ちゆく軍の質を対自化した世界革命統一戦線の構築の作業であり、統一戦線の構築の作業であり、統一戦線の内実と、組織実践の方向こそ、今、とわれている。

無媒介的に世界党を夢想することなく、世界的統一戦線の実現、すなわち、日本国内においては、世界の革命派と結合しうる統一戦線の環とは何であり、その質に規定された日本革命の統一戦線への第一歩こそ問われている。日本赤軍派、安保共斗にみられる連合赤軍形成の敗北は、まず、前提としての統一戦線に対する軽視であり、一国性であり、党の統一・合流へと短絡する誤謬をみちびくものである。統一戦線構築は、世界革命を領導する各国の主体が、今とわれている合目的斗いである。

こうした統一戦線構築に内包される世界党——軍の萌芽を、更に飛躍させ世界革命を勝ちゆく陣型へと高めねばならない。現在のにとわれていることは、世界革命統一戦線への集結と、それに連鎖した日本国内におけるその創出の作業である。

世界革命の利益を一国的利益に優先させ、世界革命戦線の創出の急務を、自己党派の利益でなく、革命の利益の為に、引きうけつつ日本国内における統一戦線をほりおこそう。今、我々と共に立つ日本の戦線は、不可視であろうとも、この一步一步は着実に成長を遂げている。

## あとがき

査証編集委員会

本書は、一九七二年5・30テルアビブ空港銃撃戦を英雄的に担い、その戦闘が切りひらいた現実のプロレタリア国際主義と武装闘争の地平から後退することなく、シオニスト強盗国家「イスラエル」を最前線とする帝国主義世界反革命体制と対峙し攻勢を続けるアラブ赤軍日本赤軍が、その時々明らかにして来たアビール、宣言、声明等が主要には収められ、また、この間の日本赤軍二兵士に対するスウェーデン秘密警察―警視庁の強制連行、レバノン大使館襲撃計画フレームアップ等に対する抗議声明、5・30三周年集会へのアビール、そして一九七四年一月に執筆された「シオニズムの展開と移民政策の帝国主義的構造」が新たに公表される。既に公表された各々とこれらを一冊にまとめることは、現在小さくない意義があるとわれわれは思っている。日帝政治警察と一体となったブルジョア・ジャーナリズムのデマ宣伝、フレームアップは、パレスチナ・アラブ革命の真実を歪曲し、プロレタリア階級の武装闘争の正しさを隠蔽し、人民のなかに差別と分断、排外化の傾向をもたらしめている。それは彼らの階級の本質であり、彼らの歪曲、隠蔽の個々については、収録されたアビール

等が各個撃破し、また当然、アラブ赤軍日本赤軍の続行する闘い自体がより雄弁に語っている。本書を貫くコンテキストは、世界党―世界赤軍―世界革命戦線建設という二次ブンド―赤軍派以来の最良の世界革命の総路線の実践・検証であり、先進帝国主義の革命と第三世界の民族解放・社会主義革命の国境を越えた戦士の結合の提示である。「隊伍を整えよ」と繰り返し呼びかける同志たちの主張のおくに、読者は何が真実であり、何が正義であるかを確認することができるだろう。

「プロバガンダは即情報であり、情報は真実を伝えることである。しかも、我々の真実の、最高の形態は武装闘争である。従って、武装闘争こそがプロバガンダの最良の形態だと信じている」というPFLP政治局員であった故ガッサン・カナファニー同志のテーゼに従って、革命のメディアとは何か、メディアの革命とは何かという問いに、用意すべき我々の解答が唯一、党建設―階級形成と一体の武装闘争の推進であるにしても、「最良のプロバガンダ」武装闘争のイコール記号のなかに全ゆる領域でのプロレタリア地下兵站線の問題が凝縮されているのであり、その内実を保障する一環として、本書の刊行は多大なる任務が課せられているだろう。そしてそれこそが、ブルジョアジーの物量的宣伝に對峙する我々の反攻の第一歩であり、日本プロレタリアート―被抑圧人民への熱い連帯の挨拶である。

## 隊伍を整えよ！ ―日本赤軍宣言―

共同編集 世界革命戦線情報センター  
査証編集委員会  
発行日 1975年6月30日  
発行 査証出版  
定価 1200円

VISA PALESTINE BOOKS 1



TOWARDS PROLETARIAN INTERNATIONALISM  
AND ORGANIZED REVOLUTIONARY VIOLENCE

暴力を組織された国際主義と  
نحو البروليتاريه العالميه والعنف الثوري المنظم

日本赤軍

الجيش الاحمر الياباني

THE JAPANESE RED ARMY

定価1200円

VISA PALESTINE BOOKS 1